# 榎本心霊調査事務所

琥珀鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
榎本心霊調査事務所

【Ｎコード】
Ｎ２１７７Ｗ

【作者名】
琥珀鳥

【あらすじ】
一族の宿痾を背負ったオッサンが流されながらも日々、除霊に励むお話です。

直接の除霊部分は少なく、調査・準備や人間関係等に重点を置いています。

一応ホラーのジャンルですが、お笑い成分とお色気成分が有ります。

因みに主人公はロリコンですが、基本プラトニック路線です。

# 第1話（前書き）

三作目にして、漸くオリジナル小説を書きました。

前からコツコツ書いていたので季節感がズレてますが、ご容赦を……

ジャンルはホラーですが、日常や準備をメインに書いて行きます。

ガンガン霊と戦う話には、ならないでしょう。

# 第1話

僕の名前は、榎本正明。

こう見えても先祖には、函館戦争で負けた榎本武揚が居る。

もともと榎本武揚は、榎本武兵衛武由の娘みつと結婚して婿養子となった男だ。

旧姓は箱田といい、現広島県福山市神辺町箱田辺りの出身だ。

どうでも良いトリビアを（読者に）話している時にデスクの電話が鳴る……

事務机の上の電話機が鳴っている。

他にはノートパソコンとハードディスク、それと充電中の携帯電話が乱雑に置いてある。

パソコンの画面は、今ハマッているゲームの攻略サイトを開いている。

今日は面倒くさいな、と思い受話器を見詰めているだけだったが鳴り終わった。

「うん。

今日は自主休暇として遊びに行こうかな?」

良い天気だし、鎌倉辺りの古刹でも眺めようか……

と、考えていたら携帯電話が鳴った、仕事用の方だ。
折り畳み携帯を開いてディスプレイを見れば
「長瀬綜合警備保障　長瀬社長」の文字が……
残念、仕事かな?
と思いながら通話ボタンを押す。
「もしもし、榎本です」
電話から渋い声が聞こえる……
「ああ、榎本君か?
事務所に電話したら出なかったんで携帯にかけたんだ。
今、電話大丈夫かい?」
「ええ、今は事務所に向っている途中ですから平気です。
どうしたんですか?」
取り敢えず居留守は誤魔化しておく。
「そうか……
実はな、厄介な物件を請け負っちまったんだ。
横須賀の建設途中で施主の資金繰りが付かず、建設半ばで放置しているマンションな。
アレの巡回警備を請けちゃったのよ」

頭の中で思い出す……

確か横須賀市の山の中で、海の見える景色が良いけど不便な場所のアレか？

「何故、請け負ったんです？
長瀬さんの会社は、建設現場の警備はしないでしょ？」

マンションやテナントビル等の常駐警備が主流のはず。

「嫌だったんだけどねぇ……
付き合いで仕方なく短期間だけ請け負ったんだ。
今は坂崎が行っているんだけど……
もう一人が、嫌な物を見たって辞めちゃって困ってるんだよ。
悪いけど頼まれてくれないかな」

僕の仕事は、霊障の調査と出来れば解決迄だが……

解決方法は、人には言えない僕の一族の業（カルマ）で処理をする。

人には言えない為に正当な報酬も評価もされないが、それで良いと思う。

人に知られたら、良くない事にしかならないだろうから。

「良いですよ。
長瀬さんはお得意様ですから……
そうすると、今晩の夜間警備から同行すれば宜しいですかね？」

「ああ、有難う。

では事務所の方に案内図と詳細をＦＡＸしとくから、時間は坂崎と連絡を取り合ってくれ。
頼んだよ」

そう言って長瀬社長は電話を切った。

携帯電話を卓上充電器ホルダーに戻す。

今夜は夜勤か……

そうだ、結衣ちゃんに連絡しておくかな。

折角再充電を始めた携帯電話を手に取り、ポチポチと彼女の携帯に送るメールをうつ。

「結衣ちゃん。
今晩は夜勤の仕事が入ったので夕飯を食べたら出かけます。
早めに支度お願いします。
榎本」

これで、彼女の手料理の夕飯を食べられる、と。

結衣ちゃんは、本名（さざなみ）　細波（ゆい）結衣

１３歳のロリ美少女だ。

訳有りのツルペタロリ美少女だ！

大切な事だから、２回言いました。

彼女の母親は愛知県のとある寒村の狐憑きの家系の女性で、彼女もそうだった。

詳細は省くが、家族から虐待を受けていた彼女を助けたのが縁で、その後も面倒をみている。

一般的な里親制度を利用したが、オッサンが少女を引き取るには苦労した、

くっくっく……

ロリ美少女と同棲中だぜ！

彼女で妄想していると、ファックスが入る……

一応事務所だから、リコーの複合機をレンタルしている。

コピーもファックスも、これ一台でオーケー！

送られてきたファックス用紙に目を通す。

なる程ね……

次は自分でも情報集めだ。

ガセネタは多いが、インターネットでも結構な事が調べられる。

少なくとも何の情報も無く危険なホラーハウスに突撃など出来る程、無謀でも無いからな。

出来るだけの下準備はする。

取り敢えずノートパソコンを開き、インターネットでキーワード検索……

「横須賀　マンション　怖い話」

窪〇洋介……

違うよ。

アレな方の怖い話じゃないんだ。

アイ・キャン・フラーイじゃない。

日常に潜む怖い話　マンションの住人……

惜しい、でもコレも生きている人間が怖い話だからな。

心霊スポット横須賀スレ……

これか？

読んでいけば、横須賀の建設途中のマンションの怪……

当たりだ！

夜中に前を通ると、３階の窓の部分に人影が見える。

敷地内に良く野良猫が死んでいる。

浮浪者が住み着いて、小火をだした……

在り来たりだな。

他のサイトも何件か見たが、共通するのは動物や虫の屍骸と3階の人影か……

次は人が死ぬような事件が有ったかの検索だ。

「横須賀　建設現場　マンション　殺人」

自宅マンションから投身自殺……

これは場所が違うな。

孤独死、独居老人が死体で発見、これも遠いな。

建設中のマンションに乗用車が突っ込む。

関連が有りそうだが、場所が離れているから違うか。

今回は事件性は無いのかな？

後は土地絡みの曰くだが、これは調べるのは現地に行かなければ無理だ。

時計を見れば、ＰＭ１：３０か……

先ずは坂崎君に連絡するか。

何度か一緒に仕事をしているから、携帯のアドレスに入っている彼の番号を探して電話をかける。

「……もしもし榎本です。
坂崎君？
今電話で話しても平気かな？
うん、社長から聞いたよ。
大変だったね……
それで今晩だけど巡回は何時からだい？
２０時から２時間置きか……
危ないのは０時以降だろうね。
分かった！
２２時の巡回には間に合うようにいくから、それじゃ」

彼、随分と怯えていたな……

見えちゃう体質だけど、自分では何も出来ないからな、辛いわ。

「さてと、現地に聞き込みに行きますか」

愛車のスクーターの鍵を持って事務所のガレージへ向かう。

最近購入したＹＡＭＡＨＡのビーノモルフェだ。

小道具の多い僕には、収納カゴやフロントポケットの有るこのスクーターは気に入っている。

コンセプトは街乗り用のレトロ感の有る、多分女性が好むスタイッシュにフォルムをしているスクーターだ。

筋肉でゴツい僕が乗るのは似合わないと言われ続けている……

車？

持ってるけど使わない。

停める所を探すのが大変だし駐車禁止で捕まるの腹立つし……

一度駐車違反で捕まったが、罰金か減点かどちらかにして欲しいよな。

事務所は横須賀市の中央部に有る。

駅前の大通りを抜けて国道１３４号線を南下する。

久里浜港を横目に更に南下し野比海岸をひた走る、途中アル中専門の病院が有る。

今は解体して無いが、国立野比病院と言う怖い病院廃墟が有ったんだ……

心霊現象の噂も有ったんだよね。

医療器具やカルテが散乱していて、持ち帰ると電話が掛かってくるんだ。

「ウチの病院から持ち出したカルテを返して下さい！」

ってね。

実際に怖かったのは、所有者が頻繁にくる不法侵入を警察に相談して巡回が多かった事。

それとセ○ムのセンサーが各所に設置されていた事だ。

廃墟ファンには堪らない物件だったね。

そんな事を思い出しながらスクーターを運転する。

道沿いは長閑な漁港だが、結構な漁船が停泊している。

何時漁にいくんだろう？

金田湾を見ながら、途中で国道２１４号線に右折し山の方に向かう……

海岸線から少し入れば、畑がやたらと目に付く長閑な田舎町。

途中で更に枝道に入り目的のマンション前に着く。

少し離れた路肩にスクーターを停めて、歩いて現場まで行く。

平屋の民家と畑ばかりの土地に、いきなりコンクリートの建物が見えた。

くすんだネズミ色の建物……

緑の山々と畑に囲まれたこの場所には似つかわしくないかも知れない。

まずは、２m位の高さの白いパネルで覆われた仮囲いにそってグルリと歩く……

お約束のスプレーの落書きがチラホラ、しかし侵入出来そうな場所は無い。

そして正面のパネルゲートの前に立ち、問題の建物を見上げる。

外から見た分には、まだまだ手を入れれば新築物件として売り出せそうだ。

コンクリートの躯体の損傷も見受けられない。

しかし施工中には有っただろう、外部足場が無くなっている。

まぁリース品だし、再開の見通しがつくまで解体して引上げたのかな？

これは逃げる時に外部階段は使えない、中の階段しかないのか……

退路が一箇所しか無いのは心許ないな。

中に入る前に周りを見渡すと道沿いの少し先に、個人が経営してる懐かしい雑貨屋が見えた。

板壁に屋根は鉄の波板で、いかにも古そうな造りだ。

板壁には昔の鉄製の看板が今も貼り付けて有る。

「元気ハツラツ！オロナミンC」

の大塚崑さんの物や

セクシーポーズの由美かおるさんの

「アース渦巻」

それにサビだらけでモデルが誰だか分らないが

「ボンカレー」

の看板。

今では余り見掛けなくなった懐かしの看板類に溢れている……

この看板類を懐かしいと思うと、歳がバレるかな？

気を取り直して店の中の人に、話を聞こうと覗いてみれば……

うほっ！

若い女の子が店番をしているではないか！

どう見ても、まだ小学生だ！

「いらっしゃいませ！」

目が合うと、元気に挨拶をしてくれるロリッ子。

「こんにちは！」

残念ながらイケメンでも若くもないが、出来るだけ爽やかに挨拶を返す。

店に入り、商品を物色する……

コンクリートの剥き出しの土間に無造作に棚が並べられ、商品が置いてある。

トイレットペーパーから洗剤等の日用品から雑誌や食料品まで……

これぞ昭和の雑貨屋だね。

無難にガムとコーラを持ってレジへ。

「じゃコレを下さい」

渡すとちゃんとレジを打っている。

流石にバーコード式でなく手打ちタイプだが……

「お手伝い、偉いね。
おウチの人は居ないの？」

２２０円ですと言われ、千円札を渡しながら聞く。

「有難う御座います。
おつり７８０円です。
うん、お父さん入院中だからお母さんが世話に行ってるの」

彼女の表情からは、父親の容態が重いのか軽いのか分らない。

「お父さん早く元気になると良いね」

と言って店をでる。

最近の子供は発育が良いな……

もうスポーツブラを着けてそうなサイズだった。

ニヤニヤしながらコーラを飲んで、今度は建物の付近をキョロキョロと見回しながら徘徊する……

しかし、これでは通報されても仕方がない変質者っ振りだ！

近くには交通事故のお地蔵様も無ければ、庚申塚も無い。

昔の因縁も無さそうだな……

元々が山村であり、戦災が有ったり歴史的な古戦場でもない。

何処にでもある長閑な田舎で、やっと開発の手が入りつつ有る場所だ！

最後に近くのお寺、畑に囲まれた小山の上に有る方道寺に行ってみる。

こじんまりとしているが、よく手入れもされていて小奇麗な境内……

住職と話が出来ればと思って訪ねたが、人の気配は無い、かな。

お寺の住職とは意外に忙しいから、アポ無しで来ても無理か。

「んー原因が分からないなぁ……」

昼間のウチに周辺を廻って見たが、収穫は可愛いロリッ子が一人で店番をしているだけか。

「ぐふふ……
大収穫じゃないか！」

意気揚々とスクーターを停めている場所に戻る。

途中でもう一度、あのマンションの前を通ると、さっきは気が付かなかったが古い看板が目に入る。

「マンション建設反対、自然を守れ……か」

何かの利害関係が、あのマンション建設の際に有った訳か。

こんな長閑な場所でも諍いが起こる。

人間ってのは業が深い生き物だよねぇ……

その業に囚われている僕も人事じゃないんだけとさ。

さて、帰って結衣ちゃんのご飯を食べて、結衣ちゃんでラブな妄想しながら仮眠を取ろうかな。

帰り道で、お土産に銀座コージコーナーのケーキを買う。

彼女はイチゴのショートケーキが大好きだ。

女の子が物を食べる姿って、セクシーだよね？

# 第2話

現場の調査を終えて家の前に到着、家を見れば既に部屋の電気が点いている。

既に結衣ちゃんは帰って来ているのだろう……

駐車スペースにスクーターを停めて玄関に廻り

「ただいま！」

と言って家に入る。

玄関先までいい匂いが漂っている……

既に結衣ちゃんが夕飯の準備をしてくれているみたいだ。

「おかえりなさい。
正明さん」

台所からエプロンで手を拭きながら出てきてくれて、少し小さめな声で迎えてくれる。

彼女の両腕には手首の部分まで包帯が巻かれている。

スカートで見えないが、右の太もも部分にも同様に包帯を巻いている。

「ただいま。

良い匂いだね。
夕飯は何かな？」

「今日の献立は、イカと大根の煮物にアジフライです……
スーパーで特売だったんです、イカとアジが。
アジはちゃんと3枚におろして揚げたんですよ」

彼女の頭をポンと軽く叩いてから

「凄いね！」

と褒める。

彼女は児童虐待を実の母親と、その男達に受けていた。
だから扱いは慎重に、スキンシップは控えめに、優しく頼れる男を演出しなければならない。

「お風呂沸いてますから、先に入って下さい」

仄かに頬を赤く染めて恥ずかしそうに、そう言って台所に戻って行く。

本当に良く出来たお嬢さんです！

風呂に入りサッパリしたところでキッチンに向かうと、既に料理が並んでいる。

なかなか美味しそうなイカと大根の煮物にアジフライ、それと海草サラダに……

ミョウガのお吸い物か！

結衣ちゃんはお婆ちゃんから料理を習っていたらしく、多少田舎っぽい料理が得意だ。

その代わり、外食をする時は洋食系が多い。

パスタが大好物なので、洋麺屋五右衛門やジョリーパスタには良く連れて行く。

彼女自体が大人し目の真面目っ子だから、兄弟か親子に間違われる事が多いのが癪だ。

歳の差カップルでも、ロリコン野郎でも全然構わないのにね。

「今日はこれからお仕事ですから、お酒は駄目なんですよね？」

そう言って急須からお茶を注いでくれる……

何時もはビールを嗜むのだが、今日はお茶だ。

僕はお茶は飲めれば良いのだが、結衣ちゃんはお婆ちゃんの影響か？

お茶に拘りが有るのだ。

前に誕生日プレゼントを贈りたくて

「欲しい物はないの？」

って聞くと、釜伸び茶とか釜炒り玉露茶とか難しいお茶を欲しがった。

いずれ静岡とかのお茶の産地に旅行に連れて行って上げたい。

湯飲み茶碗とかも好きだから、京都とか焼き物を多く扱う場所も喜ぶかな？

なとど考えながら、軽くソースをかけたアジフライを口に入れる。

うまい！

サクサクのコロモの食感に、仄かなソース。

それにジュワッとしたアジの風味が口の中に広がる……

ご飯をモリモリとかっ込む。

本当に中年の男心を鷲掴みにする料理を作る子だ。

「美味しいね、このアジフライ……
魚を捌くなんて、結衣ちゃんは本当に料理上手だよね」

そう褒めると、真っ赤になって俯いてしまう。

この子には欲望に塗れてない優しさが必要だから、出来る限り褒めてあげる。

「そんな事無いです。
私は料理位しか、正明さんに恩返し出来ないから……」

恩返しなら結婚してくれって叫びたいが、グッと我慢する。

「十分だよ。
最近食生活が充実しているから、お腹周りに脂肪が付いてきてね……」

すこし脂肪がついただろう腹を擦りながら言う。
自虐ギャクだ……

他愛無い冗談を言いながら楽しい夕食の時間が過ぎていく。

ご飯をお代わりし、全ての料理を平らげてから

「ご馳走様」

と言って自室に戻る。

「さて、少し仮眠をとりますか……」

布団にゴロリと横になる。

因みに僕はベッドより布団が好きだ。

満腹感の為か、横になると睡魔が……

おやすみなさい……

◇◇◇◇◇◇◇

少しだが仮眠を取った事でスッキリした。

目覚まし時計をセットしていた２１時に起きて、支度を始める。

先ずは装備の確認だ。

清めの塩・数珠・強力なマグライトを２本、それとスタンガンに特殊警棒……

何も敵が霊ばかりではない。

時には人間が敵の場合もある。

それと夜間に行動する為に照明器具は必須だ！

よくテレビや映画で、懐中電灯が突然消えたりする事が有るが、強い霊だと稀に有る現象だ。

だから用意するのが、発炎筒と軍用のケミカルライト！

前者は自動車にも積んでいるので馴染みのある方も居るだろう。

炎の力で光を出す。

火に弱い霊達には有効だが、火なので使う方も取扱いに注意が必要だ。

後者は良くお祭りとかで見かける、光るリングとかステッキの実用版。

玩具ではなくちゃんと実用性の有る光量を持たせた物だ。

これは、シュウ酸ジフェニルと過酸化水素との混合溶液の科学発光により蛍光を放つ。

玩具から軍用で利用している物まで色々あるが、霊も化学反応は止められないみたいだ。

それと信憑性は低いが電池式のランタン。

量販店に行けば、３０００円程度で買えるＬＥＤ式の物だが、少し細工をして内部に愛染明王の札を仕込んである。

これを大量に逃げ道に置いておく。

多少の霊なら札の力で明かりを消せないが、有る程度の奴だと簡単に消す……

これは単純に僕の札に込める霊力が弱いからか？

一度霊に消されると不思議と二度と点かないのだが、使い捨てだし必要経費だから問題ない。

壊れなければリース代金で、壊れたら経費に乗せる契約にしている。

これらを腰や足に付けたポーチに入れていく。

ランタンは段ボール箱に詰めておく。

因みに今回は長瀬総合警備保障の仕事なので、そこの制服を着てポケットの沢山付いたチョッキを羽織る。

極力両手はフリーにしておかないと危険だから……

制服着用については、外部スタッフ扱いだから問題ない。

靴は編み上げのアーミーブーツ、コレが結構使い勝手が良い。

スニーカーは防御力が低いし、安全靴は滑り易いのでコーディネイトとしては合わないが何時もコレだ。

それに手袋だが……

本来ならは手袋をして手を守りたい。

しかし、何故か手袋をしたままで愛染明王の印を結ぶと効果が薄いのだ。

只でさえ威力が低いのに、これは致命的……

なので取り敢えず軍手は持っているが、霊絡みの仕事中は使えない。

最後に、結界を張った祭壇に祭ってある「箱」を見る。

結界とは勿論、他の人がこの「箱」を触らせない為の結界。

実際には、この「箱」をどうこう出来る奴など居ないだろう……

忌々しい程の力を持った「箱」。

本来なら触りたく無い箱を手に取る。

箱根細工の様に組み上がった、ルービックキューブよりも少し小さい「箱」……

コレが僕らの物語の、始まりの「箱」。

呪われた一族の生き残りの僕が面倒を見なければならない「箱」。

無造作にポケットに突っ込む。

2階建ての我が家の2階部分は全て僕の私室と倉庫と、祭壇だ。

掃除は自分でするからと言って、結衣ちゃんにも祭壇には近付けさせていない。

さてと、準備が出来たらから出掛けるかな。

階段を降りて、結衣ちゃんの部屋をノックし出掛ける事を伝える。

直ぐにドアを開けて顔を見せてくれる……

どうやら勉強中だったらしい、机の上にノートやら教科書が見える。

来年は受験生なんだよね……

勉強が終ったら直ぐに寝るのだろう、Ｔシャツにホットパンツ姿だ。

服から覗く華奢な手足が艶かしい……

仕事の前に、彼女の部屋にこもる甘ったるい匂いを堪能する。

仄かにミルクの香り！

所謂「くんかくんか」状態だ！

そんな変態行為に気が付かず、彼女は玄関までお見送りをしてくれた。

戸締りをしっかりと言い聞かせ出掛ける。

ちゃんと扉の鍵をロックする音を聞くまでは、扉から離れないけどね。

今度はスクーターでなく、愛車のキューブで現場に向かう。

田舎だけに、夜の９時を過ぎれば交通量は疎らだ……

２０分程で現場に到着した。

一旦現場の前に停めて、ランタンの入った段ボール箱を降ろす。

それから昼間の内に調べておいたパーキングに移動し、後ろに積んである折り畳み自転車で再度現場まで……

霊障なのか、電子機器やら自動車・バイクは時として使えない場合

が有る。

何故かエンジンが掛からない！

「うわぁ、ヤバいよ懐中電灯の灯りか消えたよー！」

とか

「電話が圏外だ！
助けを呼べないじゃんか！」

とかね。

だから人力駆動の自転車、これ最強！

僕の強靭な足腰を動力として走る自転車は、今迄に逃げ切れなかった事は無い。

まぁ捕まったら只では済まないし、最悪は死ぬ……

軽快に自転車を漕いで現場の前へ！

見上げると、コンクリート製の建物は昼間とは違った雰囲気を醸し出している。

確かに何かが居る気配がする……

仮設のパネルゲートを入って直ぐに自転車を停める。

勿論直ぐに逃げ出せる様に鍵は掛けない。

「お早う御座います、榎本さん！」

元気に名前を呼ばれたかと思えば、缶コーヒーを飲みながら坂崎君が近付いて来る。

しかし微妙に恐怖で腰が引けているのがわかるんだ……

せわしなく視線を動かすし、懐中電灯やらランタンが置いてあるし。

彼なりに色々準備したんだろう。

「現場の挨拶って夜でも「おはよう」だよね」

業界用語なのか？

「榎本さんが出張って来るって事は、やっぱりコレ絡みなんですか？」

両手を前でダラリと下げてお化けの真似をする……

「まだこれから調べるんだよ！

それより、今回もヤバくなったら逃げるから自転車の準備をしといてね。

坂崎君の安全は契約外なんだよ」

命有っての物ダネだからね！

「うわっ！

前回みたいにアル中みたいな浮浪者に、出刃包丁を持って追い掛け

られる可能性有り？」

廃墟に棲み付くのは、何も幽霊だけじゃない。

人間の方が多い位なんだよね。

「うん。

可能性は有るよね。

でも今回は浮浪者が住み着いた様子も無いし、ヤクザ絡みの物件でも無い。

周りの神社やお寺。

庚申塚や曰く有りそうな地蔵も石碑も無いし……

ここで事件が起こった事も調べられなかった」

どうやら建物の中に入りたくないのか、外に折り畳み椅子を置いて休憩スペースを作っていた。

寒いし雨降ったらどうするんだい？

しかし正解だ！

ゴーストハウスの場合、建物の外には効果を及ぼさない場合が多い。

「それで、一緒に夜間巡回ですか？」

マグライトと特殊警棒を取り出して笑いかける。

「僕ら肉体労働者はさ、自分の足で調べるしかないんだよ。

さぁ２２時の巡回に行こうか？」

ここまで調べて分らなければ、直接乗込むしかない。
正規な手順を踏むなら、夜に建物の中に入るのは愚行だ。
周りからカメラや温度センサーとかで、先ずはじっくりと異変を調べるのがリスクが少なく確実だ。
海外ではゴーストハウスは割りとポピュラーなジャンルで、調査方法もそれなりに確立している。
しかし我々には、時間も金も無いから体を張るしかない。
「じゃ行こうか……
先ずは建物の外周をぐるっと歩こうか……
その後に、何時もの巡回ルートで案内をお願い。
それと歩きながらで良いから、知ってる事を教えてくれる？」
先ずは建物を時計回りで一周する……
不法投棄だろう車のバッテリーやブラウン管テレビ、それにエロ本を見つけた。
そう言えば子供の頃は、何故か廃屋探検する度にエロ本を見つけて読み耽ったものだ……
誰が持ち込むんだろう？
噂にあった動物の屍骸は無かったな。
しかし膝まで雑草が茂り、バッタだか分らない虫が飛び回っている。

動物の屍骸については、猫とか死期を悟ると人目に付かない場所に行くらしいが……

なにか関係が有るのかな？

さて建物外周には、手掛かりはなかった。

もはや内部に侵入するしか有るまい……

「坂崎君、外部に異常は見当たらない。
覚悟を決めて中に入ろう」

既にビビリまくりの彼に声を掛けて先導させる……

そして曰く付きマンションの捜索が始まった。

# 第3話

地元で有名な心霊マンション……

噂ばかりだったが、警備員の一人が怪奇現象を目撃し、逃げ出す様に辞めてしまった。

お世話になっている永瀬社長の頼みだからと請けた仕事だが、どうやら当りみたいだ。

「坂崎君、外部に異常は見当たらない。
覚悟を決めて中に入ろう」

既にビビリまくりの彼に声を掛けて先導させる……

坂崎君の後について、先ずは1階のエントランスホールに入る。

この辺は、地元のヤンキーとかも探検に来たんだろう……

スプレーの落書きにBB弾か？

サバイバルゲームでもしたのか？

こんな田舎とはいえ、それなりに人目の有る場所で？

建物の入口は、内部に何も光源が無い為か、ぽっかりと闇が口を開けている様に感じる。

ゴクリと生唾を飲み込む……

何時までたっても怖い事に慣れる訳でも無いから怖い物は怖い。

しかし仕事だからと割り切って建物の中に入る事にする。

1階はエントランスホールに管理人室、ＥＬＶホール・集会所・郵便ポストスペースと共用部分が多い。

もっとも仕上も未だだし、機材も置いてないから、剥き出しのコンクリートの小部屋ばかりだ。

特に変化は無い。

気になると言えば、床に水溜りの跡がある事や、ジメジメしている事だ。

それに微妙だが空気の流れを感じる……

妙に土臭く、そしてカビ臭い。

普通コンクリートの建物の中に入ると、ヒンヤリするが、この建物は最近雨が降ってないのに湿気の程度が酷い。

「榎本さん……

1階と2階は問題無いんですよね。

同僚が見たのは3階の東側の部屋らしいです……

血相を変えて飛び出して来て、それっきり辞めちゃいました。

3階ってのも同行して巡回した時に、その部屋に入って……

僕は見てないんだけど、彼がいきなり叫びだして走って逃げたから自分も逃げ出したんです。

後は、彼が恐ろしい物を3階で見たって……
それで、そのまま帰ったっきり仕事には来なくなりました」

話を聞きながら、2階に内部階段で登る。

思った以上に内部は暗い……

階段室には窓が無い為に、外の光が何も入ってこないからだ。

途中でランタンに灯りを付けて、階段に5段おき位に置いて行く。

足元が暗いと逃げ出す時にスピードが出ないし、危ないからね。

「その彼は、どんな恐ろしい物を見たのかな？
それについては何か言ってた？」

質問をしながら2階に到着する。

2階のフロアからは居住区画で、均等にコンクリートの壁で部屋割りがされている。

1フロアが8部屋で仕切られているが、ここも仕上がされてないのでコンクリートの剥き出しの壁のままだ。

このフロアも落書きが多いな……

卑猥な言葉や意味不明なサイン？

あとはお決まりの

「この場所は呪われている」

とかね……

「少し待ってくれるかな？」

どんどん進む坂崎君を止める。

じっくりと周りを見渡す……

通常、経験でいくと霊が現われる時は温度変化が、具体的には温度が下る。

身の毛もよだつとかは、物理的に温度が下るからかも知れない。

しかし、物音もしなければ温度の変化も感じられない。

深呼吸をして気持ちを落ち着かせ、再度気配を探るが僕の霊感には何も反応しない。

まぁ大した霊感も霊力も無いんだけどさ……

「このフロアは問題なさそうだよ。

でも心霊現象ってのは、特にゴーストハウス系はね……

知らない人が来ると一旦おさまるんだ。

そこからの振り返しが恐ろしいんだけどね」

坂崎君は、ブルブルっと身震いして左右を見渡す。

「じゃ問題の3階に行こう。

先に僕が歩くから、逃げろって合図したら振り返らずに走って逃げるんだ。
僕に構うなよ、僕も君には構わないから。
それとヤバイと思ったら2階からなら飛び降りるんだ。
最初に外周を廻ったけど、落下してもぶつかって怪我をする物は無かったし、どかしておいた。
自縛霊ならば、建物から出れば平気な場合が多い」

「ひでぇ……最悪だよ！」

「肉体派だろ、僕らは！
大丈夫だよ、社長も労災申請位はしてくれるさ」

ゆっくりと階段を登り、問題の3階のフロアに到着する……

この階段入口部分は、ランタンを3個置いておく。

最悪の場合、此処だけが脱出ルートだから目印代わりだ。

念の為に清めの塩をランタンの周りに、大き目の円を描く様に撒く。

本当に気休めだが塩は魔を払う効果が有り、一応祭壇に祭り清めた塩だ。

ただ大量に持ち歩いて、しかも大量に使うので質より量的な感じを受けるのだが……

これで最悪の時の脱出ルートの目印は出来た。

流石に鍛えている僕らでも、3階から落ちれば最悪は死者の仲間入

りだからね。

退路を確保してから、周囲を確認する。

……ヤバイな。

ライトに照らされた周りを見て思う。

このフロアには、思った以上に落書きが少ない。

普通は話題になったフロアには人が結構来るんだ。

度胸試しとかで……

だから証拠に落書きを残して行く。

しかし1階や2階よりも、明らかに落書きが少ない……

「こりゃ当りかな？

坂崎君、ちょっとマジになろうか……」

依頼されている以上は確認をしないと帰れない。

覚悟をきめて、手前の部屋から覗いていく……

問題の部屋は一番突き当たりだが、本当に其処にだけ現われるとは限らない。

ライトを持つ手首に数珠をして、特殊警棒をしまい清めの塩を持つ。

念のため、坂崎君にも清めの塩を渡す。

「榎本さん、何か異様に静かですよ……
耳がキーンって鳴るんだけど、これってヤバイのかな？」

彼も緊張しているみたいだ。

コッチも緊張で喉がカラカラだよ。

2部屋目に入る。

ここは一時期浮浪者か誰かが住んでいたのか、コンビニ弁当のゴミや新聞紙が散乱している。

どこか腐った臭いがする。

しかし異常とは言えないか……

新聞の日付を見ると3ヶ月程前だな。

少なくともその頃は、怪奇現象は無くて此処まで人が登って来ていたんだ。

続いて3部屋目に入る。

ここは……

綺麗に何も無い部屋だ。

3部屋目を見終わって一息つく……

持っていたペットボトルの水を少し飲む。

僕が立ち止まっている間中、彼はライトで周りを忙しなく照らしている。

「落ち着いて。
さぁ、行こうか」

4部屋目……

5部屋目……

6部屋目……

なんの異常も無い。

共用廊下部分にもランタンを設置するが手持ちが尽きた……

じっくりと逃げの準備をしているが、また異常は見当たらない。

少し拍子抜けだ……

もしかして、初日は反応しないのか？

そんな楽天的な思考が頭を掠めた状態で、7部屋目の前に立つ。

問題の部屋の隣だが、ここで始めて異常に気付く。
ライトを当てた室内に、小さな白い物が飛んでいる。

「ジジジジジ……」

突然、耳元で羽虫の音が聞こえた。
暗がりに灯りを持って歩いているんだ、虫くらい寄ってくるだろう。
しかし、この部屋だけにしか虫は飛んでいなかった。
用心しながら部屋の中に入ると、足にジャリジャリと違和感が……
右足を上げて見ると、床一面に黒い塊が？
ライトで照らすと、うぞうぞと動き回る虫・虫・虫の屍骸と生きている虫達。

「虫？
とその屍骸か……
こんなにか……」

見ればその部屋には黒い絨毯と見間違う程の、大量の虫と虫の屍骸が有る。
ハエやゴキブリ、カナブンやら色んな虫が積み重なって死んでいる……

毛虫や芋虫みたいな物は、うぞうぞ動いているし。

虫の屍骸？

動物じゃなくてか？

パソコンの書き込み情報と違う、初めてだろう怪異に立ち止まって考え込んでしまう。

ひょいって脇から室内を覗いた坂崎君が呻く様に

「うわっ昨日は無かったですよ。
こんな虫の屍骸なんて……」

そう呟いた。

彼の心臓は既にバクバクだろう、震えているのが掠れた言葉でも分る……

調査初日から、反応してくれるとは嬉しくないなぁ。

「どうやら我々は歓迎されているみたいだな」

隣の部屋からも微かだが、物音が聞こえ始めた。

ウォ……カチッ……カチッ……アグゥ……カチッ……

耳を澄ませば、なにやら呻き声の様なものと何かを叩く音だ。

２人に緊張が走る。

「榎本さん、なにか音がしませんか？
隣から……
見に行くの嫌ですよ僕は……」

今までは静まり返っていた建物の中で、突然僅かだか異様な音が聞こえ始めた。

坂崎君も聞こえているなら間違いないのだろう。

「これが僕らのお仕事でしょ？
我々は体を張らねばならない肉体系労働者だからね。
ここからは僕が先に行きます。
逃げろと言ったら、何があっても建物の外には最低でも出て下さいね。
後は自己責任でお願いします」

そう言ったら、情けない顔になった彼の肩を叩いて気合を入れる。

問題の部屋を出る前に、退路を確認する。

途中に設置したランタンは正常にボヤけているが灯りを放っているし、階段の3台も心強い光を放っている……

しかし、念の為に頭の中でシミュレートする……

最悪の場合、用意した照明が消されて真っ暗になったら。

先ずは照明の確保だが、発炎筒にしよう。

火はそれだけで、魔を退ける力となるし、光量も大きい。

念のために部屋の前にケミカルライトを一つ取り出して、くの字に曲げて中の液体を化学反応させてから床に落とす。

この光の左側が階段だ。

坂崎君を見れば、僕の後ろ３m位の所に立っている。

両手には懐中電灯と清めの塩をそれぞれ持っている。

無言で頷き合うと、問題の部屋に向かった……

入口から正面に開口が有り、外の夜景が見れる。

東京湾を一望し、遠く千葉県の木更津工場地帯の灯りが見える絶景のビュースポット……

入口から中を覗いても何も居ない。

覚悟を決めて室内に一歩踏み出す……

何も居ないな。

もう一歩中に入って中を伺う。

喉がカラカラだ……

フッと壁際に目をやると、居たっ！

こちらに背を向けて立っている、多分４０歳位の中肉中背の中年の男が……

青白ストライプのパジャマを着て何かを呟いている。

ウォ……カチッ……カチッ……アグゥ……カチッ……

左手の人差し指で壁の一部分を叩いている。

「うっうわぁ……

榎本さん！

アレっ、アレって本物ですよね？

向こう側の壁が透けて見えて……

あがががっ」

坂崎君がパニックに成り掛けて騒ぎ出した！

「ちょ坂崎君、静かにしないと……」

ほんの一瞬だけ目を離し、坂崎君に注意して再び中年の男を見ると……

今まで呻きながら人差し指で壁を叩いていたのを止めている。

少しずつ、本当に少しずつ体を此方に向け始めた……

「あっひゃ榎本さん、どうするんですか？

はっ早く逃げましょうよ」

坂崎君はもう無理か？

「坂崎君、先に逃げろっ！
僕は一撃与えて様子をみるからっ」

そう言うと、腰を抜かしながらも廊下に這って行く坂崎君……

その緩慢な動作に、少しは時間稼ぎが必要だと理解する！

愛染明王の印を組み真言を唱える……

「おん　まからぎゃ　ばぞろ　しゅにしゃ　ばざら　さとば　じゃく　うん　ばん　こく」

真言を唱え、裂帛の気合を奴にぶつける！

渾身の霊力を乗せた愛染明王の真言を受けて、奴は……

流石の奴も……

アレ？奴は……

その霊体を僅かに揺らしただけで、此方を向いた。

精気の無い表情で、しかし此方を睨んでいる。

「やべぇ！

効いてない？」

手順に間違いはなく、霊力も乗っていた真言をモノともしないのか？

奴の落ち窪んだ暗い眼窩を見てしまった。

「あがっ……あががっ……」

奴は手を伸ばしながら、ゆっくりと近付いてくる。

「これは、戦略的撤退だ！」

僕は奴から目を離さずに、ゆっくりと出口まで下がり始めた……

# 第４話

横須賀に有る、施主が資金繰りに困って建設中止になっているマンション。

こんなご時世なら良くある話だ。

しかし再開の目処が有るのか？

債権者が事業を受け継ぐのか警備を開始した。

何時も世話になっている長瀬総合警備保障の社長から、その物件での怪奇現象について相談が有った。

何でもバイトが一人辞めてしまったので調査をしてくれ！

そう頼まれて、早速下調べをしてから乗込んだ。

現在その怪奇現象を起こした本人（霊体？）を確認。

先制攻撃とばかりに、愛染明王の真言をぶつけてみたが……

全く効果が無く、現在見詰め合っています。

「あがっ……あががっ……」

奴は右腕を此方に伸ばしながら、ゆっくりと歩き出している。

ちゃんと全身を現し、足を使い律儀に歩いて……

「これは、戦略的撤退！」

駄目元で清めの塩をばら撒き、振り向いて逃げる。

出入口に落としておいた、ケミカルライトを目印に部屋を出て左通路を見る。

通路沿いに置いたランタンも正常に点いている。

ダッシュで階段迄走り、後ろを振り向くと……

奴が、丁度部屋から出て此方を向いて歩き出すのが見える。

「坂崎くん！
奴が追ってくる。
取り敢えず現場からも離れるぞ！」

先に逃がした彼に檄を飛ばし、階段を駆け下りる。

一階まで到着、後ろを振り返らずに一気に外まで出た所で、坂崎君に追いついた。

肩に手を置いたら

「ひぃぃ」

とか騒いだが、僕を確認すると走りだす。

２人で仮設ゲートの前まで到着し、少しだけ気が落ち着いたので後

ろを建物を振りかって見れば……

真っ暗な建物の3階部分だけ、僕が設置したランタンの灯りが窓から漏れている。

その窓からユラユラとした人影が3階の角部屋に見えた。

「彼はあの部屋に御執心みたいだな。
自縛霊かと思ったが、愛染明王の真言が全く効かなかった。
まるで何も無い空間に飛ばした見たいに……
坂崎君、明るくなるまで中には入れない。
夜が明ける迄は此処で待機だよ」

本当は、昼間でも心霊現象は起こる。

別に連中は夜型ばかりじゃないって事なんだ。

でも、態々怖い思いをさせるわけにも行かないから、日が出たら再度一緒に行こうと誘う。

朝の八時になれば、交代要員が現場に来る。

その前に再度、現場を確認し装備を回収する。

今も、問題の3階を見詰めながら話しているが、彼はまだユラユラと窓際に立ち竦んでいる。

まるで此方を見ている様に……

取り敢えずは落ち着く為に、清めの塩を使い円陣を書く。

その中に坂崎君が休憩用に持ち出していたパイプ椅子を置いて座る。

危険を感じたら、直ぐに自転車で逃走出来る準備もしてある。

しかし夜通しあんな影が窓から見えていると、噂になるな間違いなく……

へたり込んでいる坂崎君に、なにか暖かい飲み物を買ってきてくれと千円札を渡しお願いする。

彼は少し現場から離した方が良い。

僕から受け取った千円札を手に、フラフラと外へ出て行った……

最悪、彼が戻って来なくても良い。

こんな経験をして、戻って来る方が異常だろう。

清めの塩で簡易な結界を張ったが、一応愛染明王の印を組んで置く。

そして考える……

今も3階でフラフラしているアレ……

只の霊体じゃない。

乏しい経験から導き出したのは、「生霊」だ！

パジャマ姿と言う事は、こんな時間だし本体も就寝中なんだろう。

無意識に寝ている時に生霊を飛ばしている可能性も有る。
顔は酷くやつれて落ち窪んだ眼窩をしていたから、本体の顔を特定するのは無理だろう。
本体もあんななら、それは酷い状態だ！
しかし、入院中って線も……

「あっ熱っ……
ああ、坂崎君か。
脅かさないでよ」

熱々の缶を頬に当てられ驚いて現実に引き戻される。

「アイツ……まだ居ますね」

坂崎君は此方を見ずにポツリと零した。
アレだけ怖い目に合ったのに戻って来るとは、大した奴だ。

「ああ、どうやらあの部屋に問題が有るんだろうね」

熱い缶のプルトップを空けて一口飲む。

「んっ？
坂崎君、なにコレ？
カレーリゾット？
はぁこれ何なの？

カレーは飲み物とか大食いタレントが言ってたけど、まさかダイドードリンコって、ええ？」

ショート缶だから、てっきりコーヒーかと思えばカレー？

缶をマジマジと見れば、ダイドードリンコの

「とろとろ煮込んだカレーリゾット」

だと！

ツブツブのコンニャクの食感がまた空腹を促すのか？

流石はダイドードリンコ！

ネタで仕込むには最高のドリンクだよ……

そんな彼の手には、伊藤園の

「なめこ・ワカメ・ネギ入りみそ汁」

を持っている。

「伊藤園さん……

ダイドードリンコさん……

企業的にアリな戦略商品なんですかコレ？」

そのまま椅子に座り込み、残りを飲む……

薄口のサラサラしたカレー味で飲みやすいかな？

インパクトはデカかったが、味は基本を抑えていたので飲み干した。
驚かされたが、まぁ美味しいと言って良い商品だった。
しかしカレー臭が少し口に残るかな……

「何処で売ってたの？
このキワ物商品、初めてみたよ」

坂崎君もみそ汁を飲み干して

「ああ、その先の懐かしい雑貨屋みたいな商店の自動販売機に有りましたよ」

雑貨屋？

昼間来た時に入った、ロリッ子が店番していたアレか！

流石に外の自販機の商品まではチェックしてなかったな。
結衣ちゃんの為に、今度ネタで買っておくか……
そんな馬鹿話をしながら時間を潰していると、午前3時半過ぎに問題の影は消えた。
明け方、周りが明るくなってから再度建物に突入する。

「坂崎君、怖いなら外で待っていてくれても良いよ。
今日は資材を回収したら引き上げだから。

長瀬社長には、僕から連絡をいれるから」

建物の入口に少し入り、外に居る彼に話し掛ける。

大分怖い思いをしたんだから……

「榎本さん……

僕、今晩も警備のシフトに入ってるんですよ。

今晩はどうしたら良いのか」

そう良いながら、建物の中に入って来る。

結構肝は据わっているんだろう。

初めてじゃない心霊体験だが、普通なら怖くて仕方ない筈なのに、

なんの対抗手段も持ってないのに。

「いや、今晩は建物の外部からの警戒にしよう。

僕も、もう少し調べてみるから……

危険な奴が、本物の心霊現象が発生したのは確かだ。

でも、公表すると面白がってくる奴とか興味本位でくる馬鹿が必ず居るから。

君はそいつ等を建物に侵入させない事が仕事だよ」

溜め息をつきながら、これからの事を考える。

「交代の連中は7時半に来ますが……

彼らは昼間は建物内に入っても平気ですかね?」

「昼間の連中も中には入れない方が良いよね。

理由は……
教えないほうが良いかな。
また辞めちゃう奴が出るかも知れないし。
7時を過ぎたら、長瀬社長に報告をするから交代要員に指示して貰おう」

階段を登り、3階のフロアまで登ってきた。

室内の窓から朝日が差し込み、廊下の部分を照らしている。

朝もやの中に、幾つもの光のラインが走っている……

幻想的だけど、奴はもう居なくなったのかな?

問題の部屋の前に来る。

気休めだが、数珠と清めの塩を構えてから中に入る……

何も無い、誰も居ない室内。

夕べ奴が立っていた、叩いていた壁の部分を見る。

特に問題は無さそうな……

「アレ?
これ何ですかね。
何か壁に書いてありますよ……
ローマ字に数字かな?
でも掠れて……
何て書いてあるんだろ」

彼の見ている部分を覗くと

「ん……

ＦＬ＋１．０００か。

これは仕上りのフロアレベルから１m上の高さを示しているんだよ」

関係無さそうだな。

もう一度、周辺の床や壁を見たけど気になる部分は何も無い。

叩いていた壁には窓用の開口が有り、外の景色が良く見える……

角部屋だと２方向が外部に面しており、採光が取り易くそして値段も高くなる。

この室内の広さと最上階の角部屋と言う立地を考えると、相場でも４０００万円台かな。

正面の大きな開口は海を一望出来る作りになっており、此方の窓は山側……

丁度、ロリッ子商店の通りが見渡せる。

ああ、アレが妖しい商品を売っている自販機か。

丁度ロリッ子が店から出てきて、母親かな?

女性と２人でタクシーに乗込んで行った……

平日の早朝にか？

「榎本さん？
とうしました？
ボーっと窓の外を見て……
何か有りましたか？」

坂崎君が不審な顔で此方を見ている。

「ああ……
さっき君から貰った、妖しい缶ジュース？
アレはあの自販機で買ったんだね？」

窓の外を見ながら聞くと、ヒョイッと覗きながら

「そうですよ。
昼間は良く買い物に行くんですよ。
結構な美人の奥さんが店番してるんですよね、えへへへ」

彼は、年上のお姉様属性で、多分M男君だと僕は予測している。

時代の最先端はロリなのに、流行に逆らうから彼女が出来ないんだぞ……

全く、ロリは正義！

日本の未来を背負うのはロリと、それを尊重する紳士だけなのだ。

育ちすぎた女性は、出産率の低下やシングル率も高いのだよ。

昔エロい人が言ったではないか。

人は石垣、人は城。

生めよ育てよ、と……

もっと若い段階で結婚を奨励した方が良いのだよ。

「榎本さん……

言葉が駄々漏れしていますよ。

そして間違っています。

女性とは熟成してこそ、その美に磨きが掛かるのです。

ダイヤの原石とか言いますが、磨かなければタダの屑石と変わらないのです。

昔エロい人が言いました。

肉も果物も女性も、腐り掛けが一番美味しいと……

発酵食品を見てください。

納豆・チーズ・ヨーグルトいやケフィアです。

全て美味しい物では有りませんか！

青い果実など、苦くてしょっぱくて食べれませんね」

こっコイツ……

腐ってやがる、年上お姉様趣味かと思えば……

更に高みに登りやがった。

熟女だと……

無理、無理だよ僕には……

「食わず嫌いと思われても、僕はフレッシュな?もぎたての果実が食べたいんだ」

話は平行線に突入にたまま、全ての機材を収集に建物を出る。

時計を確認すれば、午前7時少し前……

では長瀬社長に電話を掛けるかな。

内ポケットから携帯を取り出し、登録している番号を検索して彼の携帯に連絡する。

何度目かの呼出音の後に繋がった

「……おはよう、榎本君。
昨夜はご苦労様だったね。
で、どうだった?」

「昨夜、坂崎君も確認しましたが……
居ましたよ、痩せこけた中年の男が。
しかし霊体かと思いましたが、愛染明王の真言が通じなかった……
僕は生霊かと思います。
ええ、お払いは出来ませんでした。
これは、調査が必要なので警備については建物の廻りだけで」

「……君から見て危険かい?」

危険か、危険でないか……

心霊現象など危険以外の何者でもないと思うけどね。

「危険だと思います。
残念ながら、僕の通常の技では効果が無い。
ならば、原因を探って対策を講じるか……」

「……より強い霊能力者をぶつけるか、かい？」

「そうですね。
しかし強さと金額が比例するとは限らないこの業界ですから……」

無論、本物は居る。

しかし彼らは総じて高い除霊料金を請求する。

己の命を賭けて挑む事と、自身の技術に自信が有るから……

「榎本君で何とかならないかな？
日数は掛かっても構わない。
とは言え、うちの警備期間は今月中だから……
正味3週間だけどね」

3週間か……

生霊の人物の特定と、その怨嗟の根本を探し出すにはギリギリかな。

「やるだけの事はしてみますが……
見通しが立つまでは、警備を外周のみに限定して下さい。
多分、昨夜一晩中3階のフロアに徘徊する影が居ましたから……
興味本位な連中が来る可能性が高いですよ」

「それで構わない……
出来れば原因を突き止めて欲しい。
駄目なら、次の警備会社に申し送りをするまでだが……」

そう言って電話を切った。

「さて、調査しますかね……」

# 第5話

長瀬総合警備保障？

主に商業ビルの巡回警備を請けている警備会社だ。

社員６０人の中小企業に分類されるが、社員教育が充実していて商品を扱うテナントを擁するビルオーナーからも信頼は厚い。

「榎本君しにて、難しいか……」

長い付き合いの中で、彼に頼んで解決出来なかった物件は無い。

逆に他で調べて貰って問題有り・解決出来ない、と言われた案件も霊障が無くなったと報告を受けた事が有る。

つまり彼が何もしていない・調べても何も無いと報告を受けた。

確かに、その後に霊障は治まっている……

どんな案件でも、彼が関われば治まっている。

もし自身が解決したならば、正規に報酬を要求するし此方も払う用意が有る。

他で危険と判断された物件を解決したのだ。

個人事務所としても、随分な宣伝になるだろう……

彼は個人経営だからと経費は掛からないと、相場よりも安いし明朗会計だ。

ちゃんと必要経費や使った機材の項目を記載した見積書を出してくる。

あやふやな表現も無いし、労務費だって実働日で換算している。

心霊を抜かして調査事務所として一般会計に廻せる内容なんだが、彼は有名になる事・注目を集める事を極端に嫌がる。

良く居る自称霊能力者の一式幾らで、成功したら報酬を吊り上げたりもしない。

「何故なんだろうねぇ……
危険な仕事なのに商売っ気が無いのは、気になるんだけどね。
生霊か……
たしか生霊や死霊を得意とする霊能力者が居て、仕事を紹介して欲しいって言っていたな……
梓巫女の桜岡霞か。
お試しで使ってみるか。
偉い美人さんらしいし、榎本君も殺伐とした霊障現場が華やぐから嬉しいだろう」

◇◇◇◇◇◇

そう言って彼女に連絡を入れる事にした。

夜勤明けで自宅に戻ると、台所に朝食が用意してあった。

結衣ちゃんが、オニギリを3個と甘めの卵焼きを作ってテーブルに用意しておいてくれたんだ。

急須と湯飲みもセットされている。

彼女は既に学校に行ったんだろう。

大人しく自己主張の無い彼女は、昔から苛められていた事が多かったらしい。

最近のガキは不良でなくても、苛める側に廻るのなんて普通だ。

少しでも他と違えば、イジメに発展する。

しかも陰湿ときていやがる。

先生達も事なかれ主義でイジメを絶対認めないし、有ったとしても知らなかったとか平気でほざく。

だから筋肉同盟の友人や、その筋の仕事関係者を集めて運動会に参加したんだ。

自慢じゃないがイケメンでも何でも無いオッサン集団だが、厳つい顔と肉体には自信が有る連中だ。

結衣ちゃんを苛めたら、筋肉馬鹿の集団が何をするか分らないからな？

まぁロリッ子を囲む肉体派の連中の輪をみて、彼女をどうこうしようとは思うまい。

逆に彼女が孤立してしまうかと心配もしたんだが、何人かの友達もできたみたいだ。

もし苛める奴がいたら、構わず相手に呪いを掛けるけど。

結衣ちゃんは実の母親とその交際相手の男達に、家庭内暴力を受けていた過去があるから……

嫌な過去を思い出させる様な奴には、死ぬほど後悔させてやる。

急須をフタを開けると、ほうじ茶の茶葉が入っている。

ほうじ茶を美味しく淹れる方法は、沸騰したお湯を一気に入れる事で香ばしい香りが引き立つ事。

多めにお湯を急須に入れて茶葉が開くのを待つ。

茶葉が開くまで暫く待ち、その間に電子レンジでオニギリを暖める。

３０秒程待って急須にお茶を注ぐ。

良い香りだ……

オッサンはお酒とお茶が大好きだからね。

電子レンジからオニギリを出して一つを齧る。

具は梅干か。

彼女は必ず複数の具を用意するから、他の2つは違う具材だろう。

立ったままで一つ目のオニギリを食べ終え、残りと湯呑みをお盆にのせて応接セットに向かう。

ソファーに座り、ボンヤリと先程の調査について考える……

生霊……

箱が反応しなかったのは、大した相手ではないのか食指が動かなかったかのどちらかだ。

つまり、アレによる強制終了は無い。

有っても生霊とは、文字通り生きている相手がいるのだから後味が悪いから……

情報を整理しよう。

先ずは奴の服装だが、青白ストライプのパジャマだ。

これで特定は難しい。

病院のお仕着せのパジャマだったら直ぐに特定できるが、良く有る市販品らしいパジャマでは……

それこそ付近の病院の入院患者を虱潰しで探すしかないし、毎日同じ柄を着ているとも限らない。

表情だが、見たのは落ち窪んだ暗い眼窩の顔で有り、これも特定は難しい。

生霊の表情は千差万別で、酷い顔をしていたり怖い顔をしていたり……

逆に普通だったりもする。

つまりは、見た目では個人の特定は出来ない。

次は、奴の行動だ。

3階の角部屋に固執する意味が分からない。

あの部屋の中で、何か心残りな出来事が有ったのか？

工事中の建屋の中での事だと、工事関係者と考えられる。

建設に携わった連中で、長期療養中の奴が居るか？

この建物は、内装が手付かずだ……

それにあの部屋に入れる工事関係者も絞られる。

具体的には現場監督・型枠大工・鉄筋工・鳶土工・墨出工、後は埋設配管を行う電気・設備工の連中だ。

これは、当時の現場監督を探し出し金を握らせて調べさせるのが一番だ。

当時の作業日報や作業員名簿とかも有るだろうから、名前が分かれば調査はし易い。

最悪は資料だけ貰って、別枠で興信所を使っても良いか長瀬さんに相談してみるか……

あと考えられるのは、窓の外の景色だけど。

これも特定は難しいな。

見える景色全てを調べてたら3週間じゃ終わらないよ。

考えに耽っていたら、全てオニギリを完食していた！

折角、結衣ちゃんが作ってくれたのに味わう間も無く完食って？

温くなったほうじ茶を飲み干してから、食器を洗い乾燥器の中に入れておく。

さて、風呂に入ってから仮眠をとるかな。

寝不足では、考えも纏まらないだろう……

◇◇◇◇◇◇

携帯電話の目覚まし機能の電子音で目が覚めた。

時刻は、午後３時……

そろそろ結衣ちゃんも帰ってくるだろうから、グウグウ寝ている訳にはいかない。

ベットから起き上がり、部屋着に着替えて簡単な身嗜みをする。

イケメンでない分、清潔感は持たなければ！

窓の外を見ると、雨雲が広がっており今にも雨が降り出しそうだ。

テレビを付けて、天気予報がやっているかを調べる。

ケーブルテレビのお天気専門チャンネルを見れば、神奈川県東部三浦半島は……雨だ。

明日の午前中まで、降水確率は８０％を越えている。

「やれやれ、坂崎君も大変だな。
雨なのに外で一晩中警備をするのか。
途中で様子を見に行こうかな……」

昨日の今日で、一人で心霊現場に夜間警備じゃ可愛そうだからね。

差し入れ位はしてあげましょう。

結衣ちゃんにお帰りを言う為に、1階の居間に移動しようとしたら、携帯が鳴り出した。

ディスプレイを確認すれば

「長瀬総合警備保障？長瀬社長」

となっている。

何か有ったのかな？

「もしもし？榎本です」

「ああ、榎本君か。
今、電話は大丈夫かい？」

「ええ、仮眠から起きたところです。
何か有りましたか？」

「ふふふふ、榎本君に良い知らせだよ。
生霊に詳しい専門家をそちらに送るよ」

「それでは今回の件は、その人に引継ぎをして完了で良いですか？」

生霊の専門家なら、お任せして平気だろう。

長瀬社長が頼む位だから、裏は取れてる本物なんだろう。

「いや、今回は彼女と協力して当たって欲しい。
梓巫女の桜岡霞君だ。
本物だったら、今後もお付き合いを願いたい相手なんだ。
宜しく頼むよ」

桜岡霞？

「本当に有った怖い○○」

とか

「信じるか信じないかは貴方次第です」

とかに出てくる霊能者じゃないか！

「長瀬さん？
そんな大物なら僕は要らないですよね？
面倒くさいから嫌ですよ」

僕自身が脛に傷を持つ身なんだ。

お茶の間の有名美人霊能力者なんかと一緒だったら、悪目立ちしてしょうがないぞ。

「そこを何とか頼むよ。
彼女はかなりの美人らしいし、恩を売るのは良い事だと思うぞ？」

彼女のプロフィールを思い出す。

巫女さん……日本美人……巨乳……性格はドS……お姉さん属性…

…却下だ！

僕はロリっ子が大好きなんだ！

でも坂崎君にはご馳走だね。

「霊能力者同士は共闘は難しいんです。
お互いに、同業者には秘密にしたい事が有りますから。
どうしてもと言うなら、今回は僕が辞退しますが……
申し訳有りません」

そう電話越しだが、頭を下げる。

「そうか……
では仕方ないな。
僕は榎本君の方を信用しているから、残念だが彼女の方を断るよ。
引き続き調査を頼むよ」

そう言って電話を切られた……

申し訳ないけど力有る霊能力者と共闘すれば、箱の秘密がバレるかも知れない。

危険は犯したくないんだ。

◇◇◇◇◇◇

やれやれ、まさか辞退する程に嫌がるとはね……

今、売り出し中の美人霊能力者を遠ざける意味が分からない。

業界の先輩として、榎本君は本当の霊能力を持ち安くて堅実で有名なんだ。

彼は自分では思っていないだろうけど、この業界では

「困ったら榎本心霊調査事務所へ」

って言われてるんだよ。

大手各社は専属の霊能力者を抱えているから触手は伸ばさないが、機会が有れば紹介して欲しいと依頼も有る。

彼が嫌がるなら、彼女を断るのは構わないのだが……

「電話で話した感じでも、かなり気の強い女性だった。先任者から協力体制は嫌だからなんて言っても、引き下がるかどうか……」

気が重いが、仕方ないか。

デスクに貼ってある付箋に、彼女の携帯電話と事務所の電話番号が書いてある。

「先ずは、事務所から掛けるかな……」

気が重いためか、指はかなりゆっくりとボタンを押していく。

仕事を頼んで直ぐにキャンセルだからな……

結果だが金は要らないが、この件には関わると強く押し切られた！

すまない、榎本君。

君は、その、かなり恨まれてしまったよ。

先程の彼女の剣幕を考えても、実力不足で断られたと思ったんだろう……

「俺の仕事に口出しするな！」

それ位、言われたと受け取っているぞ。

あれなら今晩にでも、現場に押しかけるな。

さてどうするか……

もう一度、榎本君にあやまりの電話をかけるのも億劫だし。

なるようになれば良いかな？

僕は、桜岡君の依頼は取り下げた。

だから彼女が、その後にどう動くかは彼女の自由だな。

うん、そうだ！

もう良い大人の男女なんだし、あとは彼らの問題だ。

なにか有れば、榎本君も連絡してくるだろう。

彼らの事を頭の隅に追いやり、次の仕事の事に頭を切り替える。

◇◇◇◇◇◇◇

「結衣ちゃん、おかわり！」

元気よく茶碗を彼女に差し出す。

「はい、どうぞ。
たくさん食べて下さいね」

ご飯を大盛りによそった茶碗を渡してくれる。

今夜のメニューは、八宝菜・揚げだし豆腐・ホウレン草の御浸し、
それと卵焼きに油揚げとジャガイモの味噌汁だ。

昨夜は揚げ物だったから、色々と飽きない様にメニューを考えてくれる。

この八宝菜も、豚肉・チンゲン菜・椎茸・人参・竹ノ子と具沢山だ！

野菜をちゃんと食べる様に考えているのだろう。

オッサンに配慮したメニューが多い。

勿論、僕は彼女の手料理は何でも残さず食べるけどね。

「そうだ！

今晩も様子見だけだけど、昨日の現場に行ってくるよ」

坂崎君の様子見と、適当なホカ弁でも買って差し入れよう。

「大変なんですね。

体に気を付けて下さいね。

何か残り物で、お夜食を作っておきますから」

はにかみながら、仰って下さいました！

ええ子やなー、結衣ちゃんは……

やはり家庭的なロリっ子ってサイコー！

彼女との幸せな同棲生活?を守る為にも、変に目立たない様に気を付けなければ駄目だね。

# 第6話

長瀬社長からの電話を切ってから、デスクの椅子に深々と座り考える……

外を見れば、暗い雲が立ち込めてきたわね。

今夜は雨かしら？

先程の話を噛み砕いて考えてみる……

この私に一度仕事を依頼して、直ぐにキャンセルするなんて……

先方は理由を濁したけれど、先約の霊能力者が私との仕事を嫌がったのだろう。

榎本心霊調査事務所……

調べてみても、大した事も無い弱小の部類でしかない。

本人一人だけの個人事務所でしかないし、大手企業と専属契約を結んでいる訳でもない。

ただ数少ない本物の霊能力者である事は確からしい。

しかも、この業界では珍しく明朗会計と言う変な事務所らしい。

何が有るか分からない、命懸けの仕事をテンプレートみたいな価格設定で行っているとは、欲が無いのか馬鹿なのか？

しかし……

長瀬社長は、私よりも相手を取った。

私の実績は知っている筈だし、彼が調査して霊障は生霊が原因だと報告し生霊の対処は不得意と知りながら

あえて私の方を断った。

何か彼に有るのだろうか？

安いから？

長年の付き合いから？

私が女だから？

何か、私では勝てない要素が有るのかしら……

私だって厳しい修行に耐えて、この力を手に入れたの。

霊障で苦しんでいる人達を助ける為に！

それでお金が貰えるなら一石二鳥だしね。

でもついカッとなってしまい、お金は要らないけど、この件には関わると言ってしまっが……

「後悔させてあげるわよ。

この私を袖にしたんですからね。
おーっほっほっほー！」

桜岡除霊事務所内で響き渡る高笑い……

所長室の隣で待機していた電話番のバイト

と

薊（あざみ）　菊里（きくり）

田鶴（たづる）　更紗（さらさ）

の2人は頭を抱えていた。

「また霞さんの高笑いが始まったわね」

「うん。
今日は一段と切れが良いわ……
よっぽど良い事は有ったのかしらね？」

実はテレビにも出ている桜岡霞は有名人だ。

しかも美人だし巫女服だし、胡散臭い霊能力者だし……

だから引切り無しに電話やメールが届く。

仕事の依頼だけでなく、冷やかし・嫌がらせ等の迷惑な問い合わせが殆どだ。

中には、他の（自称）霊能力者からの果たし状？

や見た目に騙されたのか結婚の申し込みとか……

サインと実印を押した結婚届が送られてきた時にはドン引きした。

添えられた写真は……

本人の名誉の為にも伏せなければならない人物だったとだけ、言っておく。

あと馬鹿に出来ないのが、郵便物と小包だ。

これも封を開けると、言葉に出来ない不思議な物が多々有る。

流石に爆発物とかは無かったが、嫌がらせの剃刀やゴミなどは当たり前。

怪しい人形や、どう見ても危険な手作りの何かも送られてくる。

これらは金属探知機に掛けて、知ってる人以外で送られてきた食べ物は殆ど捨てる。

人形やら呪術的な品物は、霞さんに見て貰い相手に返す。

相手が分からなければ、お払いするか……

捨てる。

一寸した貴金属やブランド物などは勿体無いと思ったが、呪術の中

には一寸した金品に呪いが掛かっており、知らずに受け取ると呪いが発動するとか……

しかも、その呪いは持ち主に富を与えるが代償を求められる。

その代償を知らずに停滞すると、呪いが発動するという巧妙さだ。

なんて嫌な世界なんでしょう……

でも大抵の物には、そんな物は掛かってないので内緒でリサイクルショップに引き取って貰っている。

結構な金額になっていて、良い臨時収入です。

等と考えていたら、霞さんが所長室から出てきて

「今夜は仕事で出掛けるから、私は先に帰って仮眠するわ。
貴女達も定時になったらお帰りなさいな」

そう言って、事務所を出て行った。

「今夜はテレビ関係の仕事も無かったわよね？」

「そうね……
予定表にも、除霊現場の仕事は無いわ。
急に何か有ったのあしらね？」

私達は顔を見合わせながら考えたが、特に問題ないと思った。

私達は、あくまでも電話番のバイトであり霊障現場には同行しない

のだから……

「更紗ちん、今日帰りに上大岡のタカノフルーツパーラーに寄っていかない？」

「いいわよ。
特製パフェを二人で食べましょう！」

３０００円もする巨大なフルーツてんこ盛りなパフェを思い浮かべながら、残りの手紙のチェックをする手を早めた。

◇◇◇◇◇◇

彼女達に指示を出し、地下駐車場に停めてある愛車に向かう。

スカイラインＲ３４－ＧＴターボ！

ＡＴ仕様だが何ちゃってスポーツカーが気に入っている。

この手の車でＡＴ仕様なのは何だかなーって思うけど、マニュアルはかったるいし別に走りに拘りが有る訳でもない。

駐車場を出て、のんびりと国道を自宅へと走る……

１５分ほど走るとフロントガラスにポツポツと水滴が付きだした。

「ああ、降り出したわね。
雨って嫌いなのよね、濡れると髪が重くなるし服は透けるし……」

前にテレビの除霊現場で豪雨に合い、只の自然現象だったのに霊障とか騒ぎ出して……

びしょ濡れのままで撮影を続けたのよね。

あのエロディレクター！

ジロジロと私を視姦しやがって！

今、思い出しても腹が煮え繰り返すわね。

その回の視聴率が高かったのは、除霊の内容でなく私の透けた巫女服だとか言いやがって！

あれからよね、変な手紙やメールが来る様になったのは……

「梓巫女霞・濡れ濡れ除霊スペシャル」

ってどんなエロビデオのタイトルなのよ！

ゴールデンタイムで、こんな特番を放映するから大変なんだからね。

ＴＶ局の役員を軒並み下痢にさせたら謝罪会見をしたけど、世間に定着した私のイメージはガタ落ちだわ！

しかし正式な除霊には、決められた手順が必要だし精神集中にも欠かせないので仕方ないのよ。

しかも今夜は、同業者に宣戦布告みたいな事をしなければならないのだから……

バッチリ正装で行かなければならないわね。

今夜の対策を考えていたら自宅に着いた。

新興住宅街に有る低層マンションが私の家。

巫女が神社でなくて、近代的なマンションに住むなんて変だと思うかも知れないけどね。

私は巫女と言っても、神社で奉仕する緋袴の巫女とは違う。

現代の巫女は神職ではなく神社に奉職する女性の総称だ。

梓巫女とは古来より特定の神社に所属せず、各地を渡り歩いて人々を助けた女性達だ。

吉兆の占い・厄落とし・口寄せを行う先代の梓巫女に師事し、適正があった厄落としと口寄せが免許皆伝となった。

誰も居ない一人暮らしは気楽な物だ。

玄関を開けて、セコムを解除しベッドにダイブする。

今夜は仕事だから、このまま眠ってしまいたいが……

化粧を落としてお肌の手入れをしなければ大変な事になる。

只でさえ不規則で有りストレスの多い仕事なんだから、お手入れを怠ると大変なのよ。

菊里や更紗みたいにピチピチして水を弾く肌でなく、私はしっとり肌なんですからね！

疲れた体に鞭を打ち、バスルームに向かう。

夕食？

勿論デリバリーよ！

手作り？

ナニを女性に幻想を抱いているのかしら？

最近は蕎麦屋か中華屋やピザやデリバリーガスト等、色々有るから迷っちゃうわ。

あと欠かさないのは焼酎ね！

百年の孤独や森伊蔵が最近のお気に入りよ。

ワイン？

シャンパン？

カクテル？

なにそれ？

かったるい飲み物ね！

今夜はピザのカレーモントレーのMサイズに焼酎の抹茶割りで決まりね！

残念ながら、彼女は見た目は美人だが中身はオッサンだった……

◇◇◇◇◇◇◇

愛車のR３４－GTターボで問題の建物の前の仮設ゲート前に横付けする。

シトシトと降る雨の中、問題の建物を見上げれば……

確かに禍々しい何かを感じるわね。

特に3階の角部屋が怪しいと言っていたが、残念だが私には其処まで特定出来る力は無い。

見ただけで場所や原因が特定出来るなら苦労はないのだけど……

そんな万能な霊能力者など歴史上の有名人物くらいだろう。

ボーっと見上げていたら、ゲートのくぐり戸から誰か出てきたわ。

彼が、あの榎本……
じゃないわね。
警備員の服装だから、彼は長瀬総合警備保障の社員かしら？
「あのー？
ここは私有地で立入禁止なので車の移動を……
って、あれ？
お姉さんもしかして桜岡霞さんですか？」
馬鹿ズラ下げて私を凝視する彼は、私の事を知っているのね。
まぁ悪い気はしないわね、私の知名度も大した物だわ。
「ええ、そうよ。
この建物で問題があるとお宅の社長から聞いたのよ。
だから調べにきたの」
にっこりと笑顔のサービスをしてあげるわ。
勿論、仕事は断られたけど話を聞いたのは本当だから嘘はついていないの。
「ああ、そうでしたか。
そろそろ榎本さんも来るので、共同で除霊するんですか？」
アイツ、そろそろ来るのね。

そうね、直接対決の前に情報を仕入れておこうかしら……

「共同戦線を張るのは相談次第かしら？
それで榎本さんって、どんな人なのかしら？
どんな力を持っているのか教えて欲しいわ」

胸を強調する様にお願いする。

案の定、鼻の下を伸ばして私の胸元を見つめているわ……

全く男って奴は、みんなスケベで下品で最低だわ。

「榎本さんですか？
そうですね……
筋肉質の短毛種で、愛染明王の力を借りて除霊をするそうですよ」

愛染明王って事は、真言系仏教宗派ね。

泉涌寺派かしら？

「個人の除霊事務所を構えていると聞いたけど、お坊さんなのかしら？」

どこかの寺に所属しているなら、調べようは色々有るわね。

ただ正式に何処かのお寺に所属しているのに、単独の事務所を構えるのは問題が有る筈よ。

「在家僧侶って言ってましたよ……
ここは濡れるので、中に入って下さい。

榎本さんから建物の中に入るのは禁止されてますが、テントを用意してありますから。
ささ、どうぞどうぞ此方へ……」

見ればアウトドアで使う様なテントが設置され、椅子が幾つか置いてあるわね。

こんなシトシト雨の降る吹き曝しの場所で、立ち話もなんだわね。

車のエンジンを切って中に入ろうとすると、微妙な顔をされたわ?

「どうかしました?
この場所に駐車するのは邪魔かしら?」

一応警備員だし、職場の前に不法駐車は問題だったのかしら?

「いえ、榎本さんは退路の確保を重視していて……
車やバイクは霊障で動かなくなる場合が有るから、現場近くに車を停めて自転車できますから」

ああ、なる程ね……

確かに霊障で、電子機器が壊れるのは聞くわ。

車だって電装品がイカれればエンジンが掛からないわ。

「確かに慎重な方なのね。
でも何故自転車なのかしら?」

私は自転車は乗れないの!

悪いけど、運動神経は良くないの！

「自分の肉体のポテンシャルだけで最高４０ｋｍ位のスピード出せますし、何も危険は霊だけでないから？」

何故、疑問系なの？

「霊だけでない？」

「いや、ヤクザや不法侵入者・キチガイや浮浪者とか危険は人間の方が多いって。
だから、逃走手段は十分に用意するそうです。
でも結構な武闘派だから、一人二人位なら肉体言語でＫＯ出来る人ですよ？」

筋肉馬鹿の武闘派って……

確実に脳ミソ筋肉君しゃない！

そんなのと共同戦線なんて嫌だわ！

只でさえ人気の無い所ばかり行くのよ。

私の美貌にクラクラっときたら？

か弱い私では抵抗も出来ないのよ！

「結構危険な人なのね……
私、怖いわ……」

貞操の危機だわ！

私を監禁して陵辱するかも知れないわ……

「大丈夫ですよ！
あれで紳士だし、女性には優しい人ですから……
噂をすれば来たみたいですよ」

彼の目線を追えば、折り畳み自転車をゲートの中に入れている男を見た。

なんて言うか……

見た目は普通のオッサンだわ。

# 第7話

坂崎君が、現場に女性を連れ込んでる？

何ていう事だ！

童帝（わらべのみかど）の癖に、深夜に巫女さんの彼女を連れ込むだと……

巫女さん……巫女？

こんな心霊物件に、夜遅く巫女さん？

よくよく見れば、テレビで見た事が有るぞ……

梓巫女の桜岡霞だっけ？

たしか透け透けだか濡れ濡れだかで有名な……

今回の件は彼女に手を引いて貰った筈だけど、何故ここに？

「今晩は、坂崎君。
職場に彼女を連れ込むなんて、やり手だね」

もしかしたら坂崎君の本当の彼女の……筈は無いな！

大方、自分が断られた訳を知りに来たか、若しくは宣戦布告か……

この業界の連中は自信過剰気味なのが多いからなー。

「お馬鹿さんな事を言わないで下さらない？
私を袖にしてまで依頼した貴方の事を調べに来たのよ」

ああ、やっぱりプライドを傷付けた報復か……

胸を反らせて高笑いしそうな表情だし、典型的なタカビーさんかな？

「榎本さんスゲー！
売れっ子美人霊能力者から、そんなに警戒されるなんてスゲー！」

美人の件（くだり）で顔がニヤけてるとは、おだてに弱いのか？

「あっ……えっまあ、それ程美人でも……」

良し、追撃だ！

「いやいや僕もこの物件は遠慮したんですよね。
生霊と判断したんですが、専門外だったから……
でも専門の桜岡さんが出張ってくれたなら安心だ！
それで、何時調査を受けたんですか？」

「いえ、その私は……
ボランティア、そうボランティアよ！」

◇◇◇◇◇◇◇

何故か、その場の勢いでボランティアとか言ってしまったわ。

だって素直に美人霊能力者とか言うから……

最近は、スケスケ巫女とかヌレヌレ巫女とかＡＶ女優扱いをされてたのよ。

あの榎本って男も下手に出てるし、私の素晴らしさを分かっているのね？

そうなのね？

美しさは、罪……

私は罪深い女……

「では僕はこれで……

いや良かった良かった。

本職の美人巫女さんが来てくれて……

ではお願いします」

なに、ここに居ると厄介事に巻き込まれる事間違いなからみたいな顔は？

さっさと撤収しようと、その場でユーターンした所でガッチリ掴む。

「お待ちになって、榎本さん。

逃がさないわよ」

誤魔化せる程、私は甘くないですわよ。

ガッチリ掴んだ肩は、中々の筋肉を纏っているわね。

随分と硬いわ……

「何でしょう、桜岡さん？
貴女が居れば、事件は解決したも同然じゃないですか？」

やんわりと肩を掴んでいる私の掌に、彼が掌を添えて肩から外す。

掴まれた掌をニギニギとされた。

やっぱりコイツもエロい屑野郎か？

私は嫌そうな顔で彼の掌を払うと

「ふざけてないで手伝いなさいな！」

そう言ってやった。

「手伝いとは？」

とか真面目な顔で言ってきたから

「良いから現場を案内しなさいな」

そう言って顎で建物を示す。

「取り合えず、昨日の進入で危険と判断した物件に入れと？
本気で言っていますか？

一度撤退した相手なら、対抗手段を用意しないと問題があるんですよ！

ましてや生霊だ……

僕が出来る事は少ない」

なる程、自分が一度調査したから生霊の部分には自信があるのね。

しかし生霊ならば私も一度確認しておきたいし、彼の能力も知っておきたいわね。

「生霊に関しては、私の得意分野。

大船に乗った心算でいなさい」

そう言ってズンズンと中に入ろうとする私を止めて、なにやら装備を取りに行くとか出て行ったわ。

警備員の彼が言うには、照明器具とか自衛の武器とか色々有るみたい。

除霊道具か……

私は梓弓と少量の清めの塩くらいだわ。

最近は小型のＬＥＤライトを持っているけど、除霊道具と聞かれると違うわね。

同業者の除霊道具か、凄い興味が有るわ！

しつこく話しかけてくる警備員に、適当に相槌を打っていたら段ボールを二つも抱えて来たわね。

ベースにしているテントの中に段ボールを置くと、色々と荷物を並べ始めたわ

先ずは……

市販のランタンかしら？

幾つも出して点灯確認をしてるわね。

「お店でも始める位にランタンばかり……これが貴方の商売道具なのかしら？」

ランタンをチェックする手を止めて、なにやら蓋を開け始めたわ。

何かしら？

中に、御札が折り畳んで入っているわ。

「これは？なにやら梵字が書いて有るけど、御札で良いのかしら？」

ランタンの中に仕込むなんて……

まっまさか、このランタンが武器なの？

これを投げつけるの？

なんて巧妙な……

「これはＧＥＮＴＯＳ製のエクスプローラー・プロＥＸ－７７７Ｘって言うランタンさ。
別にメーカーに拘りは無いけど、火事を起こさない電池式で長持ちで明るいＬＥＤ製が良いね。
消耗品だから安価で構わない。
愛染明王の御札を入れるのは、耐霊障措置だよ。
良く除霊現場では、電子機器が使えなくなったりするでしょ？」

確かに携帯電話やカメラが使えなくなったり、照明器具も消えたりするわ。

「でも御札だけで対抗出来るの？」

車のエンジンを掛からなくする様な、強い霊障も聞くわよ。

「気休めにはなるよ。
確かに御札で防ぎ切れない事も有ったよ。
だからこれも用意している」

次に箱から取り出したものは……

発炎筒と、なにかしら？

この液体の入った棒は？

「何かしら？
発炎筒は分かるけど、この薬品の入った棒は……」

「これは普通の発炎筒じゃないよ。
船舶用の発炎筒さ。

車に積んでいる発炎筒は、燃焼時間は5分程度で１６０カンデラ以上の照度が有る。

しかし船舶用は４００カンデラ以上の照度が有るんだ。
でも1分しか持たないけどね。
火は、それだけで魔を払うから有効だよ」

そう言って、その船舶用の発炎筒を私に差し出してきた。

「車の発炎筒と基本は同じだよ。
しかし着火したら、自分に火の粉が被らない様に手を水平にして持つんだ。
こんな感じで」

試しに水平にして持って見せたら

「そうそう、でも火災だけは気を付けるんだよ。
それはあげるからね」

まるで子供扱いをされたわ。

「この棒は何？」

親切にしてくれたのは嬉しいわ。

でも恥ずかしいから、テレ隠しでへんな棒を持って振って見せた。

「それはケミカルライトだよ。
折ってごらん」

「ケミカルライト？」

言われた通りに、中ほどでくの字に曲げてみたら……

棒自体が黄色く発光したわ。

「綺麗……
これ何なの？」

黄色に発光する棒を振り回して聞いてみる。

何よ、その見守るような温かい目線は……

「シュウ酸ジフェニルと過酸化水素を折る事で混合し、科学反応により発光させるオモチャだよ。
夜店やコンサート会場でも売っているよ。
霊障も流石に化学反応までは止められないのか、これは消された事はないよ。
ただ、吹き飛ばされた事はあるけど」

これも何本か差し出してきた。

受け取ったのは、面白そうだからよ！

「あとはコレさ！
１２００ルーメンの明るさが有るし、遠くまで光が届くから便利だよ。
あと、暴漢がいたら棍棒代わりに使えるし」

軍用みたいな厳ついマグライトを2本、箱から取り出して見せてく

れる。

私のＬＥＤライトがオモチャみたいで恥ずかしいわ。

確かに、あの腕の太さで鉄の棒みたいなマグライトで叩かれたら……

グロい事になるわ。

チッ、流石は現役の先輩だわ。

小道具一つでも考えているのね……

「でも同業者に教えて良いの？
真似されたりしたら、嫌じゃないの？」

私なら人に教えないわ。

しかし彼は、表情を変えずに

「秘密にする程、大した事じゃないからね。
同業者だってライバルだって、生存率が少しでも上がるなら積極的に真似するべきだよ」

そう言って、また段ボールを漁り出した。

「今度は何が出るの？」

もっと面白い発想の物が見たい。

もっと現場で役立つ物が見たい。

もっと同業者の秘密が知りたい。

「特殊警棒にスタンガン、編み上げのアーミーブーツに多機能チョッキ。
数珠に御札に清めの塩だよ」

「清めの塩って、５ｋｇ位有るわよ？」

ドサッと紙袋にパンパンの塩を置かれても……

清めの塩って、少量で有り難味の有る物じゃないの？

「自分の祭壇で祭ってるからね。
効果が弱ければ量で補うのは有効だよ」

そう言って小さなケース……

昔良く見た円柱型のフィルムケースに詰めていく。

はいって3本程、手渡されたけど。

「こっちは相手にぶつける用だよ。
蓋を取ってぶちまければ良いから。
こっちは結界用……
円を描く様に地面に撒けば簡易結界だ……
でも逃げ道が無いから、朝まで篭城用かな」

やはり真言系仏教を修めているから、清めの塩も御札も自作出来るのね。

ただただ関心するしか無かったわ。

「桜岡さんの準備は良いかい？
良ければ、そろそろ行こうか……
あまり遅くなると、奴らが活発に動き出すかも知れないからね」

ランタンの入った段ボールを警備員に持たせて、私の準備を待っているわ。

自分の装備って言うか、持ち物を確認する。

貰った発炎筒とケミカルライトを帯に差す。

清めの塩は小袖の部分に入れて、梓弓を右手に持つ。

貸してくれた軍用のマグライトを左手に持ち、持参のＬＥＤライトは清めの塩を入れた小袖の反対側に入れる。

たったコレだけの装備とも言えない持ち物……

彼は霊力が弱いから小道具に頼るとか言っていたけど、私ももっと自分に出来る事を考えないと駄目だわ。

「準備は出来たわ。
では案内して下さいな……」

彼を先頭に私、そして警備員が一列に並んで建物に入って行く。

昨夜と同じ手順なのだろうか？

警備員が手馴れた感じで、カンテラを床に置いていく。
なる程、退路の照明を確保しているのね。
でも灯かりが消されたらどうするのかしら?
奴らが襲って来たら?
建物内に入って初めて分かったけど、階段室って真っ暗よ。
私は、そんなに早く階段を下りられないわよ。
「ねえ?
もしも、もしもよ?
逃げる時に一斉に灯かりが消されたらどうするの?
外は生憎の雨で月明かりは無いし、人工の灯かりも建物内には届かないわよ」
前を歩く彼の袖を引っ張って聞いてみた。
彼はニヤリと笑いながら
「方向はケミカルライトを床に落としておくから、灯かりの右側が階段だよ。
しかし階段は暗い、ノロノロと下りるしかないよね。
だから2階まで下りたら、近くの窓から外に飛び出すんだ!」
「2階から?飛び降りるの?
無理よ無理、私は運動は苦手だし、普通女の子に2階から飛べって

言う？」

「建物の周りに危険な物が無いのは確認済みだから、最悪でも足を骨折する位だから平気だって。
逃げ切れないと死ぬかも知れないんだよ？」

物凄く真面目な顔で、トンでもない事を言いやがって！

「貴方が私をお姫様抱っこして飛び降りなさい！」

アホ面晒して驚いている彼に、指を差して命令する。

全く少しは見直したと思えば、女の子に無茶振りするなんて……

私をこの桜岡霞をお姫様抱っこ出来るんだから、気張りなさいよね！

# 第8話

勢いとプライドだけで来てしまった、心霊物件マンション。

当初は私を仕事から降ろした相手に文句を言う為に来た訳だけど……

榎本心霊調査事務所って零細企業相手に、現在好評売出し中の私が大人気ないと思ったわ。

しかし実際は実績有る業界の先輩で有り、色々と学ぶ事も有ったのだが……

彼は脳も筋肉の馬鹿だった。

確かに霊に反撃されたり、または能力が効かずに逃げ出す事は有るわ。

その為の退路確保は重要なのは、理解したわ。

あれだけの準備をする霊能力者は珍しい。

逃げる事を準備するのは恥ずかしい事だと思っていたけど、考えを改めさせられたわ。

確かに、命有っての物ダネだわよね。

彼はその辺の準備に抜かりは無いと思っていたの。

しかし……

しかしよ。

最後の最後で

「追いつかれそうなら、2階の窓から外に飛び降りるんだ！」

って女の子に何言ってるのよ。

しかもガチで本気だったわ……

反論したら、何を言っているの的な顔してたの。

信じられる？

勿論、私は自分の力を信じているし、生霊の対応には自信があるわ。

でも最悪……

そう！

最悪の場合は失敗するかもしれないから。

その場合は、彼に抱っこして貰い飛び降りるわ。

ちょっとご褒美が過ぎるかも知れないけど、一応は命の恩人になるのだから……

私に触れる事を許してあげるわ。

この穢れなき清純な私をね！

彼も私程の美人を抱っこ出来るのだから、嬉しそうな顔をしていたわ。

いえ、している筈よね？

私に気付かれない様に、警備員と押し付けあってるのは……

聞こえないったら聞こえない。

あのインポ野郎共め！

もしかして、おホモな連中なのかしら？

でも……

「榎本さん、確かに彼女は美人だけど熟女じゃない！
だから命を懸けて迄は、守れない！」

とか

「あのなぁ坂崎君！
僕だって仕事と割り切っているけどさ。
ロリじゃないから無理！」

とか、あまつさえ

「「やっぱ微妙な年齢じゃ萌えないよなー」」

とか、酷すぎるわ！

今まさに女盛りの２５歳の私としては……

私の硝子のハートは粉々に砕けたわ！

この変態異常性欲者野郎共め！

何かやったら、即通報してやる！

社会的制裁を受けるが良いわ。

でも結局は警備員が私を背負って逃げて、彼が殿で防ぐ事になったらしいわ。

取り敢えずは、体を張って守る気持ちは有るのね？

信じるわよ！

私、信じるからね！

◇◇◇◇◇◇◇

お馬鹿なじゃれ合いをしている内に、問題の3階に到着した。

本来、窓が有る空間は只のポッカリとした暗黒の開口になっている。

外は生憎の雨模様……

月明かりも星の煌きも無い。

ドンヨリとした雲に覆われているので自然の明かりは殆ど無い。

彼から貰った軍用マグライトと、床に置いたランタンだけが頼りね……

「ねぇ？
問題の部屋は一番奥なのよね？」

無言で頷く彼は、それでも周囲を警戒しているのが分かる……

問題の部屋以外も、一応は警戒するのね。

階段を登りながら聞いた話では、最奥の部屋とその手前の部屋に異常が有ったって。

虫を敷き詰めた黒い絨毯ね……

心霊現象で虫を操るなんて初めて聞いたわ。

標準的な女の子で有る私も、当然虫が苦手よ。

昨夜は一部屋ずつ確認したらしいが、今回は問題の虫の部屋まで進んで行く。

彼がゆっくりと虫の絨毯の部屋に入って行く……

私も彼について室内に入り、彼の背中越しに中の様子を伺う。

マグライトで照らした床一面に蠢く虫・虫・虫……

思わず漏れる悲鳴を飲み込む為に口を手で塞ぐ。

きき き、気持ち悪いわ。

ウゾウゾと蠢く、波打つ黒い絨毯……

「昨夜と変わらないな……
いや、少し増えているのか？」

靴の先で、虫の……

多分だが、甲虫だろう死骸を軽く蹴りながらボソッと話す。

「異変は継続しているって事？」

私の問いに頷く……

「この部屋の虫の実害は？
この虫って、気持ち悪い以外に何か害が有るの？」

女の子的には物凄い被害が有るのだけど、霊障としては弱いと思う。

虫なんてウザいだけだ。

彼は、ふっと考える様に顎に手をあてて……

「本当に昆虫を自由に操れるなら、厄介だ……
僕らじゃ瞬殺だな」

両の手の平を上に向けて、おどけた感じで敗北宣言をしたわよ！

「瞬殺？たかが昆虫でしょ？
それは毒虫だったら危険かもしれないけど、そんな虫は日本には少ないわよ」

踏めば死ぬ様な虫だし、どちらかと言うと不快感が強い生き物だ。
瞬殺されるとは思えないんだけど？

「虫と侮ると危険だよ。
人間の生活圏に居る昆虫だけだって危険なんだよ。
例えばミツバチだって、弱いけど毒針を持っているよね。
それらが一斉に頸動脈を集中的に刺したら？
カメムシが鼻や喉に大量に詰まったら？
蛾や蝶の燐粉が眼に入ったら？
小さくて弱くても、数が半端無い生き物なんだよ。
死兵として群がったら、何処にも逃げ場なんてないでしょ？」

なっ？

なんて気持ち悪い想像をする男なんだろう……

「リアルに嫌な想像をしたわ……
全くレディを怖がらせるなんて、紳士じゃないわよ」

両手で自分を抱き締める様にして、体の震えを抑える。

想像するだけでも、吐きそうだわ……

彼が部屋の外に出る素振りをしたので、道を空けるように部屋の外に出る。

「前に山の中で、虫を操る敵と戦った事がある。戦うなんて格好良くなくて、全力で逃げたんだけどね……」

ははははって笑ってるけど、流石は現役って事ね。

私よりも遥かに戦闘経験が有るのね。

あら？

警備員があんなに後ろに下がって……

まぁ仕方ないわね、彼は素人さんなんだし。

「じゃ問題の部屋に行きましょう」

そう言って彼の背中を軽く押す。

凄く嫌そうな顔をして、私を見たわ。

こんな美人がスキンシップをしたのに、何が嫌なのよ……

無言で前を歩く彼にムカついたので、軽くお尻の辺りを蹴りつけた！

チクショウ！

ケツも筋肉質で固くて、コッチの足が痛いわ！

「イタいじゃないか！」

って怒ったから

「もっと私を労りなさい！」

と言ってやったわ。

一瞬ビックリして、次に苦笑したわね。

「すまん、悪かったよ」

そう頭を掻きながら謝ったから、許してあげるわ！

再び歩き出した彼の後ろについて、問題の部屋の前へ。

そこで例のケミカルライトを曲げて落としたわ。

淡い蛍光色を放つケミカルライト……

確かに霊障が、化学反応に干渉するなんて聞いた事がないわね。

これで最悪の場合の、逃げ出す準備は完了なのね？

「桜岡さん、最悪明かりが全て消えたり対処が出来ない場合は……

この明かりを目印に左側が階段だよ。

2階に降りたら、近くの窓から外に飛ぶんだ。
間違っても頭から飛ばずに、足を下だよ。
最悪でも両足骨折ですむから……」

やはり彼は、私を抱っこして飛ぶつもりはないのね……

「貴方が私を抱っこして飛ぶんでしょ！」

私は飛び降りるなんて無理よって言ったら……

「僕は最悪の場合は時間稼ぎをするから、一緒には逃げられないよ。
じゃ、問題の部屋に入るよ」

そう言って、問題の角部屋の中に入って行った。

でもそれって、私の為に体を張って時間稼ぎをしてくれるの？

まっまぁ、それならそれで構わないけどね。

少しだけ、本当に少しだけだけど嬉しいわね。

ふふふっ！

誰かが守ってくれるなんてね。

そして遂に問題の部屋に入る。

◇◇◇◇◇◇

その空間は異様だった……

空気が纏わり付くと言うか、どんよりとした池に落ちたと言うか。

たかが一歩踏み入れただけなのに、日常と違う空間に入ったのが分かる。

息をするのにも、強く吸わないと駄目なくらいに……

空気が粘性を帯びたみたいなのよ。

先を歩く彼が止まり、片手でオイデオイデをする。

どうやら、問題の生霊がいるみたいね。

「どう、居るの？」

彼の肩越しに前を見ると……

指差す先に、問題の生霊が居た！

落ち窪んだ眼窩に、痩せこけた頬。

服は確かにパジャマだが薄汚れている……

この様な無残な外観の生霊は、本人自体も衰弱してる場合が多い。

念が強く本体もピンピンしている場合は、もっと攻撃的な姿形をしてる場合が多いわ。

彼は多分衰弱しているか、恨みより悲しみが先立っていると思う……

彼が体をズラしたので、奴の全体が見えた。

やはり生霊ね、間違いないわ。

「私に任せて……
やってみるわ」

彼の前に立ち、梓弓を構える。

そして弦を弾きながら、祝詞を口ずさむ。

大祓祝詞……

本来は大祓式にて、各々が犯した罪や穢れを祓うために唱えられる祝詞よ。

でも私は、この祝詞に力を加え梓弓の弦の振動を了解して相手に叩き付ける事が出来る！

「高の天原に神が留り坐す、皇族神漏岐に神の漏美なる命を以て……」

梓弓の弦の振動に合わせて、祝詞に乗せた霊力を相手にぶつける。

「我が皇の御孫命は、豊き葦原の瑞穂の国を……」

問題の生霊が、此方に気付いたわ！

此方を振り返り、ゆっくりと右手を上げて……

一歩、私達の方に近づいて来た。

ゆっくりと、ゆっくりと……

まだ私の力は奴に届いていないのか？

「天の磐座を放ち、天の重なる叢雲を伊頭の千別きに千別きて……」

まだ、まだよ！

更に霊力を乗せた祝詞を唱える。

奴の歩みが……緩くなったわ！

良いわ、効いている。

「ぐっ……ぐげげ……ぐっ……」

それでも奴は……

先程よりは緩慢としているが、歩みを止めないわ。

「おいっ！大丈夫か？」

彼が心配して声を掛けてくれた。

でもね、手応えは有るから……

まだまだイケるわ！

「皇の御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて、天の御蔭・日の御蔭へと隠り坐して、安らぎ国へと平けく……」

更に霊力を練り、それを乗せて梓弓を弾く！

「ぐっ……げげげっ……がぁ……ゆ、ゆり……さ……ゆり……」

完全に動きを止めて、何やら呻きだした……

ゆり？さゆり？

誰かしら？

でも、もう一息だわ！

更に奴に霊力をぶつけようと……

「ぐっ……ぐがぁ……」

呻くように叫ぶと、突然消えてしまった……

手応えは有ったのに、でも最後は違ったわ。

まるで……

「流石は巷で噂の桜岡霞さんだ。
奴は祓えたのかい？」

未だに周りを警戒しながらだけど、彼が労りの言葉を掛けてくれた。

彼は、最後に何か感じなかったのだろうか……

私も梓弓から手を放さずに、周りを警戒しながら応える。

「終わったのかは……
分からないわ。
でも手応えは有ったの。
最後が呆気なすぎて……
普段なら、もっとこう……
最後は、弾ける様に霧散したりするのに……」

「今回は、忽然と消えた……と？」

そう、忽然と消えた……

「しかし、僕の見ていた分でも奴は弱っていたからね。
効果は有ったんだよ。
後はアフターで何とかするしかないか……」

彼も私の祝詞が効果有ったのは分かるのね。

でもアフターって？

「アフターって何？」

気がつけば片付けを始めている彼に尋ねる。

まさか、この後に飲みに行くとかかしら？

ランタンをチェックしながら、下階に降りる彼に声を掛ける。

飲むなら付き合うけど、私は車なのよ……

「ああ、手掛けた仕事は一応解決してもね。
一週間は様子を見るんだ」

一階まで降りて、仮設テントに置いていた段ボールに道具をしまいながら応えてくれた。

「一週間？
そんなに私の仕事が信用出来ないの？」

彼は困った顔をして

「霊障は簡単には収まらないし、原因の霊が一体じゃない場合も有るからね。
一週間は様子を見るんだ」

経験からくるのか、なる程と思わされてばっかりね……

ちょっとだけ悔しくて空を見上げたら、先程迄の雨が止み雨雲の隙間から月明かりが私達を注いでいた。

最後の最後まで教えられっぱなしだわ……

「私……私も最後迄付き合うわよ」

私にだって、意地が有りますからね！

# 第9話

桜岡霞……

ＴＶで見た感じだと高飛車なお姉さまキャラだったが……

実際に会って見れば、やはり高飛車だが素直で責任感は有りそうだ。

しかしプライドが高く、実践慣れはしていない感じがする。

多分だが、ＴＶスタッフをゾロゾロ連れて除霊現場に行くのが多かったんだろう。

この手の物件は除霊１体で即解決とは行かない場合が多いし、１体目を除霊したら本体が出てきたとかザラだ。

本来なら其処まで説明する必要も無いのだが……

長瀬さん絡みだし、生霊の対処は僕では出来ないからね。

何とか桜岡さんを正規に仕事に巻き込まないと面倒臭いよね、主に僕が……

そんな思惑を持って、彼女を誘ってみた。

◇◇◇◇◇◇◇

坂崎君の用意してくれたテントでランタンを整備しながら考えたが、
やはり彼女を巻き込む事にした。

何故か彼女も帰らずに、僕の道具整備をずっと見ているし……

「ねぇ？
毎回一々道具を回収したら整備するの、その場で？」

どうやら彼女は、今回の件で同業者の仕事運びを調べるつもりかな？

「それはね……
物に憑く霊も居るし、使い捨て出来ない道具は自宅に持ち帰る前に
調べないと危険だよ。
僕は自宅の他に道具置き場も持っているから、ソッチで調べる時も
有るけどね。
序に作動確認を怠ると、肝心な時に使えない事も有る。
僕らは労災保険は適用外だからね……
自衛はやり過ぎる事は無いでしょ？」

「確かに……
霊が憑依した物を家に持ち帰るのは嫌ね……
自宅以外に倉庫？作業場？も有るのね。
でも他の霊能力者も、そんなに用心深いのかしら？」

最後のランタンを調べ終わり、段ボール箱にしまう。

「ヨシ、お終い……
何だか分からない物を相手に命を懸けるんだ。

用心にこした事はないと思うよ。
さて、桜岡さんはこれから予定有る？」

アレ？

何だろう、ニヤリと笑ったけど？

「どうしよっかなー？
こんな時間に女性を誘うなんて、深読みしちゃうわよ？」

ニヤニヤと笑われると、なんかムカつく。

「そんなつもりじゃ……」

「榎本さんズルイっすよ！
僕は朝まで居残りなのに、彼女を誘ってお楽しみなんて、結衣ちゃんに言い付けてやる！」

坂崎君が、クダラナイ食い付きをしやがった。

桜岡さんも自分の両手で体を抱きしめながら、後ずさりするし……

「私の肉体を狙っていたのね……
このケダモノ！」

「ロリコンだったと思ったのに、お姉さんも喰えるんっすねー！
長瀬社長にも言い触らしてやる」

「えっ？
彼ってロリコンなの？

じゃ結衣ちゃんって小学生？
それとも幼稚園生？」

「結衣ちゃんはロリロリな中学生っすよ。
榎本さんが囲ってるんす。
コイツは男の敵なんすよ！」

妙に息の合った漫才を繰り広げる二人……

なんか疲れたから放置したくなってきた。

「桜岡さん？」

「よらないで変態！
ロリコンはお断りよ！」

どうしようか、本気で危険視してる目をしてるけど……

「いや真面目な話で、今後の対策と長瀬社長への連絡をどうするかの相談がしたかったんですけど……
もう面倒臭くなったから、後は桜岡さんに全てをお任せして良いですよね？」

段ボール箱を持って立ち上がる。

癒しの結衣ちゃんの下へ帰ろう……

だがらスレた年増は嫌なんだよ。

その点、結衣ちゃんはピュアだから、エヘエヘ……

薄ら笑いを浮かべた僕をどう思ったかは知らないが、坂崎君は土下座し桜岡さんは僕の肩を掴んだ。

「その……
からかい過ぎた事は誤るわ。
今後の話をしましょうね？ね？」

言葉使いは優しいが、肩を掴む力は強かった……

「ではファミレスにでも行きましょうか……
この近くだと三浦海岸通りのジョナサンが近いし空いてるかな。
場所は海岸線に出て久里浜方面へ、セブンイレブンを過ぎてスシローの少し先に有るから。
駐車場で待ち合せしようか？
では坂崎君、後は独りで宜しく！」

そう言って現場を出て行く……

ゲートの前でスカイラインに乗り込む桜岡さんに

「じゃあとでね」

と言って、自分のキューブを停めてある有料駐車場まで向かう。

しかし……

面倒臭い事は間違いないな。

長瀬社長には彼女と正式に契約を結んで貰い、僕は適当な所で終了

かな。

例えば、事前調査を行い今夜引継ぎを兼ねて現場を案内したら生霊と遭遇。

そして彼女の力で一旦は退けた……

んで現在は要観察中かな。

うん、このストーリーで行こう。

これなら切り良く彼女に引き継げる筈だ。

今回は箱も反応しなかったから、アレに喰わせて解決とはいかないからね。

ある意味、桜岡さんの介入は良かったのかもしれない……

車を停めてあった駐車場には、僕の車しか無かった。

こんな田舎のこんな時間だ……

結界が反応しなかった事に安心して、車の荷台に段ボール箱のしまい運転席に乗り込む。

結界が反応していたら、僕か荷物のどれかに霊が憑依している事だからね。

もっともショボイ自作結界だから、強い力を持つ相手には効かないけど……

エンジンを掛けてゆっくりとキューブを発進させる。
時計を確認すれば、すでに0時を回っていた……
暗い農道をゆっくりと走りながら、県道に合流する。
ここまでくれば外灯が有り、明るく他の車もチラホラと走っている。
「さて、２４０gのビッグハンバーグセットでも食べるかな……」
どうやら緊張が解けた為か、空腹感が我慢できないレベルになっている。
暫く走ると、待ち合せ場所に到着した。
先に停まっているスカイラインの一つ空けた隣に停める。
車から外に出ると、彼女もスカイラインから出てきた……
しまった、彼女はまんま巫女装束のままだぞ！
「あの……桜岡さん、着替えは持って無いのかな？」
深夜のファミレスで、巫女さんと差し向かいで食事って、ナンダカナー……
ネタ以外の何物でもないよね？
彼女はムッとしながら

「私の仕事着に文句が有るの？」

と怒っていますが……

「いや……その……深夜のファミレスに巫女さん。これって周りはどう思うかな？」

「嬉しいんじゃない？」

素で返してきましたよ。

速攻タイムラグ無く脊髄反射みたいな速度で……

「そうですね……
では、入りましょうか」

諦めて、店内に入る。

オートドアが開き、店内に入ると

「いらっしゃいませ、ジョナサンへようこそ！
お二人さ……ま、ですか？」

僕の後ろに居る巫女さんを見て、バイトだろう店員が固まった。

「……ああ、禁煙席で頼みます」

多分、バックヤードに戻ったら彼女の話題で持ち上がるだろう。

最悪、有名人のヌレヌレ梓巫女の桜岡さんが深夜の密会とかゴシップになりそうで嫌だ……

席に案内されて、メニューを開く。

もう自棄食いでも良いよね？

「２４０ｇハンバーグセットに……」

「タラコと貝柱のスパゲティとジャンボベイクドポテトのチリビーンズ、それに温泉卵のシザーサラダにガーリックトースト
あと、ビールは無理だからドリンクバーね」

僕のセリフに被せて、大量に注文しやがった。

なんだと……

こいつフードファイターか？

「自分は２４０ｇハンバーグセットにズワイ蟹のクリーミードリア、
それとヤリイカの空揚げにドリングバーで」

二人でニヤリと見詰め合う……

この女、見た目の派手さと奇抜さで誤魔化されたが中身はオヤジだ！

「なかなかのチョイスね……
でもマダマダ甘いわ、ハンバーグなんてド定番を頼むなんて」

「いやいや、物事は基本が大切なんですよ。

貴女も一見バランスが取れているみたいだが、パスタもポテトもトーストも全て炭水化物……
シザーサラダは免罪符ですか？」

「あらあら？
ハンバーグにドリアと空揚げなんて、お子様の王道ね。
おほほほほ……」

しばし無言で睨み合い、ドリンクバーコーナーに出撃する。

彼女を見れば、メロンソーダのカルピス割りだと！

「オリジナルブレンドか……
やるな！
しかし僕はコッチだ！」

「なっ？
オレンジをカルピスソーダで割った……
配合は3：7ね、やるわね」

互いのオリジナルブレンドを披露しつつ、席に戻る。

ドリンクバーでは、1回で2種類の飲み物を持ってくるのは常識。

僕はジンジャーエールを彼女は梅昆布茶をチョイス。

クッ……完敗だ。

あそこで梅昆布茶に手を出せるとは……

僕は最後の口直しで頼むのだが、初回から逝くとは。

ドリンクバーで盛り上がった為か、大分距離感が縮まった気がする……

◇◇◇◇◇◇◇

馬鹿な遊びで時間を潰した為か、元々お客が少なく調理が早かったのか……

直ぐに頼んだ料理がテーブルに並べられる。

2人で頼むには異常な量だが。

「先ずは食事を楽しもう……
面倒臭い話は、その後で」

そう言ってハンバーグを切り分けていると、僕のヤリイカに手を出しやがる。

「ふふん！
まぁまぁの味ね」

人の頼んだ物を食べながらニヤリとしやがる！

仕返しをしたいが、奴の陣営は……

単体で手を出せるのはガーリックトーストだが、警戒してかテーブルの最奥に置いてある。

「僕のヤリイカの報復は……
ガーリックトーストと見せかけて、コッチだ！」

フォークで温泉卵のシザーサラダの温泉卵を掬い取る！

「あっ？
貴方、それは反則じゃなくて？
既にそのサラダは……死んだわ。
責任を取りなさい！」

モグモグと温泉卵を頬張る僕にナイフを突きつける。

「先に手を出したのは貴女だ……
やって良いのは、やられる覚悟の有る奴のみだ」

ギャーギャーと楽しく食事が進んだ。

結衣ちゃんとの食事は静かに食材に感謝しながら食べるのだが、こんな賑やかな食事も楽しいだろう……

食後のコーラを飲みながら、今後の話を進める。

「さて……
落ち着いた所で、今回の件について相談しますか？」

彼女はナプキンで口を拭いながら真面目な顔になった。

「いいわ。
それで、奴は完全に倒したかは確認出来ていないわね。
それで、調べると言っても……」

俄かに店内が煩くなってきたけど？

入口を見れば、２～３人の若者が入って来たぞ。

「ｔｗｉｔｔｅｒに載っていた店って此処だろ？」

「ああ、ヌレヌレ梓巫女の霞たんが居るお」

「スゲー、芸能人に会うのって、俺初めてだよ」

クソっ、誰かバラしやがったな？

客か店員か……

インターネットで個人のプライバシーを考え無しに公開するのは犯罪なんだぞ！

「桜岡さん、僕が先に行って会計を済ますから……
タイミングを見計らって車で逃げるんだ。
コレ、僕の名詞だから、落ち着いたら電話してくれる。
それと目立つから、これを羽織って」

そう言って名詞と上着を彼女に渡すと、レシートを持ってレジに向かう。

今、まさに騒いでいる連中に向かって上半身ムキムキのオッサンが睨みながら歩いて行く……

「おっおい、何かヤバいオヤジが近付いて来るぞ……」

「何がヤバいってムキムキだし、この時期にTシャツ一丁だぞ……」

「キモいムキムキが来るお」

そんな野次馬の群れの真ん中に突入する。

「邪魔だよ、貧弱ボーイズ！
ちょっとどいてくれるかい？」

「「はっはい、どうぞ……」」

彼らがどいた脇を、僕の上着を羽織った桜岡さんがすり抜けて行く……

「あっ？霞たん？」

騒ぎ出そうとしたオタク風の若者の頭を握る。

「何だ？たんって？
ああ？
お前、俺を馬鹿にしてるのか？」

三角筋と上腕二頭筋をムキムキにさせて恫喝する！

伊達に肉体を鍛えてはいないんだよ。

俺のマッスルなバディを見やがれ！

視界の隅で駐車場からスカイラインが走り出すのを確認し、お釣りと領収書を受け取って店を出る。

この店には仲間のムキムキズを伴いて、再度来なければなるまい。

客のプライバシーを流した奴をお仕置きする意味で……

# 第１０話

個人情報を安易に公開する馬鹿がいて困る……

特に桜岡さんは、今話題の美人霊能力者だからゴシップになりやすいし。

深夜のファミレスで巫女姿で男と密会なんて、ネタとして最高だろう。

幸いな事は、ｔｗｉｔｔｅｒで広まったが直接店に来たのは３人だけだ……

店員の証言を取っても、僕と特定するのは難しい。

彼女の周りを調べれば最近接触した関係でバレるが、ソッチ方面からバレたなら仕事帰りの食事で他意は無いでＯＫ。

只の密会じゃなければ、理由が有れば良いのだ。

ファミレスから車で移動する際に、連中の車のナンバープレートを撮影しておく。

なにか有れば、調べられる様に……

相手を特定出来れば最悪話題になっても、連中にガセだと証言させれば鎮火も早いだろうし。

勿論、平和的に証言を求めるつもりは全く無い。

色々やり方は有るのだから。

ドロドロと暗い思考をしていると、携帯から電子音が……

僕の着信音は黒電話だ。

仕事用だから着メロとかは不適切だからね。

前に坂崎君が打合せの時に、ＡＫＢ４８のヒット曲を鳴り響かせた時は……

同席の長瀬社長が、顔を顰めていた。

最低限の社会人として、また社員として守るマナーが有るからね。

ディスプレイに表示される番号に見覚えはないが、多分彼女と思い通話ボタンを押す。

「もしもし、榎本です……」

ハザードを点けて、車を路肩に寄せる。

「桜岡です、先程は有難う御座いました。
ウザい連中に捕まらなくて良かったわ」

どうやら彼女も無事に逃げたらしい……

「それで打合せは今夜は、もう遅いし無理でしょうね？
こんな状況だし、深夜に会うのは疑がわれ易いし……

明日ってもう今日だけど、長瀬社長に説明に行こうと思うんだけど……
一緒に行ける？」

「私が？何故に？」

一度社長に断られて僕に突っ掛かってきた手前、社長には会い辛いのかな？

「桜岡さんも仕事をした訳だし、僕から長瀬社長に正式に君が除霊した方が有効だと説明するよ。
ボランティアって事には出来ないでしょ？
だから正式に長瀬社長と契約を結ばないと……
勿論、僕も引継ぎをするし継続調査の手伝いはするよ。
責任問題だから、此処は明確にしておかないと僕らが不利だからね」

「契約とか不利とかって……
貴方って本当に霊能力者っぽくないわ。
何て言うか、ジャーマネ？」

ジャーマネって……

芸能界に毒されてないかい？

彼女の中の霊能力者って、どんなイメージなんだろう？

「君の霊能力者のイメージについて、小一時間討論したいね……
僕らは仕事を請負うんだよ。
そこには最低限でも最初に契約を取り決めないと負けなんだ。
じゃないとズルズルと仕事や責任が追加されるだけだし、請負とは

読んで字の如く請けると負けるんだ。
だから条件を明確化するのが必要なの！」

別に経営学について講釈を垂れるつもりはないが、仕事を貰う側は立場が弱い。

それを逆手にとる連中が多いのは事実。

長瀬社長は良い人だが、会社の存続に発展した場合は責任を追及されるかもしれない。

除霊で高額な物を壊したり人的被害を及ぼしたり、弁償や賠償は勘弁して欲しい。

ウチみたいな零細企業は一発で倒産だよ。

だから契約内容はちゃんとしないと駄目なんだ。

ふっと窓の外を見れば、野比海岸が見える。

夜の海は暗く、その先に見えるのは千葉の明かりだ……

木更津辺りの工場群だろうか、人工の明かりはやけに輝いて見えた。

「ねえ、聞いてる？
長瀬社長に会うのは良いけど、どこで待ち合わせするの？」

朝イチで長瀬社長にアポを取ってから、事前に彼女と打合せをして訪ねるか……

「先方の予定が分からないからね。
朝イチで連絡して時間を決めるから……
そっちは午前午後どっちでも平気かい？
出来れば長瀬社長に会う前に、下打ち合わせをしてから訪ねたいんだけど……」

口裏を合わせないとボロが出そうだし。

彼女はウッカリ属性が有りそうだし。

「良いわ。
じゃこの携帯に連絡してくれる？」

それじゃ連絡するよと言って、通話を切る。

さて、面倒臭くなってきたな。

箱が興味の無い生霊だと、彼女頼りで対処するしかないんだが……

電話を切ってから暫しボーっとする……

朝イチだから9時には電話しないとならないが、長瀬綜合警備保障は横浜のスカイビルに有るからね。

彼女との事前打合せを考えれば、午後にしないと無理かな？

昼イチだと、また昼食をご一緒にとかの流れは好ましくないだろう。

流石に横浜駅周辺だと、彼女の知名度を考えれば大騒ぎだ！

これは打合せには私服で来いって説得しないと駄目かね？

両手で頬を叩いて眠気を飛ばし、車の運転を再開する。

家に着くのは1時を過ぎるかな……

◇◇◇◇◇◇◇

ガレージに車をとめて家に入ると、居間の電気が点いてる？

「ただいま……

あれ？結衣ちゃん？」

ソファーで居眠りをしている彼女を見つけた。

テーブルにはのり塩味のポテチと、急須と湯呑みが置いてありＴＶはついていた。

本当に日本茶党なんだね。

そして何を観ていたんだろうか？

風邪をひかせない為にも、ベッドに移動させないと駄目だね。

「結衣ちゃん、起きて、ほら……

ほら、結衣ちゃん」

声を掛けるが、全然反応してくれない。

「うにゅ……うゆにゅにゅ……うにゅ……」

本当に可愛い寝言を連発している……

彼女は実の父親を早くに亡くし実の母親と、その男達に幼い頃から虐待を受けていた。

その為に常に周りを気にして、自分の意見を抑える大人しい娘に育ってしまった。

それでも非行に走らなかった優しい娘だ……

あの獣憑きのクソ母親と情夫は箱が喰ってしまったが、後悔はしていない。

最後の肉親で有る祖母が亡くなったのを切欠に、僕が引き取った。

一般的な里親制度だ。

本来は市町村の福祉課に申請し講習や審査が必要だけど、在家だが僧侶である僕は何とかクリアした。

これでも宗教関係者だからね！

お役所関係には、宗教法人は強いんですよ……

風邪をひかせない為にもベッドに連れて行きたいけど、彼女は異性からの接触を恐れるんだ。

きっと母親の情夫から、性的な欲望の目に晒されてきた為に過剰に反応するんだろう。

正しきロリとは、双方合意の上で行為に及ぶものだ！

押し付けや強引なのはＮＧですよ。

仕方ないので毛布を持ってきて彼女に掛けて、更にエアコンのスイッチも入れる。

乾燥対策に濡れタオルを吊るせば完璧だね！

超過保護とは思うが、これ位なら紳士として普通だろう。

一旦居間を出て台所に向かう……

思った通り、台所の机の上には夜食が用意して有った。

チキンクリームシチューに、最近彼女がハマッている酵母パンだ！

電子レンジでシチューを温めて、缶ビールを2本持って居間に戻る。

ソファーを見れば、結衣ちゃんは毛布に包まり本格的にオネム体制だ！

僕は向かいに座り、彼女の寝顔を見ながらシチューを食べる。

彼女の作るクリームシチューは最後の味の調整で僕の分には胡椒を多めに入れて、すこしピリリとした味付けにしてくれる。

鶏肉も余分な脂身は取ってあり、野菜類も人参・ブロッコリー・ジャガイモ・マッシュルームと彩り良く具沢山だ。

肥満になりがちなオッサンの体に気を使ってくれる。

だから僕も、彼女には最大限の配慮をするんだ！

もし、もしも彼女に彼氏が出来て紹介されたら……

笑ってソイツを速攻で呪い殺す自信が有る。

僕はそんな欲に塗れた、只の俗物だからね。

用意した食事を粗方食べ終わった辺りで、彼女が「うにゅにゅ……」と言って目を擦りながら起き上がった。

「うにゅ……あれ？
まさあき……さん？」

「おはよう、結衣ちゃん。
ベッドに行かないと風邪ひくよ……」

半覚醒の彼女は

「ふぁーい、おやすみなさい」

と自室へと向かった。

ズルズルと引き摺る毛布を受け取ると畳んで自室に持ち帰る……

今夜は結衣ちゃんの残り香に包まれて寝ようかな……

◇◇◇◇◇◇◇

心優しいロリっ娘の臭いに包まれて、爽やかに目が覚めた……

携帯を開いて時刻を確認すると……朝の7時16分か。

シャワーを浴びて寝たのが2時過ぎだから、5時間位は寝れたのか。

半覚醒の頭をシャッキリさせる為に顔を洗いに下に降りる。

結衣ちゃんが朝食の用意をしているのだろう、台所の方から良い匂いが漂ってくる……

今朝のメニューは何だろうか?

遅くに夜食を食べたのに空腹感を覚えた。

洗面所で顔を洗い身嗜みを簡単に整えてからキッチンに向かう。

「おはよう、結衣ちゃん。

お腹がすいたけど、今日は何かな?」

調理台で何かを調理している結衣ちゃんの後姿を見ながら声を掛ける。

制服にエプロン……

結衣ちゃん、君はスバラシイ！

「あっ、お早う御座います正明さん。
今朝のメニューは……
納豆オムレツにガーリックソーセージを焼いてみました」

「うん。美味しそうだね」

彼女と向かい合ってテーブルに座る。

彼女が炊飯器から、ご飯をよそっている間に、急須に茶葉を淹れてお湯を注ぐ……

茶葉が開ききるまで待ってから湯呑みへ。

日本茶好きな彼女の為に学んだ手順だ……

朝食の用意が全て整ったら

「「いただきます！」」

と言ってから食べ始める。

彼女は食材に感謝して食べなければならないと、祖母から躾けられたそうだ。

それには同意する。

しかもロリっ娘の手料理なのだ！

敬愛する愛染明王様に最大限の感謝をしつつ、料理を味わう。

因みにウチは毎回ご飯は2合を炊く……

お米は国産でブランドや産地は拘らないが、１０ｋｇで４０００円前後の物を選ぶ。

その代わり炊飯器は拘っている、勿論彼女がだ……

折角だから美味しいお米が炊ける物を買おう！

そう言ったら、色々と調べてアレコレと説明してくれた。

彼女のお勧めは

「お米が踊る！踊り炊き！
圧力ＩＨ炊飯ジャーが良いです！」

そう力説し、今の炊飯器を買う事に決めた。

普段は消極的だが、好きな事はちゃんと自己主張してくれるのは嬉しい。

最初の頃は、警戒されてたからなー。

まぁ確かにオッサンが里親なんて、普通に考えたら良からぬ事を考えていると勘繰るよね……

彼女の信頼を勝ち取ったのは最近なんだ。

朝の時間帯は忙しい……

モグモグと食べていると、少食な彼女が先に食べ終わり

「ご馳走様でした、今日は日直で早いので行って来ますね」

そう言って自分の食器をシンクに運ぶ。

食器洗いは僕の仕事だ。

とは言え、洗濯や掃除くらいしか家事は手伝えないから……

ほら、ロリっ娘に料理を作ってもらったりアイロンを掛けて貰うんだから、それ位は当然だよね。

自室に戻りカバンを持って来たのだろうか、キッチンに顔をだして

「では、正明さん。
いってきます」

行儀良く頭を下げる彼女に手を上げて応えて送り出す。

さて、もう少ししたら長瀬社長に連絡を入れるか……

思考を切り替えて仕事に専念しますかね。

# 第１１話

心優しいロリっ娘を見送ってから、暫し自室のパソコンに向かいメールをチェックする。

このアドレスを知るものは友人と仕事関係、それに通販関係くらいだ。

２件ほど、受信が有る。

１件は……

旨い物ドットコムの定期カタログだ。

震災関連商品が充実している……

非常食や飲料水、防災グッズ等マウスをクリックしながら内容をチェック。

今回は特に欲しい物は無い。

もう１件は、此方もお得意様である山崎不動産の山崎社長から。

こちらは仕事の依頼ではなく、遊びのお誘いだ。

山崎社長は風俗の世界では有名な性豪で、横浜のヘルス・川崎のソープでは知る人ぞ知る有名人。

僕の師匠であり、お得意様でも有る。

彼の愛人で社員でもある飯島女史は、巨乳でエロいお姉さまだが色情霊が憑いている気がする。

だから余り近付かないし、向こうもムキムキなオッサンである僕には興味が無いらしい……

金持ちとイケメンが大好物と言っていた。

嫌われてはいないが、お誘いも無い関係だからちょうど良い。

さて、と……

一旦自分の事務所に向かい、それから長瀬社長に連絡を入れるかな。

ここは僕の結衣ちゃんの愛の巣だから、仕事は極力持ち込まないのだ！

◇◇◇◇◇◇◇

榎本心霊調査事務所は、神奈川県の横須賀市に有る京急電鉄の主要駅の近くのマンションの一室を借りている。

デカデカと心霊調査事務所と看板を掲げるのは、ご近所付合い的な意味で不可だ。

心霊など、胡散臭い事この上ない業種?だ。

だから登録は　（有）Ｅ・Ｐ・Ｒ　としている。

Ｅｎｏｍｏｔｏ　Ｐｓｙｃｈｉｃ　Ｒｅｓｅａｒｃｈ　（エノモト　サイキック　リサーチ）

略してＥ・Ｐ・Ｒだ。

郵便局への登録も同様の名前で申し込んでいるので普通に郵便も届く。

何故、有限会社にしたかと言えば……

責任が有限だから。

資本金は３００万円でＯＫだし、社員無しの１人で起業出来る。

役員の任期も無いし、取締役会も開く必要が無い。

デメリットとしては、社員数が５０人以下だし、銀行から出資保管証明書も貰わなければ成らない。

銀行への登録手数料や、登録免許税とか兎に角お金が掛かる。

銀行の問題は、自分の口座に両親から受け継いだ遺産や生命保険が有るから信用は有る。

僕は在家だが僧侶の資格も持っているので、社会的な信用は高い。

有限会社って弱小企業なイメージだけど、商売そのものが目的で無いので除霊で失敗し莫大な負債を抱えても……

根こそぎ自己資産を取られる事も無い。

なので、一応社長業をやれる訳です。

なんたって大切な扶養家族が居ますから……

電車通勤にて、自分の借りているマンションに到着。

直ぐにポストを確認し、郵便物をチェックする。

水道料金や電気料金のお知らせの他には、宅配ピザのチラシだけか……

公共料金は、銀行からの引き落としだから問題は無い。

それらを保管しているファイルに差込む。

保管しておかないと確定申告の時に大変だから。

必要経費は、しっかり計上しないと国に税金をふんだくられるからね。

ピザのチラシは玄関の電話台の上に置く。

たまには出前を取るし、チラシには期間限定のサービス券も付いているからお得だ！

ＦＡＸには、特に受信した用紙は無い。

それらを確認してから冷蔵庫に向かい、中から缶コーヒーを取り出し自分の仕事用デスクに座る。

備え付けの時計を見れば、午前９時３２分だ……

長瀬綜合警備保障へ電話をかける。

３回目のコール音の後に、受付の女性が出たので社長への取次ぎをお願いする。

声で分かるが、彼女とも顔見知りだ。

「もしもし、長瀬です」

相変わらず渋い声が聞こえた……

「お早う御座います、長瀬社長。
実は昨夜、現場に桜岡さんが来まして……
ええ、どうやら仕事を断られた事が納得出来なかったみたいで……」

暫くの沈黙の後

「それで、彼女は問題を起こしたのかい？」

若干だが、彼女が問題を起こしそうな事を予測していた？

「いえ……彼女は……
そうですね。

何ていうか素直？
いやオダテに弱い？
兎に角、昨夜は一緒に現場に向かい生霊と対面。
その霊力は本物でしたが、彼女が言うには完全に除霊は出来なかったみたいなんです」

突然、気配が消えたと言っていたし……

最悪は、逃げられたか？

「失敗、では無いんだな？
それで、榎本君が態々電話してきたのは何故だい？」

いえ、責任の区分をハッキリさせときたくて……

「いえ、彼女は有能ですし僕より生霊の対応には慣れています。
なので、当初の通りに彼女メインで除霊をさせた方が効果的かと……
勿論、僕も引継ぎや手伝いはしますが、ちゃんと長瀬社長と仕事の契約を結んで欲しいのです」

「つまり無責任に介入せずに、ちゃんと最後まで仕事をさせろ、と？」

流石に長瀬さんは話が早い。

それと箱の興味が無い生霊なんて、僕には関わる意味が薄いんだ。

最悪の場合、箱に頼れずに自分で対応して死亡とか嫌過ぎる。

「そうです。

彼女の能力は本物ですし、この後に仕事を依頼する場合も考えれば悪くないと思います。
勿論、僕への報酬は調査のみの分で構いません。
残りの除霊費用は彼女に渡して下さい」

成功すれば、ですけどね。

彼女も自信が有りそうだったし、難しい除霊ではなさそうな感じだった。

「榎本君が、そう言うなら問題無いだろう。
わかった。
それで、今後の動きはどうするんだい？」

「今日の午後に時間が有れば、彼女を伴い昨夜の説明と今後の話をしたいのですが……
そうですね。
2時過ぎに時間は有りますか？」

パラパラと手帳を捲っているのか、暫く無言で待たされた後に

「今日は3時半から5時までは開いているよ。
その後は、お得意様との飲み会が有ってね。
都内まで行かなくてはならないんだ」

話すだけなら、2時間も有れば大丈夫かな……

桜岡さんとの契約については、僕は立ち会う必要は無い筈だし。

「分かりました。

3時半に、そちらにお邪魔します。
では、宜しくお願いします」

そう言って、電話を切った……

これで引継ぎは問題ないな。

この仕事が今後長瀬社長から仕事が貰えるかの、彼女への試金石になるだろう。

でもタレントの仕事でも食べて行けそうだよね、彼女なら。

勿論、実力は本物だけど色物だからな……

怪談の季節の夏は忙しく冬は暇？

いやビデオ制作会社と繋がれば、乱立するホラー物に出演出来るか……

勿論、彼女は霊能力者として働きたいなら芸能界からは離れて堅実に企業との結び付きが必要だ。

だから、この手の曰く物件に関連する不動産関係や警備関係の会社は重要な役割を果たす。

個人からの依頼なんて、よほどの信用がないと来ないんですよ。

暇つぶしにインターネットで彼女の名前を入力して検索すれば、出るわ出るわ！

色々なサイトがＨＩＴした。

その数、３２０００件以上だ……

殆どが、ヌレヌレだかスケスケだかの単語が入っているが注目度は高い。

彼女の場合、タレント霊能力者の方が大成しそうな感じがする。

除霊仕事も立派なビジネスだから、海千山千の連中に立ち向かえるのか？

まぁ僕が心配する必要はないから、関係ないね！

長瀬社長のアポが取れたので、彼女の方にも連絡をしなければならない。

温くなった缶コーヒーを一気飲みして、喉を潤してから携帯の着歴から電話を掛ける。

名刺を渡したから、この事務所の電話番号も分かっているとは思うけど。

折り返し通話の方が、向こうも分かり易いからね！

こちらは８回目のコールの後に繋がった……

繋がった後に少し間が空いてから

「もしもし……」

何だろう？

随分と不機嫌な声だけど……

「あの、榎本ですけど桜岡さん？」

ガサガサと音が聞こえた後に

「あっああ……えーと。
おはよう。
榎本さん、早いわね？」

えーと……

まだ寝てたな、コイツ……

「もしかして、寝てました？」

「いえ、ちゃんと起きてましたよ。
ええ、起きてましたから大丈夫です」

慌てて否定してるけど、寝てたんだろう……

年頃の娘さんが、朝寝坊とは頂けないですよ。

結衣ちゃんの爪の垢でも煎じて飲ませた方が良いだろうか？

「……長瀬社長と連絡が取れまして、先方に3時半に向かいます。
だから1時間前には合流して打合せをしたいんだけど、どうかな？」

「んー2時半に横浜ね。
待合わせ場所はどうするの？」

横浜東口だと、待合わせの定番は……

横浜そごうの大時計の下とかだけど、彼女の知名度を考えると面倒臭い事態になりそうだ。

あまり人目に付かないで、それでいて怪しくない場所と言うと……

地下街ポルタ内の丸善ＢＯＯＫＳの中で時間を潰していようかな。

「じゃ、地下街ポルタの中の本屋知ってる？
そこの店内に居てくれれば、こちらから声を掛けるよ。
合流したら、近くの喫茶店で打合せしよう」

本屋なら最悪、少し待たせても苦にならないだろう……

「分かったわ。
じゃ2時半に本屋に居れば良いのね？」

後一つ、大切な事を言わなければならない。

「桜岡さん……」

「なっ何よ、改まって？」

「服装だけど、巫女服は駄目だよ。
それとサングラスかマスクで変装してね。

僕は見分けが付くと思うし、分からなければ携帯に電話するから」

逆に凝った変装は注目され易くバレ易い。

しかしサングラスやマスクならば、花粉症の時期だけに結構同じ格好の連中が居る。

僕が分からなければ、大した変装能力だし分からなくても携帯に連絡すれば店内なら気付くだろう……

「わっ私だって何時も巫女服は着てません！
昨夜は仕事現場に行くから着てたの！」

怒鳴られてしまった……

でも昨夜の様子だと、彼女にはウッカリな属性が垣間見えるんだよなー！

「そうなの？
じゃ私服姿を楽しみにしてるからね！」

そう言って携帯を切る。

あれだけ言えば、それなりな服装で来るだろう。

プライドが高そうだから、ブランドスーツで決めてくるかもね！

楽しみだ。

僕は、量販店の吊しスーツで十分だけど……

男って、こう言う場合は凄く楽だ！

何たって背広とネクタイと革靴が有れば、大体オーケーだからね！

# 第１２話

今日は午後から桜岡さんと待ち合わせをしてから、長瀬綜合警備保障に行く。

先に待ち合わせの彼女とは横浜で二時半だから……

事務所を一時半過ぎに出ても間に合う。

一応、女性との待ち合わせだから先に着いてなくては紳士を名乗れないだろう。

勿論、頭に「変態と言う名の」が付くけどね……

まだ暫く時間が有るので、今後の流れを考える。

生霊……

つまり生きて生活している相手が居るんだ。

執念か怨念かは知らないが、奴はマンションに固執している。

桜岡さんは準備とか調査とか段取りには無縁な霊能力者だと思う……

多分だが、番組が探してきたり直接依頼があったりした案件しか対応した事が無いのか。

または出たとこ勝負で解決してきた力と自信が有るのか。

少ししか一緒に行動してないけど、プライドが高いけど素直で乗せられ易い性格だと思う。

根っこは善人で優しい娘さんで、本当に人を助けたいと思っているタイプだ。

つまり自分の霊能力で人助けをしたい、稀有な人材だ。

僕は自分の宿痾を解決する為に箱に縛られて、この仕事を続けている。

他には詐欺紛いの金儲けをする連中も多い。

そして胡散臭く偽物が多い業種だ！

だから僕には彼女が眩しく見えるし、変にスレたり潰れて欲しくない……

しかし自分に最悪の秘密が有るから、同業者として馴れ合いは危険なんだ。

あの他者を巻き込む箱の呪いを考えたら、同罪として粛清されても文句は言えないのだから……

今回の件は、彼女に引き継ぎをして手伝う。

その考えは変わらない。

後は……

どれだけ踏み込んで手伝うかだ。

彼女は生霊と直接対決しか出来ない。

つまり生きている相手を探し出す事は難しい。

相手の生霊を生み出す程の悩みを解決する事も難しい。

普通の人間の事を調べる事は、僕だって難しい。

だから普通なら興信所を使うんだが……

彼らだって具体的な事を指示しないと無理だ。

何か切欠か調べる方向は、僕らが探し出さないと駄目なんだよね……

それと予算！

コレ大切！

長瀬社長は、あのマンションのオーナーじゃない。

なら何故、僕に依頼が来たかと言えば……

長瀬社長は、マンションのオーナーと当然ながら面識が有るんだ。

曰く付きの物件を解決すれば、高値で販売出来る。

ならば、長瀬社長は自分の手配で解決しマンションのオーナーに交渉を持ち掛ける筈だ。

幸い？かは分からないが、僕は除霊自体が目的だから費用は安い。

だから立替え払いでも、先行で僕に依頼した。

解決すれば何割か増しで請求するのだろう……

この業界で曰く付き物件を抱えている人は多い。

長瀬社長程の人脈が有れば、今後も僕に除霊仕事が舞い込むから持ちつ持たれつの関係だ。

さて今回の件は……

そう考えると興信所への依頼は、長瀬社長の独断では許可出来ないだろう。

興信所とは調査日数が掛かれば費用も莫大だ！

それにボランティアと言っていたが、責任区分を明確にする為にも桜岡さんには長瀬綜合警備保障と契約を結んで欲しい。

彼女の為でも有るから。

しかし契約には支払いが発生する。

僕は調査込み実質２日間だだし、解決してないから２０万円位だ。

しかし彼女の依頼料は分からないし、同業者が聞く事はマナー違反だろう。

ここは長瀬社長に、本来のマンションオーナーと話し合いをして貰うしかない。

もし費用が見込めなければ、または見合った金額でなければ手を引けば良い。

ヨシ！

方針が決まった所で時計を見れば、既に１２時前だ……

随分と考え込んでいたんだな。

昼飯は外食かコンビニにしている。

結衣ちゃんが

「良かったら、お弁当を作りましょうか？」

と言ってくれたが、彼女の負担を増やす訳にはいかない。

それに私立の中学に通う彼女は、給食が出るので僕の為だけに早起きしてお弁当を作るのは大変だから……

何故、お金の掛かる私立に通わせているかと言えば。

ぶっちゃけ彼女は虐められっ子体質だ！

大人しく引っ込み思案で、天涯孤独だ。

しかも、彼女自身に人に大っぴらに話せない秘密が有る。

公立の学校の教師は、基本的に虐め対策は消極的だ。

相談しても、なんの解決にもならない連中が多い。

しかし私立は違う。

常に生徒達を観察し何か有れば……

例えば喧嘩でもすれば、直ぐに連絡が入り学校に呼ばれて当事者と担任、それと各々の親を交えた話し合いをする。

そして解決するまで、学校は責任を負って行動する。

学校と言えども、高い金を払うだけ有り生徒はお客様なのだ。

偏差値の高い私立は、この辺が凄い。

幸い彼女は真面目な性格故に、頭は良かった！

更に僕のメインバンクの支店長に紹介して貰い、編入試験を受けたんだ。

見事合格したのは結衣ちゃんの実力だし、僕はロリっ娘の足長おじさんを気取れただけでも良い。

最大の理由は、かの学校の制服が可愛かった事。

体操服がスパッツだった事。

そして美少女が多くて有名な女子中学校であり、体育祭や文化祭は親族関係者しか行けない厳しいセキュリティーで有名だった事。

なんと新体操部とか水泳部とか有るんだぜ！

初めて文化祭に招待された時は、思わず感動の涙を流したね。

レオタードに上着を着ただけの少女達が、普通に廊下を歩いていたんだぜ！

結衣ちゃんには、是非エスカレーター式で付属高校にも行って貰いたい。

なんて妄想から我に帰ると、何故か行き着けの鰻屋のカウンターに座っていた……

「へい、うなぎの蒲焼き大盛り！
それと骨せんべいお待ち！」

顔見知りの板前さんが、ドンっと大盛りの丼を置いてくれた。

「あれ？もう頼んでたんだっけ？」

板前さんは、少し呆れた顔で

「お客さん。
ニヤニヤしながら入って来て、何時もの大盛りね！
って言いましたよ」

「骨せんべいも？」

「へい！
ちょうど骨せんべいが揚がりやしたよ！
って言ったらソレもって……」

うん……

妄想癖は注意しないと、ただの変態として通報されそうだ！

「有難う！
頂くよ……」

一口食べれば、脂がのって旨い！

この店は天然物を浜名湖から取り寄せている。

所謂くだり鰻だ！

鰻は水温が１０℃以下になると泥の中に潜り、冬眠みたいにじっとしている。

寒い冬を越す為に沢山餌を食べて脂ののった秋から冬が、最も鰻の旨い時期だと個人的に思う。

モグモグと美味しく食べて、板前さんに声を掛けて店を出る。

因みにお値段は、一人前大盛りで３８００円だ。

◇◇◇◇◇◇◇

妄想癖の改善を今後の課題として、待ち合わせ場所に向かう為に京急電鉄の快速特急に乗る。

平日の昼間だけあり混んでない為か、進行方向を向いた二列シートに座れた！

ゆったりと座り窓の外を見れば……

海の方から暗い雲が此方に向かってくるのが見える。

この時期は雨が多いが、最近は寒くても雪にはならないな。

鞄の中に折り畳み傘を入れて有る事を思い出し、自分の準備の良さに少し嬉しくなった……

快速特急で約３０分、京急横浜駅に到着。

ホームの先端にＬＥＤが埋め込まれ、電車の到着と共に点滅をする珍しい設備の有る駅だ！

改札口は地下街に直結している為に、エスカレーターで下に降りる。

改札を抜けると、右がダイヤモンド地下街。

左が地下街ポルタだ。

待ち合わせはポルタの中の丸善ｂｏｏｋｓだから、左側に歩いて行く。

直ぐにポルタの入口の大階段に到着。

総ガラス張りの大屋根を見上げれば、ポツポツと雨の水滴が見えた。

「あちゃー降ってきたか……」

「そうね……
天気予報通りだけど、雨は嫌だわ」

ボケっと立ち止まり見上げていたら、急に声を掛けられた。

慌てて振り向けば……

昨夜の巫女服とは、随分印象の違う彼女が立っていた。

シックなグレーのスーツにポンチョ？マント？を羽織りベレー帽をチョコンと乗せている彼女は、間違い無く美人だ！

だが、惜しい！

僕はロリコンだから、感動は半減だ！

「こんにちは、榎本さん。
どう？」

その場でクルッと回る彼女を通りすがりの野郎共が振り返って見て

いる。

「良く似合ってますよ。
一瞬誰だか分からなかったし……」

褒められたのが嬉しかったのか、中々の笑顔を浮かべてくれました。

「じゃ打ち合わせをするから、取り敢えず喫茶店に行きましょう。
マイアミガーデンって言って、何時も空いてる店が有るんですよ」

「なに、その基準？
普通はケーキが美味しいとか雰囲気が良い店を知ってるとかじゃないの？」

ちょっとビックリした顔をしたが、素直に付いて来る。

生霊とか除霊とか、怪しい単語が多い話をするから混んでたり周りの客席が近いのは良くないから……

その点、この店は味も値段もそれなりで何時も空いているから密談に利用している。

やはりお昼過ぎなのに空いている店内の、一番奥の席に座る。

「なんか……
店内は妙に明るいのに、余りお客が居ないのね……」

女性同伴だし、薄暗い店はＮＧですから。

店員さんにアイスコーヒーを２つ頼む。

ケーキ位はと勧めたが、要らないと言われた。

うん、メニューの写真で見てもどうしても食べたいケーキでは無いかな？

注文した品物が届くまでは談笑し、店員が下がってから本題に入る。

◇◇◇◇◇◇

私の事務所は京急電鉄の上大岡駅の近くの商業ビルの中に有る。

昨夜は遅かったから少し朝寝坊してしまったけど、まさか榎本さんから電話を貰う迄熟睡するとは思わなかったわ。

んー寝酒の焼酎のお湯割り三杯が、思ったより効いたのかしら？

目覚ましは掛けていたのに不思議だわ……

あの後、二度寝してしまい気が付いたらお昼過ぎ！

ビックリして起きて、買い置きのカップ焼きそばを食べて……

永遠の定番焼きそばの、ペヤングソース焼きそばよ！

そして歯を磨き、シャワーを浴びて事務所に向かった。

流石に青海苔が歯に付いていたなんて、女性として終わった感が有るし。

直接待ち合わせ場所に行きたくても、仕事関係の資料や名刺とか自宅に置いてなかったから……

一応、大人の女性として恥ずかしくない化粧と服装に気を使ったわ。

これでもファッションセンスは中々らしく、テレビ局の衣装さんからも私服のコーディネートは褒められた事も有るの。

事務所に付いたら直ぐに荷物を纏めて待ち合わせ場所に……

少し余裕を持って着くと思えば、目の前に大屋根？を見上げている彼を発見。

何やら天気を気にしていたから、声を掛けたわ。

一瞬、私を見てビックリしていた！

ザマァ！

私だってお洒落すれば中々の美人なのよ。

ほら、笑顔でクルッと回ってあげれば道行く男子が注目してるわ！

こんな私を連れて歩けるなんて幸せでしょ？

早くエスコートしなさいな。

連れて来られたのは、妙に店内が明るく客も疎らな喫茶店……

ケーキを勧められてメニューを見たけど。

写真に写っているケーキは、どれも食指が動かない微妙な物……

確かに密談には持って来いかも知れないけど、女性同伴としてはどうかしら？

男として、どうなのよ？

それについて、小一時間問い詰めたいわね……

全く！

# 第１３話

客も疎らな喫茶店にて、これからの相談をする男女。

一人は筋肉ムキムキなオッサン。

一人は妙齢の美女。

凸凹カップルにも見えなくは無い。

周りに居る僅かながらな男性客も、羨望の眼差しをオッサンに向けていた。

畜生、美女と野獣を気取ってんじゃねーよ、と……

だがしかし、残念ながら男の方はロリコンだった！

折角の美女も、攻略対象外では仕方ない。

「それで……

私はどうしたら良いのかしら？

契約とかの交渉事は苦手と言うか……

今回が初めてなのよ。

何時もは先方から提示されたり、お礼として渡されたから」

あれ？

そこそこの数を担当してなかったっけ、この梓巫女シリーズはＴＶで何度か見た記憶が有るけど……

「もしかして……
桜岡さんって、凄いお嬢様だったりする？」

お金に無頓着なのは、金持ちかボランティア精神が旺盛な一寸アレな人しか居ない。

勿論、彼女は善人だとは思うが、そこまで博愛精神が豊かでもあるまい。

つまり金持ちなんだろう。

「えっ？
まぁパパは社長だし、お嬢様と言えばお嬢様かしら？
でもそんなにお金持ちでも無いわよ。
別荘は有るけど、クルザーは持ってないし」

いや別荘の維持費とクルザーの維持費ってどっちが高いの？

家と船じゃ家じゃね？

と言う事は、結構安く使われているのかプライドに見合う金額ならそれで良いのか？

行儀良くアイスコーヒーを飲む彼女を見れば、確かにマナーが良く美貌を伴って上流階級のお嬢様に見えなくも無い。

深窓の……と言われるとお淑やかでないのがネックか？

「失礼だけど、長瀬社長との話し合いには桜岡さんの報酬の件も含

まれる。
報酬は……
同業者の僕は聞かない事にするけど、相場というか自分の設定価格って用意してる？」

料金表までとは言わないが、何日かかってレベル別の生霊の価格位は金額が弾けるよね？

しかし彼女は頬を少し赤く染めて俯くばかり……

「えっと……大体一回で１００万円？」

駄目だこの女……

絶対周りから騙されている。

「えっと、それって経費込みで何日掛かっても同じ金額じゃないよね？」

黙って頷いたよ！

腕時計を見て残りの時間を確認する……

大体あと３０分後には店を出ないと、待ち合わせ時間には間に合わない。

でも、このまま行かせたら多分だけど……

あっさり

「じゃ１００万円で！」

「分かりましたわ、おほほほほー！」

とか言って納得されそうだ。

１件１００万円は悪い金額じゃない。

でも諸々の条件をつけて、安かろうが高かろうが納得させられる根拠と、万が一の場合の保険をかける事を知るべきだ。

僕は、こう言うお節介なキャラじゃないんだけど……

溜め息をついてから話し出す。

「桜岡さん……」

「なっ……なによ？」

「世間を知ろうか！

先ずは、どんな内容でも同額は駄目だよ。

仕事の規模や難易度によって料金を変えるのは当たり前だ！

この仕事は事後清算が多い……

何日かかるか分からない物件も多いし、命の危険は千差万別だから同一で考えちゃ駄目だ。

それこそ危険で難易度の高い物件を優先的に回されるよ」

彼女はグッと息を飲み込んだ。

当然、言いたい事や反論もあるんだろう。

「先ずは話を聞いて欲しい。
君の力は本物、それは分かる。
この業界はインチキや偽者も多いから、本物の霊能力者が一括の安値で仕事を請けると言えば殺到するだろう。
しかし、相手もリスクを正直に教えるとは限らない。
もしかしたら最悪の条件かもしれないし霊以外の危険も有るかもしれない。
例えば不良債権でヤクザ絡みとか、良くない連中の溜まり場とか……
自分を守る為にも最初に条件を付ける事、危険に見合った金額を請求する事が大事だよ。
あと、あまり言いたくないけど……
同業者に恨み妬みを買う。
力有る連中に恨まれるのは、危険だ……」
実際に呪いを掛けられたり邪魔されたりする可能性は捨てきれない。
欲に塗れた人間ほど、怖いモノは無いんだ。
「霊障に困った人々を助ける為に梓巫女になったのよ……
それを妨害が有るからって止める事は出来ないわ。
私は……」
信念有る善人ほど扱い辛いモノは居ない……
なんたって正論だし、何を言っても障害を跳ね除ける意志が有る。
ただ、その障害を跳ね除ける力が足りなかったり無闇に要らない敵を作ったりするんだ。

だがら志半ばで挫折する……

大抵が、最悪の裏切りかなにかでね。

「桜岡さん……

先ずは今回の物件を解決する事を考えよう。

それには、長瀬社長に正式に君が除霊する内容で契約を結ぶ。

費用については長瀬社長と相談が必要だ。

何故なら彼はマンションのオーナーじゃない。

僕は比較的安価だから先行投資で仕事を依頼した。

多分少し上乗せして、マンションオーナーに請求するつもりだったんだと思う。

しかし、蓋を開ければ僕だけじゃ対応出来ないから君を巻き込んだ……

これ以上の費用負担は難しい。

だから長瀬社長にマンションオーナーと協議して貰い、僕らが引き続き仕事をして良いか決めて貰う。

じゃないと無料奉仕になるし、最悪はこの仕事を外されるからね」

そう言っても彼女は未だ不満顔だ……

だから

「取れる所からは、ちゃんと取らないと駄目だよ。

その分、お金が無く本当に困っている人を助ければ良い……」

と言って、取り敢えずこの話は先送りにした。

イマイチ納得はしないけど了解はする、みたいな……

もう一悶着有るかもね？

でも先ずは、この仕事をどうするか決める。

その後の話は、ゆっくり考えれば良いから……

ここでタイムリミットが来た！

「さぁ、長瀬社長に会いに行こう。
そろそろ出掛けないと間に合わないよ」

レシートを持ってレジに向かう。

当然、此処は僕の奢りだ！

流石にロリコンの僕だが、世間的にこれだけの美人と同伴でコーヒー代を折半とか奢られるのは勘弁して欲しい。

甲斐性無しかヒモに見られて、男として終わった感じがするから……

彼女も何も言わないのは、奢られ馴れているんだろうな。

会計を済ませて店を出る。

「すみません、御馳走様でした」

そう言ってくれるのは、育ちの良さが伺える。

「いえいえ……」

そう言って並んで、スカイビルの方に歩いて行く。
流石は商業テナントの多い飲食店舗や物販店舗を抱える地下街だけあり、通行人は多い。
客層も幅が広い。
そんな中でも、周りから注目を集める2人だ。
「あれ見て！
お嬢様と番犬かしら？」
「ガードドッグ？
いやボディーガードかしらね」
「おい！
似合わないスーツのゴリラが美女を連れてるぜ」
「どうせ暴力で従わせてるんじゃねーの？」
本当に凸凹コンビなのか、容赦ない批評が聞こえてきます。
女性なら聞き流し、野郎ならキツい視線を送る……
「榎本さん、ほら威嚇しない。
こうやって腕を組めば、カップルに見えるわ」
そう言って腕を絡めて来るが、丁寧にお断りを入れる。
きっと恋愛感情は無く、周りの暴言に対して哀れに思い腕を組んで

くれたのだろう……

しかし知り合いの多い場所では逆効果だ！

しかも彼女は色物の有名人……

スポニチの紙面を飾れる怪しさだよね？

長瀬綜合警備保障はスカイビルの１８階。

シースルーエレベーターに乗り暫し外の景色を楽しむ。

遠くにランドマークタワーが見える……

チン！

と言う電子音が鳴りエレベーターは目的の１８階に到着。

彼女を伴い、長瀬綜合警備保障の受付に向かった。

◇◇◇◇◇◇◇

「こんにちは、榎本さん。

社長から連絡は入っています。

どうぞ……」

顔見知りの受付嬢に声を掛けると、直ぐに少会議室に通される。
すたすたと社内を進んで行くと
「随分と手慣れているのね……」
勝手に他人の会社の中を進んで行く事に疑問を持ったようだ。

「僕は長瀬さんから良く仕事を貰う。
それは、この会社が警備を請け負った建物が多いからね。
長瀬綜合警備保障の外部スタッフになってるんだ。
その方が便利だよ。
例えば不法侵入にならないよね、警備を受け持つ会社の社員なら。
仕事先のビルの入館手続きとか話が通り易いし」

「なる程……
確かにそうね。
所属会社や訪問先、訪問内容とか書かされるわね。
受付でビルの警備員さんに」

この辺の理解が早いのは、何処かで苦労した事が有るのだろう……

大抵の心霊現象は深夜。

管理された建物に入るには入館手続きが要る。

そこで

所属　霊能事務所

訪問先　霊障の有る場所

目的　除霊

うん、怪しい怪し過ぎる。

しかも立ち会いを頼むと大抵は断られる。

被害にあってる方々が夜中なんかに来たくない。

自分の家なら兎も角、わざわざ立ち会いなんか来ない。

だから警備員に連絡だけ入れておく。

その時に不審者や異常を確かめる為に

「身元の確かな警備会社から調査・警備の為に派遣された」

僕ならば、割とすんなり通してくれる。

じゃないと胡散臭さ過ぎる肩書きだから……

「色々と考えているのね……

でも私は女性だから、その手は無理だわ」

これは警備員向きなムキムキの僕だから可能だ。

流石に女性では無理が有るよね。

そんな話をしながら少会議室で待っていると長瀬社長が入ってきた

……

何時もスーツで決めたダンディーな紳士だ。

話す声も渋い。

「わざわざご足労すまないね。
で、今回は複雑らしいね。
桜岡さんとは会うのは初めてか。
どうも、長瀬です」

にこやかに名刺を差し出す。

驚いた事に彼女は名刺を持っていた。

「はい、榎本さんにも……
ｏｆｆｉｃｅ　ＳＡＫＵＲＡＯＫＡ　代表、桜岡霞です。
宜しくお願いします」

手渡された名刺を見れば、確かにｏｆｆｉｃｅ　ＳＡＫＵＲＡＯＫＡ　代表桜岡霞となっていた。

「わざわざどうも。
榎本心霊調査事務所の榎本です。
名刺は以前渡しましたね」

そう言って頭を下げる。

端から見れば普通の商談の開始風景だ……

「それじゃ話を聞こうか……」

僕達は打ち合わせの通りに、長瀬社長に現在の状況を報告した。

「生霊……か。
それで、今後の方針は？」

「生霊の対応は、僕は不得意ですから桜岡さんに手伝って欲しいのですが……
多分、長期になる可能性も有るし場合によっては興信所に依頼をする可能性が有ります。
相手は生霊……
つまり生きている人間を相手にしなければならない。
でも探偵じゃない我々が探しても見付ける事は難しい。
長瀬社長が言っていた、あのマンションの警備委託期間内に解決出来るかは……」

流石に彼も渋い顔になる。

一時的に警備を任されたマンション。

期間は決まっているので、長期対応は想定外だろう。

「確かに私が警備を請け負った期間は短い。
それで見通しはどうなんだい？
それなりに勝機は有りそうかい？」

「見通しは……
正直難しいです。
相手を特定出来れば、対処も有りますが待ちで除霊は厳しいです。

毎日出るかも分からないから、出来れば原因を突き止めた方が良いですよ」

「私は、やりたいわ！
乗り掛かった船ですからね。
このまま知らぬ存ぜぬは出来ないわ」

ああ、やっぱり説得出来てなかった訳だ……

こっちからやりたいと言えば、いや予算が……

なら幾らでも良いわ！

的な流れかい？

少し困った顔で長瀬社長を見詰める……

彼も視線を感じたのか、こちらを一瞥してから溜め息をついた。

お互いの腹の探り合いだけど、彼も僕も持ちつ持たれつの関係だし。

落としどころを探らないと駄目かな……

# 第１４話

この見た目に騙されがちな、美女だけど中身がオッサンで善人の為に苦労している……

せめて外見がロリなら頑張りも報われるのだが。

どこをどう見ても育ち過ぎている。

どうにも食指が動かないんだが……

「長瀬社長。
取り敢えず、マンションオーナーと話し合いをして貰えませんか？
今のままだと、警備の連中の危険は取り払えてないんですよね。
アレは生霊だから、地縛霊と違い移動出来ます。
建物周りだけを巡回させても、かなり話題になっている。
警備の目を盗んで侵入する馬鹿は居るでしょうね……」

深夜にランタンの灯りに照らされた、蠢く人影の目撃者は居る筈だ。

インターネットに書き込まれたら、人が集まってくる。

多分だが、その中には質の悪い連中が居る。

度胸試しや興味本位で侵入し……

怪我を負ったり、最悪は死ぬ。

誰が、この阿呆の責任を取るのか？

不条理だが、警備を任されていた会社と建物の持ち主だ。

不法侵入なのに、安全上・警備上に問題は無かったのか？

防げた事故じゃないのか？

お前らが、ちゃんと警備をして持ち主が立入禁止の措置をしておけば……

助かった命だろう！

だから謝罪と保障をして欲しい。

そう言う逆ギレをする遺族が居るんだ……

その点を匂わせてみた。

案の定、腕を組んで悩み始めた。

「本当に、又出るかね？」

大分揺らいできたかな？

少なくとも長瀬綜合警備保障の警備中に、そんな不祥事はお断りしたい。

だからと言って警備員の人数を増やして警備体制を強化するのと、僕達に頼む為にマンションオーナーと交渉する手間を天秤に掛けている。

最悪の場合、マンションオーナーが除霊を断れば等しくリスクを背負わされるから……

長瀬社長も何とかマンションオーナーと交渉して、除霊の件と料金を認めさせたい。

そして自分と、社員の安全を確保したい筈だ。

「僕でも除霊後に一週間は様子を見ますからね。
今回の件は、桜岡さんは除霊が成功して奴が成仏したかの確証は無いと言った……
つまり相手は手負いですからね。
完治するまで出ないか、怒って周りに八つ当たりをするかは分かりませんね……
桜岡さんも、そう思うよね？」

「えっ？
ええ、そうね。
そうかも知れないわね……」

妙に慌てて相槌を打つけど、まさか寝てた？

罰が悪そうに此方を見る彼女は、僕と長瀬社長の会話を聞き流していたのだろうか……

暫し沈黙が流れる。

僕が駄目押しをして、彼女が肯定した……

これで長瀬社長は追い込まれた筈だ。

後は彼の判断を待てば良い。

僕は用意されたコーヒーを飲む。

うん、すっかり温くなっちゃったな……

砂糖とミルクが無いと飲みにくいんだよね。

「分かった。

マンションのオーナーと掛け合ってみよう。

継続で君達に任せるか、新しい連中を呼ぶかは向こう次第だからね」

釘を刺されたな……

最悪、長瀬社長は手を引く事も視野に入れている。

それが向こうが手配した霊能力者の場合を持ち出したんだ。

先方がゴネれば、僕達を切り離して話を進めるのだろう。

悪い条件なら、僕達を紹介した分のリスクを負うかもしれないから……

もしかしたら、この物件は放置かもしれないな……

「今日のところは長瀬社長の連絡待ちですね。

宜しくお願いします。

さぁ桜岡さん、お暇しようか？」

今後については、そのマンションオーナーとの交渉次第。

又は交渉の場に同席させられるかも知れない……

「えっ？

もう良いのね、分かったわ。

では長瀬さん、失礼しますわ」

桜岡さんは、イマイチ状況を理解してないのでは？

面識の無いマンションオーナーとの交渉には、彼女は連れて行かない方が良いね。

後で釘を刺しておこう。

長瀬社長からマンションオーナーとの交渉に、意見が聞きたいから同席して欲しいって頼まれたら……

ホイホイ付いて行きそうだから怖いな。

笑顔で長瀬社長に別れの挨拶をする彼女を見て、見えない様に溜め息をつく……

嗚呼、溜め息の分だけ幸せが逃げるとは良く聞く。

しかし今回は、溜め息の分だけ苦労しそうだ……

主に僕が！

◇◇◇◇◇◇◇

桜岡さんと連れ立って横浜駅に向かう。

確か彼女のｏｆｆｉｃｅは、京急上大岡駅の近くだった。

だから途中迄は同じ電車だ……アレ？

「桜岡さん、何で来たの？
電車？車？」

「電車よ。
待ち合わせの場合、時間が読めない車は使わないわよ。
それに横浜駅周辺は渋滞するし……」

一般的な常識は凄く持っているんだよな。

「そう。
じゃ途中まで一緒だね。
僕は京急横須賀中央駅までだから」

丁度ホームに入ってきた快速特急に乗り込む。

行きと違いソコソコに混んでいる為、並んで吊革に掴まる。

電車が走り出し案内のアナウンス放送が終わると……

「えっ？
今後の話をしないの？」
って唐突に話し出した。
って今後の話？
だって長瀬社長からの返事待ちでしょ？
「えっと……
長瀬社長が先方と話し合いをして、結果で僕らは動く話になったよね。
それは理解してるよね？」
「でも……
待ってるだけじゃなくて、何か出来る事が有るんじゃなくて？」
「無い！
ちゃんと契約する迄は、オーナーさんとの話が纏まる迄は何かしちゃ駄目だ。
それは長瀬社長にも迷惑をかけるの！」
ブーって頬を膨らませる……
それはロリっ娘がやると嬉しいが、貴女がやっても子供っぽいだけだ。
子供っぽいと言っても、絶対子供にはなれない。

だから僕には……

無駄無駄無駄ムダァー！

「結果は2～3日中には分かる筈だよ。
だから、結果を聞いてから行動するの！」

「でも……」

「でもじゃないでしょ？
ちゃんと契約してから仕事をするって約束でしょ。
もし契約前に桜岡さんが怪我でもしたら……
長瀬社長が困るんだよ」

またブーって頬を膨らませる……

ここは話し掛けない方が良いだろう。

暫し無言で並んで窓の外の景色を見る……

行きに降り出していた雨は、今は本降りだ。

長瀬綜合警備保障から横浜駅までは、屋根付きの通路を歩いて来たがら余計に雨足の強さを感じる。

冬の雨には、嫌な記憶しかない。

爺ちゃんが亡くなったのも、親父が亡くなったのも……

こんな冬の雨の日だった。

「何よ！
そんな怖い顔して。
分かりましたわ。
大人しくしています。
でも連絡が入ったら動き出すわよ」

ん？

どうやら思い出していた時に、怖い顔になっていたらしい……

それで僕が怒っていると誤解したんだな。

「いやゴメン。
死んだ爺ちゃんと親父を思い出してね。
アレも、こんな寒い雨の日だった……」

爺ちゃんの亡骸を抱えて泣いたのも、親父の亡骸に対面したのも。

どちらも寒い冬の雨の日だった……

そして、僕が箱に。

あの箱に居る奴に初めて会ったのも……

「そう……
お祖父様とお父様が……」

お祖父様？お父様？

糞ジジイと糞オヤジだったよ！

様付けなんて……

背中が痒くなるよ！

「いや、気にしないで……

それより長瀬社長からマンションオーナーに説明したいから同席を

頼まれても、1人でホイホイ行かないように。

必ず僕に連絡して欲しい」

コレは念の為にも言っておかないと。

最悪、長瀬社長が桜岡さん1人に押し付けて縁を切るとか……

又はマンションオーナー側から不利な条件を押し付けてくるか……

人の良い彼女じゃ、コロっと騙されるよね。

クスクス笑いながら

「なにそれ？

榎本さんって私の保護者なの？」

って返してきたけど、そんな気がしてきたよ。

「そんなモンかな……

少なくとも、この件が解決する迄はね」

じゃないと直接被害を受けるのは、僕だし……

「クスクス……
可笑しいわね。
本当にボディガードみたいよ！」

何故か嬉しそう？

プライドの高い彼女なら、私に任せられないの？
って怒るかと思ったんだけど……

電車は弘明寺駅を通過した。

後3分位で京急上大岡駅に到着するだろう。

「そろそろ着くね。
じゃ連絡を待ってるから、そっちも大人しくしてる様にね」

「あら？
ウチ（ｏｆｆｉｃｅ）に寄っていかないの？」

何故に？

そして周りの乗客も、何故コッチを伺うんだ？

「それは連絡が着てからでしょ？
内容によっては事前に話し合う必要が有るかも知れないからね」

そう言うと車内アナウンスが流れて駅に到着した。

「あら残念ね。
では榎本さん、ご機嫌よう」

そう笑顔で言って、颯爽と電車を降りて行った……

「ヤレヤレ……
お嬢様のお守りは大変だ」

誰に言うともなくボソリと漏らすと、周りからの視線がキツくなった？

周りを見渡せば、男性陣が睨んで居る。

「ああっ？」

そいつ等に視線を合わせてやると、殆どが目を逸らすが……

何人かは睨み返して来やがった！

アレか？

まさか嫉妬か？

結衣ちゃんの時は親子ですか？

微笑ましい的な反応の癖に、何で桜岡さんだとシット団なんだよ！

ドッと押し寄せる疲労感に耐えながら、早く事務所に帰ろうと思った。

今日は早仕舞いして、早く結衣ちゃんに癒やされよう……

大人しく微笑む彼女の顔を妄想しながら、周りの視線を無視した。

端から見たらニヤニヤしたオッサンは、さぞかしキモかっただろう……

◇◇◇◇◇◇◇

僕は夢を見ているのだろう……

桜岡さんと別れてから事務所に戻り早めに自宅に帰った。

結衣ちゃんと楽しく夕飯を食べて、風呂に入って直ぐに布団に潜り込んだ筈だ……

しかし意識が覚醒してるのに、周りは真っ暗だし体も動かせない。

また、あの夢なのか……

「そうだよ……
お前の父親達が苦しみ悶えている。
早くお前も、コッチに来いとな……」

耳元でアイツが囁く……

くっ……動け動くんだ！

手足に力を入れてもビクともしない。

無駄に足掻いていると正面の暗闇から、爺ちゃんと親父が現れた……

見る度に奴に魂を浸食されているんだろう。

最初は会話も成り立った。

しかし今では苦しみからか、罵声しか聞こえない。

「まさ……あき……

何故、お前だけ……無事なんじゃ……」

「ちち……が……

苦しんで……いるのに……

お前が……何をして……るんだ……」

タールを流し込んだ様な沼地から、這う様に此方に手を伸ばして……

恨み言を話す爺ちゃんと親父……

くそっくそっ糞ッタレがぁー！

「オイ、箱！

出てきやがれ。

何故だ！

僕はお前に贄を差し出している。

なのに何故、爺ちゃんや親父が苦しんでいるんだ！

出て来て説明しやがれ！」

幾ら叫んでもヤツは姿を表さない。

口以外に動かせない僕の耳元で高笑いをするばかり……

ヒャハハハハー！

お前らの魂は、私が握っているんだよ。

足掻け、足掻くんだー！

恨み言を言いながら這ってくる爺ちゃんに足首を掴まれた時点で……

体の自由を取り戻し、起き上がった。

「くっ糞ッタレが！」

全身汗だくで疲労感が凄い……

ノロノロと起き上がり、部屋に有るミニ冷蔵庫からコーラのペットボトルを取り出し一気飲みをする。

「くっゲホッ……ゲフー」

激しく咽せたが、今はそれが丁度良い。

少しでも気が紛れれば……

僕はペットボトルに残るコーラもがぶ飲みし、そのまま布団に倒れ

込んだ。

疲労感からか、襲ってきた睡魔に身を任せる……

「爺ちゃん、親父……
まだ苦しんでいるのか……」

張り裂けそうな胸の苦しみも、眠ってしまえば一時は忘れられるから。

# 第１５話

嫌な夢を見た……

体は疲労感で一杯で汗だくだ。

あれから気を失う様に眠りについてから、３時間位は寝れただろうか？

少し体力が回復し、体のベタベタが気になり始めた……

一度気になりだすと中々寝付けないものだ。

時計を見れば５時５５分か……

冬の朝は未だ日の出前。

部屋の中も真っ暗闇だ。

「風呂で汗を流すか……

今日は長瀬社長の返事が来るまでは、自主的な休みでも良いかな……」

クローゼットを漁り、着替えとバスタオルを持ってバルスームへ行く。

一階の結衣ちゃんの部屋の前を通るが、未だ彼女は夢の中だろう。

扉から漏れる灯りは常夜灯の淡い光だけだ。

彼女を起こさない様に静かに移動する。

ウチの風呂は家庭用の濾過機能の付いた２４時間風呂だ！

だから何時でも設定温度の４２℃のお風呂に入れる。

夏は３９℃に設定するが……

結衣ちゃんは良く出来た娘さんだから、オッサンである僕の下着を含めた洗濯物も一緒に洗ってくれるし、お風呂のお湯も入れ替えたりしない。

年頃の娘を持った父親の悲劇は……

回避しています。

体を簡単に洗い流し、浴槽に浸かる……

「ふぃー……

風呂は命の洗濯と、逃げちゃ駄目な子供が言っていたな……」

タオルを絞り両目の上に乗せる。

じんわりと疲労感が溶けて行くのが分かる……

１５分位だろうか？

体の芯まで暖まったので上がる事にする。

そろそろ日の出が近いのだろうか？

外で雀がチュンチュン鳴き出したし、仄かに明るくなり始めた……

浴室を出ると脱衣場で体を拭く。

部屋の灯りは敢えて点けなかったが、窓から太陽の光が少しずつ入って……

「きゃ！

正明さん、ごめんなさい」

どうやら洗面所を使いたかった結衣ちゃんに、僕の全裸を見られたか？

窓を向いていたから息子はセーフだが、尻エクボはバッチリ見られたかな？

「ああ……

結衣ちゃん、直ぐ出るからね」

彼女に声を掛けてから、急いで身支度を整える。

普段は7時に起きて朝の支度を始める筈だが、今朝は早出なのかな？

髪の毛をガシガシと拭きながらキッチンに向かえば、結衣ちゃんが朝食の準備をしていた……

「おはよう、結衣ちゃん。

今朝は早いね。

未だ6時半前だよ？」

まな板で何かを切っている彼女に声を掛ける。

「はにゃ？

ごっごめんなさい、正明さん。

まさかお風呂に入っていたなんて……」

真っ赤になりながらワタワタする彼女。

せかせかと手を動かしながら謝る姿は、小動物みたいで可愛い。

「ごめんね、僕も電気を点けておけば良かった。

気にしないでね」

そう言って冷蔵庫を開けてパックの牛乳を取り出す。

コップに注いで一口……

火照った体に冷たい牛乳は鉄板だ！

珈琲牛乳？フルーツ牛乳？

男ならシンプル且つ基本の白牛乳だろう！

コップの残りを左手を腰に当てて、仰け反る様にゴクゴク一気飲みだ！

余りに全裸を見られた僕が気にしないので、彼女も溜め息をつきながら調理を始めた……

アレ？

溜め息をつかれた？

結衣ちゃんが料理をする姿を後ろから舐める様に凝視する……

左右に動きながら手際良く調理する彼女のフリフリと動くお尻の辺りを。

うん、美少女の手料理を食べれるなんて幸せだ！

美少女と言うか店番をしていた美幼女にも、また会いたいな。

あの仕事は僕も気になるから、もう一度昼間に周辺を調べながら店に顔を出そうかな……

目の前の極上ロリっ娘を見ながら、他のロリに思いを馳せるとは！

なんて贅沢な環境。

しかも結衣ちゃんが早起きをしたのは、学校の給食室の什器が故障した為に3日間は弁当持参だそうだ。

だから僕の分まで作ってくれた！

「では、行ってきます！」

元気良く……

ではないが、行儀よく挨拶をして出て行く彼女を見送る。

折角、彼女がお弁当を作ってくれたんだ。

休もうと思ってたけど、事務所に向かう事にする……

「さて、お仕事頑張りますかね！」

◇◇◇◇◇◇

あれから支度をして、事務所には８時４５分に着いた。

基本的に営業時間は９時から５時迄だ！

紹介が殆どの僕の事務所には、一見さんとかは殆ど来ない。

広告も出してないし、タウンページにも記載されていない。

完全に舐めた商売形態だが、長瀬綜合警備保障や山崎不動産からの紹介が結構有るので、そこそこ毎日仕事が有る。

何時もの様に郵便物とメール・ＦＡＸをチェックする……

そして仕事の依頼は何も無い。

だから長瀬社長からの連絡が来る迄は仕事が無い。

「さて……
ネットサーフィンでもするかな……」

冷蔵庫からコーラを取り出し、カチャカチャとネットで遊ぶ。

最近ハマっているゲームの攻略サイトを梯子し、ネット小説の更新状況をチェックすると……

もうお昼だ！

「時の経つのが早過ぎる……
さて、結衣ちゃんのお手製弁当を食べようかな！」

至福の時が訪れた……

◇◇◇◇◇◇◇

お弁当のメニューは定番中の定番だ。

ミニハンバーグ・甘い卵焼き・インゲンとベーコンの炒め物それに煮豆だ。

煮豆は販売品だが、その他は彼女の手作り。

両手を合わせて

「いただきます！」

と言った所で携帯が鳴った……

誰だよ？

と思い携帯を開くと

「桜岡霞　携帯」

と表示されていた……

卵焼きをモグモグと食べながら通話ボタンを押す。

「はい、榎本です。
只今食事中です……」

「あら、こんにちは。
桜岡です。
まだお昼には少し早く有りません？」

時計を見れば１１時５２分……

ほんの少し早いのか？

「それが自由業の素晴らしさですよ。
それで、何か有りましたか？」

インゲンを一本づつ摘んで口に入れる。

うん、コショウが適度に効いていて旨いな。

「うーん……
何かって言われると、長瀬さんから連絡が無いから榎本さんの方はどうかなって？」

ズズーっとお茶を飲む。

「無い！
てか、昨日の今日で話が纏まるとも思えないよ。
2～3日は掛かるんじゃないかな？」

白米を口に入れて咀嚼する……

やはりお米ってサイコー！

日本人なら米を食べなくちゃ。

「呑気なのね……
私は気になって仕方無いのよ。
何とかしなさいな」

また無茶振りを……

ミニハンバーグを一口でパクリ。

おっ、中にチーズが入っていたよー！

「ねぇ？

聞いてるの、榎本さん？」

「うん、チーズｉｎハンバーグって良いよね？」

「……そうね。
榎本さんって、ハンバーグとか子供っぽい料理が大好きですよね？」

まだファミレスのフードバトルの件を根に持っているのかな？

「待つのも大切な仕事だよ。
無為に動き回ると周りに迷惑を掛ける事も有る。
その辺はテレビの仕事もしている桜岡さんなら詳しいでしょ？」

あの業界もマイナールールとかしきたりとか煩そうな……

最後の卵焼きを食べて完食する！

美少女の手作り弁当を美女と会話しながら食べる。

ある意味では……

何て贅沢な環境？

「それは分かってるわ。
でも……」

「桜岡さんも暇じゃないでしょ？
何かやる事は無いの？」

僕はネットで遊んでたけどね。

「無いわ！
悪い？
そうだ、榎本さん私に付き合いなさいな」

「無理、忙しい」

「脊髄反射みたいに即答ね……
忙しいって除霊の仕事かしら？」

ちげーよ、遊びだよ。

ゲームの攻略を実践したいのよ！

「……単純作業の地道なレベル上げさ」

敵キャラ無限増殖でレベルをガンガン上げたいんだ！

「流石ね……
仕事の無い時は、自分を鍛えているのね？
確かに凄い筋肉ですもの。
日々の努力の賜物なのかしら……」

ピュアな回答をされると、オジサンの毛の生えた心臓もピクピクしてしまう。

「まっまぁね……
じゃ長瀬社長から連絡が来たら、お互い連絡する事。
それで良いね？
じゃ！」

ブツリと通話を切る……

桜岡さんって友達が少ないのかねぇ？

こんなオッサンに絡んでくるとは……

しかし、言われると確かに気になる事も有るな。

もう一度、現場周辺を当たってみるか。

生霊の関係者のヒントくらい掴めれば、興信所に頼めば早く見付かるかも知れないし……

駄目なら調査のみで打ち切りだ！

外を見れば、どんより冬の曇り空。

午後からノンビリと電車と徒歩で、現場の周りを調べてみようか……

◇◇◇◇◇◇◇

横須賀中央駅からノンビリと三崎口行き特急電車に乗る。

客は疎らであり、シートに座りボーっと景色を見る。

手荷物は折り畳みの傘だけ……

暫くして目的地の駅に到着。

その後、バスに乗り問題のマンション迄辿り着いた。

「こう……

アレの存在を知ってるのに昼間は普通に見える……」

見上げる建物は午後2時を過ぎたばかりだが、夜と違う顔を見せている。

「でも前に昼間来た時とは違う雰囲気だ……

何故かな？」

2～3日前に昼間来た時よりも、感じる雰囲気が明らかに違う。

何かヤツに変化が有ったのか？

手負いになり、なりを潜めているのか？

それとも除霊は成功していた？

後は何か他に原因が有るのか……

しかし今は建物には関わらず、周りを調べ直す事にしよう。

先ずはロリっ娘店番の雑貨屋に……

「アレ？休み……か？」

シャッターが閉まっているが、お知らせの貼り紙はとくに無い。

「父親が病気で入院中、母親はその見舞い。
娘が1人で店を切り盛り……
怪しいかな？」

しかしロリっ娘なら今は学校に行ってるか微妙な時間だし。

店を開けられなくても不思議じゃないか。

「あら？
榎本さんも来ていたの？
私の誘いを断ったのに現場に来るなんて……
やはり気になってたのね」

閉まっているシャッターを睨みながら考え事をしていたら、桜岡さんが隣に居た……

彼女は昨日と違い少しラフな格好だ。

皮のジャケットにパンツスタイルだ！

僕の知らない海外ブランドだろう高級感が素人でも分かる……

ちっ、お嬢様め！

「あら？
このコーディネートは気に入らない？
現場には動き易い方が良いと思ったの」

自分の服装を確認する様に、左右に首を振る。

「いや……
悔しいが似合っている。
流石はブルジョアめ！」

僕は重度の真性ロリコンだが、攻略対象外の女性だからといって無意味に差別をしたりしない。

ただ、興味が無い・縁が無いと言うだけだから……

「……？
それ、ほめ言葉じゃないわよ。
まぁ良いわ。
それで何か分かったのかしら？」

彼女のセンスは確かなのだろう……

悔しいが結衣ちゃんへのプレゼントを選んで貰うのも良いかも知れない。

悔しいが、僕に美的センスは無い……

折角だから利用させて貰おうか！

「ふはははは！
桜岡霞よ。
僕の為に役立つが良いわ！」

「いえ、私の為に役立って貰うわよ榎本さん！」

見詰め合いながら、互いにニヤリとする……

「「ふはははは！（おほほほほ！）」」

実は気が合う2人だった！

「さて、周りから不審者扱いされる前に移動しよう」

「そうね……

私は兎も角、榎本さんはマンマ性犯罪者に見えるわ」

結構毒を吐くお嬢様だ……

並んで歩きながら、一旦ロリっ娘の店の前から離れる。

「さて、僕はもう一度周りから調べてみるけど……

桜岡さんって何時もはどうしてるの？」

「えっ……

その、その辺も一緒に回って教えて欲しいなーって……ダメ？」

可愛くシナを作り言っているつもりなのだろう。

彼女程の美女にお願いされたら、一般男性なら墜ちたかもしれない……

しかし、何度もいうが僕はロリコンだから。

無駄無駄無駄ムダー！

# 第16話

梓巫女の桜岡霞……

本物の霊能力を持つ25歳の美人さんだ。

彼女はテレビの心霊番組で良く見掛ける、今一番知名度の高い霊能力者だろう。

しかし出たとこ勝負の一発屋的な除霊スタイルと大雑把な料金スタイルを持つ、世間知らずなお嬢様だ。

だが、自分の力で人を助けようと行動する善人でもある。

このままでは利用されたり騙されたりして大怪我をする前に、何とか業界の先輩としてその辺の立ち回りを教えておきたい。

別にお節介な筈じゃなかった僕だが、今隣に居る彼女に自分の仕事の手順を教えているから不思議だ！

◇◇◇◇◇◇◇

「だから最初に調べられるだけの事を調べるんだ。

ネットでキーワード検索をしたり図書館で昔の新聞記事を調べたり……

霊障って事は、誰かが死んだ訳だからね」

「ネット？
あの某巨大掲示板の書き込みとかを？
信用出来る内容とは思えないわ」

僕らは問題のマンションの周辺３００ｍ圏内をゆっくりと調べながら歩いている。

田舎だから周囲の県道や市道、又は農道や私道とか限られるけどね。

「煙の無い所には噂は広まらない。
確かに人聞き、人伝だから真実とかけ離れている場合も多いよ」

余り当てにはならないけど参考位にはなるからね、と笑いながら言う。

「例えば今回の件はどうだったの？」

「ん？
そうだね……
「心霊スポット横須賀スレ」って書き込みが有ってね。
読んでいけば、横須賀の建設途中のマンションの怪についてだった。
夜中に前を通ると、３階の窓の部分に人影が見える。
敷地内に良く野良猫が死んでいる。
浮浪者が住み着いて、小火をだした。
他には動物や虫の屍骸と３階の人影を見たとかね」

「人影ってあの建物の中は真っ暗だったわ。
外から人影なんて見えたのかしら？

虫は大量に居たわね。
でもあの警備員と話した時は前日に初めて虫の死骸を大量に見たって。
小火は……
実際に有ったかは分からないけど、火事が有ったから警備が厳しくなったのかしら？」

確かに言われてみれば、その通りだ。

ランタンの灯りに照らされて、ユラユラ動き回る影が確認出来たんだ。

真っ暗の中で人影なんて見えないな……

「確かにそうだ……
多分だけど、誰か勇気の有る馬鹿が中に入って目撃したんだろう。
それを読んで、さも自分も侵入した様に書き込んで内容が変化していったか……
実際に建物の中を調べた時は、２階迄は落書きが酷かったでしょ？
でも３階は殆ど無かった。
普通は肝試しなら、証拠に問題の３階迄侵入して落書きしたりするのに。
だから逆に噂は本物だと判断した。
３階には立ち入れない何かが有るって……
真偽が分かれば警戒も上げられる。
嘘か本当か迷うよりは余程良いからね」

彼女は首を傾げながら

「そうやってネットの情報と実際に見た状況を摺り合わせて考える

のね？
榎本さんって脳筋かと思ったけど、ちゃんと考えているのね……
凄いわ、チョットだけ尊敬しちゃった」

笑顔で誉めて？くれた？

でも……

このアマ、人の事を脳筋とか言いやがったな！

態度を見れば本人には悪気は無いのだろう……

その分ムカついたぞ！

ムッとした表情を出してしまった為か

「怒ったの？
ごめんなさいね。
ほら、機嫌を直して……」

そう言って腕を絡めてくる。

毎回思うが、彼女はこの辺の警戒心が足りな過ぎる。

もし僕がロリコンじゃなかったら、誤解されて大変な事になるぞ！

「そう言うのは誤解されるから止めなさい。
それは彼氏にしてやると喜ぶけど、それ以外だと誤解されるから……」

スルリと腕を離すと

「榎本さんって固いわね！
クスクス、お父さんと話しているみたいだわ」

此方を見ながら後ろ向きに歩いて、嬉しそうにクスクス笑っている。

「僕はまだ３０代だ！
君みたいな大きな娘は居ないぞ」

「はいはい。
お父さんは心配性なんですね！」

チクショウ、全然反省してないや。

「それで……
この歩き回る事の意味はなにかしら？」

散歩じゃないんだぞ！

「現場の周りにお地蔵様や庚申塚。
墓地とか曰くの有りそうな物が有るかを探しているんだ。
神社やお寺も怪しい場合も有るし……
こんな看板も、何かしらのトラブルの原因が有るかも知れない」

そう言って古びた看板を指差す。

「マンション建設反対……
自然を守れ。
これって、あのマンションの事なの？」

「つまり反対運動が有ったんだね。
純粋に自然保護か利権問題か……
少なくとも対立する人間は居たんだよ。
この辺が、ヤツの生霊に関係してるかもしれない。
反対運動をしていた連中や、利権絡みの関係者。
工事関係者だって怪しいかもしれない。
この辺の調査は、本職の興信所じゃないと我々では難しい。
だから長瀬社長に予算の件を相談したの！」

ビックリした顔で此方を見ている？

「予算とか契約とかヘンテコな人だと思ったら、こう言う訳も有ったのね！
確かに探偵紛いな事は、私には無理ですわ……
それに今の話だけでも、何十人って規模だし。
でも、興信所の人達は生霊の相手を判断出来るのかしら？」

「いや、報告書を読めば絞り込めるでしょ？
最近、調子が悪そうだ！
とか入院中だとか……」

パジャマ姿の生霊なら、入院中の線が濃厚なんだけどな。

「確かにそうね……
あの後、出没してるのかしら？
警備員の人達は危険じゃないの？」

「彼らには建物内部に入る事を禁止して貰ったよ。
ゴーストハウスは、案外建物の外には影響が無い場合が多い。

でも今回は生霊だから微妙だけどね。
長瀬社長が請け負った警備期間は短期だ。
だから採算は合わなくても、２人体制に警備を変える様に頼んだ。
１人だと魅入られて誘い込まれる危険が有る。
事情を知ってる連中なら、相方がフラフラ中に入り込もうとしても、ぶん殴って止めれるからね」

やっぱり脳筋じゃない！

力任せは良くないわ。

とかクスクス笑って楽しそうなお嬢様に溜め息が出る。

彼女の中では、僕や坂崎君は脳筋のひと括りなんだろうな……

「いい加減に脳筋から離れなさい。
この業界は調査・準備が９割以上なんだよ。
実際に効果が有ると判断しないと、直接対決なんか出来ない。
僕に言わせれば、出たとこ勝負な桜岡さんの方が脳筋に見えるけどね！」

「ひっ酷いわ、レディに脳筋なんて！
榎本さんって意地悪だわ」

凄いショックを受けた顔をして、此方を睨んでいる……

言わないが、黙ってればレディと認めてやっても良いけどね。

「でも桜岡さんの除霊スタイルは考えた方が良いよ。
初対面の霊と戦うのが基本って、霊能力者としてはどうかと思う。

テレビ的には、こんな地味な調査なんてせずにズバッと戦った方が良いんだろうけど……
テレビ以外の仕事をする考えが有るなら、尚更だ！
普通の顧客は値段と解決率が全てだよ」

最近良く見せる、ブーって頬を膨らませて此方を睨む……

本当に子供っぽいお嬢様だ。

「テレビの仕事は、止めた方が良いのかしら？
有名には成れたのは確かよ。
でも……」

色ノモ芸人と変わらない扱いだからか？

「それは一概には言えないね。
僕は余り周りに知られたくないんだ。
元々在家僧侶として資格を持ってるから、派手に仕事をするのも問題が有るからね。
桜岡さんも、ソコんところヨロシク！」

釘を刺しておかないと、テレビ関係者に話されでもしたら大変だからね。

「分かっわ。
あの……
榎本さんってお祖父様とお父様を亡くされているじゃない。
実家のお寺は、ご兄弟の方が継いでいるのかしら？」

「……故郷はダムに沈んだよ。

家も寺も何もかも。
親兄弟、親戚も既に他界してる。
天涯孤独の身の上さ」

ハッと息を飲まれた……

少し言い方が悪かったな。

反省しなければ。

「気を悪くしたらゴメンね。
檀家衆も村がダム湖に沈んだ時に、同じ宗派のお寺に引き継いで貰ったんだ。
継ぐ寺が無いから在家僧侶なんだよ。
だから、余り除霊とかしてるのは広めたく無いんだ」

だから内緒だよ！

って笑って言えた。

暫く無言で並んで歩るく……

この辺は、まだまだ開発の手は伸びていない。

周りには畑が沢山有り、昔ながらの住宅が密集している。

木塀の家も多く、鉄製の看板も沢山有る。

これが有名なオロナミンCの昔の看板だよ。

とか

これはボンカレー、あれはオリエンタルカレー！

昔はルーが粉末だったんだよ。

とか、昭和のトリビアを話ながら散策を楽しんだ。

2時間位歩いただろうか？

漸くゴールのマンションが見えて来た。

冬の夕暮れは早い……

既に遠くに見える水平線には、沈みゆく太陽が半分掛かっている。

「綺麗……

でも、もう夕暮れね。

結局何も見つからなかったわ」

暫し並んで夕日を見ていたが彼女が、ポツリと言った。

確かに確認の意味での散策だから、真新しい事実は見つからなかった……

「連絡次第だけど、次は付近のお寺や神社に聞き込みをするよ。

田舎では神社仏閣には住民の情報が集まるからね。

住職や神主さんの話は貴重だ」

「今日行かなかったのは、何故？」

「正式な依頼を請けていれば、あのマンションのオーナーから頼まれて調べています！
って言えるでしょ？
プライバシーに絡む話は、中々聞き出せないよ。
興味本位や取材なんかより、ちゃんと依頼を請けてる方が相手も話し易いでしょ？」

お寺なら伝手が有るから、最悪は総本山からの紹介とかも使えるからね……

そう言って考えなしにお寺や神社に突撃しない様に釘を刺す。

それにどちらも聖職者だし、ペラペラと話してくれる内容でもないからね。

人の生き死にに関する情報なんて……

「榎本さんが寺社、私が神社を担当すれば良いコンビじゃないかしら？」

「ははははは！
桜岡さんは、どの流派に属しているんだい？
さて、最後に長瀬綜合警備保障の連中の待機場所に簡易結界を張っておしまいだ！
流石に彼らを放置じゃ危険過ぎるからね」

知った顔も多いし、彼女曰く脳筋仲間だから！

無用な度胸で突撃する奴も居るんだよ。

「俺は、幽霊なんて信じないっすよ！
だから平気っす」

とか

「自分は非科学的な事は信じてないから大丈夫です！」

とか、気の良い奴でも否定派は少なくない。

逆に深夜のビルとかを巡回する連中は、それ位じゃないと務まらない。

一々怖がっていたら仕事にならないからね……

長瀬社長も昼間はそんな連中を夜は霊障の実体験を持っていても辞めない連中でシフトを組んでいる筈。

危険は圧倒的に夜の連中だ……

だから彼らを守るのも僕の仕事の内なんだよ。

「ふーん、結界ね。
それって私も見ていて良いかしら？」

「別に構わないけど……
そんなに楽しい事じゃないよ」

今日は、このお嬢様に付き合いっぱなしだね。

マンションに向かえば、例の雑貨屋のシャッターが開いていた。

「桜岡さん、ちょっと店に寄るね」

彼女に断りを入れてから店に入る……

店内には蛍光灯は点いているが、少し薄暗い。

店番は……居ないな。

商品を物色する様に、ゆっくりと中に入る。

「いらっしゃいませ……」

店の奥から、３０代半ばと思われる女性が出て来た。

髪をキチンとセットし、薄く化粧もしている。

その表情には旦那さんが入院中で苦労している感じは無いか……

まぁ調べなければ、あの娘の母親とも限らないけどね。

前回同様、ガムとコーラを手に取りレジへ。

「これを下さい……

前に来た時は、娘さんですか？

店番をしてましたね。

偉いなぁ、まだ小学生位ですか？

ウチの子にも見習わせたい」

子供なんて居ないが、話のネタ振りで嘘を言う。

彼女が僕と後ろの桜岡さんを交互に見てるけど?

「わっ私達の子供じゃ未だ違いますからね！」

桜岡さんが慌ててるけど、旦那さんの事を聞きたくて話し掛けてるのに。

騒いだら話の切欠が途切れるでしょ！

邪魔しないで下さい。

見れば彼女は、淡々と商品をレジ袋に入れている。

怪しいのは怪しいのだけど……

# 第17話

働くロリっ娘を見にくれば、彼女の母親と思しき女性が出て来た……

３０代半ば、身嗜みに気を配った女性だ。

とても旦那さんが入院中で苦労している様には見えない。

淡々と商品をレジ袋に入れている彼女に話し掛けても反応は薄い。

「２２０円になります……
其方はご夫婦では？」

小銭入れからピッタリの金額を探して渡す。

「僕達ですか？
僕達は仕事の同僚ですよ。
あのマンション……
競売に掛けるらしくて下見がてら来ました。
周りの生活環境によっても入札金額が変わりますからね」

競売と聞いた時に、僅かに反応した……

あのマンション絡みで何か有るのか？

「そうなんですか……
知りませんでした。
そう、工事が再開されるのですか？」

少し食い付いて来たかな？

「でも、調べてみたら良い噂を聞かないんですよね。
何か周りも口を濁すと言うか……
幽霊が出るとか言われた時は笑いましたよ。
この平成の時代に幽霊ですからね。
奥さんは何か聞いてます？」

それとなく探りを入れてみるが……

「いえ……
でも工事が中止になってから、変な人達が夜に訪れたりして騒がしくって……」

困ります、と言ってくれたが……

この辺が潮時かな？

「ああ、肝試しとか？
大変ですね、では！」

そう言って店を出る。

暫くは振り返らずに真っ直ぐ歩く……

「榎本さん！
子供が居るなんて聞いてませんよ！
離婚したんですか？
子供には両親が必要なんですよ！
てか、さっき天涯孤独って……」

「落ち着いて下さい。
嘘ですよ、彼女との話の切欠作りです。
それより、怪しいと思わなかった？
彼女の旦那さんは入院中だ。
娘に店番をさせて見舞いに行っている。
そんな環境で身嗜みを必要以上に整えるかな？」

状況は辛い筈だ……

一家の働き手が入院中。

幼い娘に店番をさせる程、困ってるのに化粧？

それともスナックとかバーとか、夜の店に働きに行ってるのか？

「なっ？嘘？
駄目ですよ、騙すなんて！
子供が居るなんてビックリしましたわ」

違う！

君じゃなくて彼女が怪しいか聞いたのに……

「でも入院中の旦那が生霊として、何故マンションの３階なんだ？
それとも彼女絡みでは無いのかな……」

場所に憑く生霊は、僕は聞いた事が無い。

生霊は人に憑き纏う物だと思っていたけど……

「んー普通の生霊は、怨みや執着している相手に憑きますわ。
前にストーカーの生霊を祓った事が有ります」

「えっ？
ストーカー被害って、ついに心霊現場まで発展してるの？
でも、歪んだ思いの結果なら有り得るのか……」

話しながら歩いていると、マンションを囲う仮設ゲートの手前まで来た。

さり気なく手前の角を曲がる時に後ろを確認すると、例の彼女が此方を伺っている。

「桜岡さん、彼女が見てるから曲がるよ。
後ろを振り向いちゃ駄目だからね……」

道を曲がり僕達の姿が見えなくなってから一息つく。

やはり、彼女は何かしら今回の件に関係してる。

携帯カメラを録画モードにして、角から突き出し確認する……

少しだけ突き出しているから、向こうからは確認出来ないだろう。

画面を見ればジッと此方を伺っていたが、一分程で店の中に戻って行った。

「怪しいな……
でも不用意に会ってしまったな。

向こうも警戒しちゃったし……
さて、どうしようか？」

「えっ？
直接問い詰めないの？」

携帯をしまいながら聞いたら、脳筋な回答来ました！

オイオイ……

いきなり聞ける訳ないでしょ！

塀にもたれ掛かり溜め息をつく……

「えっと……
馬鹿にされてるか、呆れられてる気がしますわ」

ブーっと頬を膨らませて

「私怒ってます！」

的な表情の桜岡さん。

「直接問い詰めるのは下策でしょ！
先ずは調べないと……
いきなり、貴女の身の回りの誰かが生き霊となりマンションに出没してます！
どうしてくれるんですか？」

って、警察を呼ばれたら僕達が不審者で捕まるよ」

こっから先は、長瀬社長次第だな。

興信所に依頼出来れば、結構解決は早いかも……

「不審者？私が？」

何を驚いているんだか？

心霊話をいきなり始めたら、結構不審者ですよ……

「桜岡さん。
彼女が警戒してるかも知れないから、正面ゲートからは入れない。
僕は塀をよじ登って中に入るから、君は迂回して今日は帰った方が良いよ。
そろそろ暗くなるから危険だしね」

そう言って電柱を利用して、工事用のパネルに手を掛ける。

「えっ？」

彼女が驚いている間に、パネルの上に登り

「後で電話するから……
じゃ今日は解散で！
くれぐれも彼女に見付からない様に帰るんだよ」

と言って、中に飛び降りた！

「えっ？

榎本さん、私を放置プレイしないでー！」

……何か騒いでいたが、気にしない事にする。

ここはマンションの裏側だ。

建物の外周をゆっくりと歩いて正面に回る。

入り口付近のテントに、長瀬綜合警備保障の警備員が詰めていた……

良かった、知った顔だ！

「お疲れ様！」

漫画を読んでいた彼に話し掛ける。

確か心霊現象の肯定派の人だ。

「うわっ？

なんだ、榎本さんですか！

脅かさないで下さいよ。

社長から聞いてます。

だからいきなり声を掛けられたからビックリしたじゃないですか！」

本気でビビってたね！

大丈夫かな？

「ゴメンゴメン……

長瀬社長から聞いているなら問題無いね。

このテントに簡易結界を張るから……
それと御守りのお札ね。
あと、建物の中には絶対に入らない事。
少し噂になってるから、肝試しとかで変な奴らも来るかもしれない。
でも基本的には中には入らないで欲しい。
もし入るなら3階には立ち入らせないで、その前に連れ出して欲しいんだ……」

テントの四隅に盛り塩をして、鉄製のポールにお札を貼り付ける。
後は護身用の札を何枚かと、フィルムケースに入れた塩を渡す。

「交代要員は？」

「22時にもう1人来ます。
それまでは僕だけです」

深夜警備だけを増やしたのか……

まぁ仕方ないか。

「テント内に居れば、一応結界が有る。
ヤバいと思ったらダッシュで逃げろ。
お札は一枚を肌身はなさず持っていてね。
残りは他の人に渡して。
塩は最後の手段だからね。
もし襲って来たら……
撒いて逃げる。
基本的には逃げの方向で」

彼に一通り簡単な説明をしておく。

「それと……
僕が除霊で来ている事は誰にも内緒でね。
今回は生霊の可能性が高い。
つまり相手は生きている人間だ。
どんな奴かも分からない。
男か女かも分からない。
下手に話すと君も危険だからね……」

そう言って口止めをしてから、入って来たのと同じ様に裏の塀から外に出る。

成り行きとは言え、手持ちの除霊道具の殆どを渡してしまった。
残りは数珠だけか……

見渡せば、すっかり辺りは暗くなってしまった。

時刻は、６時４８分か……

シマッタ、結衣ちゃんに連絡入れるのを忘れた。

迂回しながら駅の方へ歩きだす……

途中で携帯電話から自宅へ電話をする。

コール音が聞こえ、４回目で結衣ちゃんが出てくれた……

「はい、榎本です」

くーっ、はい榎本ですって新婚さんみたいだよね？

「もしもし、結衣ちゃん？
ゴメンね。
これから帰るから、あと1時間くらいかな？」

「分かりました。
では夕飯は食べずにまってます。
今夜は鍋にしたんです」

「おお、鍋！
寒い時期には最高だよね。
何かデザートを買って帰るよ。
何か良い？」

「すみません。
今日は調理実習でシュークリームを作ったんです。
良ければ正明さんに食べて欲しくて……」

ナンダッテ？

ロリっ娘の手作りスイーツだと！

「勿論、そっちを頂くよ。
じゃ戸締まりはちゃんと確認してね。
真っ裸で……
いやマッハで帰るから」

何てこったい愛染明王様よ！

こんなご褒美が待ってるなんて。

足取りも軽く、通り掛りのタクシーを捕まえて最寄り駅まで……

一分一秒を惜しんで帰宅しました！

◇◇◇◇◇◇◇

タクシー・電車・タクシーの三連コンボで、予定時間を大幅に短縮して帰宅した。

途中で、桜岡さんにも電話をして経緯は報告。

後は本当に連絡が来ないと何も出来ないと念押し。

2～3日だから大人しくしていなさいと説得。

漸く本日のご褒美……

ロリっ娘の手料理の海鮮チゲ鍋を食べています。

普段はキッチンで食べるけど、鍋と言う事で居間の炬燵に運んでテレビを見ながら食べています。

最近結衣ちゃんがハマっているクイズ番組だ。

僕が遅れたので、付き合わせて見れないじゃ申し訳ないからね！

「和食党の結衣ちゃんが韓国料理とは珍しいね！
辛いの苦手でしょ。
大丈夫かい？」

余り辛い物が食べられない結衣ちゃん。

序でに猫舌でもある。

フーフーと取り分けた野菜に息を吹きかけている。

嗚呼、僕にもフーフー＋アーンして下さい！

のコンボを決めて欲しい。

「えっと……
冷凍庫の整理をしてたら、海老とかイカとか少量ずつ残ってて。
一度に食べれるのは鍋が最適かなって。
それに私だって辛い料理だって食べられます。
正明さん、過保護です」

あからさまに怒ったり拗ねたりはしないが、こんな風に拗ねられるのは最高だ！

「ゴメンゴメン！
じゃ今度は少しだけお酒の効いたケーキとか買ってくるからね」

結衣ちゃんの食べる仕草は可愛い。

特に大好物のケーキは、本当に幸せそうに食べる。

でも日本茶党だから、ケーキにもお茶なんだよね……

「……ケーキの時点で子供扱いです。

でも洋酒が効き過ぎだからと言って食べさせてくれなかった、パティスリー雪の下のロイヤルフルーツケーキなら許してあげます」

ああ、鎌倉のアレか……

普通は加熱するからアルコール成分は飛んでいるんだけど、アレは結構な量がかかっていたし風味も残ってて危ないと思ったんだ。

「じゃ今度の休みにでも、2人で鎌倉散策に行こうか？」

「……良いですよ」

グフフッ……

結衣ちゃんを合法的にデートに連れ出せたぞ！

週末は楽しみだなぁ……

鎌倉だけじゃなくて、江ノ島まで足を延ばして江ノ島水族館にでも行ってみるかな。

「そうだ！

序でに江ノ島まで足を延ばして江ノ島水族館に行ってみようか？」

「そうですね！
お魚大好きですから行きたいです」

結衣ちゃんは水族館や動物園が結構好きなんだ。

ズーラシアやシーパラダイスには良く連れて行った事が有る。

そう言えば池袋のサンシャイン水族館も改装中だし、次は其処に誘おうかな！

デートプランも固まったので、料理に専念する。

海鮮チゲ鍋は、海老・イカ・ホタテ・白身魚の切り身、それにほうれん草・白菜・大根と栄養のバランスも取れた逸品でした。

最後にうどんを入れて溶き卵で辛味をまろやかに……

デザートのシュークリームは、膨らみが少し歪だったけど美味しく頂きました！

「御馳走様でした。
結衣ちゃん！」

# 第１８話

榎本が結衣ちゃんとイチャイチャしてた頃、問題のマンションでも変化が有った……

久し振りに夜空に雲も無く、満月に近い月明かりに照らされて敷地全体がボンヤリと見渡せる明るさだ。

仮設のテントの中でボーっと待機するだけでは隙を持て余す。

しかし巡回は2時間おきだし、建物の中には入らない様に言われている。

つまり敷地に巡らされた仮囲いの周りを定期巡回するだけ。

大して動かないから寒さが堪える……

屋根は有っても壁は無い。

缶コーヒーを買っても直ぐに冷えてしまう。

「うー寒みーなー！
それに暇だし……
ビル警備なら暖房が効いてるしテレビも有るのにな」

「全くだよ。
でも幾ら寒くても、アレの中には入りたく無いな……
今回は本物らしいからな」

社長からも念を押されている。

「入るな危険！
第三者が侵入しても2階で何とか取り押さえろ」

しかし仮囲いには正面しかゲートはないが、一旦中に侵入してしまえば建物内には何カ所か入り口が有る。

気付かれずに入る事は可能だ。

だから外周は30分おきに回っている。

不審者や不審車両のチェックの為に……

週末のせいか、それともネットで噂が広まったせいか何組かの若者が見に来ている。

外から

「これが噂の廃マンションかー！」

「怖えーよ！
マジでヤバくね？」

とか、怖いもの見たさで騒いでいる分には良い。

近くに行って懐中電灯で照らしてやれば、笑いながら帰って行く。

問題は、気合いの入った心霊マニアだ！

奴らは、単独又は少人数で静かに侵入しやがる。
警備が居ても
「取り壊される前に見たかった！」
「折角の貴重な建物なんだ！
記録映像を撮らせてよ」
とか言ってくる。
直ぐに警察に通報するのが、会社のマニュアルだ！
勿論、現行犯で確保もするし証拠の写真も撮る。
不法侵入は立派な犯罪だから……
「昼間に榎本さんが来たんすよ。
あの人、今回は難しいって言ってましたよ」
「あー、結構信用してんだよ、あの人は。
俺らと同じに現場回ってくれっし、肉体派だしな」
「「それに下ネタが好きっすからね」」
全く風俗にハマって、横浜ヘルス街と川崎ソープ街じゃ有名な人に師事してるとか言われてるぜ！
全くエロ坊主じゃね？

猥談で盛り上がる彼らを一瞬で現実に引き戻す事態が発生した！

「オイ！
２階で一瞬、ＦＬＡＳＨが光らなかったか？」

「俺も見たっす！
最近はナイトビジョンでの撮影が多いけど、今のはＦＬＡＳＨだ！
誰か侵入しやがった」

警棒とマグライトを掴んで、建物にダッシュする。

幾ら怖いと言っても、仕事だから仕方ない。

建物の入り口で、一瞬だけ躊躇したが侵入する。

「誰か居るのか？
居るなら出てこい！」

「出口は塞いだぞ！
２階から飛び降りる気か？」

１階内部を探索し、声を掛ける。

どうやら黙りを決め込むつもりか？

「階段は此処だけだ……
２人で行こう」

警棒を構え、マグライトで周囲を確認しながら階段を登って行く。

直ぐに2階に行かないのは、すれ違いや思わぬ反撃を警戒してだ。
奴らも犯罪行為は理解している。
逃げ出す為に反撃する奴も居るんだ。

「オラッ！
出て来いやー！」

威嚇の為に警棒でコンクリートの壁を叩く。
静かな建物内に響き渡る打撃音……
ゆっくりと手前の部屋から調べ始める。

「居るなら今の内に出て来い。
見付かってからじゃ洒落にならないぞ」

荒事専門、肉体派の2人は顧客には礼儀正しいが不法侵入者には厳しい。
何度か彼らを捕まえて、警察からも表彰を受けた事も有る猛者だ。

「ひっひぃー……
畜生、覚えてやがれ！」

突然、外から叫び声が聞こえた！
窓に顔を出して確認すれば、小太りの男と背の高い男が走り去って行くのが見えた……

「ほぅ……
2階から飛び降りたか。
まぁまぁ気合いが入っているじゃんか」

「今から追っ掛けでも捕まらないか……」

取り敢えずは任務完了だ。

ふっと張り詰めていた気が緩んだ瞬間

「ふっ……」

耳元で誰かの息遣いが聞こえた！

「オイッ！」

「誰だ？」

2人が振り向くと、部屋の入り口にパジャマを来た奴が居た……

頬が痩け眼窩の落ち窪んだ暗い穴の様な両目を此方に向けて、ただ立っていた。

「……出やがった」

「かっかか体が、動かない……」

懐中電灯を向けたままの姿勢で体が固まって動かない。

「おい！塩、塩だ！
持ってるか……」

「有る……
けど、ポケットの中だ……
体が動かねえ」

奴から目が離せない。

体が動かせない。

気持ちは焦るが、対処出来る物を持ってるのに行動出来ない……

「やっヤバいぞ。
近付いて来やがる」

「たっ助けて……
いや、嫌だ……」

ガタガタと震える体に力を入れるが、全く言う事を聞かない。

ゆっくりと近付いてくる奴をただ見ているだげた……

後、２ｍで触れる位に近付いてしまう。

何故か奴の呻き声や布ずれの音までが、ハッキリと聞こえる……

後、１ｍ。

もう吐く息さえ感じられそうだ。

「動け、動けよ……」

直立不動で動けない彼らの一歩手前まで近付いた。

「くっ来るな！
来ないでくれ……頼む……」

「がっ……あがが……」

唸る声、吐き出す息遣いまで感じられる距離。

願いも虚しく目の前まで近付いて来た。

「ぐがっ……さっ……ゆ……ゆり……」

枯れ枝の様に細く痩せた手を彼らに延ばしてきた。

「「うわぁー！」」

彼らの悲鳴が深夜のマンションに響き渡った！

◇◇◇◇◇◇◇

突然の電子音で目が覚めた……

電話？携帯？

枕元に置いてある携帯電話に手をのばす。

ディスプレイには

「長瀬綜合警備保障　長瀬社長」

の文字が。

同じくディスプレイの右上には現在時刻が表示されている。

４時１８分……

何か有ったのか？

「もしもし……
榎本です」

電話に出ながら起き上がり、机に向かいメモれる様にする。

「早朝にすまん。
榎本君、先程警察から連絡が有った。
例のマンションの警備の連中が入院した。
状況は分からんが、見てしまったらしい。
付近の住民が悲鳴を聞いて警察に連絡。
駆け付けた警察官が２階で倒れている彼らを見付けて病院まで搬送してくれた……」

「２階でですか？

3階でなくて？」

まさかヤツは移動出来るのか？

「そうだ2階だ……

幸い怪我は無く見つけ出した時に目覚めたが、錯乱していたので念の為に入院だ。

それと検査をされている。

心理的なショックも有るが、薬物使用の有無を確かめられてるんだろうな」

麻薬をキメて幻覚を見たとか疑われたのか？

と、言う事は警察も彼らが幽霊を見た！

そう聞いてしまったんだろう……

「それはご愁傷様でした……

しかし命に別状が無くて良かった。

でも警察に知られたのは不味かったですね。

僕の事は話しても構いませんが、桜岡さんの事は……」

お茶の間の人気梓巫女である彼女は、格好のネタだ！

梓巫女・桜岡霞、除霊に失敗！

遂に被害者が出る。

とか五月蝿そうだぞ！

「警察に呼ばれているよ。
朝9時に所轄の刑事課へ……
警備会社は警察ともコネが有る。
君達の事は伏せておくよ。
幸い君に言われてマンションのオーナーに調査を頼んだのが良かった。
警察には、何か怪しい物が見えると社員から報告が有り警備体制を増員していた。
向こうの調査待ちだった！
そう言えるからね」

「坂崎君にも口裏を合わせないと……
でも僕は無理ですよ。
昨日、彼らに有ってお札と清めの塩を渡したんです。
調べればバレるし、もしかしたら彼らが話しているかもしれないし……」

対策を講じていたのに、全く効果が無かった。

まるで無能だ……

「分かった。
君への依頼はちゃんと報告する。
そして危ないと報告されて、警備体制を強化。
マンションオーナーに問い合わせている最中だった！
この線で行こう」

後は幾つかの決め事をしてから電話を切った……

最悪の流れだ。

騒ぎが大きくなった。

しかも警察沙汰だし救急車まで呼んだんだ。

騒ぎは広がるばかりだろう……

時刻を見れば、６時７分か……

少し早いけど、桜岡さんにも釘を刺すか。

彼女なら知らなければ、騒ぎの中に突っ込んで行きそうで怖い……

携帯からコールするが、出ない。

まだ寝てるのか？

１０回鳴らして諦めた。

所轄だと横須賀警察署か……

刑事課には知り合いの刑事さんが何人か居る。

最も友達じゃなくて、職務質問とかされた仲だ。

彼らからすれば、僕らの業界は詐欺師の集まりだからね。

でも比較的、人の死に近い警察も心霊絡みは……

実は結構有る。

でも彼らは表立っては認めないけどね。

僕は在家僧侶だし、料金も破格に安いから問題は少ない。

坊主が依頼を請けて死者の魂を極楽浄土へ導く……

別にどこも悪く無い。

しかも警察から何回か依頼も請けているし、遺族にさり気なく紹介してる節も有るんだ……

だって広告出してないのに、事務所に来るんだよ。

何処からの紹介かを聞いても答えないし、でも警察絡みの事件の関係者だから……

少し早めに事務所で待機していれば、案の定警察から任意同行と言うか……

お話を聞かせて欲しいと連絡が有った。

◇◇◇◇◇◇◇

僕の事務所から横須賀警察署までは、歩いても１０分と掛からない。

9時30分にと言われたのは、長瀬社長と時間差で質問し粗を探すつもりか？

結局、桜岡さんからの電話は無く事務所の留守電に用件を録音しといた。

大切な話が有るから、午後は体を空けておいてくれと……

勝手知ったる刑事課に顔を出す。

「お早う御座います。
榎本と申しますが、刑事課の佐々木さんに呼ばれまして……」

この警察署の刑事課は、20畳ほどの別室になっており扉は1つしか無い。

だから入ると一斉に厳つい刑事さん達が注目する。

ちょっと怖い……

「ああ、榎本さん。
わざわざ済みませんね。
ちょっと聞きたい事が有りましてね」

「長瀬さんから聞いてます。
何でも昨夜の騒ぎについてだろうって……」

ナチュラルに話ながら、応接室に通される。

何も犯罪はしてないから、警察も取調室には案内しない。

大抵は会議室か応接室だ。
緑茶を淹れてくれて対面で座る。
「で、どうなの？」
「あのマンションは本物だと思います。
先日、夜に立ち会いで調査しましたが……
僕も見ました。
だから真偽をマンションオーナーに問い質して、取り敢えず警備を強化しろって長瀬社長に言ったんですよ……」
朝の打ち合わせ通りの内容を話す。
僕は在家だが僧侶。
僧侶が霊の話をしても、なんの不思議も無い。
幽霊なんて居ない！
魂なんて無いんだ！
なんて言ったら、警察と言えども仏教界に喧嘩を売った様なものだ。
「やはり同じ事を言うんだな。
まぁアンタは坊さんだ。
霊を信じてるのは職業上当たり前だよな。
分かった、ご苦労様でした。
でも、あのマンションどうするんだ？」

これだけの騒ぎだ。

沈静化するのに何ヶ月掛かる事か……

「あとは長瀬さんとマンションのオーナーさんとの話し合いでしょうね。

正直、依頼も無く動き回る訳にも……」

廊下まで案内してくれた佐々木刑事に頭を下げて警察署を出る。

長瀬社長の携帯にコールするが、直ぐに留守電に切り替わった。

此方の取り調べは終わった旨を録音する。

僕と違い長瀬社長には、聞かれる事が沢山有るんだろうな。

何たって社員が入院したんだからね…

「長瀬社長……

頑張って下さい」

僕は、まだ取り調べの最中だろう長瀬さんにエールを送った。

# 第19話

警備員がヤツに襲われた……

幸いにして怪我も無く、多少の精神的なダメージを負っていたが、タフが売りな連中だ。

2～3日の休養で現場復帰出来るそうだ。

しかし、警察沙汰になった為に現場は一時閉鎖されるだろう。

問題は……

長瀬さんは、責任をマンションオーナーに振った。

タイミング的にも、それは良かった。

先方の受け取り方次第では、揉めるだろう。

一連の説明と今後の対応について、僕は桜岡さんと話し合わないと駄目？

「駄目でしょう！

榎本さんも、ほらほら呑んでー」

いやいやいや……

ナレーションに突っ込み入れないで！

「いや、僕は手酌で……
ビールに継ぎ足しは駄目だから」

僕は本当はホッピー派なんですよ。

横須賀はホッピー発祥の地。

冬でも三冷が当たり前なんです！

因みに三冷とは、ホッピー・焼酎・ジョッキの三つをキンキンに冷やしておく事。

四冷は氷を足す事。

焼酎の量を調整する事で、好きな濃さを楽しめる逸品だ！

「ほら！
瓶を持つ手が重いわ……
早くグラスを空けなさいな」

それって、何処の体育会系なコンパだよ？

笑顔を絶やさず上品に……

しかしやる事はオッサンだぞ、この女は！

「いや、そろそろホッピーに変えようかなって……」

ビールも好きだけど、横須賀で飲むならホッピーだ！

「ホッピー？
何なんですか、それ？
カクテルか何かかしら？」

こんなサラリーマンが実用で呑む赤提灯に、カクテルなんかねーよ！

大衆酒場だぞ、ここは。

「えっ？
桜岡さん、知らないの？
横須賀はホッピー発祥の地なんだよ。
代用ビールとして生まれた……」

「知らないわ！
それよりボトルいれて、ボトル。
芋は臭いから麦の焼酎、何かないかしら？」

折角説明しているのに、バッサリ切りやがったぞ！

しかも飲み物のメニューを持って見てるんだし、ボトル無いの分かりますよね？

「いや、この店にはボトルキープなんてないから……
女将さーん！
麦の焼酎、何かあるー？」

カウンター内で忙しく動き回る女将さんに声を掛ける。

正直、焼酎の銘柄は良く分からない。

大抵はサワーで頼むから……

「今日は、ばっかいか白水が有るわよ。
何で割る？」

ばっかい？白水？

有名なのかな？

まぁ本人に選んで貰えば良いか……

隣で上品にしめ鯖を食べている彼女に聞いてみる。

「桜岡さん。
麦焼酎なら、ばっかいか白水だって！
何で割るの？」

可愛らしく首を傾げて

「あら白水が有るの？
じゃお湯割りを貰うわ」

と、オヤジなチョイスを宣った！

普通は女性ってカクテルとかサワーとかじゃない？

初っ端から瓶ビール、次が焼酎のお湯割りって！

見た目だけは上品で美人なのに、何か勿体無い感じが……

「女将さーん！
白水をお湯割りでー！
序でにホッピーの黒、三冷でお願いします」

そうは言っても、この酒乱に付き合わないとならないのか……

どうして、こうなった？

誰か教えてくれ……

◇◇◇◇◇◇◇

警察署で事情を聞かれてから、一旦事務所に戻る。

長瀬社長や桜岡さんには留守電を入れてあるから、今日は連絡が取れる体制にしておこう。

携帯電話は、常に出れる様にしておくか……

事務所に戻り、今までの経緯を報告書に打ち込んで行く。

後で長瀬社長に請求する時の添付資料だ！

カタカタとパソコンで打ち込んで行く……

今までの経緯を粗方打ち込み終わると、丁度昼飯の時間だ。

デスクワークで凝り固まった体をラジオ体操第一で解していく。

ゴキゴキ鳴る体は、年のせいじゃないよね？

外食だと携帯電話はマナー違反だから、コンビニか出来合いの惣菜でもデパ地下で探そうかな？

取り敢えず、財布と携帯電話を持ち上着を羽織って外に出る。

エアコンの効いた室内から外に出ると、思わず寒さでゾクゾクっときた！

「うわっ！

寒いなー、こりゃ雨が降れば雪になるかも……」

お弁当にカップラーメンでも買ってこよう。

ポケットに両手を突っ込み、前屈みで駅前商店街に向かった……

寒さに負けて手近なコンビニでオニギリとカップラーメンを買い事務所に戻った。

因みにオニギリはツナマヨと明太子だ！

カップラーメンは、天麩羅ソバ。

テレビを見ながらモソモソと食べる……

今朝はバタバタして折角、結衣ちゃんがお弁当を作ってくれるのを

早出だからと断ったんだ。

残念だが、彼女を早起きさせて作らせる訳には、ね。

流石に昨夜の件はニュースにもなってないな。

新聞も確認したけど、横須賀版にも載ってなかった。

それはそれで良かった。

変に知られると、対処が面倒臭いからね。

食後のお茶を飲んでいると、漸く桜岡さんから電話が有った……

ああ、長瀬社長からは連絡が有った。

特に社会的責任云々も無く、警察からも入院中の2人から薬物反応も出なかった為、無罪放免だそうだ。

後はマンションオーナーさんとの協議だけか。

そんな事を考えながら、桜岡さんからの電話に出る。

「もしもし、榎本です」

「こんにちは、榎本さん。
今、電話大丈夫かしら?」

「ええ、今は事務所ですから大丈夫ですよ」

「すみません、電話頂いたのに連絡が遅れて……
実はテレビ局で打合せ中だったんです」

テレビ局？打合せ？

結構早くからやるんだな……

「構いませんよ。
桜岡さんには昨夜の連絡が行ってますか？」

「昨夜……ですか？
いえ、あれから事務所の娘達と食事して今朝は電車で都内に行ってましたから」

電車の中だからマナーモードか。

彼女って一般常識とか、真面目さんなんだよね。

きっと電車内で携帯電話は弄らないんだろう……

「そうですか……
例のヤツだけど、動きが有ったんだ。
警備の連中が襲われた。
怪我は無かったが、騒ぎを通報されて警察沙汰になってね。
午前中は長瀬社長と共に、警察署で事情聴取だったんだよ」

「そっそんな事に？
どうしようかしら……
実はテレビ局からオファーが有って、榎本さんに相談と言うか助言を貰いたくて……

でも今の話も良く聞きたいわ。
そうだ！
榎本さんの事務所に行って良いかしら？」

「ウチに？何故に？」

「だって警察沙汰なお話を普通の喫茶店とかで話すのは良くないわよ。
私の相談も、余り人には聞かれたくないの。
私のオフィスに来て貰うよりは、其方に伺った方が良くなくて？」

んー別に来て貰っても問題は無いか……

仮にも事務所だし、変な事をする気も無いし。

「そうだね。
場所は名刺に書いて有るから分かるよね。
何時位にこれるかな？」

一応は片付いている部屋を見回しながら応える。

時間が有るなら掃除した方が良いかな……

「今から向かいますから、３時には着くわ」

二時間半後か……

何とかなるかな。

「分かったよ。

んじゃ3時に待ってる。
その前に例の2人の見舞いに行ってくるよ。
話せるならば、昨夜の件を聞いてみる」

そう言って電話を切った……

さて、お見舞いには何を持っていこうかな?

怪我は無いようだし、簡単に食べれる物でも持っていくか……

◇◇◇◇◇◇◇

彼らの入院している病院は警察署からも僕の事務所からも近い。

まぁ横須賀市の中心地区だし大抵の施設は揃っているから。

病院の受付でお見舞いの旨を申告し、名簿に記載してバッヂを貰う。

病室はA棟のかな4階、４０３号室か……

床に書かれた案内に従い病室に向かう。

軽くノックをしてから中に入る。

「こんちは!
元気してるか?」

なるべく明るく声を掛ける。
2人はベッドの上に……
いやしねぇ。
治療か？それとも診察か？
「あれ？
榎本さん、どうしたんす？
こんな所で？」
声を掛けられ振り向けば、新聞やお菓子を持った2人が立っていた。
「見舞いだよ！
てか、大人しく病室に居ろよな」
「昼間っから寝てばかりいられないって」
全くだ、と笑い合ってから談話室に移動する。
見舞いの品々をテーブルに並べる。
ジュースにスナック菓子だ……
ひとしきり食べてから昨夜の事を聞く。
「で、お前らでも気を失う事を聞かせてくれ。
昨夜何があったんだ？」

２人とも黙り込んだが、意を決したのか話し出した……

「昨夜、警備中に建物内に侵入したヤツが居た。
ＦＬＡＳＨの光が２階で見えたんっすよ」

「社長から話は聞いていたけどさ。
行かない訳にゃならんから直ぐに建物に入った。
３階には行くなって言われてたからな」

そこで一旦話を止めて缶コーヒーを一気に飲んだ。

「３階には行かなかったんだな。
じゃ何処で？」

「見たのは２階の一番手前の部屋だ。
俺達は、１階から威嚇し調べながら２階に上った。
侵入者は俺達の威嚇にビビったんだろう。
窓から飛び降りて逃げ出した。
俺達は騒ぎながら逃げるヤツをその部屋から見ていたんだ。
２人組の侵入者を……
そして気がつけば、ヤツが居た」

「後ろから気配を感じて、振り向いたらヤツが入り口に居たんだよ」

２階の廊下だと？

確かにヤツは３階の部屋から僕を追って来た。

でも建物から逃げ出した時は、３階を徘徊していた。

2階へ降りて来なかったのに、何がヤツを変えたんだ？

「どんな感じだった？」

「痩せこけた男だった。
パジャマを着ていたな……
見た瞬間に恐怖で体が固まったんだ」

「折角貰った塩を撒こうにも体が動かねえ。
ヤツはゆっくりと近付いて、俺に触った。
干からびてミイラみたいな腕だったぜ……」

「息づかいも感じられる近さだった……
俺もアレが近付いてくるのに目が離せなかった。
そしてアレに触られた後の記憶が無い。
恥ずかしいが悲鳴を上げたらしいな……
だから誰かが救急車を呼んでくれたんだ」

全く情けないぜ。

荒事専門の俺達が幽霊にビビって気を失うなんてな。

そう締めくくって、何とも言えない顔をした。

かなり悔しいんだろう……

いや、心霊現象を体験して悔しいって感覚が凄いんだが。

このタフさが、スゲーよ。

「うん、有難う。
良かったよ、元気そうで……」

2人と別れたが怪我も無く精神的にも大丈夫そうで安心した。

◇◇◇◇◇◇◇

ざっと事務所の片付けをする。

一応は女性を迎え入れる訳ですから……

掃除機をかけて机を拭いてゴミを出したら終わりだ。

寒いけど窓を開けて空気を入れ替えた時にチャイムがなった！

「いらっしゃい！」

事務所とは言え、マンションの一室なので普通の家の玄関と変わらない。

扉を開けて彼女を中に招き入れる。

「お邪魔しますわ。
あら、少し寒いかしら？」

彼女は今日もお洒落さんだ……

本気で結衣ちゃんのプレゼントを選んで欲しい。

「すいません、換気中でした……」

応接室に通して換気していた窓を閉める。

エアコンを強にしてからお茶の用意をする。

「では、先ずは僕の方から……」

昨夜の件、長瀬社長との話・警察での話・見舞いの結果を順を追って話す。

「私に配慮してくれるのは嬉しいわ。
でも、それじゃ榎本さんに迷惑ばかり……
そうだ！
私がご馳走しますから、何処か飲みに行きませんか？」

パンと両手を胸の前で合わせて、名案だわ！

って感じですか……

「いや、そんな気を使わなくても……」

結衣ちゃんとマイホームで夕飯食べたいんだよ！

「気になさらずに。
相談事も有るから、丁度良いですわ」

強引に推し進められて、仕方無く結衣ちゃんお勧めのフレンチレストランに連れて行こうと出掛けたが……

途中で大衆酒場に行った事が無いから、連れて行って欲しいとせがまれた。

ガチガチの労働者が行く店でなく、普通のＯＬや会社員が実用で飲みに行く店に連れて行ったけど……

彼女が酒を呑むと、化けるのは聞いてなかったんだ。

# 第２０話

相談事を持ちかけられて……

誘われるままに居酒屋で飲み始めた。

見た目はお嬢様な桜岡さんは、中身はオヤジだったのは誤算だ。

にこやかに絡むし、お酒を強引に勧めるし。

しかも自身はお酒好きだけど弱いときてる……

僅か５杯で出来上がってますよ？

◇◇◇◇◇◇◇

彼女の頼みで本当ならフレンチレストランに行く予定が、所謂居酒屋に来る事になった。

見た目がお嬢様な彼女は浮くかと思ったが、すっかり馴染んでいやがる。

何故だ？

上品に焼き鳥を食べ、しめ鯖を摘む姿に違和感を感じないのは……

内面がオヤジだからか？

「それで、相談事ってなんだい？」

上品にマグロのやまかけを食べてる彼女に話し掛ける。

不思議だ……

妙に店にマッチしている。

「ん……
初めて来たお店なのに馴染むわ」

「そう、来慣れている感じがするけど？」

モツ煮込みを箸で器用に食べている……

食べ過ぎじゃないかと思ったが、ファミレスでフードバトルをしたんだった。

「そのね……
夏用の番組で心霊特集を組むの。
それでね、私のコーナーを作ってくれるって。
桜岡霞の除霊コーナーね。
そして対象は、八王子山中の廃屋よ。
かなり前から噂の絶えない曰く付きらしいの。
私は其処に若い女性タレントを連れて行って戻ってくるだけ……
もし怪異が有ったら対応するの。
どうしたら良いのかしら？」

良くある夏の心霊番組か……

除霊の仕事じゃない見せ物番組だろう。

しかし名前は売れる。

「それは、良く有る夏の特番だね。
知らなかった、この時期から仕込むんだ……
有名人にはなれる。
霊能力者としては微妙だけどさ……
でも名前を売る事は大切だ。
仕事の依頼は増えると思うよ」

但しお茶の間霊能力者としての名前が……

彼女が望む人助けからは、ちょっと距離が有るかな。

「榎本さんって見た目が脳筋なのに一般的な意見を返してくるわよね。
不思議だわ……
逆に、私がテレビに出るのってどう思うかしら？」

まだ脳筋ネタから離れないのか！

ちょっとイラッとしながら、丁度注文していたシシャモが来たので一本かじる。

あっ私も！

と言うので皿ごと彼女の方にズラす。

マヨネーズと一味唐辛子を付けて上品に食べる。

頭から丸かじりの僕とは大違いだな……

「君が言った人助けがしたいって言うのには、ちょっと遠いかな？
テレビには視聴率が有るから、思った通りには除霊出来ない。
お茶の間霊能力者を本心から信頼して頼む依頼者が多いかな？
勿論、テレビに出る霊能力者にも本物は居るから一概に同じとは言えない」

立て続けにシシャモを食べる彼女から皿を奪う。

チクショウ、五匹の内三匹も食べられた！

「そうなのよ。
確かに売り出し中の私には、テレビに出るのは効果が有ると思ったの。
でも実情はヌレヌレだかスケスケだか変なあだ名を付けられたの。
酷いと思いません？」

ちゃんと考えているじゃないか！

彼女が頼んだモツ煮込みを奪って摘みながら思う……

多分、自分の中では正解は出てるんだ。

それで後押しが欲しい。

踏み出す一歩を……

「君は人助けをしたいと言った。
心霊現象で悩んでいる人は、テレビのバラエティーに出てる人に心底縋ろうと思うかな？
特番の心霊番組の常連者も同じだと思うんだ。
ある程度は名前が売れたなら、後は実績を積んで行くのが遠い様で近道だと思うよ」

箸を止めて、此方を真剣に見詰める桜岡さん。

口の脇にシシャモの焦げたカスが付いてますよ……

「分かっていたわ。
その通り、テレビの出演者に本気で縋ったりはしないわ。
分かったのは最近よ。
貴方と仕事をして本物を知ったのよ。
今のやり方では絶対に無理な事もね。
でもテレビのお仕事は好きだわ……
だから年に何度かの特番は出たいと思うわ。
でもちゃんとした物語にしたいの」

話し終えて、どう？って顔のお嬢様の口元を指差す……

「……？
バカっ、意地悪ね」

ハンカチで口元を拭うと、ニッコリと笑った。

「それは良い事だと思うぞ。

でも番組的にどうなんだ？
地味な調査や逃亡の準備なんて番組にはならんでしょ？
テレビには派手な除霊や霊現象そのものが喜ばれる」
僕のやり方に影響されたのは良いけど、そのまま実践されちゃ無理だろ。
あの番組は、梓巫女・桜岡霞のヌレヌレで持っている様な物らしい。
美人な巫女さんが活躍するから視聴率が稼げるんだよね？
「でも本物の霊現象の起こる現場に素人を連れて行く危険は理解したわ。
私達本職が2人居た時も、警備員さんの時もヤツにやられたでしょ。
だから撮影の時に榎本さんが一緒なら心強いと思うの。
お願い」
可愛く拝む様に頼まれたが……
「却下！」
「即答ね、脊髄反射なみに早かったわよ！」
落ち着け……
ホッピーを一気飲みする。
「桜岡さん、僕は目立つ事はしたくない。
前にも言った筈だ！」

ちょっとだけ語気を強くして話す！

「分かりましたわ。
この話は此処までにしましょう。
榎本さんってシャイなのね……
ムキムキなのにシャイ？
ふふふ、変な人」

そう言ってメニューを見始めた。

まだ食べるつもりか？

ならば張り合わねばなるまい……

あんな細い腰の女に負ける訳にはいかない。

手を上げて女将が近くに来るのを待って

「先ずは串焼きの盛り合わせだな。
後はじゃがバター、それに小えびの唐揚げを……」

「やるわね。
なら私は……」

ファミレスに続き、第二次フードファイト勃発！

僕の胃袋と財布はボロボロだ……

◇◇◇◇◇◇◇

流石に奢ってくれるって話だったが、支払いは僕がした。

居酒屋で2人で１８０００円って結構な金額だ！

まぁ楽しかったから良いし、彼女のお願いも断ったんだから僕が払うのは当然だろう。

何より行き着けの居酒屋だ。

「榎本さんが、この間美人さんと一緒に来られまして奢って貰ってましたよ」

とか言われたら、余り嬉しくない。

見栄っ張りだとは思うのだが……

オッサンがお嬢様にたかるみたいで嫌だ！

そのお嬢様と言えば……

「榎本さん……
ぎぼぢわるいわ……」

絶賛悪酔い中です。

居酒屋を出てから酔い醒ましを兼ねて、駅ビル内のプロントでお茶

をしている。

彼女は、机に突っ伏してダウン中……

僕はホットコーヒーをチビチビ飲みながら、彼女が回復するのに付き合っている。

回復したら適当なタクシーに放り込んで帰そう。

それが、大人の対応だ！

間違っても

「少し休んで行こうか？
エヘエヘ！」

ではない。

15分位だろうか……

大分顔色が良くなってきた。

「桜岡さん、タクシー呼ぶけど自宅は何処らへん？」

お冷やを飲んでいる彼女に聞く。

余りに遠いならビジネスホテルに放り込もう。

「んー家は金沢区よ……」

金沢区？近いな。

此処からなら一万円で足りるか。

「立てる様になったらタクシー乗り場に行こうか……
まだ休んでいて良いよ。
この店は２２時まで開いているからね」

携帯電話で現在時刻を確認すれば、まだ２０時半だ。

居酒屋に２時間と少し居た計算か……

「ねぇ……
やっぱり私の手伝いは嫌なのかしら？
テレビに出なくても、相談には乗って欲しいの……
私の周りには、相談出来る本物の霊能力者なんて居ないし、お師匠様は亡くなってしまったし」

随分と懐かれた物だ……

確かに、この業界の連中は癖の有る奴ばっかりだ。

こんなお嬢様は珍しいし、自分の力や除霊方法は隠すのが普通だからな。

駆け出しの彼女にとって、業界の先輩の僕に頼りたいのは当たり前か……

「桜岡さん……
僕は目立つ事はしたくないんだ。

だから個人的な相談としてなら受けるけど、テレビの仕事絡みは駄目だよ」

テレビ出演とかは危険だし、撮しませんとか言っても分かったもんじゃない。

彼女はテーブルに伏せったまま

「ふふふ……
個人的な相談って。
榎本さん優しいのね。
それとも下心アリアリ？
でもロリコンだから安心なのかしら」

クスクス笑っているのを見ると大分回復したのかな？

「あのね、君が危なっかしいから心配なの。
それに結衣ちゃんのプレゼントを見立てて欲しいんだ。
オッサンの僕に若い娘のファッションは難しい」

余り物を欲しがらず、お洒落に興味が無さそうな彼女を着飾らせてあげたい。

年頃の女の子として、普通の幸せを感じて欲しいんだ。

「結衣ちゃん？
ああ、中学生なんでしょ？
榎本さんが囲っている。
嫌ね、光源氏計画？」

起き上がって、正面を見ながら結構キツい事を言われたよ。

でも光源氏計画か……

心惹かれるぜ！

「結衣ちゃんは……

母親と母親が連れ込んだ男達に虐待されていた。

まだ小学生の時にだ！

しかし母親が霊障で亡くなり、唯一の親族だった祖母も亡くした……

彼女の一族は、獣憑きの血筋なんだ。

普通の孤児院では対処が出来ないし、獣憑きなんて信じやしないだろ。

だから僕が、里親になったんだ……」

それにあれだけのロリっ娘が不幸になるのを分かってて、変態と言う名の紳士たる僕が黙ってろ？

無理無理、そんな事出来る訳が無い！

一応、下心を隠して真摯な表情で教えた。

変に勘ぐられて、行政にチクられたら同棲生活の破綻だ！

「……そうなんだ。

榎本さんって凄いのね。

見直したわ。

分かりましたわ。

結衣ちゃんを連れ出してお洒落させるのね？

確かに年頃の女の子だから、父親代わりがムキムキの脳筋じゃ相談

事も出来ないわね……」

フムフムと頷いている……

騙せたみたいだな。

でも何気に酷いぞ！

いい加減、脳筋から離れろ！

確かに男親には話せない相談事か……

あっアレか？

昔、小学生の時に女子だけ別の教室で何やら教えられていた。

確かに僕じゃ子作りは教えられても、それは難しい。

「そうだね……

今度、結衣ちゃんと会って欲しいんだ。

大人しく引っ込み思案だから、少しお洒落と言うか……

その辺の相談に乗ってあげてくれる？」

「分かりましたわ！

お姉さんが教えてあげるわ。

任せて下さいな」

笑顔で承諾してくれた。

彼女は基本的に善人だし、本物のお嬢様！

結衣ちゃんの為に頑張ってくれる筈だ……

それに桜岡さんは高飛車でケバいかと思ったけど、実際は印象が全然違う。

彼女なら結衣ちゃんを任せても大丈夫。

僕の未来の花嫁を任せたよ。

思わずニヤニヤしてしまう……

「榎本さん、何かしら？
気持ち悪いわ。
そのニヤニヤは……
結衣ちゃんの前で、その笑いをしたら嫌われるわよ。
とってもイヤライから！」

おっと、結衣ちゃんとの新婚生活を妄想してしまったか……

「えっと……
結衣ちゃんと桜岡さんの買い物シーンを考えたら、美人姉妹だなーって。
ＨＡＨＡＨＡ！
兎に角宜しく頼むよ」

ヤバい、言葉使いが変になってないか？

「ふーん……
美人姉妹ね。

結衣ちゃんて、どんな娘なのかしら？」

僕は携帯電話の画像フォルダーから、彼女の制服姿の一枚を見せる。

これは去年、夏服に変わった時に撮らせて貰った僕の宝物だ！

「あら、随分と大人しそうだけど可愛い娘ね。
なる程、榎本さんが親バカになるのも分かるわ」

そうです！

親バカです！

もし結衣ちゃんが彼氏を連れて来たら、速攻で笑いながら呪殺する位に……

「榎本さん、怖い顔をしているわ。
でも呪殺は駄目ですからね！」

真剣な表情で、桜岡さんにダメ出しされました！

アレ？

だだ漏れだったかな？

# 第２１話

タクシーに乗り家に帰る途中で、先程までの事を考える……

まだ会ってから一週間も経ってないに、随分と彼に甘え過ぎだわ。

夜の街を後部座席の窓から見ながら考える。

ネオンが綺麗……

海岸通りの１３４号線を横浜方面に向かっている。

右に見えるのは横須賀米軍基地……

その先はダイエーね。

トンネルを抜ければ田浦、その先は追浜……

自宅はその先。

１５分もすれば到着するだろう。

運転手には１３４号線から脇道に入る時に指示をすれば良い。

座席に深く座り、深く息を吐く……

飲み過ぎたかしら？

何時もは自制して３杯以上は呑まないのに。

お酒は好きだけど弱いのは、十分理解していた。

以前にテレビの打ち上げで酔わされて、ホテルに連れ込まれそうになった事が有ってから、異性と外で呑む時は警戒していたのに……

「それだけ、安心して甘えているのかしら？」

確かに業界の先輩であり、霊能力も本物。

体も鍛え抜かれている。

頼りになるのは確かね。

交渉に長けて、契約とか料金とかに細かい人。

女性に優しく何だかんだ言って支払いもスマートに払ってくれる……

そして話していて楽しい人。

大食いな私に張り合える、やはり沢山食べる人。

料理の取り合いなんて初めての経験だったわ。

家族とだって、そんな事はしなかったのにナチュラルに私が手を付けた料理を食べるし……

やだ、考え出したら顔が熱いわ。

「不思議な人……

私をイヤライ目で見ない。
何故？
僧侶だから？
それとも私って魅力が無いのかしら……」

独身なのに善意から子供を引き取れる程の人だもの……

邪な目で私を見ていないのね。

アレ？

でも確か……

初めて会った日に、あの警備員と私を押し付け合った時に……

「僕だって仕事と割り切っているけどさ。
ロリじゃないから無理！」

とか言っていたわよね？

聞き間違いよね？

榎本さんを信じて大丈夫よね？

結衣ちゃんって、本当に安全なのかしら……

幸い明日は土曜日だし、早めに結衣ちゃんに会って真偽を確かめないと！

まさか本当に光源氏計画を実行していたら……

「結衣ちゃんの為にも、榎本さんのナニをモギ取らないといけないわ……」

「お客さん……
怖い台詞が駄々漏れだけど、彼氏の浮気の制裁に息子をモギるのはやり過ぎだぜ！
アンタの子供も作れなくなるんだぜ」

はぁ？

私と榎本さんとの子供？

「なっななななな……」

「あんた美人なんだから、浮気って本当かい？
彼氏と良く話し合った方が良いんじゃないかな。
案外、勘違いとか多いぜ」

ギャハハハ！

ちゃんと首輪してガッチリ捕まえておけよ！

とか言いやがったぞ、この運転手！

首輪？

犬、かしら？

犬ね、それ良いかも……

確かに番犬には、うってつけな人材ですわね。

「そうね。
首輪……良いですわ。
クスクスクス」

桜岡霞に、不思議な性癖が開花したかも知れない。

◇◇◇◇◇◇◇

「長瀬君、君の所に任せているのに今回の不祥事は何故かな？」

「いや、曰わく有りとは聞いていたが実害が有るとは聞いていませんでしたよ」

「だからと言って、警察沙汰は御免だ！
私も呼ばれたんだぞ。
建物の持ち主としての責任を問われた。
君の所の従業員の保証もだ。
労災は利かないそうだよ……
心霊現象では無理だろうな。
だから、此方で面倒をみよう。
それと忌々しいが、あのマンションも曰わく付きとして広まってしまった……
霊能力者も此方で手配するぞ。

もう君には任せられん！」

「では、警備の契約は明日の昼勤務で終了とさせて頂きます。
そちらの霊能力者は何時からですか？」

「……明日の夜になろう。
まぁ君が手配した連中よりは確かだよ。
生霊？
ふん、どうだかな」

「では請求は今日付にて送らせて頂きます。
なに、こちらの霊能力者の支払いは請求しませんよ。
彼らにも手を引かせますので……」

相手から無言で切られた。

全く、榎本君が難しいと言ったんだぞ。

どの程度の連中が対処するか楽しみだな。

まぁ義理で請けた仕事だ。

喧嘩別れでも構わんか……

榎本君の請求も、報告書込みで２０万円位か。

桜岡君には悪かったが、まぁ彼に説得させれば良いだろう……

この件は、これで終わりだ。

仕事用のデスクに座っていたが、体が凝って固くなってしまったな……

椅子から立ち上がり、社長室の隅に設えた応接セットに首を回しながら歩いて行く。

ゴキゴキなるのは年齢のせいだろうか？

ソファーに深く座り目頭を揉む……

そうだ！

坂崎君に撤収の準備をさせなければ。

それと榎本君にも連絡だな。

桜岡君は……

榎本君経由で押し付けよう。

ああ、最近妻と娘と過ごす時間が無かったか……

明日は週末だし、前からお願いされていたディズニーランドに連れて行くか。

時計を見れば、既に２１時を少し回っている。

全く面倒事は今日中にすますとするか。

胸ポケットに入れてある携帯電話を取り出し、榎本君の番号を検索

する。

ヤレヤレだな。

数回のコールの後に榎本君に繋がった……

◇◇◇◇◇◇◇

桜岡さんをタクシーに放り込み、自分は電車で自宅に帰える。

時刻は２０時３０分……

タクシーで帰るには勿体無いからね。

横須賀中央駅のホームで、電車を街ながらボーっと週末の予定を考える。

土日のどちらかで結衣ちゃんと鎌倉に遊びに行こう。

久し振りに彼女と2人きりでお出掛けだ！

長瀬さんの方も1日や2日では進展しないだろう……

多分だが、揉めると思う。

警察沙汰になったし。

マンションオーナーも、頭を抱えてるだろうな。

労災申請しても状況が状況だからな。

ただ、あの２人は頑丈だから数日の休業補償と医療費だけだから……

実費負担は２０万円程度かな？

丁度、快速特急が来たので乗り込む。

平日だからか、結構な乗客が居るな。

結構な酔客の数だ……

まぁ週末だし、１０分位だから立っていても良いか。

車窓から外を見れば、遠く千葉県の内房の辺りが見える……

木更津辺りの工場の煙突群が見える。

横須賀から千葉は、結構近いんだ。

東京湾フェリーで５０分位で、久里浜から浜金谷迄行けるからね……

つらつらと考え事をしていたら、駅に付いた。

コンビニで結衣ちゃんへのお土産を買って行こう。

何が良いかな？

女の子だから、スィーツ！

結衣ちゃんも甘党だから、ケーキかプリンか……

結局コンビニで、コーヒーゼリーを2つ買った。

夜遅かった為か、品揃えが良くなかったのだ……

「そう言えば、最近は桜岡さんとばかり外食してたな。
ファミレス・喫茶店・居酒屋……
このラインナップは倦怠期のカップルか？
まぁお仕事だから仕方無いよね。
結衣ちゃんとお買い物に行って貰う時には、誤解の無い様にしないと。

「桜岡さんって榎本さんと付き合ってるの？」

とか言われたら悶死しそうだよ」

確かに美人で話してて面白いんだけど、年喰ってるからなー！

おっと、携帯が……

電車に乗る為にバイブモードにしていたので、ポケット内でブルブルと。

「もしもし、榎本です」

「ああ、榎本君。

夜分にすまないね、長瀬です」

時刻は9時過ぎ……

長瀬社長からって、何か進展したのか？

「大丈夫ですよ。
丁度、家に帰る途中ですから……
何か進展したんですか？」

「例のマンションの件だけど……
ウチは手を引く事になったよ。
明日で終わりにする」

手を引く？

やはり警察で責任は建物の所有者に押し付けたのがマズかったかな……

「そうですか……
残念ですが、仕方無いですね。
では私の請求は昨日迄の分を報告書と共に送りますが、宜しいですか？」

調査だけだが、まぁ仕方無いか……

「箱」も乗り気じゃなかったし。

「勿論構わないよ。
それと……

桜岡君には、君から説明してくれ。
仕事を依頼しようにも、先方から断られたからな。
仕方無いが、次に何か有れば頼むからと」

えっ？

僕は桜岡さんのマネージャーじゃ無いっすよ！

「ちょ、それは……」

「頼むよ。
君から持ち掛けた話しだろ？
彼女の件は……
そうそう！
明日の夜から、先方の霊能力者が対応するそうだ。
じゃ頼むよ！」

そう言って、一方的に電話を切られた。

おいおい……

彼女は、あの件に介入する気が満々だぞ！

しかし、マンションオーナーから断られ、他の霊能力者が派遣されるなら……

未解決にはならないから、何とか説得出来るかな？

「明日電話すれば良いかな……
夜に女性に電話するのも何だし」

それに、今夜は結衣ちゃん成分を補給しなきゃならないからね！

丁度、自宅に付いたので玄関の鍵を開けて

「ただいま！」

と言って中に入る。

「お帰りなさい、正明さん」

直ぐに応えてくれたのは、居間に居た為か……

コンビニ袋を渡しながら

「はい、お土産。
今から食べる？
明日にするかい？」

と言うと

「何ですか？
あっコーヒーゼリーですね。
じゃお茶淹れますね」

そう言ってキッチンに行った。

確かにコーヒーゼリーを食べながら、コーヒーや紅茶は飲まないかな？

それとも日本茶好きな結衣ちゃんだからか？

僕は着替える為に、自室へと向かった。

結衣ちゃんの、物を食べる口元が好きなんだよね。

エヘエヘ……

桜岡さんは上品に食べるけど、結衣ちゃんは少しずつ口に運ぶ食べ方なんだよ。

性格的な物かも知れないけど、控え目な感じが大和撫子なんだよなー。

部屋着に着替えてから居間に戻る。

丁度、結衣ちゃんが湯呑みをコタツに置いた所だ。

寒い時期にはコタツが良いよね。

うっかり足と足が触れ合ったりもするし……

いや事故ですよ、故意じゃないから！

向かい合って座り

「「いただきます」」

と言って食べ始める。

結衣ちゃんは、スプーンで少しずつ崩して食べ始めた……

うんうん、良いですぞ！

「……？

正明さん、何か私の顔に付いてますか？」

ヤバい、ガン見してたのがバレたか？

「いや、美味しそうに食べるなって……

そうだ！

結衣ちゃんは、梓巫女の桜岡霞さんって知ってる？

長瀬綜合警備保障の長瀬社長から紹介されてね。

今、仕事を一緒にしてるんだ」

彼女は少し驚いた顔をして

「あの心霊番組で良く見るお姉さんですよね？

少しエッチな……」

と言って、顔を少し赤くした。

やはりヌレヌレだかスケスケだかで有名なんだ！

テレビの仕事は、辞めさせた方が良いかも。

特に女性の尊厳的な意味で……

「本人は至って真面目なお嬢様だよ。

あれはテレビ的な演出で、本人も嫌がってた……」

「そうなんですか……
分かりました。
それで、桜岡さんがどうかしたんですか？」

流石は結衣ちゃん！

物分かりが良いな……

「いや、結衣ちゃんの話しをしたら一度会いたいって事になってね。
嫌じゃなければ、会ってみるかい？
彼女はかなりお洒落さんだから、結衣ちゃんのコーディネートを頼もうかと思ってさ！」

「わっ私のコーディネートですか？
恥ずかしいですし、これ以上正明さんに迷惑は……」

やっぱり遠慮するか……

もう少しワガママを言って欲しいんだけどな。

コーヒーゼリーを食べ終わり、日本茶を啜ってから結衣ちゃんの説得に掛かるかな……

結衣ちゃんには、人並み以上の幸せになって欲しいからね。

# 第２２話

結衣ちゃんと２人、コタツに入って寛いでいる。

日本茶とコーヒーゼリーと言う、不思議なコラボレーションは結衣ちゃんのお薦めだ。

コーヒーゼリーを食べ終わり、コタツでまったりとテレビのニュースを見ている……

プロ野球の結果や天気予報をぼんやりと見る。

週末は天気みたいだ……

今日は金曜日の夜。

明日、明後日はお休みだ！

結衣ちゃんと鎌倉に遊びに行く約束を果たすのと、桜岡さんに頼んだコーディネートの件を話す。

しかし、結衣ちゃんは持ち前の謙虚さと遠慮深さから、この申し出には難色を示した……

僕はお洒落をした結衣ちゃんを見たいのだが。

ＣＭに入った所で、再度その話題を振る。

「正明さん、そんな迷惑は……

今でも全て正明さんのお世話になってるのに」

俯き加減で話す彼女だが、それでも初めて会った時よりは大分会話も繋がっている。

昔は一言二言で下を向いて黙ってしまったからな。

「いや遠慮は要らないよ。
桜岡さんも乗り気なんだ。
断るのは、かえって悪いと思うし……
それに家事全般やってくれる結衣ちゃんに、お礼がしたいんだ」

ねっ！

と強めに頼むと、引っ込み思案な彼女は頷いた。

ヨシ！

これでお洒落な結衣ちゃんも見れるぞ。

桜岡さんのファッションセンスは、流行に無頓着な僕でも格好良い・可愛いと思ったんだ。

素材が良ければ、更に素晴らしいだろう。

楽しみだなー！

明日は鎌倉に行くので、大体の予定を決めてからお開きになった。

「僕は……

まだ仕事が有るから！」

そう言って、先に彼女にお風呂を勧めた。

「大変なんですね……
では先にお風呂に入りますから」

そう快諾してくれたが、何時も結衣ちゃんに先に入って貰う。

何故なら、結衣ちゃんエキスが浴槽内に……

ゲヘゲヘ！

美少女の残り湯なんて最高だぜ！

僕の邪な気持ちには気が付いてないのだろう。

何時も申し訳無さそうに、先にお風呂に入る結衣ちゃん……

コッチからお願いしてるんだから、気にしないでね！

◇◇◇◇◇◇◇

変態的行動を取るが、覗きはしない。

それは合意の上でのプレイだ！

自室に戻ると携帯が着信有り、の点滅をしている。

見れば桜岡さんからだ。

着信時間は２１時５８分か……

今は既に２２時１７分、女性に電話をするには遅い時間だ。

明日でも大丈夫かな？

それとも緊急か？

取り敢えず、折り返しで電話をかける。

３回目のコール前に繋がった。

はやっ！

これは待っていたか？

「こんばんは、榎本です。
夜分にすいません。
着信に気が付かなくて……」

一応、夜に女性に電話する訳だから一言謝っておく。

「榎本さん？
夜遅くご免なさい。
ちょっと気になってしまって……」

気になる？

何だろう……

除霊の件かな？

「何だい？改まって……」

暫し無言だけど……

「結衣ちゃんの事ですけど……」

「ああ、有難う御座います。
先ほど彼女に話しましたが、喜んでました」

「……そうですか。
でも早い方が良いと思うんです。
ええ、本当に切実に！
例えば、明日とか……」

何だろう？

鬼気迫る迫力を感じるんだけど……

「明日は予定が有りまして……
明後日以降なら結衣ちゃんと相談しますが」

「今、話せますか？
結衣ちゃんと……」

何で、こんなに急ぐんだろうか？

アレかな……

テレビ収録で忙しくなるのかな？

「今はお風呂に入ってます。
もう遅いですし……
迷惑でなければ明日、此方からかけ直しますが」

流石に一面識も無い桜岡さんと、いきなり電話で話すのは結衣ちゃんには大変だ……

人見知りなんだし。

「風呂ですって！」

「はい、僕の帰りを待っていてくれたので。
お土産のコーヒーゼリーを一緒に食べて、今から寝るところです」

「寝るですって！」

桜岡さんは、何を興奮してるんだ？

一々怒鳴るけど……

「もう夜も遅いですし、中学生に夜更かしは……
それに桜岡さんにも少し話しましたが、彼女は虐待を受けていたせいで極度の人見知りです。

いきなり電話で話すのは無理ですよ。
ちゃんと僕が同伴で、紹介しないと……」

根っこが優しくてお嬢様な桜岡さんなら、結衣ちゃんも懐く筈だけどね。

「そうでしたわね……
でも、彼女の為にも早めに確認した方が、傷は少ない筈ですわ」

傷？トラウマ？心の傷かな？

桜岡さんって、其処まで結衣ちゃんの事を考えてくれていたのか！

「買い物は明日以降になりますが、明日時間が有るなら結衣ちゃんを交えてお茶でもしませんか？
鎌倉まで散策に行きますから、良ければ一緒に……」

早い段階で桜岡さんと引き合わせた方が、結衣ちゃんにプラスになるかな。

「鎌倉ですか……
そうですわね。
いきなり買い物に行きましょうじゃ無理ですね。
分かりました。
明日、一緒に鎌倉に行きますわ」

鎌倉には女性の喜びそうな喫茶店やレストランが多いし、お礼を兼ねてご招待しますか……

「ではＪＲ鎌倉駅の改札付近で１１時で良いですか？」

「分かりましたわ。
では明日……
キリキリ白状して貰いますからね」

そう言って電話を切った。

キリキリ？白状？

何の事だろう？

でも明日は賑やかになるだろうな……

◇◇◇◇◇◇◇

古都鎌倉……

１１９２年源頼朝が征夷大将軍に任命され、武家政権の鎌倉幕府を作った。

実際はもう少し前の１１８５年には幕府としての機能を持っていたそうだ……

「良い国（１１９２）作ろう鎌倉幕府」

って語呂で覚えたんだけど、今は違うらしい。

武家政権発祥の地も、今では世界的に有名な観光地で有りデートスポットだ！

そう、今日は結衣ちゃんとデート。

おまけで桜岡さんも来るけどね……

自宅から京急電鉄で汐入駅まで行き、ＪＲ横須賀線に乗り換える。

ローカル色豊かな横須賀線のボックスシートに結衣ちゃんと向かい合って座る。

この車両には８人しか乗っていない……

ガタゴトとのんびり走る電車は、如何にも旅行に行きます的な感じだ。

「結衣ちゃん、急に桜岡さんと一緒でゴメンね。
一度一緒の時に顔合わせしないと駄目だと思って……」

昨夜、桜岡さんとの電話の後、結衣ちゃんに鎌倉で合流すると話した。

急な展開で、少しびっくりしていたが……

元々素直な優しい娘だから、反対はされなかった。

僕的には

「正明さんと2人きりのデートなのに嫌です！」

とか言って欲しかったのは秘密だ……

「急でびっくりしましたが……

テレビで活躍してる人と会うって、不思議な気持ちです」

そう微笑む彼女は、前に自分がプレゼントしたワンピースを着ている。

勿論、女性のファッションセンスなど皆無だから適当に高そうな店に入り店員さんに写真を見せて見立てて貰った。

パステル調のフェミニン風？なワンピースだが、彼女は気に入ってくれたらしい。

実際似合ってると思う。

「見た目はお嬢様だけど、話すと気さくな感じだよ……」

性格はオッサンだけどね。

「そうなんですか？

話し易い人なんですね」

等と話していると、ＪＲ鎌倉駅に到着した……

流石に観光地だから、ホームはごった返している。

はぐれない様に手を繋ぎならが改札へ向かいたいが……

引っ込み思案な彼女は、そんな事はしない。

自分の真後ろを付いて歩いている。

僕は防波堤だね……

改札を抜けると、駅前はパスターミナルになっていて、数台のバスとタクシーが並んでいた。

左側が小町通り、右側が江ノ島電、鉄通称江ノ電だ。

周りを見渡すと……

居た！

桜岡さんだ。

今日は遠目でも気合いが入っている服装だ。

結衣ちゃんの性格は話してある為か派手さはないが、これぞお嬢様な服装だ……

しかもナンパかな？

若い男2人連れと話しているけど、にこやかに手を振って断ってるな。

あっコッチに気が付いたぞ！

◇◇◇◇◇◇◇

全く気合いを入れてお洒落したのは、結衣ちゃんの為でお前らを楽しませる訳じゃないんですのよ。

断っても諦めず食い下がってくるチャラ男め、ウザいわ。

似合わない髭に冬なのに胸元全開のシャツ。

妙に日焼けした肌に、下品な香りの香水。

チャラチャラしたアクセサリー。

これが両脇から絡んでくるなんて。

地を出しても良いのだけれど、もし結衣ちゃんに見られたら……

彼女が怖がると思って我慢しているのよ！

「いえ、ですから待ち合わせをしてますので……」

「ナニナニ友達？
俺らも2人だし丁度良くね？」

「そうだよ。
俺ら車有るから、ドライブしよーぜ！

そうだ、それが良いぜ」

行きませんわよ！

お前達とドライブなんて、何処に連れ込まれるか分かりませんわ！

「いえ、待ち合わせは男性ですから……」

それと同伴の引っ込み思案な少女なのよ。

早く追い払わないと……

「いやいや、女性を待たす男なんて碌な奴じゃないって！」

「そうだよ！
俺らと行こうぜ、な！」

遂に手を握って引っ張り出したわ……

「嫌です！」

振り払おうにも2人掛かりで両手を握られては……

ちょ、本当に嫌なんですって！

その時、視界の隅に最近見慣れた筋肉が居たの……

「オラオラ！
優しく言ってる内に行こうぜ。
裏通りに車停めてんだよ」

「ぎゃはは！
江ノ島行こうぜ、江ノ島にさ……
ちょ、おい痛た、痛いよ」

榎本さんは、チャラ男の髪の毛を掴み捻り上げたわ！

毛髪って体を浮かせる程、強いのね……

「おい、止めろコラ！」

「禿げる、禿げるじゃねーか！」

チャラ男が騒いでいるが、ビクともしないわ！

あっ抜け落ちた……

ゴッソリと両手にチャラ男の髪の毛を掴みながら、初めて見る怖い顔をしている。

「なぁ誘拐犯。
知ってるか？
現行犯なら、警察官じゃなくても逮捕出来るんだぜ？」

「何だとテメェ！」

「ああ、コッチは2人だぞ！
おっ？
後ろに可愛い娘が居るじゃ……」

問答無用で急所を蹴ったわ！

崩れ落ちる様にしゃがみ込んで……

「おまっ？
人としてヒデェよ。
って、あぐっ……」

危険を察してか、残ったチャラ男が股関をガードしたけど……

ガード越しに蹴り上げたわ！

しかも爪先で……

アレは指と急所が、大変な事に。

でも榎本さんは、怖い顔のまま……

ちょっとヤバいかしら？

「なぁ誘拐犯？
2人も攫う気か……
これは他に危害を加えない内にモギルか」

白目を向いて悶絶するチャラ男達には、聞こえてないですわよ！

彼の腕にしがみついて

「もう許してあげなさいな。
反省はしないでしょうが、罰は受けたわ。

ほら、人が騒ぎ出す前に離れましょう」

私がナンパされてる時は遠巻きで見ていた連中が騒ぎ出したわ。

警察とか呼ばれたら面倒よ……

「さぁさぁ、こちらへ」

腕を掴んだまま、路地の方へ誘導する。

「貴女が結衣ちゃん？
さぁ榎本さんをコッチに……」

「はっはい」

あまりの出来事に固まっていた？彼女に声を掛けて2人掛かりで榎本さんを路地に引っ張る……

私達の力では動かない筈だけど、素直に移動してくれた。

野次馬から引き離したら、タクシーで移動しましょう。

全く番犬には丁度良いと思ったけど、結構気の荒い性格なのね。

助けてくれたのは嬉しいのだけど……

幾つかの路地を曲がり大通りに出てから、タクシーに乗り込んだ。

後部座席に3人は狭いけど、私も結衣ちゃんも小柄だから何とか座れた。

この乱暴者の手を離すと暴れそうだから……

ずっと腕を組んでいたのに気が付いたのは、タクシーに乗り込む時だったわ。

# 第２３話

ＪＲ鎌倉駅前で酷いナンパに有っていた時に助けてくれた。

でも、あんなに怖い顔は初めてだったわ。

確か坂崎さんと言う警備員が、彼は武闘派で肉体言語が得意だから１～２人なら負けないって言ってたわね……

でも容赦の無い急所攻撃は、荒事に慣れている感じがしたの。

命の遣り取りをする仕事なんですもの。

私が甘過ぎるのね……

タクシーの後部座席で、私と結衣ちゃんとで左右の腕を抱き締めているのを理解したのか、真っ赤だわ。

「すまない……

つい、カッとなった。

後悔はしていないが、反省もしていない。

腐れナンパ野郎は悉く滅べ！

幸い頭髪は確保した。

呪おう……」

ちょ、髪の毛を掴んだのって、そんな思惑が？

表情は未だに真っ赤だけど、目は真剣よ！

「榎本さん。
程々にしないと、私も怒るわよ。
でも助けてくれたのは……
嬉しかったわ」

あのまま後5分も遅ければ、あの連中に拉致られたかも知れない……

そう思うと、急に怖くなりギュッと彼の腕をかき抱いた。

やはり、この番犬は良いかもしれないわ。

頼りになるし、基本的に私を何時も守ってくれているもの……

もっ勿論、仕事のパートナーとしてだけどね？

「結衣ちゃんも落ち着いたかしら？
いきなり怖い思いをさせてごめんなさいね。
でも、私だけだったら対処出来なかったわ。
有難う御座いました、榎本さん」

そう言って頭を下げる。

腕を抱いていたので、その固い胸板に頭をコツンと当てる感じだったけど……

ただ

「無事で良かったよ」

とだけ言ってくれたわ。

暫くは沈黙が続いた。

ただ空気を読んでくれたタクシーの運転手さんは、気まずそうに咳払いをいていたわね。

確かに真ん中に座るオッサンが、両脇に美女と美少女を侍らせれば、ね……

取り敢えず目的地は横浜ランドマークにしたわ。

お洒落なお店も多いし、何より私の行き着けの店が有るわ。

横浜ジャックモール・赤レンガ倉庫・クイーンズイースト・ワールドポーターズとか、お洒落なお店が多いし美味しいレストランも何件か知ってるし……

何故かしら、デートコースよね。

ふふふ……

でも、私が着れなくなった服をあげても良いわね。

妹が出来るって、こんな感じかしら?

でも榎本さんと結婚すると、娘に?

イヤイヤイヤ、それは飛躍し過ぎだわ……

そう言えば、ちゃんとした自己紹介が未だだった事を思い出し改め

て結衣ちゃんと名乗りあった。

あんな事が有った後だからだろうか……

人見知りと聞いていた彼女だが、それなりに会話が弾んだ。

榎本さん越しにって、変な位置取りだったけどね！

◇◇◇◇◇◇

女性の買い物に同行するのは、精神的にキツい。

歴代のエロい人は言った……

「諦めろ……

そして何でも似合ってると言え。

後は財布が被害を引き継いでくれる、と……」

良く分からないが、桜岡さんと結衣ちゃんは意気投合している。

何故だろう？

僕は既に両手一杯の衣装を持っている。

しかし彼女等は、まだ衣装選びをしている。

つまり、この手に持つ衣装は全て買うのか？
それとも候補なのかは、怖くて聞けない。

「結衣ちゃん、これも着てみましょうか？
デザインだけでなく機能的なのも選ばないと」

「はい。
でも少しスカートが短くないですか？」

「これ位は普通よ。
それにこれより長いと動き回る時に不便よ。
さぁさぁ試着室に行きましょう」

長くなりそうだ……

彼女等を見詰めながら、財布の中身とカードの限度額を思い浮かべる。

財布には２０万円、カードは今月使ってないな……

限度額上限４０万円だな。

結衣ちゃんのコーディネートを頼んだ以上、桜岡さんにもお礼をしなければ駄目だろう。

今月は節約しなければ……

にこやかに此方を見詰める店員の笑顔が、良いカモがキター！

と、喜んでいる様に見えた……

◇◇◇◇◇◇◇

問題のマンション……

昼間の警備で長瀬綜合警備保障の警備員は撤退した。

建物の外周しか点検してないので、入り口には警察が張った立入禁止の黄色いテープがそのままだ。

此処に2人の男が建物を見上げている。

時刻は既に日付が変更された辺り……

今夜は久々に月が顔を出し、建物と敷地をほんのりと照らしている。

しかし窓ガラスや玄関扉の無い建設途中の建物は、暗い口がポッカリと開いている……

禍々しい口に見える。

「さて、やりますかね」

「そうだな。

現れて脅かすだけの相手なら、楽勝だぜ」

1人はスーツを着崩した感じの２０代後半、痩せ型で神経質そうな男。

もう1人はジャンパーにGパン、小太りな中年男。

此方は体型故か、人当たりの良さそうな感じだ。

しかし口調はどちらも悪い……

無言で頷き合い、建物の中に入っていく。

「確か初期調査だと3階の角部屋にしか現れないのが、除霊後は2階に現れたんだよな」

「そうだ……
失敗したのか、初めから建物全体に憑いてるか？
まぁどっちでも構わないけどよ」

懐中電灯で確認しながら、1階を探索する……

今夜は雲は多いが月が出ている。

窓部分の開口からも、仄かな月明かりが差し込み暗くは無い……

「さて2階に上がるか……」

「特に何も感じないな。
ああ、2階に行こう」

痩せ型が前、小太りが後の順で2階に上がって行く……

階段を登りきると、8箇所の入り口を見通せる廊下に出た。

慎重に辺りを見回し、己の霊能力を集中させるが気配一つ無い……

「やれやれ……

奴め、今夜は様子を見る気かよ?」

「初日から出るのは少ないからな。

面倒臭いが、何日か張らないと駄目かもしれん」

軽口を叩き合うが、警戒は怠らすに各部屋を回る。

しかし8部屋全て回ったが、何も異変は無い……

角部屋の中を見回り、何もないのに安心したのか。

窓際の壁に寄りかかり煙草を吸いだす……

「おっ、一本くれよ!」

小太りが差し出す煙草は、ＳｅｖｅｎＳｔａｒｓ。

痩せ型がくわえると火のついたライターを差し出す……

暫し喫煙タイム。

「なぁ、何でこの仕事請けだんだ?」

「ん？
ああ、金の為だな……
他に理由は無いだろ？」

痩せ型の問いに、何言ってんだ？
と聞き返す。

「まぁ確かにな。
俺もそうだけどよ……
短期で終わらせろとか、無茶言われたからな」

あの糞ジジィが！
と毒づき乱暴に煙草を壁に擦り付けた。

ピン！

っと窓の外へ吸い終わった煙草を指で弾きながら

「さて、と……
じゃ３階に行くか？」

一服も終わり部屋を出ようとした時、空気が変わるのを感じた……
粘つく感じの生暖かい空気が体全体を包む。

「ヤベェ！来るか？」

「はっ！
初日からご登場とはな」

背中合わせになり、周りを警戒する……

成人男子の生霊だ！

近くに居れば、直ぐに分かる筈。

しかし、体に纏わり付く粘着質な空気は密度を増すが本体は現れない。

「おい！
撤退するか？」

「駄目だ……
見ろ……入口を……」

絞り出す様な小太りの言葉に目をやれば……

天井から逆さまに降りてくる頭が見えた。

逆立った髪の毛がだらしなく垂れている。

そして徐々にオデコから目迄がハッキリてしてきた……

既に口元まで現れている奴は、奴の目には……

明らかな殺意が有る。

顎が見え首が現れて始めたが、異様に首が長い……
まるで首を吊って暫く放置した遺体の様に。
そして３０センチは有ろうかと思える首の後に、漸く剥き出しの方が見えた。

「やるぞ！」

「ああ、ビビってんじゃねーぞ！」

暫し見詰め合っていたが

全身が現れると危険だ！

と本能が訴えた……

既に痩せこけて肋骨の浮いた体が見えている。

「おん　ばさら　うんけん　まゆきら　てい　そばか　かん」

「おん　ぎゃーてー　あーてー　ゆーてー　まーてー」

共に力ある言葉を紡ぐ！

「「はっ！」」

己の霊能力を乗せた言霊をぶつけられ、奴を壁までぶっ飛ばした！

「ヨッシャー！

効いてんぜ、アレはよー」

「バカやろう！
奴の全身が……
くっ、アレは生霊じゃねえよ。
怨霊だ……」

確かに霊能力で吹き飛ばした！

しかしヤツの体は天井から抜け出し壁に張り付いていたが、そのまま床に崩れ落ちる。

べちゃり、そんな擬音が聞こえそうな感じだ……

「あ……ががっ……あがが……」

ヤツが床に体をめり込ませた瞬間、彼らの足首が何かに掴まれた！

「ヤベェ……
霊体が物質化してるぞ」

「バカ！
塩だ、清めの塩を撒くんだ……」

2人の足首にめり込む様に握り締める手に、思わず唸ってしまう。

ヤバい、ヤツは実体化している！

これはかなり強いヤツだ。

しかも壁や床を抜けてくるのか……

準備不足だぞ、どうする？

掴まれた足に清めの塩を撒き散らし一旦距離をとる。

ヤツは床に沈み込んだ……

「一旦逃げるぞ！
何処から現れるか分からん。
建物内は危険だ」

「はぁはぁ……
聞いた話と違うぜ。
分かった、うわっ？」

べちゃりと、天井から落ちてきたヤツが、痩せ型にしがみつく！

「ひっひ、ひぃ……
たっ助けて」

のし掛かる様にして動きを止めると、だらしなく開いていた口から
涎を垂らしな

「げっげげ……うげ……」

痩せ型の顔に実体化した涎が降り注ぐ……

「げふっ！
おい、ヤメロ……ヤメてくれ……ガハッ……」

気が付けば、小太りは逃げ出していた。

腐乱死体の様な怨霊は、涎を垂らしながら痩せ型の首を絞める。

息をしたくとも首を絞められ、口には涎が大量に垂らされていく……

◇◇◇◇◇◇◇

お風呂に入り、缶ビール片手に自室に戻る。

簡単に髪の毛を乾かして、床に座り込んでビールを飲む。

今日は疲れた……

女三人集まれば姦しいと言われるが、桜岡さん独りでも騒がしかった。

何件も店を梯子し、結衣ちゃんの服を購入……

8着目までは数えたが、後は分からない。

しかも後半は桜岡さんのカードで支払っていたのも有るみたいだ。

ちゃんと返すか、何か同額以上の物を贈らなければならないな……

でも彼女の楽しそうな顔は久し振りに見たんだ。

桜岡さんには感謝しなきゃ……

飲み干したビールの缶をクシャリと潰して、ゴミ箱に投棄！

壁に当たりゴミ箱には入らなかったが、起きて捨てに行くのも怠い。

ああ、眠いな。

今日は、疲れた……よ……

そのまま布団に横になった。

勿論、万年床じゃないぞ……

「……まさ……あき。

おい、まさあき……起きろ……」

誰だ？

気持ちの良い眠りを妨げるのは……

「起きろ……

アヤツが変化したぞ。

ただ恨むだけから、誰彼構わず怨むになりおった……

だから起きんか……」

アヤツ？恨む？怨む？

何を言ってるんだ？

半分覚醒し、寝たまま周囲を確認する。

眠くてスタンドを点けっぱなしだったのか、仄かな灯りが部屋を照らしている……

テレビ・衣装棚・パソコンラックにゴミ箱。

寝る前と寸分も変わらない部屋に奴が居た。

そう！

我が一族を悉く取り憑き殺している奴が。

真っ黒な髪を足首まで伸ばし、ほっそりとした体には何も纏っていない。

顔は影になっているが、真っ赤な唇と。

両目だけが真っ赤に光っている幼女が、僕を見下ろしている。

箱の中身、呪いの元凶は僕の好みを反映させて現れる。

「ああ起きたか？

アヤツが変化したぞ。

今、人を独り喰い殺したな……

もう1人も……

ああ、ヤラレタぞ。
あれは良い怨みを纏っているな。
正明よ、アレが喰いたい。
行くぞ、支度をしろ」

真っ裸な幼女に上から目線で命令される。

しかし、これは仮の姿……

本性を知る僕が、逆らえる訳がない。

頷くと、幼女は消えて「箱」だけが転がっている。

この忌々しい「箱」を握り締めて、飲酒をしたが車を運転しなければならない事を思い付く。

「クソッ！
バレずに現場まで行けるのか？」

僕は着替えを始める。

箱の機嫌が悪くならない内に、出掛けねばならないから……

# 第２４話

足首まで伸びた、濡れている様な艶やかな黒髪。

透き通る様なきめ細やかな陶磁器を思わせる白い肌。

蠱惑的な真っ赤な唇。

それに前髪に隠れているが、紅く光る瞳……

真っ裸の幼女にこき使われているのが僕だ。

アレは人の欲望を忠実に再現する。

つまり僕の理想は日本人形みたいな幼女、そして真っ裸なのか。

爺さんは早くに祖母を無くしていたので、若い頃の祖母だったらしい。

親父は……

派手で露出度の高い巨乳のネーチャン。

つまり飲み屋のネーチャンか、理想の浮気相手だったのか？

榎本家の直系男子にのみ、ヤツは取り憑く……

見た目に騙されて、ヤツの機嫌を損ねれば問答無用で取り込まれる。

魂がヤツから逃げられず、未来永劫絶えず苦しむんだ！

夢でしか会えないが、最初の頃は爺さんとも親父とも会話が成立した。

しかし今は……

既に僕を認識してるかも分からず、辛い責め苦に耐えているだけだ。

そして恨み辛みを切々と訴え縋りつく……

アレに、「箱」に魂を捕らわれると未来永劫苦しみ続けるのだろう……

祭壇に祭り結界を張っても簡単に抜け出してくる。

布団の上に転がっている「箱」を掴むとポケットにいれた。

時計を見れば０時２９分……

今から行けば、朝迄には帰れるだろう。

結衣ちゃんにはバレずに行わなければならないが……

部屋で着替えてからバイク……

ビーノモルフェのキーを持って一階へ降りる。

結衣ちゃんの部屋の前を通ったが、電気も消えているし寝ているみたいだ。

音を立てずに外に出て、玄関の施錠を確認。

ビーノモルフェを５０m程押して自宅から離れてエンジンを掛ける。

深呼吸を数回し、酔いがそんなに強くない事を確認してから走り出す。

自宅から国道１３４号線を南下する。

久里浜港を横目に更に南下し野比海岸をひた走る。

途中の道沿いは長閑な漁港が有る。

夜に漁があるのか、灯りを灯した漁船が停泊し慌ただしく人が動いている。

何が捕れるんだろう?

金田湾を見ながら、途中で国道２１４号線に右折し山の方に向かう……

海岸線から少し入れば、畑がやたらと目に付く長閑な田舎町。

途中で更に枝道に入り目的のマンション前に着く。

少し離れた路肩にスクーターを停めて、歩いて現場まで行く。

この時間になれば、人通りや車の通行は皆無だ。

民間さえも雨戸を閉めて室内の灯りが漏れない。

疎らな街灯の灯りを頼りに、現場の近く迄歩いていく。

後５０m程だろうか？

問題のマンションが見える。

前に車が停まってるな……

アレが「箱」が教えてくれた連中のか？

慎重に周りを確認し、建物の裏手に回る。

仮囲いの前まで到着。

左右を確認し、電信柱を利用して仮囲いを登り中に侵入する。

飛び降りてから、姿勢を低くしたままで周囲を警戒……

物音も無く、人の気配も感じられない。

警戒しながら建物に近付き、正面の入口から中に入る……

幸い今夜は雲が無く月明かりが仄かに建物内を照らしている。

ここで不用心に灯りを点けたら侵入がバレるから、暗闇からくる恐怖にじっと耐えるしかない。

暫く入口で留まってみたが、反応は無い。

「箱」を取り出し、話し掛ける。

「おい、着いたぞ！
どうするんだ？」

持っていた「箱」からタールの様な黒い粘性の液体が床にこぼれ出す……

直接持つ手に触れるが、凍える様に冷たく不気味だ。

小さな箱から溢れんばかりに漏れ出した液体は、床に溜まり……

そしてボコボコと盛り上がると、人の形を成してゆく。

そう、真っ裸な幼女に……

本性を知っていながら、暗闇に浮き出す病的に青白い裸体に目が行ってしまう。

その不躾な視線に気付いたのだろうか？

「なんだ？
妾に欲情したのか？
くっくっく……
相手をしてやっても構わんぞ？」

振り向いて、右腕で長い髪をかき上げる仕草は見た目の幼さに反比例する淫靡さだ。

「いや……
遠慮するよ。
で、どうするんだ？」

首を傾げる仕草は愛らしいのに、背筋には冷や汗が垂れ流れている。

「……二階に死体が有るな。
それなりの霊能力者だな。
先ずはソレを頂くか」

天井を見上げながら、とんでもない事をサラリと言うと歩き出す。

その後を三歩離れた位置で着いて行く。

彼女自体が仄かに発光している為に、見失う事は無い。

二階に上がると、廊下に小太りな中年が倒れている。

彼がマンションオーナーから頼まれた同業者か？

恐怖に顔を歪ませて絶命している。

口の周りに黒いヘドロの様な汚れが……

首を掻き毟っていて、まるで溺れた様な？

陸で？まさかな……

「ほう……
そこそこ力が有るな。

まぁ良い、喰らうか……」

呆然と立ち尽くし、考えに耽っていると彼は闇に溶け込む様に床に沈んで行った。

「うむ。
恐怖に捕らわれて死んだ人間の魂は旨いな。
さて、次は部屋の中か……
行くぞ」

まるで散歩に誘う様な気楽さで、先を促す。

「今のは……
溺れている様な死に様だが？」

「ん？
ああ、多分実体化したヤツの体内に取り込まれたかしたんだな。
多分ヤツは水死してるな。
しかも汚い川か沼で……
だからヘドロ塗れなのだろう。
ほら、ヤツもそうだぞ」

「箱」が指差した男は奇妙だった……

痩せこけた男はくの字に体を折り曲げ、舌を極限に伸ばし死んでいた。

コッチも溺死みたいに口の周りがヘドロだらけだが、首が折れて曲がっている。

失禁したのか股間の辺りが濡れているし……

「ふふふふ。
コレも旨そうだ。
では頂こうか」

あんなに汚れている者が旨そう？

彼も体を包む様に黒い液体で取り込んだ。

「さて、前菜は終わりだ。
主菜と行くか。
ん？
ヤツの気配が消えておるな……
ほぅ、アレが求めた者か。
くたびれた中年女性に固執した結果か。
色欲に塗れた人間の末路は哀れよの。
正明、ヤツは外に出ているぞ。
行くぞ」

独り言を言ってスタスタと歩き出す。

「ちょちょっと待てって！
何を言ってるんだ」

慌て後を追う。

建物から出てゲートに向かい律儀に潜り戸を開けて外に出る。

風が吹いているのにアレの長い髪はなびかない。

そして左右を見ると、またスタスタと歩き出す。

コッチはバレない様に細心の注意をしてるのに、真っ裸で外を歩くな！

潜り戸から左右を見て、人が居ない事を確認する。

アレはロリな少女が手伝う雑貨屋の前に立っていた……

「人目を考えてくれ。
真っ裸で彷徨くなんて！」

深夜に真っ裸な幼女と一緒の所を見られたら、言い訳出来ないんだぞ！

って、中で何か騒がしいな。

ガタガタ騒いで……

お店の正面はシャッターしかないが、右脇には木製の扉が有る。

此方が玄関扱いなんだろう。

其処から女性が飛び出して来た！

「たっ助けて……
中に、中に娘が……残ってます」

息も絶え絶えに転がり出て来た中年女性。

確か昼間にレジに居た女性だ。

そして玄関扉から室内を覗けば……

ヤツが居た！

初めて見た時よりも酷い有様だが。

首が異様に伸びてダランと右側に傾き、口と胸の辺りをヘドロの様な物でベッタリと汚している。

しかも「箱」が教えてくれた様に、怨霊化してるのか？

咄嗟に愛染明王の印を組み、真言を唱える！

「おん　まからぎゃ　ばぞろ　しゅにしゃ　ばざら　さとば　じゃく　うん　ばん　こく」

真言を唱え、裂帛の気合を奴にぶつける！

今回は効いた？

前は揺らめくだけだが、今回はぶっ飛ばせた！

しかし、直ぐに立ち上がってくるから……

大して効果は無い、か。

「逃げろ！

ここは食い止める」

しゃがみ込んでいた女は、僕が怒鳴るとヨタヨタと遠ざかって行く……

おぃおぃ娘を残してか？

しかし「箱」である真っ裸な幼女は見ていない。

近付いてくるヤツに再度、愛染め明王の真言を叩き付ける為に……

叩き付ける前に真っ裸な幼女が動く！

その魅惑的な唇が、愛らしい顔が顎から後頭部までベロンと捲れ上がる。

当然、顔の皮膚が捲れ上がれば筋肉と骸骨だ！

「ウケケケェー！」

雄叫びを上げてヤツに貪りついた。

後は捕食するだけ……

人の体をしたモノが、人の成れの果てを貪る。

玄関先で粘着音を響かせ喰らう「箱」を外から見せない為に玄関扉を閉めて施錠する。

既に頭部は喰われ胸の辺りを喰っているのだろう……

右手を突っ込み心臓を取り出して笑っている。

トラウマになりそうだ……

食事を楽しむ「箱」を迂回して室内に入る。

裕福では無いのだろう。

質素で昭和の匂いが漂うインテリア。

玄関を入り直ぐ左側が台所、右側が居間でその先は……

おそらく店に繋がっているのだろう。

暖簾越しに商品棚が見えた。

多分突き当たりの左側がバス・トイレで右側が寝室かな……

取り残されたロリっ娘を探そうと奥へと進む。

「お邪魔します……」

一応断りを入れておく。

大人のマナーだ。

居間には居ない。

台所にも居ない。

トイレも風呂場も電気は点いていない。

「寝室かな……
誰か居るかい？」

声を掛けながらドアノブを捻ると、中からガチャガチャと押さえて

「誰！誰なの？
お母さん、助けて……」

ロリっ娘の悲痛な叫びが……

「大丈夫だよ。
僕はお母さんに頼まれて助けに来たんだ。
一応、お坊さんだよ。
安心して開けてくれないかな？」

背後をチラリと見れば、大腸だか小腸だかを引っ張り出している最中。

これは見せられないよ。

「本当に？
怖いのいないの？」

「ああ、お兄さんが追い払ったよ。
それに僕は前にお店で買い物をしたんだ。
覚えてるかい？
ガムとコーラを買ったんだけど」

安心させる為に、更に優しい声で話し掛ける。

すると、そっと扉が少し開き中から小さな瞳が覗いている。

「あっ！
オジサンだ、オジサン助けて！」

そう言って飛び出して来たロリっ娘をガッシリと正面から抱き締める。

顔を胸に埋めて、後頭部を押さえ後ろは見えない様に……

現在の食事状況は、両足を振り回している最中だ。

もう暫く掛かるだろう、完食までは。

「もう大丈夫だよ。
お兄さんが助けに来たから平気だ」

ポンポンと背中を叩いて安心させる……

「怖いオジチャン居ない？
汚いオジチャン居ない？」

どうやらヤツは汚いオジチャンと認識したらしい。

お化けよりマシか？

「勿論追い払ったよ。

もう大丈夫だよ……」

背後から盛大なゲップが聞こえた。

つまり完食だな。

彼女を抱き締めながら振り返れば、捲れ上がった顔を下ろしている最中だ……

何時見てもキモい。

「箱」は満足したのだろう。

またドロドロに溶けて僕のポケットに流れてくる。

黒いタールみたいな液体が、足元からポケットまでせり上がってくる。

身の毛もよだつ感触を残して「箱」は元に戻った……

しかし、今はロリっ娘のケアが大事だ。

彼女を下ろして台所の椅子に座らせる。

母親が誰か助けを呼びに出て行った筈だからな。

助けが来る前に退散したいが、怖がっている彼女を放置出来ない。

冷蔵庫を開けると、パック牛乳を見つけた。

適当に鍋を漁りガスコンロにかける。

砂糖は……

流し台の上の棚に調味料ｂｏｘが有り、塩・砂糖・薄力粉かな？

砂糖を大さじで二杯入れて甘めなホットミルクを作る。

「オジサン、コップこれだよ！」

ロリっ娘も大分落ち着いたのか、コーヒーカップを出してくれた。

「はい、熱いから気を付けて飲むんだよ」

鍋から直接カップにホットミルクを注ぐ……

湯気をたてたホットミルクは、甘くて美味しそうだ。

出来ればブランデーを数滴垂らしたい。

「オジサン有難う！」

「お兄ちゃんだよ、オニイチャン！」

フウフウ息を吹きかけるロリっ娘は聞いていなかった……

３０代はオジサンか？

ガックリとうなだれてしまう。

さて、この後どうするかな？

# 第２５話

建設途中で中止となったマンションの怪異。

当初は生霊だったヤツが怨霊化した。

「箱」が言うには生霊だったヤツが溺死して怨霊化したそうだ。

3階の角部屋にしか現れなかったのに途中から他の階にも現れ、あまつさえロリっ娘の家にも現れた。

何故だ？

ヤツはロリっ娘の母親に固執していたのだろう……

確かに3階の角部屋からは、ロリっ娘の家が見えた。

霊的ストーカー？

しかし、それなら直接この家に現れるんじゃないか？

何故、あのマンションだったんだ？

何故、あの部屋だったんだ？

「オジサン、絵梨眠くなっちゃった。
お母さん、何処に行ったのかな？」

不安げに此方を見るロリっ娘。

母親が居なくて知らないお兄さんが居る状況だ。
不安になるのも仕方ないよね。
そうか、彼女はエリちゃんか……
「お母さん、外に人を呼びに行ったからね。
そろそろ戻って来るんじゃないかな？」
あの中年女性にヤツは襲いかかったのだろう。
怖くて娘を置いて逃げ出したからな……
まぁ僕が何とかするって言ったけどさ。
そろそろ誰か連れて来るなり、様子を見に来るよね。
「エリちゃんは、あの汚い人に見覚え有るのかな？」
「うーん……
いきなり台所に居たの。
お母さんが、何か話し掛けてたけど。
お母さんに襲い掛かって。
私は怖くて奥の部屋に行っちゃって……」
話し掛けた？
アレの見分けがついたのか、それとも全く分からず普通に不審者として扱ったのか……

暫くはホットミルクを啜る音だけが響いた。

玄関から人の気配がして、扉をそっと開ける音が……

「絵梨？絵梨居るの？」

おっかなびっくりな様子で玄関扉を開けて、中を伺う中年女性。

僕が台所を出ると目があった……

「あっ貴方……
絵梨は？
娘は無事なの？
アイツは？」

両手を胸の前で拝むようにして、それでも中には入ってこない。

「あっお母さん！
このオジサンが追い払ってくれたんだよ」

子供にとって母親は絶大だ！

眠そうだったエリちゃんが、椅子から飛び降りて母親に駆け寄る。

「嗚呼、絵梨……
ごめんなさい」

暫し母娘の感動の抱擁を見詰める。

母親に抱き締められて安心したのだろう。

エリちゃんは眠ってしまった……

彼女の髪を優しく撫でている母親は、とても娘を残して逃げ出した様には見えないな。

エリちゃんを奥の寝室の布団に降ろして寝かせている。

「では、僕はこれで……」

どうやら人は呼ばずに戻って来たみたいだ。

「確かにお化けがウチに出た、助けて！」

は、田舎な近所付き合いをしていては難しい。

直ぐに変な噂になるだろう……

下手したら村八分だ！

「あっあの？

待って下さい……

アレは、アレはどうなったのですか？」

有耶無耶にするには衝撃的な事件だ。

真相を知りたいのか？

逆にコッチが知りたいんだけど……

「申し遅れました。
僕は真言宗の僧侶をしています。
あのマンションを警備している会社から、怪奇現象の調査を依頼されています。
しかし、あの者は此方のお宅に現れた……
何故でしょうか？
ああ、彼は極楽浄土にお送りしました。
死して尚苦しまれていましたから、私が祓いました」

ヤツは極楽浄土なんかには行っていない。

「箱」に喰われたんだ。

未来永劫苦しむだろう……

「お坊様……
極楽浄土、祓った……」

へなへなと廊下に座り込んでしまったよ。

アレが居なくなって安心したからか？

でも誰なんだろう……

彼女の旦那か？

それにしては扱いが酷いな……

「もう夜も遅いですね。

それでは僕は失礼します」

「あっあの……
待って下さい。
私達は、これからどうすれば良いのですか？
私は……」

後悔だか恐怖だか分からない表情で縋ってくる。

「少し、お話を聞かせて下さい」

これも御仏に仕える義務だろう。

彼女の話を聞き、気持ちを楽にさせる事にする……

◇◇◇◇◇◇◇

台所で母親と向かい合わせに座る。

少し前はエリちゃんと向かい合ってたのに……

ロリじゃない年増と向かい合ってもテンションは上がらない。

さっきはホットミルクを飲んだが、今は日本茶だ。

銘柄は分からないが、余り良い茶葉ではない。

その代わりお茶請けの菓子が出てきた。

ザラメ煎餅にチーズ鱈だ。

お店の商品を直接持ってきましたよ！

「貴女は、かの者が誰か……
ご存知のようですね？」

社交辞令で、お茶を一口啜り聞いてみる。

多分、旦那だろう……

「彼は……彼は、私の浮気相手だと思います。
見た目は変わり果てていましたが、私には分かりました」

アレ？旦那じゃない？

旦那は入院してた。

だからパジャマだし、病気だから痩せこけていたんじゃ？

「旦那さんは見当たりませんが……
別居なさっているので？」

入院中なのはエリちゃんから聞いているけどね。

彼女は言い澱んでいる……

浮気を告白したのに？

「主人は、三浦市民病院に入院しています。
元々、体が弱く入退院を繰り返してました……
娘と2人、この店を守り暮らしていましたが。
生活が苦しく駅前のスナックに私は働きに出ました……」

寂しさと生活の苦しさで浮気に走る……

有りがちだが、説得力は有るな。

ホステスと客が不倫したのか……

「そこで、彼と知り合ったのですか？」

「はい……
彼は、マンションの建設会社の社員。
昼間、良くお店を利用してくれて……
それでスナックにいらした時に意気投合しまして、ズルズルと。
でも建設が中止となり、暫くは有っていませんでした……」

久し振りに有ったら霊的ストーカーに変貌かよ。

でも切欠はなんだ？

「久し振りに再開して、また関係を持ったと？」

坊主が下世話は話をするのはどうかと思うが……

彼女も直接的な表現に頬を染めてるけど。

「はい。
こんな田舎ですし周りに見られない様に、あのマンションの3階で会っていました……」

アレが3階に固執したのは、逢瀬の場所だからか……

「彼は貴女に執着していました。
最初は生霊として、あのマンションの3階に現れていました。
しかし……
多分、入水自殺をなさったのでしょうか。
死して尚、貴女の元に現れた。
今度は怨霊として……」

実際「箱」が喰ったが、アレは2人も殺している。

「あのマンションが建設中止となり、彼もリストラに合ったそうです。
暫くたってから教えて貰いました。
当然お金が無く私にたかる日々……
私も生活が苦しくてスナックに働きに行ってますから。
別れ話になりました」

浮気相手がヒモへ？

元々生活が苦しいのに、一時の浮気相手の面倒までは見れないわな……

「何時から会ってないのですか？」

異変が現れたのは、確か今年に入ってからか？

もう少し前だろうか……

チーズ鱈を一本食べる。

お酒が欲しくなるよね。

「昨年末には別れ話を……
その後は直接会ってませんが、電話やメールのやり取りは少し……
不摂生で体調を崩し入院したと聞きました。
暫くして主人も定期検査のレントゲンで肺に影が移り入院して……
それで忙しくて、最後の電話がかかってきた時に……」

そう言って俯いた。

顔は見えないから表情は分からないが、小刻みに震えているのは泣いてるのか……

「何か決定的な事を話したのですか？」

彼女は俯いたままだ。

「は……い……
主人を裏切れない。
もう電話もメールもしないでって……
それから少し言い合いになり……
貴方なんか嫌いだ、死んでしまえ、と……」

ちょおま、それで入水自殺したんだぞ！

アレは浮気相手に本気になり、そして振られたのか。
しかも「死んでしまえ」とか言われたら……
病気で気落ちしてる時に、好きな相手からトドメを刺されたのかよ。

「そうですか……
エリちゃんの為にも、夫婦仲良くしてあげて下さい。
子供には両親が必要です。
彼女は貴女を心配していましたよ。
良く出来た娘さんではないですか。
彼は残念な結果でしたが、死して安寧になれたのです。
それを忘れずに、成仏を祈ってあげて下さい」

これで事件は、僕的には解決だ。

後は社会的に纏める事なんだけど……

「彼の魂は救われました……
しかし入水自殺をされている筈です。
もしかしたら遺書が有るかもしれません。
しかし……
思い人にこっぴどく振られた上に怨霊になった。
などと広まれば、彼は成仏し切れないでしょう。
僕が祓った事、この家に現れた事は秘密にしてあげて下さい。
私も警備会社の方には、何も無かったと報告します」

社会的醜聞は避けたいだろうし、折角旦那と寄りを戻したんだ。

今更浮気相手の事など知られたくないだろう……

何度も頭を下げる彼女に

「それでは、失礼します」

と言って、今度こそ帰らしてもらう。

後味の悪い事件だった。

浮気相手は自殺、マンションオーナーが頼んだ霊能力者は行方不明。

死体は「箱」が食ったから、殺人としての立件は不可能だ。

ゲートの前の車は、不法車両として問題になるだろう。

依頼者としてマンションオーナーは事情聴取か？

僕もバレない様に帰らなければならない。

既に時刻は４時ちょっと前……

幾ら田舎の朝は早いとは言え、まだ周りは寝ている時間帯。

なるべく県道を通らず、コンビニ等のカメラの有る場所は避けて帰らなければ……

幸いバイクだし、農道を通って遠回りして帰ろう。

帰宅ルートを予測しながらバイクのキーを回した……

◇◇◇◇◇◇◇

あれから一週間……

警察からの問い合わせは無い。

結果を知るのは僕だけだが、対外的にアフターをしているのを理由に現地に向かっている。

出来ればロリっ娘に会いたいが、何か言い触らされたら厄介だから会わない。

ノンビリと電車とバスを乗り継いで、問題のマンションに到着した。

ゲートの前に立ち建物を見上げるが、相変わらずくすんだコンクリートの外壁。

剥がれた立入禁止の黄色いテープ。

唯一変わっているのは張り紙がしてある事だ。

解体計画のお知らせ……

もはや曰く付きの物件は、更地にしてから計画し直しなのか？

一応現場を一周し付近を確認するが、警備員が居なくなった一週間

で落書きが増えたくらいか……

遠目で例の雑貨屋を見れば、中年の男性が店の前を掃き清めている。

旦那さん、退院したんだな……

さて、これから長瀬社長に報告と請求書を提出しに行くかな。

大した結果を残さなかったから、請求額は１５万円。

実質昼間の調査1日、夜間巡回が2日だからね。

途中、桜岡さんと合流する予定だ。

一応、彼女も1日夜間にヤツと戦ったから……

もうヤツは居ないから、この先怪異が収束すれば彼女の活躍でも構わないだろう。

「なに、黄昏てるのよ？」

「うわっ！

脅かすなよ、桜岡さん」

いきなり声を掛けて背中を叩いた本人が笑っていた……

◇◇◇◇◇◇◇

アフターで一週間。

特にあの晩から連絡も問題も無いみたいだわ。

今日、長瀬社長に報告と請求書を渡しに行くのに同行する約束をした。

でも、その前に一応現場を確認しておくって……

1人で行くって言ったけど気になるわ。

だから先回りして現地を確認したの。

待ち合わせの時間から逆算すれば、何時に現場に行くのか大体分かるから……

彼が来る予定時刻より一時間は早く現地に来て、建物周辺を見回る。

長瀬綜合警備保障は、もう警備をしていないから中には入れない。

それに榎本さんからも単独行動を止められているし……

お父様みたいに過保護な人。

前に来た時に寄った雑貨屋さんが営業しているわね。

一応聞いてみようかしら?

「こんにちは……
あら、お手伝いかしら？」

前に来た時は母親？

かしら中年の女性だったのに、今日は可愛い店員さんね。

「いらっしゃいませ」

ハキハキと笑顔で応えてくれたわ。

何か良い事が有ったのかしらね？

# 第２６話

榎本さんの事だから、また独りで何かしてそうだから早めに現場に来る事にしたわ。

待ち合わせの時間から逆算すれば、現地を確認しに来る時間も分かるから。

少し早めに来て周りを見回り、あの雑貨屋に入った。

前は中年の女性だったけれど、今回は可愛い店員さんだった。

小学生くらいだけど、何か知っているか聞いているかもしれない。

えーと、榎本さん曰わく会話を繋げるには……

何でも良いから何か買って、会話を繋げるって言ったわね。

でも雑貨屋さんなんて、私来たの２回目よ。

何を買って良いのか……

商品棚を見渡せば、洗剤やら鍋やら食品やら。

統一感が無いから雑貨なのね……

暫く店内を見回してから、結局はキシリトールガムとポケットティッシュを持ってレジへ。

商品をレジ台へ置く。

「ありがとうございます！」

彼女は商品を手に取ると、今時珍しい手打ちのレジを器用に操作して

「３８０円です」

と言われたので、カードは使えないでしょうから百円玉で４枚手渡す。

「４００円のあずかり……
２０円のお返しです」

テキパキとお釣りを渡し、レジ袋へ商品を入れ様としているから

「そのままで良いわ」

そう言って、そのまま商品を受け取る。

彼女に聞いても分からないかもしれないけど、一応ね。

「ねぇ？
最近、何か変わった事はなかったかしら？」

少し屈んで、目線を近付けて話し掛ける。

勿論、笑顔でよ。

「んー、お母さん元気になった！

お父さんも退院したの。
汚くて変なオジチャンをおっきいオジサンがはらってくれたんだって。
お母さんが言ってた。
あっ！
内緒って言われてたんだ。
お姉ちゃん、お願い。
今のは内緒ね」

エヘヘって舌を出して笑ってるけど……

汚くて変なオジチャン？

おっきいオジサン？

最近見たフレーズよね……

あの生霊と筋肉馬鹿な男の顔を思い浮かべる。

「分かったわ。
内緒ね！
でも、もう少し教えて。
おっきいオジサンって誰かしら？」

んーっと悩む格好をしたが、所詮は子供。

誰にも言わないわって約束したら、教えてくれたわ。

「あのね。
夜に台所に、いきなり汚くて変なオジチャンが居たの。

お母さんに襲いかかって、私は部屋に逃げ出したんだ。
そうしたら、おっきいオジサンが助けてくれたの。
後からお母さんに聞いたら、汚くて変なオジチャンを成仏させてくれたから安心なんだって！
お母さん、喜んでた。
あのおっきいオジサンはお坊さんだって」

成仏？

それって霊障なの？

「あっいらっしゃいませ」

新しいお客が来たのを機に会話が途絶えた。

入って来たのは3人連れの主婦連中。

私をチラ見するけど、特に反応も無く騒がしく商品を見ている……

私はレジから少し離れて、商品を見る振りをしながら考える。

心霊現象の起こるマンションの近くの雑貨屋で、こちらも心霊現象？

こんな子供が成仏なんて言葉は分からないわよね？

だから母親から聞いた事を覚えている……

どう言う事かしら？

それにお坊さんって？

おっきいオジサンでお坊さんって、彼しか居ないじゃない。

あの野郎、私には単独行動はするなとか言っておいて……

自分はヤツを何とかしたって事なのかしら？

もう少し情報が欲しいわ。

暫く考え事をしていると、店内が騒がしいのに気が付いたのか母親が現れた。

「いらっしゃいませ。
あら……」

私に気付き会釈をして、後から来た主婦達の商品を処理していく。

五月蝿い主婦達が帰った後、今度は母親に話し掛ける。

「こんにちは」

前に見た時は化粧をして見栄えを気にしていたみたいだったのに、今日はスッピンね。

でも表情が軟らかくなっているわ。

「いらっしゃいませ。
今日はお連れの方はいらしてないのですか？
改めてお礼を言いたいのですが……」

お礼？ビンゴだ！

あの脳筋野郎、独りで解決したんだわ。

カマを掛けてみましょう。

「今日は彼に頼まれて、貴女方の様子を見に来ましたわ。
何かお変わりはないですか？」

私も知ってます的に話し掛ける。

彼女は、娘を気にしたのか

「絵梨、お店の番はもう良いわ。
中で休んでなさい」

「はーい！
お姉さん、バイバイ」

元気に中に走って行く……

そんな娘を優しく見詰めている。

母親の顔だわ。

「お坊様の言われた通り、あの人は自殺していました。
鎌倉湖で……
共通の知人に確認しましたので、間違いありません。
でも私を怨み自殺をしたのに、成仏させて頂き気持ちの整理もつきました。

主人と娘の為に、これからは生きていきます……」

そう深々と頭を下げられた。

自殺？恨み？成仏？

それに、これからは主人と娘の為に生きていきますって……

端から見ても、コレって万事解決ですわよね。

「分かりました。
伝えておきますわ」

もう裏も取れたから、ここに居る必要は無いわ。

あの脳筋野郎を捕まえて、キリキリ白状させるだけなの……

会釈をして店を出る。

見渡しても、まだ来てないわね……

あの電柱の影で暫く待とうかしら？

◇◇◇◇◇◇◇

暫く待つと、独自な体型の男が左右を見ながら歩いて来る。

来たわね！

マンションの外周を見回り、雑貨屋を気にしているわね。

あら、ご主人かしら？

店の前を掃除してらっしゃるのは……

そう言えば、退院したって言ってたわね。

雑貨屋に行くのかと思ったら、マンションを見上げながら黄昏てるわ！

攻めるなら今よね……

音を立てない様に彼に近付いて、私の苛立ちを込めながらバシンと肩を叩く！

私の手が痛いわ、この筋肉ゴリラ！

「なに、黄昏てるのよ？」

「うわっ！

脅かすなよ、桜岡さん」

榎本さんは笑顔で振り向いた。

そうよね。

貴方が独りで解決したんですもの、笑顔も零れますわよね！

そして、どうやら叩いたダメージは無いのね……

「それで、見回ってどうでした？
何か問題が有りましたかしら？」

ニッコリ笑顔で聞いてあげるわ。

私、実情は知ってるのよ？

彼は暫く考えてから

「特に変化無しだね……
あの後、霊障も収まってるみたいだし。
でも警備員の連中も見たから、まだ居るかもね。
しかし建物の取り壊しは決まったみたいだ。
取り憑く建物が無くなれば、収まるかも知れないね……」

なに自分は何もしてませんってシラをきるの？

貴方が解決したのに……

「ふーん、ふーん、ふーん……」

彼の周りをクルクルと回る。

「なっなんだい？」

私の挙動不審さに、引き気味ね。

ならばヒントを上げますわ。

「あの生霊……
怨霊化したわよね？
そして雑貨屋さんに現れた……
何故、成仏させたのに秘密にするのかしら？」

流石にビックリした表情をしたわ！

何時もの保護者面じゃないのが、快感ね……

「何故、おっきいオジサンが助けたのかしら？
ねぇ、オジサン」

かなり慌てているわね！

もう状況証拠もバッチリだわ。

「その辺を少し話し合いましょうか？
長瀬さんに会う前に。
此処じゃなんですから、駅前に戻って喫茶店にでも入りましょう……」

彼の太い腕をガッシリと掴んで、そう脅した。

「なっ？
分かった、分かりました！
だから手を離して……」

見た目と違いウブなのよね、この筋肉ゴリラは。

「逃げるから駄目よ！
捕まえてなくちゃ……
さぁキリキリと歩きなさいな」

端から見れば年の瀬カップルかしら？

でも榎本さん３０前半らしいし、私が２５歳だから普通よね。

◇◇◇◇◇◇◇

京急三浦海岸駅。

駅名の如く、海水浴場の三浦海岸に近い駅。

駅前には海の家みたいなお店が並んでいたり、コンビニや本屋が有ったりと混在した感じの商店街ね。

今回の件で初めて利用した駅……

駅前バスターミナルの外れに、場違いな本格的珈琲を飲ませてくれる喫茶店が有る。

常時３００種類の珈琲豆が有るのが自慢らしい。

しかし、店名はポエム……

似合わないわよね？

店内に入りボックス席に案内される。

実は珈琲って苦手。

だって酸味と苦味が……

あら、でもケーキは美味しそうね。

桜と小豆のシフォンケーキか……

「私はオリジナルブレンド珈琲と、この桜と小豆のシフォンケーキにするわ」

「僕はアイスコーヒー。
甘さは普通で」

かしこまりました、と店員さんがカウンターの中に入って行く。

「ねぇ？
アイスコーヒーだけ甘さを言ってたけど何故？」

ガムシロップ無いのかしら？

「ああ、この店はね。
珈琲に拘りが有るから、客が勝手にガムシロップで薄めない様に店側で入れるんだよ」

なんて、常連振りね。

似合わないわよ、貴方に珈琲は……

どちらかと言えば、日本酒や焼酎よね。

「良く来るの？」

「いや、最近初めて来てね。
同じ事を言われた。
ここの珈琲は変な酸味が無くて飲みやすい。
もっとも珈琲通じゃないから、良く分からないけどさ」

頭を掻いて笑ってると、クマさんね……

何て会話をしていると先に私の珈琲とケーキが来た。

暫くして彼のアイスコーヒーも来たわ。

「いただきます……
このシフォンケーキ、美味しいわ。
少し食べるかしら？」

少しならあげても良いわよ。

「いえ、ご遠慮致します」

即答したわね……

「そう？
じゃ話して下さらない？
私に内緒の行動を……」

少し語尾がキツくなるのは仕方ないわよね。

だって黙って独りで解決したのですから。

「うん……
何て言うか気になったんで、夜に再度来たんだ。
暫く様子を見てたら、あの雑貨屋の女性が玄関から飛び出して来た。
慌てて行けば、最初に見たヤツと分からない程に変貌したヤツが居た。
いや最初は別物かと思ったよ。
でもパジャマは一緒だし、痩せこけた顔も似ていたんだ……」

ふーん、何故夜中に独りで？

「それで、怨霊化したのが分かったのは何故かしら？
見た目だけじゃ分からない筈よ……」

ストローを使わずにアイスコーヒーを飲むのね。

手の平が大きいからかしら、グラスが小さく見える。

「咄嗟に唱えた愛染明王の真言が聞いたんだよ。
だから生霊では無いと思ったんだ。
死者は、その直前の姿形で現れる事が有る。
溺死体の様に舌をダランとして体をヘドロで汚していたんだよ」

なる程ね……

見た目の変化と真言の効き具合で判断した。

そして即、除霊出来る能力が有るのね。

やはり経験が段違い、か……

「分かりましたわ。
じゃ最後の質問よ。
何故、自分が祓ったって言わないの？
これは大変な事の筈よね。
何故、秘密にするの？」

何故かしら？

凄く苦悩した表情を……

嫌だわ、何でそんなに辛い顔をするの？

「今回の件は、調査で打ち切り。
長瀬社長とは契約していない。
そして、あの雑貨屋の人達からも頼まれてないんだ。
全くの偶然だからね。
そして除霊後に話を聞いたんだ……」

つまり、この事件の原因の事よね。

それが、そんなに辛いの？
「それは、この件の真相ですわよね？」

「そうだよ。
ヤツは、あの奥さんの浮気相手だ。
旦那が病弱、お店は繁盛せず彼女は夜にスナックで働いていた。
魔が差したんだろう。
客で有るヤツと不倫。
しかしヤツは……
金に困り、彼女にたかり始めたので破局。
ヤツは不摂生が祟り入院……
この時点が生霊だ。
そして逢瀬の場所だった、マンションの3階の角部屋に現れていた」

だから、あの時は3階にしか現れなかったのね。

「だが、彼女は余りに粘着質なヤツに決定的な言葉を吐いた……
ヤツは絶望し自殺した。
そして固執していた彼女の元へ。
これが真相だよ」

「そうだったの……
でも、それなら彼女にも責任が……」

手を振って私の言葉を遮る。

「それを騒いでも誰も幸せになれない。
浮気がバレて、相手は自殺。
旦那が退院してこれからって時に、波風を立てる必要は無いんだ」

それっきり、辛い表情のまま黙ってしまったわ。
人を世間知らずとか散々言うのに、自分は底抜けの善人じゃない！

自分の実績や手柄よりも、あの家庭の幸せを壊したく無いのね……

全く、顔に似合わない事しかしないんだから。

それが良い所よ……

「でも、貴方の実績や手柄でしょ？
せめて長瀬社長には、お話したらどうかしら？」

首を振って否定か……

「いや、それも出来ない。
噂なんて、どこから漏れるか分からない。
だから内緒にして欲しい」

こっこんな所で頭を下げたら駄目よ。

目立ってる、目立ってるわよ私達！

「あら見て！
彼氏の浮気を問い詰める彼女かしら？」

「修羅場か！
ざまぁ筋肉ゴリラが美人を捕まえるからだ」

「あらやだわ。
男に頭を下げさせるなんて……
何処の女王様かしら？」

結構人気の喫茶店なのだろう。
席を八割ほど埋めているお客が、此方をみながらヒソヒソと囁きだした……

「分かりましたわ。
分かりましたから！
頭を上げて下さいな。
私も内緒にしますから……」

漸く頭を上げてくれたけど、周りのお客様さんは盛り上がってるわよ。

「ぷっ浮気がバレたのを黙ってるってさ！」

「何だよ、惚気かよ。
人前で良くやるな」

もう恥ずかしくて、お店に居られない。

「でも、貸し一つ。
もうお店を出ますわよ。
ここは払いますから、貸し二つですからね！」

こんなに恥ずかしい思いをさせたんですから、貸しですからね。

伝票を持って立ち上がる私を慌てて追い掛けてきたわ。

この貸し二つ……

何で返して貰おうかしら？

とっても楽しみね！

## 登場人物（前書き）

登場人物を纏めてみました。

次は小道具を。

今日は本編更新は有りません。

明日から幕間を挟み新章に入ります。

ストック尽きたので、この土日でどれだけ書けるか……

## 登場人物

榎本正明（えのもと　まさあき）

榎本心霊調査事務所所長

過去にダムに沈んだ、高知県長岡郡本山町に有った西院王寺の跡取り息子。

僧侶の資格を持つが、寺は湖の底に沈んでいる為、現在は在家僧侶の扱い。

代替で別の土地に寺を移設したが、とある呪いにより祖父と両親は死亡。

移転保障により国から多額の金銭を受け取っている事や祖父と両親の生命保険。

また代替に貰った寺も土地も手放した為に、貯金は相当額有り生活に困る事はない。

真言宗の傍系で愛染明王の真言を得意とする。

僧階は「１２級　権小僧都」

独身　身長１８５ｃｍ体重８５ｋｇマッチョメンであり短髪、残念ながら美形ではない。

ドが付くスケベで有るが、これは愛染明王の教えを曲解している為

に平然とムッツリスケベ道を進む。

「煩悩と愛欲は人間の本能でありこれを断ずることは出来ない。本能そのものを向上心に変換して仏道を歩ませる」

この功徳を元に、僅かながらの霊能力と愛染明王の力を使える。

真言は「おん　まからぎゃ　ばぞろ　しゅにしゃ　ばざら　さとばじゃく　うん　ばん　こく」

印は両手の親指を交差させ人差し指を離し、中指を手の中に折った形で交差させる。

最後に薬指を立てた状態で合わせるが小指は合わせず離す。

細波結衣（さざなみ　ゆい）

愛知県の寒村の出身。

黒髪のショートカットで小柄な体型、貧乳です。

訳有って同棲（同居）している元狐憑きの家系のロリッ子。

実の母親と、その交際相手の男達に小さい頃から虐待を受けていた。

両手と太股には、その時の自傷が残っている。

榎本の事は、恩人且つ頼りになるお兄さんと思っているが、実は妄想のオカズにされている。

小さい頃から家事をやらされていたので、家事全般に料理は普通にこなす。

お茶に拘りがあり、お米が大好き。

物怖じする性格だが、頑固な面を持つ。

長瀬亮太郎（ながせ　りょうたろう）

お得意様その１

長瀬総合警備保障？　代表取締役社長

社員数６０人のビルの常駐警備を専門に請け負う。

中小企業故に、大手が避ける事故物件でも請けねばならず、榎本に物件の霊視を頼む。

ダンディな４５歳　８歳下の奥さんと１３歳の娘を持つ。

心霊現象については、実体験が有るので信じている。

お得意様その２

山崎聖二（やまざき　せいじ）

？山崎不動産　代表取締役社長

社員数は営業を含めて8人、主に横須賀・横浜市内の物件を扱う地域密着型不動産屋。

ツルッパゲな60歳　独身　会社の事務員を愛人として雇っている。

榎本のエロ師匠であり、横浜のヘルス・川崎のソープでは有名人。

心霊現象については、実体験が有るので信じている。

坂崎健二（さかざきけんじ）

長瀬綜合警備保障の社員

ガタイも良くタフなので、心霊物件担当にされている哀れな男。

ガテン系26歳　独身　恋人無し期間＝年齢。

年上好みのオバちゃん好きな変態。

飯島弘子（いいじまひろこ）

山崎の愛人であり山崎不動産の社員。

エロいお姉さま系29歳　山崎の他にも複数と愛人契約をしている。

Eカップの巨乳の持ち主だが、榎本の見立てでは色情霊が付いている。

桜岡霞（さくらおか　かすみ）

現在売出し中の霊能力者。

実力は本物だし、彼女の美貌もありテレビの心霊特番とかに出演もしている。

しかし、ヤラセや演出重視の傾向に嫌気がさしている。

腰まで届く黒髪に中々の巨乳を持つ。

霊障に困っている人々を助けたいと思い、知り合いの紹介で比較的霊障の多い不動産業界に紹介を頼んだ。

残念な所は、お嬢様なので金銭面に関しては大らかな事。

お洒落な外観、オヤジな中身な事。

その容姿では信じられない大食漢。

ちゃんとした修練を積んでおり、除霊スタイルは梓巫女の流れを汲んでいる。

梓弓を鳴らしながら呪文を唱え神懸かりを行い生霊や死霊を呼び出し（口寄せ）、その霊に仮託して託宣や呪術を行う。

薊菊里（あざみ　きくり）

桜岡除霊事務所のバイトA。

現役女子高生であり、霞の遠い親戚でもある。

バイトをしたくても校則が厳しく、親戚のお姉さんの仕事を手伝う事にした強かさんである。

特技は茶道・華道という古風な一面を持つ。

小柄で両肩の所で切りそろえた黒髪を持つ。

田鶴更紗（たずるさらさ）

桜岡除霊事務所のバイトB。

菊里とは、ネットゲームのオフ会で知り合った。

趣味で小物を集めているが、趣味は悪い。

茶髪のショート、今時の女子高生。

「箱」（はこ）

榎本一族に祟る呪いの元凶。

対象者の求める姿形に似せて現れる。

父親は色っぽいネーチャン、爺さんには若い頃に無くなった妻。

主人公の前には日本人形の様な全裸の幼女姿で現れる。

一族直系の男子に取り憑き、殺す……

# 小道具

スクーター

ＹＡＭＡＨＡ　ビーノモルフェ

２００９年モデル

グレーイッシュクリーンソリッド３

前面の大型バスケット・フロントにコンビニフックやペットボトルが入るポケットが有る、収納上手なスクーター。

ＧｰＬＯＧＫといって鍵穴に蓋をする機能が有り、盗難防止に一役かっている。

本体重量８４ｋｇ

燃費は１Ｌ当り６６ｋｍ　しかし１Ｈ当り３０ｋｍの速度なので実際に街乗りで使うと１Ｌ当り５０ｋｍ程度。

４．５Ｌの燃料タンクだから、まぁ２００ｋｍ走ったら給油している。

車

小道具運搬に便利な相棒です。

日産　キューブ

特殊警棒

３段伸縮式、メーカーに拘り無し。

発炎筒

サンフレイヤー

燃焼時間は5分程度　１６０カンデラ以上の照度が有る。

１本５００円程度の使い捨て。

車に必ず1本付いているアレ。

船舶用発炎筒は４００カンデラ以上だが燃焼時間は1分程度。

ケミカルライト

シュウ酸ジフェニルと過酸化水素との混合溶液の科学発光により蛍光を放つ。

ステックタイプで折って内部のアンプルを割って使用する。

１本２００円程度の使い捨て。

夜店やコンサート会場で売っている玩具の光量を多めにした物。

ＬＥＤランタン

ＧＥＮＴＯＳ製　エクスプローラー・プロ　ＥＸ－７７７ＸＰ

２８０ルーメンの明るさが有りながら、３０００円前後という手頃さ。

フックも付属されているので吊るしても置いても良し。

本体の中に札を仕込む事により気持ち耐霊力効果有り？

折りたたみ自転車

ｄｏｐｐｅｌｇａｎｇｅｒ（ドッペルギャンガー）製

ＬＰ７１０　ｐｒｉｍｏ

メーカーに拘りなし。

行きつけのアウトレットモールのアウトドアショップの現品限りを１万円で購入。

マグライト

ＭＡＧＬＩＴＥ　マグライト　Ｄ．ＣＥＬＬ４

世界中の警察・消防・軍隊で幅広く使われている。

基本色はブラック、全長４３５ｍｍ　ワイドとスポットの切り替え可能。

強度が有り最悪は棍棒として使用経験有り。

## 小道具（後書き）

明日から幕間で主人公の過去と「箱」との関連を書いていきます。

今日は登場人物と小道具だけですみません。

## 幕間１（前書き）

何時も私の拙い小説を読んで頂き、有難う御座います。

今回は主人公の過去の話です。

幕間として二話程続きます。

ストック切れの為、もう何話か掲載したら掲載頻度は週二程度になると思います。

# 幕間1

呪われた「箱」

僕の生家は、本州の山間部の小さな集落に有った。

有ったと言うのは、今は人造湖に沈んでいる。

ダム建設の際に、3つの村と1つの町が対象となり移転させられた。

ウチの寺が有った村も例外でなく、檀家衆が居なくなれば経営は成り立たない。

国が用意してくれた場所に墓所を移し寺を建てた……

僕の家系は呪われていると言うか、百年単位で一族の男子を残し早死にすると言い伝えがある。

遡れば江戸初期まで記録が有るのだが、確かに直系の男子以外が10人単位で一年以内に亡くなった事が2回も有る。

病気・事故・自殺・他殺……

兎に角、何らかの理由でバタバタと一族が減り、そして増えると死んでゆく。

理由は分からなかった。

爺さんも親父も知らなかった。

そして前回から約百年が経っていた。

僕の世代で悲劇が起こるのかとも考えたが、予兆も前触れも何も無い。

僕自身も家族も、特に気にしてはいなかった……

◇◇◇◇◇◇◇

「爺さん！
檀家衆からも言われたけど、寺の移築に反対なのか？
でも町長が許可しちゃったし、檀家衆も引っ越すんだろ？」

小さな山間部の村に降って湧いたダム建設の話。

都市部の水瓶として目を付けられたのが、此処だ。

「ああ、正明か……
儂は反対だな。
ご先祖様から祭ってあるお社は、言い伝えで決して開けてはならないと言われている。
移築など問題外だろう」

呑気に和室でお茶など飲んでる現榎本家当主で、この寺の住職たる爺さん。

もう７０歳を越えているが、元気はつらつな糞ジジィだ。

「父さん。
町長からも言われたが、もう無理だ。
国の方針としてのダム建設、町長も認めちまった。
保障も十分だし、檀家衆も引っ越すんだ。
新しい土地でやり直すしかあるまい。
それに移転先の寺は既に建設中なんだぞ」

補助金やら補償金やらが高額だった為か、とんとん拍子に移転計画は進んでいる。

今更ゴネるのは厳しい状況だった。

「そうですよ、お父さん。
此処に残るのは無理ですわ。
新しい土地で頑張りましょう」

僕の両親も爺さんの説得をする。

両親はダム建設に賛成だ。

こんな山間部の田舎よりも代替地に指定された場所は、遥かに便が良く都市部に近い。

特に結婚してから此処に来た母さんにとって、都会に近付くダム建設は嬉しかったのだろう。

寺に嫁ぐと言う事は寺に尽くす意味で、嫁は大黒様と呼ばれ大変忙

しい。

元はＯＬで有り都会育ちの母親にとって、田舎独特の因習とか馴染むのに大変だった。

気晴らしに出掛けたくても、こんな便の悪い山間部の田舎では出掛けるだけでも大変だ。

しかし新しく寺を建てる場所は、バスで一時間で都心部に出れる。

内緒だが、母さんは凄く楽しみにしていた。

「しかし……

お前達も知ってるだろう？

我が家の曰わくを……

アレには、お社が関係してると思うんだ。

昔は気にしてなかった。

しかし、ダム建設の話が出てから特に思うようになったんだが……」

一族が直系跡継ぎを残して死に絶える。

そんな馬鹿な話はないだろう……

ダム建設開始まで２ヶ月と少し。

引っ越しまでは１ヶ月と少ししかない。

爺さんの説得には時間が掛かるだろう。

心の隅では心配し過ぎだ。

科学が発達した現代で、連綿と続く呪いなんてナンセンスだと思っていたんだ……

しかし、問題の呪いは発動した。

ウチの直系は爺さん・両親と僕だけ……

その晩、母さんが突然息を引き取った。

原因は不明。

朝、親父が隣で寝ている母親を起こそうとしたら死んでいた。

死に顔は、凄く怯え歪んでいたんだ。

隣で寝ていた親父が気が付かないのが不思議な位、首を掻き毟り苦しんでいた。

状況が状況だ……

不審死として警察が司法解剖をしたが、原因は全く分からなかった。

薬物反応もアレルギー反応も無いし持病も無い。

突然、首を掻き毟り苦しんで死ぬ。

そんな病状だって聞いた事もないのだから……

母親の葬儀はしめやかに執り行われ、母さんの墓は移転先の墓地に

埋葬された……

原因不明の母さんの死。

でも僕らは未だコレが一族に掛かっている呪いとは思わなかった。

いや思いたく無かった。

しかし……

母さんの葬儀が終わり暫くしてから、今度は父さんの様子が変わってきた。

何時もは普段と変わらないが、少しずつ痩せて……

いや窶れてきたのだ。

食事は僕が作り同じ物を三食を一緒に食べている。

寺の仕事は大変だ……

朝早く起きて掃除とお勤め・昼間は寺の仕事・夜も掃除とお勤め。

大体が掃除に費やしているが、窶れる程の過酷さではない。

朝が早い分、寝るのも早いから健康的は筈なんだ。

病気かと思い、無理矢理都市部の大病院で精密検査をしたけど……

特に問題は無かった。

精神的なものでは?

とも疑ったが、毎日接している僕達が気が付かない筈もないだろう……

しかし検査結果の中で気になるのは、内分泌系や免疫機能の低下だ。

いわゆる腎虚の症状なのだが、気を付けなければならない程でもない。

年齢からくる老化現象と言われる範疇だ。

打つ手も無く日々を過ごしていたが、母さんが亡くなって丁度1ヶ月後。

何の前触れも無く、親父が亡くなった……

冷たい雨が降る冬の朝、社の鍵が開いており中で亡くなっていた。

親父は半裸の状態で、母さんと同じ様に恐怖に顔を歪にしていた。

両の目を見開き、社の奥を向いて壁に寄りかかっていた。

発見したのは爺さんだが僕も呼ばれ、初めて社の中に入った。

驚いた事に社の中にはもう一つ社が有り、それは厳重に御札で護られている。

周りには昔から置いて有るのか、木箱やら訳の分からない祭事具な

どが乱雑に積まれていた……

爺さんと二人で親父を外に運び出し、救急車を呼んだ。

救急車が来ても、既に死んでいたので警察も呼ばれた。

1ヶ月おきに二人も亡くなったのだ。

噂が広まるのは止められないだろう……

親父の死因は不明。

心臓発作と思われるが司法解剖の結果も曖昧だったが、自殺も他殺も考えられず事故死扱いとなった。

流石に立て続けに夫婦が同じ日に亡くなったのだ。

色んな酷い噂が、村中を飛び交った。

次は僕か爺さんだろう……

直系の跡継ぎが残ると言うが、次期当主の親父は死んだんだ。

次は僕が死なないとは限らない。

親父の葬儀の後、急に怖くなった僕は爺さんの書斎に入り浸り昔の記録や資料を漁った。

しかし今まで歴代の祖先も調べたんだろう。

大した事は分からなかった……

後は、あの社しか調べる物は無い。

爺さんの目を盗み、社の中を調べる事にした。

あの中には色々な物が乱雑に置いてあったが、木箱の中には書籍の様な物も有った筈だから……

その晩、爺さんが眠った頃を見計らい社に向かう。

扉の鍵は、親父が侵入する時に壊したのだろう。

多少の音は立てたが、すんなりと中に入れた。

懐中電灯を照らし、中を見回す。

不気味な社の中に有る、もう一つの社。

これが本命で周りは人除けに作られたのだろうか？

幾ら爺さんの目を盗むとはいえ、深夜に中に独りで居るのは怖い。

しかし死ぬよりはマシだ！

周りを調べると二つの木箱が有り、片方には書籍が入っている。

もう片方は、何やら着物の様な布切れが……

書籍の束を漁ると、全く古文みたいで読めない物ばかりだ。

諦めかけていた時に、一冊の本が見付かった！

開かずの社の筈だが、他の本と比べると最近の……

多分、前回の生き残りのご先祖様の書いたらしき本が見付かった。

その中で興味深い記録を見つけ出した。

記録と言うが日記だ。

榎本朝吉と言う、前回の惨劇の生き残りのご先祖様だ。

◇◇◇◇◇◇◇

今朝、我妻が見事に喉を突き通し本懐を遂げる。

これで我が一族の生き残りは私ただ一人。

息子は二人居たが先に長男が服毒自殺を遂げ、次いで次男が割腹自殺を遂げた。

我が一族にかけられた呪いは、直系跡継ぎ一人を残し全て死に絶える。

本来なら長男が残るべきだが、あれは最初に長男に取り憑いた。

耐えきれずに自殺。

続いて次男に取り憑き、やはり自殺に追い込んだ。

あれは、自身の願望を反映した姿形で現れる。

そして取り殺すのだ。

我が妻は直系の血を継ぎ、私は分家筋だった。

だから私を生き残す為に、自らの命を絶ったのだ。

榎本家最後の1人となった私の前に、あれは現れた……

我が妻の姿形を真似て、私の前に現れた。

「お前達一族の義務を果たせ……」

たった一言……

そう言い残し、私の前から消えた。

その意味は未だ解らず、この呪いを子孫に継承する事が心残りである。

……つまり呪いの原因は不明だが、あれなる何かに取り殺されるらしい。

しかも回避するには、義務を果たさねばならない。

しかしご先祖も、その義務が何だか分からない、

直接聞くにも、あれが現れるのは最後の1人になってからだ……

生き残りは、僕と爺さんの2人だけ。

結局、最後の希望に縋る様に社に侵入したが……

何も分からないと同じ事だった。

簡単に片付けをして母屋に戻ると、縁側に爺さんが灯りも点けずに座っていた……

「爺さん……何で……」

思わず話し掛ける。

「正明、馬鹿孫が！
社には立ち入るなと言った筈だぞ」

「しかし、親父も母さんも死んだんだぞ！
生き残りは僕と爺さんの二人きりだ。
何か、何か原因が分かればと思って」

この数日間の焦りや恐怖をぶつける様に、爺さんに詰め寄る。

もう呪いが確実に我が一族に降り掛かっているのは間違い無いんだ。

残された時間は、もう少ない……

「正明……
まぁ座れ。
あれ、な……
儂の所に現れたよ。
若い頃の婆さんの姿形でな……
夢枕に立ちおった」

爺さんは静かに語り始めた……

「アレって？
まさか……」

「我が一族に取り憑いたアレは強力だぞ。
儂の法力が全く効かんかった……
だが、僅かな遣り取りで分かった事が有る。
アレは我が一族を根絶やしには出来ない。
我々に何かをさせないと、アレは困るんだろうな。
だが、我々はそれが何か知らない。
だから……
罰のつもりで一族を殺すんだ！」

なっ！

そんな傲慢な考えで、僕らは虐殺されてきたのか？

「それで……
爺さんは聞いたのか？
アレが求める何かを！

僕らに何をさせたいかを！」

爺さんは、力なく首を振った……

「いや……

聞いたが、薄ら笑いをして消えおったよ。

儂にも全く分からん。

だが1人は残るのは確かだな。

正明、お前が生き残れ！」

そう言って、自室へと戻って行った。

その後姿は寂しげで、僕は声を掛けられなかったんだ……

◇◇◇◇◇◇◇

翌朝から僕の生活は激変した！

爺さんから厳しい修行を受ける事になったのだ。

今までの読経と違い、霊を祓う仕方をだ。

普段唱えるお経とは全然違う、死者を安らかに極楽浄土を送る為でなく、魔を祓う真言を教えられた。

親父と違い僕には霊能力と言う物が有るらしい……

爺さんは自分が死ぬ前に、僕に何らかの自衛策を持たせたかったんだろう。

その気持ちが伝わったからこそ、短期で厳しい修行に耐える事が出来た。

僅か一週間だったが、基礎としてなら合格点だそうだ……

「良く頑張ったな正明。
これで霊能力の基礎は身についただろう。
明日からは応用編だ」

修行中は厳しく誉め言葉など聞いた事は無かったから、この一言は嬉しかった……

# 幕間2

榎本一族に代々伝わる呪い……

直系後継ぎを残して、一族が死に絶える呪いだ！

この平成の時代に何を馬鹿な事をと思った。

しかし呪いは実在し、僕は両親を失った……

残された肉親は爺さんただ一人。

その爺さんも呪いの元凶に遭遇したそうだ。

あれと呼称される社に封印されている何か……

あれは人の記憶を読み、一番望む姿形で現れるそうだ。

爺さんには、死んだ婆さんの若い頃のだったそうだ。

最愛の人の姿形を借りて取り憑くとは、何て嫌らしいヤツなんだ。

両親は１ヶ月おきに殺された。

次の予定日迄は、あと１０日程残っている。

少しでも抵抗出来る様にと、爺さんがスパルタで除霊を仕込んでくれた。

所謂霊能力ってヤツだ！

素質は有ったらしく一週間で基礎だけは学べた。

しかし残りは僅か１０日だ……

◇◇◇◇◇◇◇

「良く頑張ったな正明。
これで霊能力の基礎は身についただろう。
明日からは応用編だ」

毎日庭で修行を受けていたが、終わると何時も反省点や駄目出しばかりだった。

修行中は厳しく、誉め言葉など聞いた事が無かったから……

この一言は嬉しかった。

「爺さん、有難う。
でも除霊なんて映画とか漫画の世界の出来事だと思ってたよ」

エクソシストとかＧＳ美神とか……

まさか田舎の和尚さんが行えるとは思わなかった。

「高僧が悪鬼を祓ったりするのは聞いた事が有るだろ？
何も陰陽道だけが出来る訳じゃない。
死者と密接な関係は仏教の方だろうが。
正明も法力を高める術を学べば、まだまだ強くなれるぞ」

確かに歴史では、高僧が悪鬼を退治する話は良く有る。

てっきり孔雀王みたいに高野山で修行しないと駄目だと思ってたよ。

「何となく自分の中に有る力を引き出す事は分かったけど……
まるで実感が無いな。
霊能力なんて……」

体の中に有る力を真言に乗せて放出する。

言うのは簡単だが、実際はどの程度なのか全く分からない。

「ふむ……
しかし実践させるには、まだ早いからな。
後は反復して体に覚え込ませるしか有るまい。
今日はこれまでだ」

そう言って母屋に戻って行く爺さんは、とても７０歳とは思えない。

疲れを感じさせない足運びだ。

僕の方は、縁側にヨタヨタと歩いてベタっと横になり深く深呼吸をする……

「すーはーすーはー」

汗をかいた体には、冬の風も心地よい。

鼻から入る冷たい空気も、熱くなった体にもだ。

暫く休んでいたが、これ以上体を冷やすと風邪をひきそうだ……

重い体に鞭を打ち、シャワーを浴びる為に風呂場へ向かう。

ベタベタと貼り付く法衣は気持ち悪い。

こんな田舎でも電気の力で直ぐにシャワーを浴びる事が出来る。

母さんが母屋をオール家電化したせいだが、今は感謝している。

何たって家事は大変なんだ！

それは両親が亡くなり、爺さんと二人になって身にしみた。

亡くしてから分かる親の有り難みか……

シャワーを浴びてサッパリしたら、夕飯の準備だ。

体を洗いながら冷蔵庫の中身を思い浮かべ、献立を組み立てる。

今夜は野菜炒めとアジの干物、それに板ワサかな……

まんま旅館の朝食だが、男所帯の食事など似たようなものだろう。

早朝の修行に備えて、今夜は早く寝なくては……

既に9時過ぎには布団に入り5時には起きる予定を組み立てる。

「はぁ……

青春真っ盛りなのに、田舎で修行三昧かよ」

思わず零した愚痴は、誰にも聞かれなかった……

◇◇◇◇◇◇◇

この数日間の孫への修行を考える。

確かに素質は有った。

あれの父親には全く霊能力は無かったが、幸い孫の正明にはそれなりに有ったのが救いだ。

上手く指導すれば、並み程度の力は得られるだろう……

しかし、あくまでも並みだ！

しかも修行を始めたのも遅く、未だに一週間と短い。

儂が生きている内に教えられるのは……

もう殆ど無いだろう。

後は知り合いの寺に預け、修行させるしか無い。

しかし我が一族には、残された時間が殆ど無い。

修行は自己鍛錬に任せ、今は相続の手続きをしなければなるまい。

幸い田舎の住職とは、檀家からの相談も受け付けている。

つまり相続関係には詳しい。

まぁ誰かが亡くなって起こる問題など、相続以外は少ないからな。

孫に少しでも遺産を残し、尚且つ修行の道筋を考えておかねば、独り残される正明は自棄になるやもしれん。

あれは儂では歯が立たんだろう……

せめて正明の為に、やれる事だけはやろう。

幸いな事に息子夫婦の生命保険や、土地建物それに移転の補償金を含めればかなりの額だ。

貯蓄もかなり有るし、儂自身の生命保険も合わせれば、正明だけなら一生遊んで暮らせる筈だ。

宗教法人だし相続税なとタカが知れている。

正明に金の心配だけは、させずに済むだろう……

◇◇◇◇◇◇◇

あれから更に一週間が過ぎた……

残り3日。

僕か爺さんが死ぬ日までだ。

爺さんは僕に生きろと言ったが、あれがどちらを選ぶかは分からない……

修行は基本を認めてもらい応用編に移ったが、やっている事は反復練習だけだ。

爺さんは……

この三日間、忙しく外出したり税理士やら弁護士やらと打合せをしている。

両親の相続とか土地の売買とか、確かにリアル事情が有るからだけど……

生き死にの掛かった残り大事な日にちなのだが。

その晩、夕飯の後に爺さんの部屋に呼ばれた。

和室で卓袱台に向かい合って座る。

爺さんの部屋には、基本的に暖房器具が無い。

だから寒い。

仕方無くお茶を二人分用意する。

「何だよ爺さん。
改まって……」

良く分からないが、爺さんの前には封筒が山積みだ。

提携してる銀行や農協、それに地方自治体のロゴが見える。

「ああ、正明に相続関係の書類をな。
儂が死んでからでは分からない事も多いだろう。
先ずは……
銀行預金の名義変更からだ……」

そう言うと幾つか輪ゴムで纏めていた封筒の上から順に、書類を出し始めた。

暫くは名前を書かされたり判を押したり……

分かり易く付箋や鉛筆で下書きがしてある上から記入していく。

一時間以上掛かっただろうか、最後の書類に記入して終わりとなった。

相続欄には僕しか記入しない為、比較的簡単らしい。

そう言えば僕の親戚って少ないな。

母さんの方は既に爺さん婆さんは他界し、一人っ子だから兄弟も居ない。

親戚は居るが、両親の葬儀に来てくれた人数は１０人以下……

これも呪いの影響か。

「疲れたか？
これ位で疲れては、卒塔婆書きが堪えるぞ。
何せ年間に１０００本は書かねばならんからな」

書類を確認し、封筒に入れ直し老眼鏡を外す爺さん。

確かに盆の時期は、檀家衆に呼ばれる爺さん以外は毎日親父と卒塔婆を書いていた。

今度は最悪１人で行わなければならない……

「うへぇ……
確かに大変だな」

疲れた利き腕をブラブラ振りながら応える。

「これで儂が死んだら、榎本家は全てお前の物だ。
金庫の開け方や、檀家衆や得意先のリストの場所は分かるな？
引っ越しも順調だが、儂の葬儀は此処で行え。

この寺の最後の葬儀は儂だ……
お前が取り仕切れよ」

縁起でも無い事を言う。

「爺さん、何を……」

「まぁ良いじゃないか。
明日も早い、もう寝ろ」

そう言われて爺さんの部屋を出された。

あれから何度か新しい寺に荷物を移動したので、部屋がガランとしている。

後は両親の私物整理と僕や爺さんの身の回りの物位だ。

人間、何年も住めば色々と荷物が増える。

この機に不要品は大分処分した。

だけど両親の荷物は……

中々捨てられない。

きっと殆ど箱詰めして新居に送ると思う。

広々として底冷えする寒さと併せて、急に寂しくなった。

2ヶ月前は家族4人揃っていた。

だが3日後には、また1人亡くなってしまう。

そう思うと涙が出て来た。

拭いても拭いても涙は止まらない。

悲しみと悔しさで、止めどなく流れる涙……

声を押し殺し涙が止まる迄、泣き続けた。

◇◇◇◇◇◇

翌朝、爺さんは昨夜の書類を持って外出した。

最近手抜きで朝飯はパンにしているが、僕は1枚だが爺さんは3枚だ。

6枚切りの食パンをだよ。

目玉焼きにソーセージを焼くのは、せめて手抜きをしない為だ。

「正明の手料理を食べれるのも僅かだな。
お前、本当に上達しないな……」

中途半端に半熟な目玉焼きを突つきながら、爺さんが愚痴を零す。

因みに爺さんは半熟が好きで、僕は完全に火が通っている方が好きだ。

「嫌なら爺さんが作れよ。
俺より旨いんだから……」

早くに婆さんを亡くした爺さんは、男手一つで親父を育てた。

だから僕より格段に料理は上手だ。

でも中々作ってくれないんだよな。

「まぁ良いか……
晩飯は久し振りに作ってやるよ」

爺さんは家庭的な和食がメインだが、手間を掛けるので旨い。

これは夕飯が楽しみだ……

◇◇◇◇◇◇◇

最後の晩餐では無いが、夕飯は大変美味しかった。

冬野菜の煮物・山菜の天麩羅・出汁巻き卵に豚汁。

御飯は、鯛を丸々一匹使い土鍋で炊いている。
それに何とデザートに白玉団子まで有った！

「爺さん、気張ったな。
久し振りだよね。
こんなに僕の好きな物だけを作ってくれたのは……」

殆ど全てが僕の好きな物だ。

「まぁたまにはな……
まぁ冷める前に食え」

男二人の食卓は殆ど会話は無いが、それでも楽しい夕飯だった。
食後のデザートの白玉団子を食べ、くだならい話をしていたら直ぐに寝る時間だ……

「爺さん、そろそろ寝る時間だぞ」

「ん？
もう寝る時間か……
もう少し付き合え。
寝酒に飲もう」

そう言って秘蔵の久保田の万寿と、ぐい飲みを二つ取り出した。

「何だよ、普段は飲ませないくせに。
じゃ少しだけ付き合うよ」

白菜の漬け物を切って摘みにする……

どちらともなく昔の話をして盛り上がる。

いや、僕の昔の恥ずかしい話を掘り返されるだけだ。

幼児の頃のお漏らし迄遡り漸くお開きとなった……

「零歳児なんだし、爺さんの背中で大小合わせて漏らしたって良いじゃないか！」

全く黒歴史だぜ……

しかし、これが最後の晩餐だったんだ！

その夜、爺さんは社に向かい……

あれに戦いを挑んだのだろうか？

それは、今となっては誰にも分からない。

爺さんは僧衣を纏い社の中で冷たくなっていた。

その顔は、両親とは違い満足げで数珠を握り締め大の字に寝転がっていたんだ……

その日も寒い雨の降る日だったよ。

親父も爺さんも、冬の寒い雨の日に亡くなった。

爺さんを発見した時、僕は半狂乱だった！

まだ2日……

2日有ったのに何故、爺さんはあれに挑んだんだ？

それでも救急車を呼び、既に死亡していた為に警察が呼ばれ色々調べられた……

やはり両親と同じで原因が不明。

病死として死因は心不全として処理された……

田舎故に、周りが色々と気遣いフォローしてくれたので泣いているだけで夜になり独りだけの家に帰ってきた。

もう誰も居ない我が家。

来週には立ち退く我が家。

自室の布団に倒れ込む様に横になると、泣き疲れだろうか？

そのまま睡魔に負けて、寝てしまった……

深い深い闇の中、夢か現か分からない。

しかし、あれは僕の前に現れたんだ！

「最後の生き残り正明よ。

義務を果たせ」

それは幼女だった！

闇の様に暗い髪の毛を足首迄伸ばし、髪と対比してか肌は病的に青白い。

前髪で隠れている両面は、紅く輝いている。

真っ裸の異様な雰囲気の幼女……

「お前が一族を殺しているあれか？
ああ！
何故、家族を殺したんだよ？
何故なんだよ！」

僕の叫びに
「ギャハハハハハハ……」

と、ただ大笑いするだけだ。

それが闇に溶け込む様に消えてから、両親と爺さんの苦しむ姿が見える。

黒いタールの様な沼の中で、苦しみ足掻いている姿が……

アレが魂を捕らわれた末路なんだ！

「正明……
来るな、こっちに来るな……
巻き込まれぞ」

「正明、助けてくれ。
苦しい、苦しいんだ……」

「ま……まさ……あき。
た……すけ、て……」

爺さん・親父・母さんの順に話し掛けられるが、母さんは2ヶ月近く捕らわれていた為か？

既に限界を超えた様に呻くだけだ……

これが、あれに捕らわれた末路なんだ。

あれの望みを叶えれば、爺さんと両親は解放されるのだろうか……

# 第27話

ｏｆｆｉｃｅ　ＳＡＫＵＲＡＯＫＡの事務所のソファーに深く座り、桜岡霞は悩んでいた。

今はバイトの娘達は学校に通っている時間だから居ない。

事務所には独りだけ。

机の上にはテレビ局から送られてきた企画書と契約書が置いてある。

今まで熟読していた。

それこそ初めて最初から最後まで読んだ。

内容はテレビ局からの依頼で、夏の特番の仕込みについてだ。

「貴方の近くにあった本当に怖かった話２０１１」

この特番の１コーナーの企画についてだ。

都内近郊のとある曰く付きの廃屋に、そこそこ売れ始めたアイドルやモデルの女の子を同行させて探検。

彼女達に何かあれば、その場で対応するのが依頼内容だ……

これは夏に視聴率が取れる心霊関係に、売り出し中の彼女達の人気上昇を狙っての事だ。

勿論、桜岡霞本人が登場する事による彼女のファンによる視聴率アップも盛り込んでいた。

しかし……

桜岡霞は最近知り合った先輩霊能力者の影響で、準備なく現場に乗り込む事。

素人を同行させる危険。

曰く付きとは言え理由が有って霊となった者の事を考えると、簡単に視聴率アップの為だけに仕事を請けて良いか悩んでいた。

「以前なら即請けたわ……
名前も売れるしお金も入る。
根拠の無い自信も有ったから。
でも、今は……
この企画内容では、請けてはいけないと感じている。
あの筋肉馬鹿の影響かしらね」

出来るならば……

事前に曰く付きの廃屋の調査から始めたい。

そして何故、心霊物件になったかの原因を突き止めてから除霊したい。

面白半分に素人を引き連れて曰く付きの廃屋に入って、出たとこ勝負で除霊する……

なる程、テレビ局には美味しいネタだ！

何か有れば、リアルな心霊現象を得られる。

その“ナニ”かの対応に失敗した時の保険が私。

つまり失敗した責任を負わなければならない。

今までは余りテレビ局の契約書なんて読まず、内容も確認しなかったけれど……

「請負とは請け負った時点で負けなんだよ！
だから内容を確認し、責任の所在を明らかにしておくんだ」

と、教えてくれた彼を思う……

契約書に先にサインをさせてから仕事を始める。

確かに気を付けないと撮影中の事故責任の殆どが私になっている。

良く今まで無事故でいられたものだ……

何か有れば賠償金や霊症のケアで大変だったわ。

「あの糞ディレクターめ！
スケスケだかヌレヌレだか訳の分からないアダナだけでは物足りず、
責任まで私に押し付けるつもりだったのね……

でも、でも私では契約書の内容変更の交渉なんて難しいわ。

出来なくはないと思う。

でも海千山千のテレビ局関係者に、太刀打ち出来る自信は無い。

何か抜け道的な事をされそうな気がするの……

随分と考え込んでしまったのだろう。

気がつけば時間は１１時３０分。

出勤後、直ぐに書類を読み始めたがら3時間近く考え込んでいた計算だ。

「やはり榎本さんに相談しましょう。

貸しが2つも有るから無碍には断れないでしょうし、丁度お昼時だし昼食をご一緒しながら相談すれば良いわ！」

前回の件で、抜け駆け的に事件を解決し……

被害者の母娘の為に、その成果を秘密にしている優しい人だもの。

私のお願いくらいは聞いてくれるはずよね？

デスクに移動して固定電話のボタンをプッシュする。

勿論、短縮ダイヤルに登録済み。

暫く呼び出し音が鳴り響いた後に、あの聞き慣れた声が聞こえたわ……

「もしもし？
榎本です……」

◇◇◇◇◇◇◇

事務所のデスクに座り、最近有った出来事を考える……

片手に持った缶コーヒーを弄びながら。

横須賀の心霊マンションの件を「箱」が強制終了させた……

生霊かと思えば、まさかの怨霊化したストーカーだった。

まぁロリっ娘が一人幸せになれたのだから、良かったのだろう。

うん、多分良かった筈だ！

良かったよね？

二人程、同業者がお亡くなりになったのが残念だが……

僕が行く前に殺されてたから、関係無いと割り切る。

マンションオーナーだって死亡者二人の物件なんて嫌だろうし、同業者だって返り討ちに合うのは覚悟しているだろう。

この商売は、死者と命の遣り取りをするのだから……

思考がダーク寄りになったのをパソコンのインコサイトの掲載写真を見て癒やす。

ロリっ娘は大好きだが、鳥類も大好きだ！

特にキエリクロボタンインコとかオカメインコとか……

癒やされるなー。

暫しパソコンの画面に見入っていたが、卓上ホルダーで充電中の携帯が鳴りだした。

持ち上げて画面を見れば「桜岡　霞」の文字が……

何故かお嬢様な彼女に懐かれている気がする。

彼女は美人だし、話していて楽しいしフードファイター仲間だが……

ロリじゃないから仲間止まりだ！

育ち過ぎだから、無理だ！

大切だから二回言いました。

何て心の中で思っていても、おくびにも出さずに通話ボタンを押す。

「もしもし？

榎本です……」

「こんにちは、榎本さん。
ご機嫌はどうかしら？」

オッサンにご機嫌？

いや、機嫌は良いですよ。

流石はお嬢様だ。

社交辞令も普通じゃないぞ。

「機嫌と言うか……
まぁボチボチでんなー、ですかね？」

「何故疑問系なの？
それに関西弁なのかしら？」

クスクスとオヤジギャグに反応してくれる。

意外にノリは良いんだよね。

「それで？何か用ですか？」

お互い経営者だし、そんなに暇な訳でもない。

僕も山崎不動産の社長から、手が空いたら連絡が欲しいと言われている。

長瀬綜合警備保障の仕事が一段落したから、そろそろ連絡を入れな

いとダメなんだが……

「えっと……
お願いが有るのよ。
出来れば相談に乗って欲しいの……
お願いしますわ」

相談？お願い？

嫌な予感がするんだけど？

まさかテレビ局の件かな？

「えっと……
忙しいくなりそうな予感だから、無理かなーって。
駄目かな？」

「駄目です。
例の貸しを返して頂きたいの。
勿論、お礼はしますわ」

結構強引に話を進めて来たな。

まぁ話位なら聞いても良いか……

「うーん、じゃ話だけでも聞こうかな……
それで、電話で事足りる内容かな？」

話が複雑なら、一度会って話し合った方が良いだろう。

「有難う御座います。
これから横須賀中央に向かいますから、昼食でもご一緒して話を聞いて下さらない？」

昼食だと！

桜岡霞、また懲りずにフードファイトを挑むのか？

「分かった！
その挑戦を受けよう。
場所は京浜急行線の汐入駅に有るダイエー前のセンターグリルだ。
米軍仕込みのネイビーバーガーやステーキ各種が質・量共に豊富に有る。
勝負だ、桜岡霞よ。
１２時半に汐入駅改札前で待つ！」

「えっ？
ちょ……何を……」

彼女は何かを言い掛けたが、構わずに電話を切る。

奴との対戦までに一時間も無い。

体調を整えなくては……

ベストなコンディションで挑む為に、トイレの個室に向かった。

出す物を出して、胃と腸にスペースを作らねば！

◇◇◇◇◇◇◇

京浜急行線汐入駅は米軍基地の有る、比較的に外国人の多い街だ。

それ故にドブ板通りと言う米兵相手の商売をする店が連なった商店街が有る。

昔は治安も悪く怪しい飲み屋が多かったが、今は観光地化して歩き易い。

最近はご当地グルメとして、横須賀海軍カレー・ネイビーバーガー等の食べ物や軍港クルージングとして海上自衛隊横須賀基地と米軍基地に停泊している軍艦を間近で見れるツアーも有る。

榎本からフードファイトを挑まれ、比較的お腹周りの緩い服に着替えて直ぐに事務所を出た。

京浜急行線は１０分間隔で快速特急が運行しているので、約束の１２時半よりも早く着いた。

改札を出て周りを見渡せば……

向かって右手側がバスロータリーになっていて、その近くの自販機の前に筋肉が立っていた。

不思議……

体格の良い外国人が多く通っている中で、あの筋肉は存在感が負けてない。

何と言う筋肉！

ジーパンに革ジャン、インナーはラガーシャツかしら？

悪くないコーディネートだが、色合いがカジュアル過ぎるきらいも有る。

あの体格なら、もっと……

あっ、私を見付けらしく手を振ってくれたわ。

笑顔を浮かべ小走りで彼に近付く。

「こんにちは、榎本さん。
カジュアルな服装は初めてね」

彼は自分の服装を見回し

「いや、客先に出向く時は背広だし現場には長瀬綜合警備保障の制服か動き易く目立たない服装にするからね。
今日はフードファイトを挑まれたから、普段着だ」

やはり脳筋グマめ！

彼の胸板を遠慮無く叩く。

バシッと良い音が鳴り響いて周りの人達が、私達に注意を向ける。

「違うわよ！
フードファイトじゃなくて、相談に乗って欲しいの！」

全く衆人環視の中で目立ってますわよ。

毎回思うけど、叩いた私の手が痛いわ。

本気で叩いたのに平然としてるし……

「ん？
分かった分かった。
勝負に勝ったら相談に乗るから。
さぁ行くよ。
予約入れてあるから待たさないからさ」

何時の間にか

「相談に乗って下さい」

が

「勝負に勝てば相談に乗ろう」

になってるわよ？

「お待ちなさいな。
コラ、勝手に話を進めないで……」

スタスタと歩き出す彼の左腕に抱き付く。

丸太みたいに太い腕だ。

「ちょ、おま、くっ付かないで」

この脳筋グマは、見た目と違い照れ屋さん。

だからスキンシップに過剰な反応をするの。

躾(しつけ)的な意味で、スキンシップをする様になったわ。

反応が面白いのよね。

「早くお店に案内しなさいな」

見上げる様にして催促する。

渋々と彼は歩き出す。

きっと優しいから女性に強く言えないのだろう。

バスロータリーを横切り１３４号線を渡ると直ぐにダイエーだ。

「あら、ダイエーの中なの？」

「いや……

ダイエーじゃなくて、アレだよ」

榎本さんが指差した先には、ダイエーの敷地内だけれど独立した建物が見える。

「センターグリル……
あら、お店の前に客車が有るわ」

古風な電車が一両隣接している。

本物かしら？

「センターは駅を表してるんだ。
だから店内も電車に因んだ内装になっている。
ほら、行くよ」

腕に絡んでいるからか、歩き出す時は声を掛けてくれる。

きっと引っ張ったりするのが嫌なのね。

ちょっとした優しさが嬉しい。

オートドアを潜り店内に入ると、８０年代のアメリカがテーマみたいね。

いや、開拓時代かしら？

イマイチ統一感が無いわね……

窓際のソファー席に案内されたけど、流石に窓側を譲ってくれたわ。

でも店員さんとの遣り取りは馴れた感じだわ。

つまり彼のホームであり、私にはアウェーか……

メニューを差し出す彼に対して、沸々と闘志が湧いてきたわ！

どれどれ……

なる程、ステーキ屋さんだけは有り種類は豊富ね。

パスタ系も有るわ。

悩むわね……

彼が手を上げて店員を呼んだわ。

私は未だ決めかねているのに？

「何時もの奴に、バーベキューチキンとコーンサラダ。
それに生を一つ……
いや、桜岡さんも飲む？」

こっコイツ、素面で相談乗る気無いわね？

「勿論頂くわ。
それと彼と同じ物をお願いします」

フードファイトなら、同じ物を食べないと勝ち負けがハッキリしないからね。

「えっ？
此方のお客様の何時ものとは……
７５０グラムのフィレステーキですが！

大丈夫なのですか？」

ウェイターさんが、私のお腹周りを見て不思議そうに聞いてくるけど。

「構いませんわ。
オーダーは以上よ。
但しメニューは一つ置いていって下さいな」

びっくりした顔で、お辞儀をして下がっていく。

たかだか７５０グラムのステーキでビビるなんて！

彼を見れば、何を当たり前な事を的な顔ね。

やっぱり大食い仲間って良いわ。

普通だと不思議な生き物を見る様な目で見るのよ。

私達は珍獣じゃなくてよ！

# 第２８話

四人掛けのソファー席に山のように並べられた料理！

周りのお客さんも注目の中、普通に食事を始める。

やはり７５０グラムのステーキは大きいわ。

成人男性の握り拳位の大きさが有るわね……

「「いただきます！」」

ナイフとフォークで切り分けながら食べ始める。

うん、美味しいわ。

付け合わせのマッシュポテトも野球ボール位のボリュームが有るけど、味はクリーミーね。

多分、ジャガイモを裏ごしして生クリームを混ぜていると思う。

榎本さんを見れば、食べる前に全てを切り分けているわ。

大きな手にナイフとフォークを持って、器用に切り分ける姿は……

躾の行き届いたクマさんみたいね。

暫くは無言で食べる。

ステーキを完食したタイミングは、計った様に同時だわ。

「やりますわね。
この私のスピードについてこれるのは榎本さんくらいよ」

「ふん。
体の容積は半分以下の桜岡さんが良く言う。
勝負はバーベキューチキンだな」

鶏の半身を使い焼き上げたボリューム満点のチキン。
此方の付け合わせは、ブロッコリーにインゲン・ニンニクスライス・人参と野菜が盛り沢山ね。

「まだまだ余裕よ。
では、いただきますわ」

上品にチキンを切り分ける。

榎本さんも器用にチキンを切り分けているわね。

野趣溢れる手掴みじゃないのは嬉しいわ。

ウチも一応は上流階級だし、旦那様のマナーには五月蠅いか、ら？

いえいえ、違うわよ。

落ち着いて、霞。

落ち着くのよ。

ほんの少し動揺した間に、既にチキンを切り分け終えて食べ始めてるわ。

私も負けられないの！

ビーフステーキを完食し、チキンのバーベキューは顎的にキツい。

残りはコーンサラダだけだわ。

お腹は余裕綽々だけど顎が痛いの……

食べる手を止めた私を心配そうに見るわね。

「食べ過ぎて、ぽんぽん痛いの？」

ちょ、ぽんぽんって子供じゃなくてよ。

「顎が、痛いの。
流石に咀嚼する力は普通の女の子なのよ。
この勝負は負けね……」

顎が回復するのを待つのは勝負ではアウト。

私の負けね……

ナイフとフォークをテーブルに置いてギブアップ。

「お腹は平気なんだ。
じゃゆっくりデザート食べますか？

此処のお勧めはラズベリーチーズケーキだよ。
あっコーンサラダは貰うよ」

そう言うなり、私の分のコーンサラダに手を伸ばす。

サラダ自体の量は少ないけど、やはり肉はクマさんの得意分野な訳ね？

次はお寿司かスィーツで挑めば、何とかなるかしら……

見る間にコーンサラダを完食し、生ビールを飲み干す彼を見てリベンジに燃える！

コーンサラダを完食してから、ウェイターを呼びラズベリーチーズケーキと紅茶を二つ注文。

確か珈琲は余り好きじゃないのを覚えてくれていたのかしら？

負けたからには、相談は出来ない。

当たり障りの無い雑談で時間が流れて行く。

次こそは負けないわよ！

◇◇◇◇◇◇◇

今回の勝負はハンデを考えなかった僕に非がある。

つまりは引き分けだ。

そのつもりで彼女のコーンサラダを取り上げ、変わりにデザートを注文した。

デザートを食べながらの会話は、当たり障りの無い雑談だ。

一向に相談を話してこないけど……

ケーキを食べ終わり、紅茶を飲み干せば店を出なければならない。

レシートを持ち席を立つ。

「そろそろ出ようか？
忘れ物の無い様にね」

何か言っている彼女を抑えて、会計を済ます。

結構楽しい食事だったな……

「で？
喫茶店に入る？
それとも事務所に来るかい？」

「えっ？」

おぃおぃ、本題の相談を忘れてないよね？

何時までも話さない桜岡さんに水を向けてみる……

「相談だよ、相談。
勝負はハンデを見込まなかった僕の負けだ。
何か相談が有るんだろ？
この辺の喫茶店は相談をする場所としては不適切かな……」

汐入駅の周辺の喫茶店は……

メルキュールホテルのラウンジしか思い浮かばない。

でもホテルは対外的にマズいだろうな。

彼女は「お茶の間の巫女さん」だから、知名度が高い。

「私の負けでしょ？
同情は要らないわ……」

結構頑なだな。

「完食のタイミングは一緒でしょ？
次は顎の疲れないメニューを選ぼう。
僕の場合は生トマトは苦手だから、これが入っていた時点で負けを認めるけどね」

数少ない食べられない物。

生トマト……

ケチャップやトマトジュース、それに煮込んだりすれば平気だが生

は無理だ。

小学校の頃、当時の給食は今よりグレードが低かった。

トマトなど今の品種では考えられない程、固く青臭かった。

好き嫌いを認めない担任から

「正明ちゃんがトマトを食べないと、他のお友達がお昼休みを遊べないんだよ?」

とか今なら裁判沙汰な強要をされ、同時も嫌いだったトマトを一口で食べて牛乳で流し込んだ……

そして

「ウエッ!ゲロゲロゲロ……」

その担任の顔に向かい吐き出したんだ。

当然、担任は激怒。

親を呼び出された。

同時は学校の先生も体罰が容認された時代。

悪い事をすれば、当たり前に拳骨!

それは教育の範疇なら、素晴らしい事なんだが……

質の悪い教師なんて、何時の時代も居る。

放課後に呼び出された爺さんが、担任に対して説教を始めた。

ただ

「貴方の息子さんは好き嫌いが激しい。
ご家庭でも指導して下さい」

とでも言いたかったのだろう。

しかし説法を生業としている住職に、根拠も無い話が通じる訳が無い。

結局一旦帰ったが、その後に校長が頭を下げにきたらしい。

田舎で檀家衆を抱える住職に、転勤で来た校長や担任が適う訳が無い。

「何を黄昏ているのかしら?」

「いや、子供の頃に嫌いなトマトを強要した担任の顔に吐いたのを思い出したんだ……
それ位トラウマなんだよ」

呆れた顔の彼女と、取り敢えず僕の事務所の方に歩いて行く……

相談事なら周りに聞かれたくないだろう。

だから事務所が一番良いかな?

彼女を伴いドブ板通りを歩いて行く。

最近は観光地化したが、同時の面影を残す店も有る。

ワッペンや刺繍の大将・肖像画の武谷・スカジャンの大熊、名前は知らないが米軍放出品を扱う怪しい店など、アメリカと日本のコラボレーションな商店街だ。

勿論アメリカスタイルのバーも有るが、昼間は閉まっている。

暫くドブ板通りを歩いていると、彼女には珍しいのだろう……

キョロキョロと左右を見回している。

「ねぇ？
大通りは綺麗だけど、脇道は怪しいわね。
何か怖いわ」

こらっ！

腕を絡めるな、腕を……

此処は僕のホームなんだよ。

「ゲームのシェンムーでも舞台になったけど、まだまだ夜は治安が良くないね。
勿論昔に比べたら各段に良いけど、ちょっとしたスラム街な雰囲気でしょ？」

本当は脇道や怪しい店に入らなければ殆ど安全な商店街になっている。

これも地元のイメージアップ戦略と商店街の努力だと思うけどね……

「ふーん……
あっ、あれ！
凄いわね、あれがスカジャンなのね？」

店頭に吊された竜や風神雷神、それに鷹？鷲？の刺繍を凝視している。

「通称スカジャン。
本当は横須賀ジャンパーまたは空飛ぶ東洋の竜が人気だったから……
スカイドラゴンジャンパーの略とか言われてるね」

横須賀では当たり前な事だが、それは地元だからの知識だ。

随分と感心している。

「兄ちゃん、美人な彼女に買ってやれよ。
この揚羽蝶とか女性でも喜ぶぜ」

立ち話を聞いていたのだろう。

商売のチャンスと、すかさず商品を勧めるが……

紫のベースに金糸銀糸で揚羽蝶の刺繍を施したスカジャンは、彼女には似合わないだろう。

見れば桜岡さんも笑顔が固いし……

「いや、また今度考えるよ？」

お断りの決まり文句を言って立ち去る。

その後は此処がネイビーバーガーで有名なハニービーだとか、ドブ板で一軒だけの行き着けの鰻屋だとか紹介しながら横須賀中央駅まで到着。

駅前広場を通り過ぎて坂を少し登った先に、僕の事務所が有る。

ゆっくり歩いても２０分位の距離だ。

二度目となる事務所来訪だが、特に問題は無いだろう……

事務所に戻り応接セットに通してからお茶を用意する。

とは言え普通の日本茶だが、寒い時期には有り難い。

エアコンの暖房を入れたが、暖かくなるのに時間が掛かるからね。

でも石油ストーブは面倒臭いからなぁ……

「粗茶ですが……」

湯呑みを彼女の前に置いて、向かいのソファーに座る。

「あら、ご丁寧に有難う御座いますわ」

チクショウ、やはり見てくればお嬢様だな。
湯呑みを持つ動作も、何か上品だ。
「……ん？何かしら？」
「いや、何でもない。
それで相談事とは何だい？」
彼女の顔を凝視していた事を誤魔化す様に質問を被せる。
桜岡さんは、鞄から何やら書類を取り出して僕に差し出してきた。
Ａ４サイズの紙の束だが、結構な枚数が有るな……
受け取って表紙を見ればタイトルに
「貴方の近くにあった本当に怖かった話２０１１」
と有り、例の梓巫女シリーズの企画書だ。
中を流し読みすれば、有りがちな女性タレントと心霊スポットを巡る内容だ……
しかも事前準備無く、いきなり現地に乗り込みだよ。
普通、その建物の所有者なり管理者に許可を得る筈だけど……
敢えて書類には書いて無いのか、それとも他に意味が有るのか？

場所は八王子市の山中か……

企画書なのに場所の特定も曖昧だし、廃墟の資料や写真も無い。

でもホテル名は書いてあるな。

これなら調べる事は可能だろう。

しかし企画書自体は数枚だ……

これは企画書じゃないな。

その後ろには、何だ？

契約書？

やたら約款が多いし字も小さいな……

ポケットから眼鏡を取り出す。

こんなＥｘｃｅｌなら文字の大きさが４位な文字なんか見えるか！

「榎本さん、まさか老眼なのかしら？」

「違います！

近眼なの、コンタクトは体質的にダメなの。

でも運転免許はギリギリで眼鏡無しで平気だよ」

失礼な物言いの彼女を軽く睨んでから、契約書の約款を読み始める

……

うん、見事な程に責任の区分を明確にしている。
これ、僕も参考にコピーさせて貰おうかな。
余りの文字数の多さに１０分近く読んでいただろうか？
じっと僕の様子を伺う彼女に聞いてみる。
「桜岡さんは、ちゃんと読んだかい？」
「ええ、読みましたわ。
初めて契約書を隅から隅まで読んだわ。
見事に責任が私に有る事になるわよね……」
良かった。
ちゃんと学んでくれたんだな。
契約書のサインをする前に、ちゃんと読んだのか。
「そうだね……
少し桜岡さんに不利な内容だ。
特に現場での責任者になってるよ。
これは君の企画だから、責任の殆どは仕方ないと相手は言ってるね。
でもペラペラの企画書には、君が主体で進める内容じゃないし。
どちらかと言えば、テレビ局が企画から準備・進行・現場での権限が有る。
この辺の一文に……
現場撮影の進行について乙（桜岡霞）は甲（テレビ局）に最大限の

配慮をするって有るよね。
実際は現場の責任者は桜岡さんだけど、テレビ局の立会者が何か言ったら配慮してね！
でも最終的に判断し許可したのは君だから、責任は君持ちだよ。
って意味だよ。
何か有った場合の保障の殆どは桜岡さんだし、事故の損害も相手は請求出来る内容だね。
どうするの？」

契約書は大切だ。

しかし、これは少し酷いと思う……

「……だから悩んでいるのよ。
逆に企画を持ち掛けるか、それとも契約内容を変更して貰うか。
どちらも私だけでは難しいの……
何か良いアイデアは無いかしら？」

縋る様に此方を拝む彼女を見て考える。

下手に強気に出れば、企画自体無くなるか他のタレント霊能力者に替えられるだけだろう。

さて、どうするか……

# 第２９話

フードファイトを挑んで来たと思えば、テレビ局の仕事内容の相談だった……

早く言えば良いのに？

いや、相談を持ち掛けられたけどフードファイトになった？

何故だっけ？

向かいに座る、困った顔をして此方を見詰めるお嬢様を見て思う。

確かにこの内容では、何か有った時に彼女の人生が被害者の補償で終わる内容だ。

幾らお嬢様とは言え、個人で負担するのは辛い。

てか、安全管理の殆どを彼女に押し付ける内容は酷いだろう。

普通に考えて、交渉内容は幾つか思い浮かぶ……

一つ目は、この契約内容をバラすぞって脅す。

勿論、グレーゾーンな部分を法的に指摘する。

発注者の責任の部分をだ。

まぁ、なら結構ですで終わりだな。

他にも売れる為ならと無理をする奴は居るから……

彼女の望む進展は、ちゃんとした除霊のプロセスを踏む事だと思う。

だから2つ目は、逆企画を提案する事だ。

でもテレビ局的に地味な調査とか平気か？

何か彼らを惹き付けるネタが必要だけど……

本物の心霊物件でも宛がってやろうか？

でもテレビ局的に本物はヤバいので、放送ではダミーを混ぜてるって聞いたな。

衝撃映像など半分以上は偽物だとか……

曰く付きの映像の取り扱いが難しいと言う事か？

確かに除霊もしてない写真や動画を無闇やたらと電波に流すのは考え物だ。

「難しいね……

これを不当と突っぱねる事は簡単だ。

けど、なら企画自体を他の方にとか言われて終わり。

桜岡さん的には、除霊のプロセスを踏んだ流れにしたいんだろ？

でも地味な調査はテレビ局的には受け入れ難い。

彼らは視聴率を求めるからな……」

「そうなのよね……
でも出来れば曰く付きと言われてしまった霊の真相を調べて成仏して欲しいの。
これじゃ自宅に土足で踏み込んで喧嘩を売る内容じゃない？」

ちょっと驚いた。

暫く見ない内に、いや結構会ってるけど……

そんな考え方を持ってるなんて！

出来れば彼女の望む展開にしてあげたい。

んーどうするか？

気持ちを切り替える為に、温くなったお茶を一気飲みする……

うん、渋くなってる。

新しいお茶をいれる為に一旦席を立つ。

急須に新しい茶葉を入れお湯を注ぐ。

お茶請けに買っておいた坂倉本舗の豆大福を奮発するか。

「はい、熱いよ。
それと地元の老舗和菓子屋の豆大福だよ」

湯呑みと豆大福を渡して、自分も豆大福をパクリ。

うん、上手い。
この甘さを控えた上品なこし餡が良いんだ。

「んで提案だけど……
テレビでは映さないが、事前に桜岡さんが現地入りをして心霊物件の調査と準備をする。
これは契約書にも
乙（桜岡霞）は甲（テレビ局）の関係者の安全に最大限の配慮をする。
って有るから、逆手に取って事前準備をしないと危険だからと説得させよう。
責任を桜岡さんに押し付ける為の一文だから、向こうも危険と言われれば断れない」

これで行き当たりばったりの出たとこ勝負は回避出来るだろう。

「でも……
それってテレビでは放送されないかもしれない部分ですわよね？」

「確かに編集でカットかダイジェストで少し使うだけかもね。
でも桜岡さんのやりたいプロセスは踏める。
テレビ局は視聴率が重要だ。
だから妥協が必要だよ。
それに君がやりたい事は出来る筈だ」

曰く付きと言われてる原因の霊を助けたい。

なら過程は割り切りも必要だろう。
気がつけば１０個有った豆大福が残り４個だ。
あれ？
僕はまだ2個しか食べてないよ……
彼女を見ても特に口をモグモグさせてないし、僕の倍も食べた様には思えないし。
「ん？どうかしましたか？」
と微笑む彼女の口元は、豆大福の粉が少し付いている。
つまり僕が気付かない内に４個も食べれたのか？
凄いテクニックだ……
「いえ、何でもないよ。
さて事前の調査や準備は出来る可能性は見えた。
後は責任区分だけど……
これは難しいね。
精々が現場では桜岡さんの指示に従う事くらいしかない。
本来危険だから素人は同行させたくない。
しかし番組の企画上、彼女達を同行させないと意味は無いんだよね……
同行する彼女達にも一筆念書をとるか」
彼女達も危険を承知で、この企画を請けだ筈だ！

若しくは心霊現象なんて信じていないか……

でも危険な場所に行くからには、幾つかの基本的な身の振り方と桜岡さんの指示に絶対従う事。

何か怪我や霊障が出ても、事故責任の範疇で。

これ位なら、テレビ局側も交渉に応じるかな？

誰だって自分の危険はお断りの筈だ。

ましてや他人の怪我等に気を使えるかは少ない。

責任をテレビ局側に余りいかない様にすれば、或いは責任区分も緩和されるかも知れない。

これで駄目なら、桜岡さんの方を止めるしかないだろう……

何もテレビ以外が仕事では無い筈だ。

「参加するアイドル達にも、自己責任にするの？
可愛そうじゃないかしら」

「僕には、これ以上は桜岡さんの責任を軽くする方法は考えつかないよ。
アイドル達も売れる為に無理をするんだから……
それで辞退するなら、それまでだよ。
因みに、これ以上の妥協案で仕事を請けようとするなら僕が桜岡さんを止めるから……」

知り合いが不幸になるのを知っていて止めない訳にはいかない。
文句を言うなら物理的に監禁か、呪術的に腹下しでもして動けなくするだけだ。

「なによ、保護者みたいな事を。
でも、どうやって止めるつもりかしら？」

そう言って、彼女は挑発的に微笑む。

「具体的に？
物理的には監禁。
呪術的には下痢。
兎に角、動けなくして止めるよ」

「なっ？
何を言ってるのよ！
それに監禁や下痢って犯罪じゃない」

僕も無言で微笑む。

でもイケメンじゃないから、微笑むが恫喝の笑みになるから困る。

ほら、桜岡さんもドン引きだし……

「それだけ無茶苦茶な契約と仕事の内容って事だよ。
どうする？
交渉するなら同行するよ。
もう乗りかかった船だし、目立ちたく無いけど君だけじゃ交渉は無

理だ！」

本当はテレビ局など関わりたくもない。

でも……

このお嬢様一人じゃ無理だし、交渉だけなら……

甘い考え方だな。

「箱」に関わってから地味に生きてきたが、ここで心変わりするなんて。

自然と口元が緩む……

「何よ、怖い顔をしたと思ったら微笑んで。
本当にお父様みたい。
良いわ。
その条件で交渉しますわ」

桜岡さんの説得は一応の成功か？

彼女はテレビ局への交渉には同行する旨を伝えたら、帰っていった。

日時を決めて連絡をくれるそうだ……

彼女を玄関から送り出して考える。

時刻は既にオヤツの時間を大分過ぎていた。

随分話し込んだものだ。

湯呑みや豆大福のお皿を片付けて、自分のデスクに座る。

桜岡さんには話していないが、交渉は揉める。

問題は霊的な被害の補償と、普通の労災との区分けが今回の交渉のキモだ！

どの道、除霊の危険を話しても……

そのハプニングもテレビ局的には美味しい。

だから先程の内容では纏まらない。

ならば、どうするか？

簡単な事だ。

現地に先入りして準備・調査。

これを何としても約束させる。

最悪はテレビ局には関係無く調べても良い。

それと責任区分を普通の労災と霊的な傷害に分ける。

これは霊能力者だから、霊障は引き受けるが一般的な怪我等はテレビ局側の責任者に取らせる。

少し大変だが、難しくは無い筈だ。

彼らだって普段行っている事だから……

それさえ契約書に明記してしまえば、コッチのモノだ！

後は調査・準備の時に除霊迄終わらせてしまう。

これなら（過去に）曰く付きだった廃墟に、単純に肝試しに行くだけだ。

これで僕達の手に負えない奴が居たら、その時は強い力を持つ霊が居る。

廃墟に近付けば、僕達では対処出来ない。

どうするんだ？的にして、責任を相手に委ねれば良い。

もし強引に進めれば、その時の責任は全て向こう持ちだと約束させ一筆とるか上司に連絡させる。

彼女の負担は減るだろう……

僕の負担は増えるけど。

彼女に内緒の方向性は決まった！

後は裏付けと交渉を有利に進める準備だ。

僕は携帯のアドレス帳から、爺さんの代からお世話になっている松

尾法律相談所を探す。

相続の時にお世話になった個人弁護士だが、本来は企業相手の相談が主な仕事内容だ。

だから仕事の契約の時に同席して貰い、アドバイスをしてもらう。

大抵は弁護士を同席するとビビる！

これはグレーゾーンな契約内容を理解して結ぼうとしている相手には覿面（てきめん）だ！

松尾先生は同郷で爺さんの後輩だ。

御年７３歳だが現役で働いている。

小柄で頭髪は真っ白、短く刈り込んだ髪型に鋭い眼差しの老紳士だ。

和服を好み、ちょっと目にはヤクザな大親分な感じがする。

僕を子供の頃から知っていて、やれオシメを替えたとか恥ずかしいネタを知っているんだよね。

数回のコールの後、電話が繋がった。

「はい、松尾です」

「松尾先生、ご無沙汰してます。
榎本です」

強面だが、話し方は丁寧で優しいんだ。
だから電話で話した後に会うと、みんな驚く。

「ああ、正明君か。
久し振りだね。
急に電話をするなんて、何か有ったかな？
それともやっと嫁さんを見付けて、紹介してくれると嬉しいのだが……」

松尾先生は死ぬ前に僕の嫁さんと子供を見たいと煩く言うをだ。
だから頻繁には連絡をしないんだけど……

「いえ……
少し仕事の契約について問題が有りまして。
出来れば交渉の場に同席をお願いしたいのです」

出来ればテレビ局に呼ばれたら、その場で話を纏めてしまいたい。
即断・即決を出来る準備をしておきたいんだ。

「ほぅ！
厳しく教えた筈の正明君から、そんなお願いとは。
余程の事かな？
詳しく聞こうか」

「実は知り合いがテレビ局と契約をするのですが……」

松尾先生が同席してくれれば、問題は無いだろう。

後はコピーした、この企画書の物件を調べられるだけ調べよう。

上手くすれば、交渉の必要の無いガセネタの廃墟かも知れないから……

そんな淡い期待は直ぐに霧散した。

コレは、厄介な建物かも知れないぞ……

◇◇◇◇◇◇◇

帰りの電車の中で吊革に捕まりながら、先程の相談事を考える。

最初は渋った癖に、結局は最後まで面倒を見てくれそうな感じ。

あれだけ目立つ事を嫌がっていたのに、テレビ局まで一緒に行ってくれるって……

榎本さんにとって、私の位置って何なのかしら?

同業者?

大食い仲間?

それとも友達?

少なくても恋人ではないわよね。

告白してないし……

いや、その、えっと、告白って私は何を考えているのかしら?

真っ赤になって首を激しく振ってしまった為に、周りの注目を集めてしまったわ……

でも本当に、彼は私の事をどう思っているのかしら?

奇態を晒し恥ずかしくなったので、次に停車した駅で降りた。

金沢文庫駅……

駅自体は普通だが、ホームの反対側に車両を待機させる引き込み線が何本も有る鉄道マニアでなくとも楽しめる場所。

普通の電車だけでなく、モーターカーと呼ばれる工事用の黄色い作業車はレール削成車?

青色の独特な形の電車も有る。

アレは走りながらレールの傷を測定し研磨するらしいわ……

暫く眺めていると次の快速特急が来たので乗り込む。

やはり適度に混んでいて座席には座れないが、どうせ次で降りるのだから扉脇の手摺に捕まり外を眺める。

ボーッと眺めていると、やがて電車は京急上大岡駅に到着した。

さて、事務所に帰ったらテレビ局に連絡して日程調整ね。

榎本さんも今週中なら午前・午後開いてるけど、一応何日か候補をあげてくれって言ってたし……

これから忙しくなるわ。

# 第３０話

東京都港区高輪に有るテレビ局本社。

例の企画書と契約書の件で打ち合わせのアポを取り、現在は榎本さんと待ち合わせ中。

京急品川駅を降りるとＪＲ品川駅と改札が隣接していて、その構内に有るユニオンの前で待ち合わせ。

今日の私は仕事の打ち合わせと言う事も有りビシネススーツを着込んでいる。

黒のタイトなスカートにジャケットをチョイス。

首に巻いたスカーフがアクセントよ。

コートはバーバリーの新作にした。

確認の為、左右を見ても可笑しくはないわ。

暫く待っていると京急の改札を見慣れた筋肉の塊が？

あれ？

あれれ？

見慣れてない法衣を着込んだ榎本さんと、小柄ながら着物を着たご老人が近付いて……

あの着物の柄は江戸小紋染めかしら？

慣れた感じで着物を着こなした眼光鋭いご老人だわ。

誰かしら？

「こんにちは、桜岡さん。

此方は僕がお世話になってる弁護士の松尾先生だよ。

先生とは子供の頃からの付き合いだから、安心して信用して欲しい」

いきなり弁護士のお爺様を連れてくるなんて！

聞いてませんわよ。

「あっ、えっと……

初めまして、桜岡霞と申します」

取り敢えず、お辞儀をする。

榎本さんの子供の頃からの知り合いって？

家族的な付き合いが有るって事なのかしら？

お爺様は失礼に感じない程度の視線で私を見ると、突然榎本さんの脇腹に肘鉄を喰らわせた！

流石の筋肉バカな榎本さんも顔をしかめたわ。

でも、あれで顔をしかめるだけなの？

ガスっとか、結構良い音がしたわよ。

「なんだ正明君。
こんな綺麗なお嬢さんを紹介するとは、コレか？
都会に出てから体ばかり鍛えて筋肉ばかり付いたが、ちゃんと彼女を捕まえたのか」

カッカッカ、と高笑いをするお爺様。

コレ？彼女？

私って榎本さんの中では、そういう位置付けなの？

「いえ、お爺様。
私達はそんな関係では……」

「爺さん、彼女が困ってるだろ。
ごめんね、桜岡さん。
テレビ局との交渉だけど難航しそうだからね。
本職の弁護士を呼んだんだ。
あと企画書の廃墟だけど色々調べたら、かなりヤバいんだ。
だから僕も僧侶として、いち霊能力者として助言をするよ」

私と彼のやり取りを楽しそうに見ているお爺様。

周りの通行人も私達を注目し始めたわ。

「えっと、テレビ局にはタクシーで行きます。
此方ですから……」

品川駅のバスロータリーの一角に有るタクシー乗り場に案内する。

私も「お茶の間の霊能力者」として有名だし、彼は法衣を纏っている。

ムキムキの短髪筋肉和尚様状態だわ。

しかも、ただ者でない感じのお爺様も居る。

目立つ事は確実だわ。

助手席に私が乗り込み、後部座席に彼らを押し込む。

運転手さんに行き先を告げると、タクシーはゆっくりと走り出した。

◇◇◇◇◇◇◇

関東近郊の八王子市の山中に有る廃墟。

地元では有名だ。

日本中の経済が麻痺したバブル末期に完成し、バブル崩壊と共に破綻し廃墟となったホテル。

これを管理する会社が倒産し、競売にかけられた物件だ。

しかも立地も悪く近くに観光スポットも無い。

序でに温泉も出ない。

これでは観光客も寄り付かないだろう。

このホテルの売りは何だったんだろうか？

競売後も買い手が付かず、管理会社も交通の便の悪いこのホテルを半ば放置している。

買い手もままならない建物に金を掛けて警備はしない。

入口を閉鎖した程度で、絶賛放置中……

だから、この建物及び周辺での事故・事件は多い。

先ずは何時もの様にパソコンで検索する。

キーワードは

「八王子　山中　廃墟　ホテル」

を入力。

これだけで出るわ出るわ。

ヒット件数は3万をこえる……

この中で代表的な物を幾つかピックアップする。

真偽は別としても、ホテルで自殺が2件。

これは営業中と廃墟化してから1件づつだ。

近くで遭難・行方不明者が3件。

誘拐殺人の現場の山荘や、死体遺棄の場所も近い。

んー、曰く付きだけなら曰く付き捲りだ……

次はグーグルマップを開き、周辺の神社仏閣や史蹟・古戦場の有無を調べる。

近くには神社のマークが有るが、名前は分からないな。

こんな山中の神社だし、実際に行かないと無理かもしれない。

神主さんも常駐してるかも不明だ。

関係は無さそうだが、面白いのは運行を中止したロープウェイの廃墟が有る。

これだけでも横須賀のマンションよりも調べる事は多いな……

次は廃墟としての検索だ。

キーワードは

「八王子　廃墟　ホテル　探検　画像」

を入力。

廃墟探訪や廃墟探検、または廃墟マニアのブログに写真付きで探検記録が載っている。

何件かのサイトには、かなり詳細に探検した様子が書かれていた。

エントランスから客室、大広間に厨房。

それに大浴場に機械室や屋上までを探索している。

パンフレットや顧客名簿、それに備品類まで残されていた。

夜逃げに近い状況だな……

流石に立地の関係で浮浪者等は居ないし、悪戯に来る連中も少ないのだろう。

さほど中は荒らされていない。

もっとも公開は5年も前だから、現在は不明だ。

気になるのは２００６年の冬を最後に、何処のサイトにも写真や探検記録が無いんだ。

この手の廃墟は年数が余り経ってなくて、マニアの間では評価が低い。

しかし掲載された写真を見る限りでは、落書きは破壊活動は少なく保存状態は良好そうだ。

中には客室の家具や厨房の機器類も残されたままだし、機械室等も手付かずで残っている。

こういう物件を好んで探検する連中も居るのに……

これは判断が難しい。

訳有り曰く付きで廃墟マニアが寄り付かないのか、単純に廃墟として魅力が足りないのか。

最後は本命の心霊スポットとしての検索だ。

キーワードは

「八王子　ホテル名　心霊　スポット」

を入力。

此方もヒット件数は８０００件をこえた……

中でも古参の心霊スポットサイトに、興味深い記述が有った。

「深夜このホテルの客室から呻き声が聞こえる」

「地下の機械室で自殺した男の霊がホテルを徘徊している」

「ここの大広間で写真を撮ると必ず霊が写る」

「深夜2階の廊下を赤ん坊がハイハイしていた」

「実はホテルの敷地内に有るお稲荷様がヤバい」

「ホテルの物を持ち帰ると携帯に電話が有る。
曰わく持ち帰った物を返してくれ、と」

最後のは良く有る作り話だな。

携帯電話が使えなくなったり、妙なノイズや画面の乱れは有る。

しかし通話は聞いた事が無い。

それを除いても多彩な心霊現象だ！

男と赤ん坊の霊。

呻き声は上記のどちらかと関係が有りそうだ。

大広間の心霊写真は、それ以外の霊も引き寄せられているのか？

最後のお稲荷は危険だ。

伏見稲荷大社を総本社とする稲荷神を祀るお稲荷様は日本古来の神様だ。

赤い鳥居に白い狐のお稲荷様は、誰でも一度は見た事が有る筈だ。

全国に6万を越えるお稲荷様は、企業やホテルが屋敷神として祀る

事が多い。

これを倒産後に放置していたら大変だ！

稲荷神は真言密教ではインドの女神ダーキニーと習合させて広めた。

つまり羅刹や刹那の如く災いの神・祟り神の一面も持つ。

しかも勧請の方法が簡易な申請書だけで出来るんだ。

逆に言えば強力な稲荷神が住まう事は殆ど無い。

厄介なのは信仰あつく祀られると神格が上がる。

その後で無碍に扱えば、途端に祟り神だ！

これを真っ向勝負は負けるだけだろう。

仮に神格の低い動物霊とか他の良くない霊が社に入り込んだとしても強力だ。

出来れば現地で先に調べたいが時間が無い。

明日の午後に桜岡さんと待ち合わせをして、テレビ局で打ち合わせだ。

嫌な予感がする……

霊感か第六感か知らないが、この件に関わるのが凄く嫌な予感がするんだ。

何故だろう？

仕事的な意味でなくプライベート的な意味で、嫌な予感がするんだ。

しかし乗り掛かった船だし、桜岡さんを放っておく訳にもいかないからな。

頑張るしかないか……

◇◇◇◇◇◇◇

初めてくるテレビ局！

芸能人に会えるかと見回すが、特に知った顔は居ない……

「ちょっと、榎本さん。
落ち着いて下さいな」

そう窘（たしな）められてしまった……

まぁ隣にお茶の間の霊能力、桜岡霞が居るけど見慣れてしまったし。

アポを取っていた為か、桜岡さんも認知度が高いのか受付で彼女が記帳しただけで中に入れた。

受付から連絡を受けた私服姿の若者が案内をしてくれて、第８会議室と掛かれた部屋に案内された。

６畳程度の広さで、小会議室といった所か？

８人掛けの会議テーブルが用意されていた。

暫く待っていると、先程の若者がペットボトルのお茶を配りに来て、また待たされる……

「なぁ、桜岡さん。
何時も待たされるのかい？」

パイプ椅子に座り、お茶を飲むのも飽きたので彼女に話題を振ってみた。

「すみません。
わざわざ同行して貰いましたのに……
普段は此処まで待たされた事は無いのですが」

既に１５分以上は待たされているが、此方も５分前には来ているからな。

「正明君。
落ち着きが無いぞ。
慌てる乞食は貰いが少ない。
果報は寝て待て、だ。
なに直ぐに来るだろうよ」

いや爺さん、ペットボトルをベコベコ鳴らせて言う台詞じゃないぜ。

結構苛ついてるだろ？

「爺さんもな。
その原型を留めてないペットボトルを良く見ろよ」

意外に短気なんだよな。

本人は認めないが、一般的な基準では短気だよ。

「ん、ああ。
儂を待たせた奴を思ってな。
ほら、こうじゃ」

勢い良くペットボトルを潰す。

「榎本さんの筋肉なら、もっと潰れないかしら？」

桜岡さんも悪乗りしてきたか？

仕方無く渾身の力を込めてペットボトルをねじ切る……

結構簡単に潰れたな。

哀れペットボトルよ、昇天しておくれ……

こんな漫才を繰り返していると、漸く担当ディレクターが現れた。

かれこれ２０分程待たされた計算だ！

「霞ちゃーん、お待たせー。
前の打ち合わせ延びちゃってさー。
あら、此方の2人は？」

多分４０代前半だろうか？

細身で１７０センチ程度の身長。

赤いポロシャツに白のチノパン。

首から社員証をぶら下げた七三分けの男だ。

微妙に茶髪だし、全体的に軽い感じがする。

語尾を伸ばす変な話し方のディレクターが、此方を値踏みする様に見詰める。

パイプ椅子から立ち上がり、見下ろす様にして自己紹介をする。

「僕は桜岡さんの知人で、真言宗の僧侶をしています。
此方は松尾先生です。
個人で法律事務所をやっています」

ディレクターも流石に驚いた様だ。

「ほぅ！
霞ちゃーん、凄いね。
格闘家みたいな坊さんに、ヤクザの親分みたいな弁護士さんですか？
で、彼らが同行した目的はなんだい？」

中々大した物だ。

威嚇を含めた自己紹介をかわし、的確な表現で僕らを表す。

これがテレビ局のディレクターか……

「えっ、と……

その、企画書の内容と契約書の件で」

途中で彼女の言葉を遮る。

「ああ、桜岡さんから相談を受けまして。

八王子市山中の廃墟を撮影するとか？

あの廃墟を何故、舞台に選んだか聞かせて頂きたい」

チンピラにガンをくれる様にディレクターの目を見詰めながら質問する。

彼は、テレビ局は何処まで知ってるのだろうか？

ディレクターは

「ああ、自己紹介が遅れまして。

西川と申します。

お坊様は、あの廃墟をご存知で？」

少しだけ動揺したようだ……

でも落ち着いているな。

「ええ、ある程度は。
なので何故、あの廃墟を撮影したいのかお聞きしたい」
重ねて質問する。
「えー、我々は毎年の様に心霊スポットを紹介する番組をしてまして……
その中で、視聴者からのリクエストみたいな葉書や手紙が来るんですよ。
中でも、あの廃墟が凄いとか怖いとかが多くて。
ならば、今売り出し中のアイドルとお茶の間の梓巫女桜岡霞をコラボすれば売れるんじゃね？
と思ったんですよ」
なんと、原因は視聴者からのリクエスト？
そんな偶然が有り得るのか……

# 第３１話

桜岡さんにテレビ局から仕事のオファーが来た。

ネットで調べただけでも、ヤバい感じだ。

僕の霊感も第六感も危険だと訴えている。

そもそも仕事の契約自体が不利な内容だ……

これを何とかする為に、松尾の爺さん迄引っ張り出したのだが。

ディレクターは視聴者からの葉書か手紙で安易に決めたと言う。

これは本当の話なのか？

兎に角、情報が少ないんだ！

◇◇◇◇◇◇◇

テレビ局の会議室で、桜岡さん・僕・松尾の爺さんと向かい合わせに座るディレクター。

名前は西川と言ったか……

「なる程、視聴者からの手紙で廃墟の存在を知ったのですか……
しかし少々不用心ではないですか？
企画書には、準備・調査の無いスケジュールですよ」

予算が無いから適当に！

では済まされないのだが……

「えっ？
事前に調査ですか？
何も無い様にするのが、其方さんの仕事では？」

惚けているのか？

それとも本気なのか？

「失礼ながら西川さんは霊の存在について、どうお考えですか？」

基本的な質問をする。

肯定派か否定派か？

それだけ分かれば対応は幾らでも有る。

「えっ私ですか？
えーっと、お坊さんの前でアレですが居るんですかね？」

そう言い放った表情は、否定派な感じだ。

なる程、危険性を信じてないから普通のロケみたいな感覚なのか……

僕は盛大に溜め息をついた。

「ふーっ……
僧籍に身をおく僕が居ないなどと言えましょうか？
我々は死者の魂を極楽浄土に送るのが仕事。
居ないと言うのは、仏教界全体を否定なさる訳ですな」

大体、人が死んで魂を極楽か地獄に送らないと現世は魂で溢れ出してるって！

「いえいえ。
そんなつもりは無いですよ。
ただ見た事無いのに信じろってのは、乱暴じゃないですかね？」

見れば信じる、か……

内心は僕らを馬鹿にしているんだろう。

でも……

こんな奴が、例え見間違いでも霊を見たってなると盲信的な肯定派になるんだよな。

何でもかんでも心霊現象に結び付けるから、余計に怪しくなるんだ。

肯定派だからって、僕らの味方にはならない場合が多い。

逆に邪魔なんだよね。

「話を契約内容に戻しましょう。
西川さんは心霊スポットに行く事を前提に企画を練られた。
つまり霊が居るかも知れない場所にアイドル達を送り込むから、保険で桜岡さんに仕事を依頼した。
で、良いですよね？」

幽霊の居る・居ないは、話が荒れるだけだ。

政治・野球と同じに交わる事がない平行線の不毛な言い合いだから。

だから「居るかも」と言い換える。

素直に頷いたな。

「そして、この契約書には桜岡さんはテレビ局のスタッフやアイドル達を守る事に全力を尽くさなければならない。
ならば彼らの危険を減らす為に、事前に調査・準備は契約内容に則った事。
これを不当に止めさせるのは、契約違反ですよね？」

どんな仕事でも準備は必要だ。

まして安全が掛かってるんだぞ！

「いや、でも準備って？
何をするんです？」

僕は桜岡さんに視線を送る。

これは彼女が言わなくては駄目な内容だ。

僕と目が合うと、小さく頷いて話し出す。

「先ずは今回の廃墟について、出来る限り調べます。
何故、ホテルを廃業しなければならなかったのか？
それから周辺を隈無く調べます。
お寺や神社、庚申塚やお地蔵様。
霊が出ると言う事は、何か原因が有る筈なんです。
それを調べてから、実際に廃墟に入って調査します」

うん、良い手順だ。

僕もネットで調べただけだが、幾つか彼女の知らない情報が有る。

「霊とは、悪霊と言い換えても構いませんが誰かに縋りたいのです。
恨みの元凶に復讐に……
とか考えがちですが、実際は波長が合えば彼らは誰でも良いんですよ。
だから、今回の心霊スポット巡りは危険なのです。
テレビ局のスタッフやアイドル達を守る為にも、桜岡さんは事前調査を要求したんですよ。
勿論、現地に居る人だけが危険じゃない。
彼らに理屈は通用しませんから、貴方も危険かもしれません。
もっとも僕らは現地の人達は守りますが、他は知りませんよ」

卑怯な言い方だが、責任範囲外の連中を守る必要は（契約上は）無い。

「いや、それは……」

霊を信じていなくても、自分に被害が及ぶと聞けば弱気になる。
これって霊感商法の手口だ。

「いや別に脅かすつもりはありません。
安心して下さい。
現地スタッフは必ず守ってみせましょう」

そしてお前以外は守ってみせると言う。

一人だけ仲間外れの心理だ。

「ちょ、お坊さん！
私の安全は？」

そして駄目押し！

「僕が一番心配しているのは、この廃墟が……
まだ現役のホテルとして営業していた時に勧請した稲荷神社の事です。
バブル当時は賑わっていた高級ホテルだ。
さぞ、稲荷神も手厚く祀られていたでしょう。
しかしホテルは倒産……
廃墟と化したホテルに残された稲荷神は、最悪の場合。
良くないモノに変化してるかもしれない。
霊獣白狐、扱いを間違えれば祟り神になります。
僕は……
これらを事前調査しないなら、桜岡さんをどんな手を使っても必ず止めますよ。
誰か他の人にやらせれば良い」

本命の稲荷神の話題を振る……

正直な所、僕も関わりたくないからな。

この交渉が拗れても、最悪は構わないんだ。

「正明君、彼を追い詰めるな。
君、実はこの仕事が危険だから先方から断らせるつもりか？
なぁ西川さん。
幾ら霊を信じていないと言っても、この会社にも屋上に稲荷神を祀っているじゃろ？
あれを不当に扱うのと同じ危険が有るんじゃよ。
霊獣白狐、神として崇められた存在を敵に回すんだ。
多分、まともな霊能力者なら断るぞ。
正明君も桜岡さんが危険だから同行したんだ」

爺さん、ナイスフォロー！

桜岡さん、僕を感激した顔で見ない！

西川、僕を複雑な顔で見るな！

「榎本さん……
私の為に、そこまで考えていたのですか？」

「全く若いもんは老人をヤキモキさせおって。
幸せになれ正明君。
と、言う訳じゃ。
西川さんとやら……

今回の件はキャンセルじゃな。
若い二人を祝福してくれたまえ」

カッカッカッカ！

とか高笑いして、水戸黄門裁きみたくまとめるなー！

「爺さん、水戸黄門じゃないんだ。
話をまとめるな！
桜岡さんも、まっ良いか的な顔しない。
貴女の仕事でしょ？」

流石は弁護士だ。

危うく納得する所だったぜ！

いや、仕事は断れるから良いのか？

でも流れ的に、桜岡さんとお付き合いが始まる感じだぞ？

取り敢えず咳払いをコホンとひとつ……

「僕達はちょっと調べただけでも危険な廃墟に、準備無く行こうとするのを止めたいのです。
テレビ的に地味な調査ですが、他のロケでも下見とかするのと同じですよ。
それと現在の管理者には撮影の許可を貰ってるのですか？」

複雑な顔で黙り込む西川さんに話し掛ける。

「ん……
勿論、撮影の許可は取ってますよ。
実は管理者の方から手紙を貰ったんですよ。
何でも地元でも有名なお化け廃墟だから、一度取材に来て欲しいって。
普通は管理者や所有者と揉めるじゃないすか？
それが向こうから提案してきたんだ。
だから渡りに船ってね」

管理者？

所有者じゃなくて？

自分の管理する物件の資産価値が落ちる……

いや、価値なんて無いから話題作り？

でも何かが引っ掛かるな。

何故、所有者じゃなくて管理者……

わざわざ廃墟に呼ぶ意味。

ギャラだって大した額じゃないだろう。

「さて、西川さん。
どうします？
桜岡さんに仕事を依頼するなら、事前の調査と準備の費用と日数は必要だ。
それと心霊絡み以外の保障は責任区分から外して下さい。

それは一般的な部分だから、発注者側の責任だ。
あとは……
現場の最終的な決定権。
例えば危険と判断して、中止に出来るのは誰か決めて頂きたい。
勿論、その人が責任者だから責任取るんですよ。
それはテレビ局側から出して頂かないとね」

桜岡さんに仕事をさせるなら、この条件を飲め！

そう言う意味を込めた。

「うーん、私じゃ即決は出来ませんね。
お預かりして、後日に返事をさせて下さい」

うん、その通りだよね。

「確かに、そうですよね。
松尾先生から、何か有りませんか？」

「いや、儂の出番は返事次第じゃな。
で？
どれ位で返事を貰えるかな？」

「一週間以内には、多分平気かと……」

まぁ妥当な線だよね。

「桜岡さんは？
他に何かないかな？」

「私は……
私が言う事は無くなったから平気ですわ」
では長居する必要も無くなったかな？
「では西川さん。
宜しくお願いします」
そう言って、今回の話し合いは終了した。
色々と問題は有るが、初回だからこんな物かな？
受付で貰ったバッヂを返却し、テレビ局を出る。
行きと同様にエントランスに待機していたタクシーに乗り込む。
暫くは誰も無言で、ただタクシーの運転手の振る話題に一言二言、
僕が応えるだけだ……
品川駅に近付いた辺りで爺さんが
「運転手さん、駅前で喫茶店は有るかな？
静かな雰囲気が良いんだが……」
「そうですね。
国道沿いに有るルノアールなら、広くて静かですよ」
「桜岡さんも良いじゃろ？
少し話してから解散しようか」

「はい、お祖父様」

お祖父様？

これだからお嬢様は困るんだ。

コレがお祖父様だって？

文句を言っても鉄拳制裁だから黙っておく。

ルノアールは駅から2分もしない好立地だ。

店内は広くて、基本的にソファーだ……

黒い革張りのソファーに深々と座りこむ。

何故か隣には桜岡さん。

向かいが松尾の爺さん。

店員が来て、水とオシボリを配っている。

「えーアイスコーヒーと……

爺さんと桜岡さんは？」

「儂はホットだな」

「私はカフェモカを」

暫くは、水を飲んだりオシボリで顔を拭いたりしてオーダーが来る

のを待つ。

ひと通り品物が来てから、爺さんが話し始める。

「さて、正明君。
どうなんだい？」

また漠然とした質問だなぁ……

ガムシロップと格闘している僕に質問を振る。

「どうって？
アレは無知故に危険を考えられないタイプだな。
大体、管理者からの手紙って怪しいだろ？
どうして所有してる物件を曰く付きにしたいんだろう？
普通は変な噂が立つのを嫌がる筈だよね」

僕的には、その管理者が怪しいと思う……

「榎本さんが危険と思う程なの？
危険なら、今回の仕事は諦めても……」

「おやおや、この筋肉馬鹿が心配か？
全く体ばかり頑丈で困った馬鹿息子みたいな物なんだが、心配している娘がいるとはな。
桜岡さん、この筋肉馬鹿をお願いしますぞ」

変な話をして頭を下げる爺さん。

おぃおぃ……

「心配なのは桜岡さんだろ？
あの契約じゃ仕事は無理だろ。
でも、かの感じじゃ上手くいくとは限らないな……」

腕を組んで悩む僕を見て、クスクス笑う彼女。

「何だよ、笑ってさ」

「いえ、喫茶店に法衣を纏った榎本さんは浮いてますわよ。
周りの方もチラチラ見てますし……
まるで初めて会った帰りに寄ったファミレスの時と逆ね。
あの時は私が巫女装束だったけど、今思えば確かに浮いてたわね」

嬉しそうに笑う桜岡さん……

そう言えば、前は巫女装束の彼女と深夜のファミレスでファーストバトルをしたっけ……

あの時も引き分け。

居酒屋も引き分け。

ステーショングリルも引き分け。

次はフルーツパーラータカノ辺りで勝負を……

「なんじゃお前さん達は、そんなプレイをする仲なんかいな？
もう結婚しちゃえＹＯ－！」

親指立てて嬉しそうにホザきやがった！

無駄に若者言葉にアンテナを張ってる爺さんの、場違いな発言にドッと疲れたんだ……

「本当に、もう嫌だよ……
疲れたんだ……」

## 第３１話（後書き）

これで連続更新は一旦終わりです。

３日に１話程度の更新スペースになりそうです。

リアル仕事が本気で忙しくなりました……

完結まで頑張りますので、宜しくお願いします。

# 第３２話

ちくしょう、舐めやがって……

今回のはヌレヌレのスケスケしか能がないお色気巫女と、売り出し中のイマイチな二線級の女達を集めた低予算な企画なんだぞ！

それを弁護士やら筋肉坊主を連れて来やがって……

準備・調査だと？

パッと行ってパッと撮影しろってんだ。

全くイライラするぜ。

デスクの上には吸い殻で山盛りの灰皿。

そこに無理矢理くわえていた煙草を押し込む……

飲みかけの缶コーヒーを飲み干して、また煙草に火を付けた。

イライラを解消する為に、深々と煙草の煙を吸い込む……

「ふーっ！」

少しだけ気持ちが落ち着いた時にＡＤが駆け寄って来た。

お前も少し落ち着けよな。

「西川さん、分かりましたよ。
あの坊さんは警備会社や不動産屋のお抱えの拝み屋ですよ。
坊さん＋筋肉で有名です！
直ぐに分かりました。
榎本心霊調査事務所を開業してます。
爺さんの方は個人で弁護士事務所を開業してます。
松尾弁護士事務所。
こちらの専門は企業間の契約トラブルですね」

メモ書きを差し出しながら、興奮気味に説明する。

渡されたメモを見ながら説明を聞いているが……

ほう！

それなりに有名なんだな。
しかも本物の霊能力者に契約専門の弁護士か。

やり難いなぁ、全くよ。

「で、例の廃墟も調べたのか？
何かヤバいらしいぞ？
全く、ちゃんと調べろよ」

くそＡＤめ！

私に呪いだか祟りだかが降りかかるのは、お断りなんだよ。

「えっと……
手紙をくれた管理者の方とは連絡が取れないっす。

でも留守電は入れてありますから。
ネットで調べたんですが、霊の目撃情報は多いですね。
坊さんの言うお稲荷様の情報も確かに有りました。
どうします？」

あの筋肉坊主、マジで仕事を断られても構わない話運びだったな。

つまり相手も厄介と思ってるのか？

つまり本物の心霊現象を捕らえる事が出来るのか？

「よし！
特番のコメンテーターを何人か切って予算を浮かせるぞ。
ひな壇芸人とか要らんだろ？
浮いた金で事前調査をさせよう。
だが、その様子も全て撮影しろ」

本物の拝み屋の手順だ。

何かに使えるだろう……

後は責任区分だが、心霊関係以外なら何時もの事だからな。

会社の一括労災の契約範疇で何とかなるか……

「ＡＤちゃん。
この企画練り直すから関係者集めて！
今回は面白くなるぞ」

本職坊主にエロチック巫女、売り出し中の女達ならお色気を出させ

ても嫌とは言えないだろ。

元々モデルと言っても下着メーカーとかにも所属してる連中だ。

パンツ位は見せ慣れてるだろ？

でもゴールデンだから、微エロで止めないとな。

チラチラで終わりか？

テレビ放送で視聴率が取れたら、特別編集してビデオ販売するか？

なら過度なお色気は、そっちで見せれば売れるだろ？

何たってホラーにはエロチックはセット販売だ。

大抵映画での最初の被害者は、イチャイチャしてるカップルだしな……

よし！

新しい企画の基本方針は決まりだ。

一時はイライラしたが、次善の策としては悪くないぞ……

「西川さーん！
関係者集まりましたよー」

「さて、ヌレヌレ梓巫女・桜岡霞の最新作はテレビとビデオの二本立てで行くぜ！」

要らん所で要らん企画は進行し始めた……

◇◇◇◇◇◇◇

あれから榎本さん達とは喫茶店の前で別れて、今は一人で電車で帰宅途中。

午後の3時過ぎとは言え電車内は、それなりに混んでいる。

扉部分の手摺りに捕まり窓の外をボーっと見ながら、先程の事を考える。

彼は番犬……

いえ番クマとして、本当に頼りになるわ。

まさか弁護士のお爺様まで連れて来てくれるとは……

それに事前にホテルの事も調べていてくれた。

契約内容を変更しなければ、私を止めるって……

何故、そこまでしてくれるのかしら？

私が大切だから？

すっすす、好きだから？

いえいえいえ、あの見た目クマさんは妙に優しいからもしかしたら心配してくれただけ……

今回の件をもし請けるならば、少し行動してみましょう。

でもでも……

こんなに心配してくれるのだから、少しは期待しても良いわよね？

結構な美人が電車内でクネクネしながら赤面してる姿は、車内の人達の注目を集めていた。

「嗚呼、美人なのに残念な娘なんだなー」

「妄想癖が有るのか？」

「でも赤面する美人は良いものだ……」

乗客の心の突っ込みは、意見がかなり割れていた。

◇◇◇◇◇◇◇

此方は桜岡さんと品川駅で別れたオッサンと爺さん。

松尾弁護士事務所は東京都大田区平和島に有る。
行きは事務所で合流し電車で品川駅に向かったが、帰りはタクシーを利用している。
やはり筋肉坊主は悪目立ちをするから……

「正明君、桜岡さんだったか。
なかなかの美人でお嬢様な感じだな。
アレは育ちが良いぞ」

流石は弁護士！
人を観察する目が有るな。

「そうですね。
父親は社長とか言ってましたよ。
普通に金持ちのお嬢様でしょう」

黙っていれば完璧なお嬢様なんだが、中身はオッサンなんだよな……

「ふむ……
で、どうなんだ？」

ああ、ニヤニヤ始めたぞ。
この爺さんは他人の色恋沙汰が好きだからな……
全く面倒臭い。

「どう、とは？
僕らは仕事仲間ですから、それ以上でも以下でもないですよ」
キッパリ断らないと、この爺さんは暴走するから大変なんだ。
「何だ、つまらんな。
でも結衣ちゃんだったか？
女子中学生よりは余程健全だ。
彼女も悪い娘ではないが、お前には桜岡さんみたいなタイプが似合うと思うぞ……」
なっ？
マイエンジェルよりも中身オッサンを選ぶとは！
「爺さん、人を見る目が無いぞ！
結衣ちゃんの方が良いだろ？」
「このロリコンが！
お前がサッサと結婚しないと、儂がアイツに顔向け出来んだろ。
早く結婚しろ、早くだ！
儂が……
儂がアイツにあの世で会う前にだぞ」
松尾先生は俺の爺さんと懇意にしてくれてたからな。
もう年だし、焦っているのか？
でも結衣ちゃんと結婚するなら、あと四年は待たないと……

幾ら法的には１６歳で結婚出来るとはいえ、せめて高校は卒業しないと。

指折り数えていた僕をぶん殴る！

何てフリーダムな爺さんだ。

「何を数えているんだ？
桜岡さんなら直ぐだろ？」

「彼女じゃねーよ！
結衣ちゃんとだよ！」

「お客さん、目的地に着きましたぜ……」

運転手さんが目的地に着いて話し掛けるまで、不毛な会話は続いた。

第三者の前で延々と痴態をさらす榎本と桜岡……

とっても似た者同士しだった。

お前ら、もう付き合っちゃえＹＯ―！

その翌日、西川氏から連絡が有りほぼ此方の希望通りの責任区分での契約となった。

費用の方は事前調査は出来高清算とし日数及び内容にて積算するが、それは榎本が日常で行う事なので問題は無い。

ただ、あくまでも元請けはｏｆｆｉｃｅ　ｓａｋｕｒａｏｋａ　であり榎本は二次下請けとして契約した。

これはテレビ局と直接契約をして縛られるのを防ぐ為だ。

発注者は二次以降の下請けに直接命令は出来ない。

必ず元請けを通すしかなく、請ける仕事の内容も桜岡さんと決められるから。

揉め事回避の為の契約形態となった。

そして、いよいよ現地に乗り込む日となった……

◇◇◇◇◇◇◇

何処までも抜ける様な青い空……

絶好のドライブ日和！

そして八王子市という目的地故に日帰りは厳しいのだが、我が愛の巣に結衣ちゃんを独りきりにする訳にはいかず日帰りです。

今日は初日と言う事で現地に９時に集合。

渋滞を避ける為に、余裕を持って朝６時前に自宅を出る。

結衣ちゃんには桜岡さんと仕事をする事を説明した。

凄く喜んでいたが、何が嬉しいのだろうか？

早出をするので起こさない様に静かに支度をしていたが、ちゃんと起きていて送り出してくれた……

相棒のキューブは好調だ！

自宅を出て一番近い高速道路、横浜横須賀高速道路。

通称「ヨコヨコ」に佐原インターから乗り込み、軽快に目的地に向かう。

山間部を縫う様に道路が有り、暫し緑を堪能しながらのドライブ。

途中の自販機で購入した、午後ティーを啜りながらの安全運転。

８０キロで巡行！

途中一般道の国道１６号線に降りた時は渋滞に捕まったが、八王子バイパスに乗って目的地へ。

現場は山の中の為、一旦麓のファミレスの駐車場で合流した。

所要時間は１時間４５分。

まずまずのタイムだ！

既に駐車場には、見慣れたスカイラインが停まっている。
Ｒ３４ＧＴターボ、なんちゃってスポーツカーのＡＴ車だ。
スカイラインの横に停車すると、直ぐに桜岡さんが降りて来た。
「お早う、榎本さん。
早いわね。
まだ８時前よ」
今日の服装は、薄いピンクのジャンパーにチェック柄のキュロットスカート。
足元は歩き易そうなスニーカー。
小さなリュックを背負っている。
毎回思うが、お洒落度では完敗だ。
僕はと言えば、調査が目的だし依頼人は桜岡さんだから普通の服装だ。
山登りを考えて撥水加工を施したジャンパーにカーゴパンツ。
足元はアーミーブーツで固めて、腰にポーチとリュックを背負っている。
軽い登山並の装備だ。
腕時計を見ながら現在時刻を確認する。

僕もΩのＳｓｐｅｅｄ　ｍａｓｔｅｒを見るが、少し早かったか……

「お早う、桜岡さん。
でも一時間後に出たなら、この時間には着かないよ」

渋滞を避ける為に早出したんだ。

7時に家を出たなら、まだ保土ヶ谷辺りを走っている筈だよ。

「ふふふ、私もちょっと前に着いたのよ。
他の人達は、まだみたいね。
でも凄い装備！
相変わらず準備に手抜かりはないのね。
もしかしたら遭難しても平気な位かしら？」

勿論、一泊位なら二人は楽勝な装備だ。

しかし田舎故に広大な駐車場。

如何にも登山します的な服装の男女。

そして僕らを含めても5台しか停まってない駐車場。

つまりお店から丸見えな訳です……

「先に店に入ってようか？
まだ待合せ時間までは余裕有るし、それに店から丸見えだからね」

彼女を伴い店内へ。

待ち構えていた様に店員さんが案内してくれる……

きっと待っていたんだろうな。

店内は統一されたチェーン店の筈だが、微妙に地方色が溢れている。

昔の農工具がオブジェの様に展示してあったりとか……

それにお土産コーナーが、やたらとデカい。

「何かしら？

億貯まる貯金箱……

これじゃ１００万円も無理じゃないかしら？

それに、コレ蝮を乾燥させた物なの！」

ああ、地方の駄洒落商品か……

「桜岡さん。

それは億貯まるで奥多摩って駄洒落だよ。

場所は全然離れてるのに不思議だね。

蝮は本物だけど、一匹で３０００円は安いのか高いのか判断が微妙だ……

まぁ席に座ろうよ」

他にも田舎観光地ならではの定番のペナントやマグカップ、提灯にお饅頭と色々だ。

暫くお土産コーナーで時間を潰せた……

取り敢えずドリンクバーと軽食を頼む。
軽食と言っても僕はトーストセット、彼女はホットケーキ。
それに山盛りポテトだ！
机に料理が並び、各々好きなドリンクを用意してから打合せを始める。
「さて、調査初日。
テレビ局関係者も来るけど、何から始めようか？」
他の連中が来る前に、簡単な打合せをしておくべきだろう。
「ん？
ホットケーキ食べます？」
僕は真面目な話をしているのだが……
上品にホットケーキを切り分けてたのに、フォークに刺して一切れ口の前に寄越してきやがった。
「いえ、要らないです」
アーンな感じですよ？
嫌ですねぇ、全く相変わらずガードが緩いぞ！
食べ物を前にして彼女に真面目な話は無理なんだ。

食べ終わるのを待とう。

そう思い、自分の分のトーストにジャムを塗り始めた。

# 第３３話

鄙びたファミレスチェーン店で朝食……

周りには殆ど客は居ないから、嫌でも目立つ美女と筋肉。

凄い目立つ凸凹カップルだ。

最近思ったが、梓巫女の装束を着ていないと桜岡さんが有名人とはバレない。

微妙に髪型とか衣装とかを変えている為か、バレたのは三浦海岸のファミレスだけだな。

まぁあの時はまんま巫女装束だったし、バレない方が不思議だろう……

本当に何でも上品に美味しそうに食べる。

普通にお嬢様な彼女が、ヌレヌレだのスケスケだのの変なアダナになったのが不思議だ。

これがテレビの怖さなのだろう。

真実が歪曲されて広まってしまう。

僕も奴らとの付合い方には気を付けないとダメだ。

ただでさえ後ろ暗い、過去と秘密を持っているのだから……

料理を完食したので、漸く真面目に仕事の話をする事が出来る。

「「御馳走様でした！」」

僕らは食材への感謝の思いを忘れない。

「さて、漸く仕事の話が出来るね。
余り時間は無いから簡単に……
テレビ局側は何人来るのかな？」

余り大所帯だと、行動に制限が掛かる。

今日は様子見だが、何が有るか分からないから……

「ＡＤさんにカメラさん、音声さんにマネージャーの四人よ」

マネージャー？

居たんだっけ？

この間のテレビ局との打合せには来なかったよね。

「桜岡さんのマネージャーなんだ？
居たんだ、ならテレビ局との打合せに……」

「マネージャーと言っても専属じゃないのよ。
私も一応、芸能プロダクションに登録してるの。
だから複数のタレントの面倒を見ている人だから、仕事の契約をした時だけお世話になるの。

でも今回は、特別に同行するのよ。
なんたって怖いのが嫌いな人なんだけど、契約とかの話をしたら一度榎本さんに会いたいからって……」

僕に？

変な地雷を踏んだか、プラグを立てたのか？

「まぁ良いや。
先ずは今日の行動だけど、基本的には廃墟には入らないよ。
出来れば依頼人の管理者にも下調べが済む迄は会いたくない。
ちょっと気になるし、怪しいんだよね……」

あれ？

不思議そうな顔だぞ。

「凄い慎重なのね。
でも依頼者に会わないのは何故かしら？
色々と話を聞ける筈でしょ？
それこそ当事者だからこその、確かな情報よ」

僕は管理者の癖に、心霊とかお化けとか建物に悪いイメージが広まる事をやろうとするのが分からない。

普通は隠すか、話が広まるのを嫌がる筈だ。

なのにテレビ局に手紙を出してまで呼び寄せるのは何故だ？

「普通は管理している建物に、悪い噂が立つのは嫌だろ？

わざわざ手紙を出してまで呼び寄せるのは何故だ？
考えられるのは、本物の心霊物件だから無料で解決して欲しい。
ならば僕らに不利な情報は話したくない。
無理だと帰られては困るからね。
それを調べる前に廃墟に入らされる危険も有る。
だから下調べをしてから接触するべきだね」

「うーん……
考え過ぎじゃないかしら？
本当に困って連絡してきたかも知れないし」

まだまだ甘いと言うか、優し過ぎるんだ。

僕が歪んでしまっただけかも知れないけどね。

人は本当に困ると、他人を巻き込んでも何とかしたい連中が多い。

まだ情報が全く無いのに、そんな不用心な真似は出来ないんだ。

「用心にこした事は無いからね。
さて、これからテレビ局の連中が来るけど……
僕の立場は桜岡さんに雇われた同業者。
だから何か有っても僕に安易に判断を委ねちゃダメだよ。
彼らが君を甘く見るから……
あくまでも責任者は桜岡さんだからね」

最悪、本物のホラーハウスの場合にだ。

頼り無い姿を見せていたら統制が取れない。

勝手に逃げ出したり、勝手な事をするかも知れない。

だから桜岡さんの近くに居れば、彼女の言う事を聞けば安全と思わせないとね。

ただでさえ本番では、僕はテレビに映りたくないから距離を置くし……

「分かってます。
私がしっかりしないとダメだから……
私の企画ですもんね！」

笑顔で答える彼女は、本当に眩しい。

人助けをする事に迷いがないから……

命が惜しくて「箱」に贄を差し出している僕とは根本が違うんだ。

だから、だから出来るだけの事はしよう。

ある程度、話し終わった頃に彼女の携帯が鳴った。

駐車場を見ればワゴン車と軽自動車が新たに停まっていて、四人の男女が佇んでいる。

どうやら全員集合のようだ……

◇◇◇◇◇◇

あの後、皆で軽く朝食を採ってミーティングをした。

勿論、僕らも二回目の朝食だが軽い物だ。

今回の参加者だが……

ＡＤ君は前回テレビ局で案内してくれた彼だ。

２０代後半、今風な若者。

カメラさんは４０代だろうか、無口なマッチョメンだ。

彼とは気が合いそうだ。

逆に音声君は金髪ロングのチャラチャラした３０代で、苦手なタイプ。

マネージャーはといえば、２０代後半かな？

黒髪ショートの極々普通のＯＬさんで、幼い感じの女性だ。

ロリじゃないが、２０代前半でも通用するかな？

程度のロリ道を歩む僕としては中途半端な感じだ……

現地調査だから他の男性陣は動き易い格好だが、彼女はハイヒールでした。

いや、山道どうするの？

微妙に先行きが不安な六人組だ……

因みにマネージャーさんの名前は、石川恵理子さん。

男達は、どうでも良いので役職名で通します。

◇◇◇◇◇◇◇

目的地の廃墟の有る山の入り口まで到着した。

見上げる山々は、濃い緑色をした葉を茂らせている。

鬱蒼として暗い感じで、とても観光地とは思えない。

人の手が最低限しか入ってない原始の森だ。

先ずは周辺の調査を行うのだが……

「榎本さん、先方に連絡して有るんですよ。
本当に会わないんすか？」

「相手を信用する根拠が無いのに、いきなり会うんですか？
此方が問題の廃ホテルです！

って案内されて予備知識無しでホラーハウスに突入？
はははは！
僕も桜岡さんも君の安全は保証しないよ」

このＡＤ君は馬鹿なの？

事前に今日の予定は打合せしてあるのに、何故訪ねないと言ってある先方にアポを取ってるんだ？

「でも僕、連絡しちゃったし……
困りますよ」

「調査が難航して其方まで伺えない。
とか、色々と理由は付けられるでしょ？
桜岡さんからも言われてますが、初日だし慎重に進めますから……」

未だにブツクサ言うＡＤ君を放置して、桜岡さんの元へ。

マネージャーさんと話していたが、此方に気が付くと笑いかけてくれる。

「榎本さん。
先ずは車で徐行しながら、周りを確認してみましょう。
それで気になる物が有ればチェックして調べる。
特に庚申塚やお地蔵様、神社やお寺は要チェックですね」

うん、上出来です。

「そうですね。
車は四台ですが、我々は六人。

二台に分乗するか、ワゴン車に全員乗るか……
僕の車には道具一式乗せてるから二台が良いです」

出来れば一台まとめて移動が制御し易いが、機材が無いのは心許ない。

それに万が一の為に、お神酒と油揚げを用意している。

神様相手だから、下手に出ないとアッサリ死ぬから……

「では榎本さんの車と局のワゴン車で。
私と石川さんの車は置いて行きましょう。
では私達は榎本さんの車に乗りましょう」

僕と桜岡さんは別れて乗り込んだ方が良くない？

「僕らが一緒より分かれた方が対処し易くない？」

「んー、それも考えたけど調査だし一緒の方が直ぐに意見交換が出来るから。
それに今日は調査だけですから、平気でしょ？」

責任者で有る桜岡さんに、拝む様に言われては立場的に断れないか。

それにムサい男共より、ロリじゃなくても女性の方が万倍マシだ！

「分かりました。
ＡＤ君来てー！
一応これ、渡しておくから。
それと携帯の番号を交換しておこう」

ＡＤ君を読んで、お札と清めの塩を渡す。

「お札は各自で懐にでも入れておいて。
塩は何か有ればバンバン撒くんだよ。
量は有るから気にせず使ってね」

取り敢えず、お札を三枚と清めの塩を１キロ。

「重っ？
こんなに清めの塩？
相撲みたいっすね？
てか、これで何十万とか請求されるんすか！」

量が有ると有り難みは薄れる筈だが、何十万ってボリ過ぎだろ。

「チマチマ撒くよりドバッと撒いた方が効くよ。
ちゃんと僕が祭壇で清めた塩だから、効果は保証するし。
勿論、何十万もしないよ」

おっかなびっくりと塩を持つＡＤ君から取り上げで、コンビニのビニール袋に小分けして、各々に配る。

余計に有り難みが薄れた……

「何か榎本さんって、僕の知ってる霊能者と違うっすね！
お札とか清めの塩とか、貰った事ないっすよ。
こういうのって僕らでも使えるんすか？」

ＡＤ君が、お札を珍しそうに眺めながら聞いてくる。

カメラさんも音声君も同様だ。

「別に特別な力が必要な訳じゃないよ。
勿論、作り出すには霊力を込めるし使用効果も一般人より高いけどね」

お札やお守りなどは、元々は普通の人でも使える様に出来ている。

「でも高額っすよね？」

値段に拘る奴だな……

他の連中も、僕の顔を伺ってるし。

使ったらお金を取られるとでも思ってるのかな？

ならば、その心配を解消しないとダメだな。

「坊主に法事とかで読経させると、相場は一回で三万から五万。
例えば一回に１キロの塩ならば、１グラムで３０円だよね。
でも１０キロなら１キロ当たり３円だ。
だから、それだけ使い切っても３０００円。
まぁお金は取らないから安心してよ」

霊感商法じゃないんだから、ボッタクリみたいな真似はしないよ！

「榎本さん。
私にも、その塩を売って下さい」

「えっ？
桜岡さんも必要なの？
何時もはどうしてるの？」

確か前は持ってたけど、まさか何処かから買ってるのか？

「えっと、知り合いの神社から清めた塩を買ってるんです……」

偉く恥ずかしそうに、申し訳無さそうに言っているのは……

多分高いんだろう。

「1月に1回、1キロ迄ですよ。
友情割引で1万円で良いです」

別にボッタくる気もないし、1回で大体3キロは清めるから平気だろう。

ニコニコしている桜岡さんを促して車に乗せる。

いよいよ調査に出発だ！

◇◇◇◇◇◇

車を走らせて数分、幸い他に車は見掛けないので30キロ程度のスピードで走る。

山の中をクネクネと曲がりくねっている道は、雑草が生え落ち葉が吹き溜まり荒れかけている。

標識やガードレールもサビが浮いているし……

「んー、相当痛んでるし手入れをしていない。
生活道路として使っている感じもしない。
あっ！
落石が道の端に、そのまま有るな……」

「それは仕方ないんじゃ？
バブル崩壊から１０年以上過ぎてるわ」

マネージャーの石川さんが、外を見ながらポツリと言う。

ソワソワしている様に感じるのは気のせいかな？

もしかしてトイレ……か？

「地図で見ると付近に古い集落が有るんだ。
彼らが道路を使っていたら、もう少し手入れをすると思う。
ほら！
ガードレールが無くても、何も養生してない。
人が使っていれば、ロープを張るとか何かしらするよね。
特に都会でなく田舎の人達は、そういう事には細かいんだよ」

他人に無関心な都会と違い、田舎は横の繋がりが強い。

この手の仕事は共同で迅速に行う筈だ。

放置する程、人手が無いか他に道が有るか……

営業中のホテルと集落の連中は、上手く関係を築いていたのかな？

少し走ると大きな錆だらけの看板を見つけた！

縦２ｍ横６ｍは有る大きな看板だ。

車を降りて確認する。

錆だらけで良く分からない部分も有るが、この山全体の簡易な地図とホテル迄のルート。

それに付近の景勝地が分かる。

近くに川が有り、小さな滝と池が有るのか……

「観光出来る場所が滝と池だけ？
これは廃れるよ。
でも水場には霊が集まり易い。
行ってみるか……」

現在地から一番近い池迄は、車なら5分と掛からない場所だった。

# 第３４話

大きな錆だらけの看板。

これはホテルが開業の時に立てた案内看板だろう。

デフォルメしたホテルと、その付近の情報が簡単だが読み取れる。

山頂近くに有るホテルからクネクネと道が麓まで続いている。

しかし観光出来る景勝地は滝と池だけだ……

取り敢えず水場には霊が集まりやすいし、一番近くの池に行ってみるか。

気が付けばカメラさんが看板を舐める様に撮影している。

「寂れた感が漂って良い感じだな。
これは使えるだろう」

独り言の様な渋い意見に、返事を返してみる。

「編集して番組で使うのかい？」

カメラを止めて、此方を見る。

やはり彼は中々の筋肉だ！

「ああ、使えるかもしれない物は撮る。

しかし……
良い筋肉だな」

「ああ、アンタも中々鍛えてるな。
良い筋肉だ」

お互いニヤリと笑うと、看板から離れる。

「周りの景色も撮っておくんだ。
こんな寂れた場所は中々ないぜ。
他の番組でも使えるかもしれん」

ああ、この映像を転用するのか……

でも何もないコレが使える番組が有るのか？

「田舎に泊まろうか？
くらいしか使えないだろ？」

こんな山の中の寂れた映像なんて、他の使い道が有るのが信じられん。

「結構あるんだ。
バラの映像を組み合わせたり、最近の編集機能は凄いからな。
例えばドラマや映画、安っぽい奴は大抵色んな映像を繋ぎ合わせるんだ。
例えばウチが企画した和製ホラーはよ。
人気の無い森の中って設定だが、役者と撮るのは都内の森でよ。
他は行った事も無い癖に、こんな映像を使うんだぜ……」

そして簡単な最近の画像編集の技術を教えて貰った。

そんな技術が有れば、簡単に低予算なB級特撮番組が出来るよなー

……

いや技術が凄いと言い換えれば良いのかな？

カメラさんと友好を深めていると、視界の隅にAD君がせかせか動いているのに気付いた。

何やら桜岡さんに看板の前で何かコメントを言って欲しいと頼み込んでいる。

君は演出も兼ねてるのか？

要望に応えて桜岡さんが、看板をバックに何かを話そうと……

あれ？

僕を手招きしてる？

仕方無く近付いて聞いてみる。

「どうしたの？」

トコトコと近付いて来て

「看板だけ見て何かコメントって……

何を言えば良いのか分からないわ」

そりゃそうだな。

もう一度、看板を見て考える。

「んー、看板だけ見ての情報だと……
先ずは基本的な情報のおさらいかな。
何故、廃業に追い込まれたのか分かる？」

事前情報では知っているが、実際に目で見て判断出来る事も有る。

「業績不振でしょ？
んー、そんな単純な質問はしないわよね……
そうね、周りに見る所が滝と池だけ。
それに交通も不便だわ」

良く出来ました。

「何よ、ニコニコして？
気持ち悪いわよ」

そう言って胸板をバシンと叩く。

音は凄いが痛くはない。

逆に彼女の手の平の方が心配だ……

「酷い言われ様だな。
この看板を見る限り、何にも無いのが魅力か？
でもリピーターは来ないよね。
典型的な抱え込み型の観光ホテルだ。

でも観光無い温泉無いじゃ余程、料理が美味いかサービスが良いかじゃないと……
わざわざ来ないよね」

潰れる為に建てたホテルだな……

「そうよね。
他に良い所が一杯有るし、一度来れば二度目は無いわよね」

手の平にフーフー息を吹きかけながら応える。

痛いなら叩かなきゃ良いのに……

「いや、ホテルの経営方針とか営業戦略じゃなくて、霊能者としてです。
何か分からないっすか？」

ＡＤ君が割り込んで来た。

調査・準備で来たのに、もう撮影の方に比重が傾いてるな。

音声君もカメラさんも煙草を吸って手持ち無沙汰だし、少し長く話し過ぎたか……

「そうだね。
水場には霊が集まりやすい。
後は錆びてて見難いが、鳥居のマークが有る。
滝・池・神社は調べるべきだな。
後は気が付いたと思うが、今走っている道路はホテル専用だと思う。
生活感や手入れをしてる気配が無い。

付近に集落も有るのに利用してないのは何故だ？
集落もホテルとの関係を調べるべきだね。
後は……」

「あー榎本さん。
それカメラに向かい桜岡さんに喋って欲しいです。
貴方はテレビに映りたく無いんですよね」

どうやら桜岡さんの仕事を奪ってしまったようだ。

「すまない、桜岡さん。
君も気付いた事をペラペラと……
じゃオッサンは下がるから、撮影を始めて」

そう言うと看板から少し離れた場所に移動する。

丁度、適当な樹木が有ったので寄りかかる。

看板の周りにはベンチも有るが、痛んでるから僕が座ると壊れそうだし……

桜岡さんは、さっきの話を上手く纏めて説明している。

この後は池を調べて次は滝かな……

その後に付近の集落まで行ければ今日は十分だろう。

池も滝も昼間見ただけでは何も分からないけど、鬱蒼と茂った森の中に澱んだ池が！

とか透き通った池が！

とかテレビ的な画像は撮れるだろう……

カメラさんは喜びそうだ。

「榎本さんって、霞ちゃんとの関係って？
もしかして付き合ってたりする？」

隣りにマネージャーが立っていた。

てか気が付かなかったよ……

「ねぇねぇ、付き合ってるんでしょ？」

人が今後の展開を考えてたのに、ニヤニヤと色恋話を振ってきやがった！

この中途半端なロリ顔め。

「まさか！
あんなお嬢様とオッサンがか？
笑えない冗談だな」

この辺はキッパリ言わないと歪曲して広がるからな……

「年の差・身分の差カップルなんですか！
凄いロマンティック……」

「アンタ、バカァ？
んな訳無いだろ。
てか人の話を聞けよ……」

「おっ？
しかもアニオタ？
霞ちゃんの梓巫女服に萌えちゃう感じ？
いやー榎本さんて、エロオヤジなんだね。
私も気を付けなくちゃ！」

この娘は典型的な色事大好きなトラブルメーカーっぽいな。

勘違いや思い込みも酷いし……

気を付けないと大変だぞ。

適当に話を濁して撮影が終わった桜岡さんに近付く。

後ろから

「ヒューヒュー熱いねぇ！」

とか野次が聞こえるが無視だ！

「ご苦労様。
さて移動しますか？」

幸い桜岡さんは、マネージャーの暴走に気が付いてないみたいだ。

「そうですわね。

でも池を見るだけで何か分かるかしら？」

そんなに劇的な事は分からないだろう。

そんな意味も含むて両の手の平を上に向けて肩を竦める。

「行ってみないと分からないけど、大した事は……
先ずは虱潰しに調査だからね」

看板一つで３０分以上も使ったよ。

少し急がないと今日のノルマが達成出来るか微妙だな。

大体のタイムスケジュールを思い浮かべる。

４時過ぎには帰らないと、結衣ちゃんと一緒にご飯が食べれないからね。

現在１０時前だから、残り６時間って事だ。

車に乗り込み先ずは池へと向かった……

◇◇◇◇◇◇◇

のんびりと走りながら周りに目を配るが、何も無い。

本当に荒れ果てた道路だ……

街灯なんて無いから、夜は普通に怖いだろう。

闇を怖がると言うか、鬱蒼とした森は原初の恐怖が有る。

風や動物の立てた音だって怖いと感じるしね。

看板から１０分程度で池に付いた。

ほぼ円形で直径は１００m程だろうか？

水辺にはバーベキュー場が有り、キャンプも出来ただろうスペースが有る。

管理事務所だろう。

原型を留めたプレハブ小屋、それと貸しボートも陸上げされて残ってる。

まだ使えそうだ……

池の周りも遊歩道だったのか、今は草がボウボウだが歩道の名残りも有る。

「これは……

結構本格的に金を掛けて整備したんだな。

貸しボートにバーベキュー場、それに遊歩道まで有るよ」

池の辺で全体を見回しながら感想を言う。

「でも肝心な池は……
澱んでるわよ。
滝が有るのに川に繋がってはいないのね」

確かに滝から川へ川から池へと流れれば、水は綺麗な筈だ。

しかし、この池は澱んでいる。

つまり滝とは別の水源なんだな。

足元に落ちていた大きめの石を広い、力一杯投げてみた。

大きな放物線を描き２０m位の離れた場所にボチャンと水音を立てた。

「ボートが有る位だから、水深１m以上は有りそうだな。
でも濁っていて底が見えないから分からない」

緑色と言うのは、藻とかが生い茂っているんだ。

溺れたら体に絡んで大変だろう。

「ボート出してみる?」

「危険だな……
放置したボートでかい?
沈没したら大変だぞ。
藻が絡むし、もしかしたら沼みたく泥に足を取られるかもしれない。
それより遊歩道を歩いてみよう。

何か見付かるかも?
さぁリーダー、皆を呼ぼうか」

周辺を好き勝手に探索していた連中に声をかける。

「おーい、桜岡さんが話が有るから集合!
さて、桜岡さん。
この後の方針を宜しく」

リーダーたる彼女が、皆に説明しないとダメだからね。

バラバラと集まって来る連中を見ながら、今回の立場って難しいと思った……

◇◇◇◇◇◇◇

「さて皆さん、この池を調べますが……
管理事務所は鍵が掛かっていましたから中には入れません。
管理者の方に会う時に鍵を借りましょう。
バーベキュー場は何も有りませんでした。
なので遊歩道を一周してみましょう。
あとボートは放置されて長そうですから危険です。
今回は乗りませんわよ」

彼女の説明は中々分かりやすい。

しかし草ボウボウの遊歩道を歩くのは大変だ。

なので車から道具を取り出して来た。

愛車ｃｕｂｅの弱点はトランクスペースが小さいんだ。

だから必要最小限の荷物しか積めなかった。

今回は必要な物が多くて選別が大変だったよ。

先ずは草を切り裂くブッシュナイフ！

普段は安い海外製を使うんだけど、今日はお気に入りの山刀を持ってきた。

「蕨手（わらびて）山刀」

土佐の名工、秋友義彦先生謹製の８寸５分の両刃だ！

刀身から一体構造の共鉄柄の狩猟刀。

この刃渡り２５５ｍｍの前には、軟弱な草木など……

あとは軍手に虫除けスプレー、それにロープとタオルだ。

タオルは頭に巻くのだが、蜘蛛の巣とか色んな物から守ってくれる優れもの。

ロープは１０ｍだが、意外と色々な事に使える。

彼女の説明が終わった所で、参加者に軍手とタオルを渡す。

「えー補足ですが、軍手は分かりますよね。
タオルは頭に巻いて下さい。
蜘蛛の巣とかヒルとか居るかも知れないから。
後、僕が先頭で道を作りますから一列で進みましょう。
僕・桜岡さん・マネージャー・ＡＤ君・音声君・カメラさんの順番で。
カメラさんは撮る時に僕が邪魔なら声を掛けて下さい、どきますから。
では行きましょう」

皆が準備を終わるのを待つ。

マネージャーが虫イヤー！

とか虫除けスプレーを盛大に体中に掛けているが……

夏場じゃないから肌も露出してないし、そんなに掛けなくても平気だぞ。

「では、行きますか！」

スラリと蕨手刀を抜いて、手前の草木を切り裂いて行く。

うん、素晴らしい切れ味だ……

ブルトーザーの様に掻き分けて進めるぜ！

「榎本さん、馴れてますわね。

しかも、その刀……」

草木を切り裂くのに集中し過ぎて話掛けられたのが分からなかったぞ。

危ない危ない。

これじゃ刃物キチガイじゃないか……

「ん？

ああ、コレかい。

僕の田舎はね。

今はダム湖の底だけど、此処に負けない位に山奥だったんだ。

だから山歩きは馴れてるんだよ」

子供の頃は山の中が遊び場だった。

小さな山刀を持って、走り回ったんだ。

山刀で竹トンボを作ったり、山菜やウサギとかも捕まえた。

魚を釣って山刀で捌き、火をおこして焼いて食べたりもしたな。

今の過保護な親達には発狂する子供時代だったぜ。

「本当に頼りになるわ。

この番クマは。

あとは、もう少し躾（しつけ）れば大丈夫ね……」

何か桜岡さんが不穏な言葉をブツブツ言っているが、危険だからス

ルーした……

バンクマってなんだ？

躾って誰をだ？

彼女は何を企んでいるんだ……

# 第３５話

やはり刃物とは男心を擽る何かが有る！

蕨手山刀を手に、バッサバッサと草木を切れば……

そのまま５０ｍは進んだだろうか？

何やら開けた空間に出た。

「ふぅ……
ちょっと待って！
何か開けた空間に出たから、調べてみよう」

後ろの連中に声を掛ける。

問題の空間は円形で直径１０ｍ位だが、確かに人の手が入った跡が有るんだ。

最初は池の辺の休憩所とも思ったが、遊歩道を挟んで池の反対側が開けている。

普通は池側に休憩所を作るだろう。

観光地として数少ない、景勝地で有る池を見せるんだから……

「あら、何かしら？
榎本さん、祠みたいだわ」

桜岡さんが何か見付けたみたいだ……

隣に並んで見れば、立派な楠木の下に小さな祠が有った。

その周りは雑草が刈られ、綺麗に掃除が行き届いている。

「清められて、お供え物も有るね。
つまり信仰している人が居るのか……」

祠の前にはお酒と団子が供えられている。

団子は卵を模しているから、蛇神かも知れない。

御神体は、石かな？

石には文字がうっすらと書かれているが、殆ど読めない。

「大蛇……姫……領主……
殆ど読めないから多分たけど、水神を祀ってるね。
御神体も古るそうだし、調べれば伝説が伝わってるかも知れないな」

リュックからワンカップを出して供える。

大蛇、もしかしたら龍かもしれないが、そんな大物が相手じゃヤバい。

伝説の龍なんて、天候を自在に変えたりするんだぞ！

そんな天変地異な連中が、おいそれと居る訳が無いんだけどね。

「何時もお酒を持ち歩いてるのかしら？
飲み過ぎは体に悪いわよ」

ねぇ大丈夫？

依存してない？

私、アルコール中毒は嫌だからね。

とか失礼な質問を続けざまに聞いてくる。

僕はアル中じゃないぞ！

全く酷い誤解だ。

「当初は稲荷神だと思って、お酒と油揚げを用意したんだよ。
でも信仰の生きている祠だから、お祀りしなければ大変だからね。
でも、此処に来るルートは遊歩道以外は……」

周りを見回すと、祠の後ろに草木を踏み固めた獣道が有る。

曲がりくねっているので先を見通せないが、集落に繋がっている予感がする……

「道が有りますね……」

「行ってみようぜ？」

「何処に繋がってんだろう？」

ＡＤ君・音声君・カメラさんが獣道の先に行きたがっているが……

「先に池を調べよう。
まだ集落とホテルの関係も分からないし、田舎の集落は排他的な場合が有る。
余計なトラブルは避けよう。
桜岡さんも良いかい？」

田舎って牧歌的で日本人の心の故郷みたいな感じがあるが、実は村八分とか陰湿な面も有るんだ。

特に生活環境が厳しい所は顕著だ。

映画の楢山節孝でも有名だが、姥捨山や子供の間引きも有った。

山で暮らす木地師達は、間引いた子供の為にコケシを作った。

コケシは「子消し」から来てるなんて云われも有るし……

現代では笑い話だが、明治の初期頃までは実際に行われていたんだ。

心配し過ぎかも知れない。

でも、いきなり訪ねるよりは下調べをするべきだよ。

「分かりましたわ。
皆さん先に遊歩道を調べましょう。
榎本さん、行きましょう」

「少し待ってくれ。

撮影するから……」

カメラさんが、祠と周辺を撮影する。

「桜岡さんも看板と同じくコメント宜しく！」

ＡＤ君に言われ、祠を前に簡単な水神についての説明をする。

流石は梓巫女だけあり、蛇神とか龍神とかの知識は僕より豊富だ。

簡単な事例と比較して説明している。

これは面白い企画になるか、稲荷神・水神・廃墟と手を出し過ぎて纏まらなくなるか……

撮影が終わり、リーダーの一声で残りの遊歩道を調べる事にする。

しかし……

散々遊歩道の草木を伐採し、祠に供え物もした。

僕らが来た事を先方は知るだろう。

水神伝説か……

全国各地に似たような伝説が有る。

夜叉ヶ池の次女伝説・阿池姫伝説、大沼の黒姫伝説とか……

大抵は大蛇か龍が娘を見初めて連れ去る話だが、実は日照りや飢饉

の時に生贄を水神に捧げた場合も有る。

あの池に生贄の娘達が沈んでいる事も考えられるんだ。

稲荷神より危険かも知れないな……

遊歩道は途中で休憩用の東屋が有った位で、特に目新しい発見は無かった。

鬱蒼と繁った草木に阻まれて、見落としが有るかもしれない。

しかし6人掛かりで探したんだから大丈夫かな?

草木を切り分けて歩いたので想像以上に時間が掛かり、バーベキュー場に付いた時には太陽が真上に来ていた。

つまりお昼だ……

「ふーっ!

流石に少し疲れたな。

桜岡さん、休憩にしようか?」

流石に一時間以上も山刀を振り回していれば疲れる。

バーベキュー場に備え付けられたベンチに座り、一息つく……

このバーベキュー場は机やベンチが有り、屋根も付いている。

樹液でベトベトになった蕨手山刀をウェットティッシュで丁寧に拭き取り、油を染み込ませた布に包んでしまう。

刃物は手入れが大切だ。

帰ったら本格的に手入れをするが、今はこれで良い。

序でに軽く汗をかいたので、顔や手をウェットティッシュで綺麗にする。

何たって水道が無いから、ウェットティッシュは必需品だ！

「皆、昼飯にしよう。
用意してあるかい？」

僕の声にＡＤ君がワゴン車から弁当とペットボトルのお茶を運んで来た。

「これが噂のロケ弁か？」

何て事は無い仕出し弁当だが、美味しそうだ。

「一応６個有ります。
種類はバラバラですが、お好きなのを……
あっ僕は唐揚げ弁当っすから」

見れば、幕ノ内・唐揚げ・ハンバーグ・カレー・オムライス、それにカツ丼か……

でもカレーとか冷めてるとマズくないか？

ＡＤ君が説明すると音声君やカメラさん、それにマネージャーが我

先に選んでいる。

「あれ？
桜岡さんは、選ばないの？」

ボーっと見ている彼女に聞いてみる。

フードファイターな彼女が、ご飯に興味が無いなんて事が有り得るのか？

「うーん、あの手のお弁当って冷めてると美味しくないじゃない？
だから私はパンを買って来たのよ」

そう言ってリュックから惣菜パンの山を机に広げた……

その数１０個！

卵やハムのサンドイッチ各種・懐かしの菓子パン等々、バラエティーに富んでいるな。

何気に１リットルのコーヒー牛乳も有るし。

何処にしまっていたんだよ？

ＡＤ君なんて

「桜岡さんって、そんなに食べるんすか？
太りますよ絶対！」

とか騒いでいるが宿敵としては、そうは思わない。

「桜岡さんにしては控え目だね。
僕は結衣ちゃん手作りのオニギリ弁当だけど、半分交換しても良いよ」

そう言って重箱をドンっと机に置く。

本当は皆で食べて下さいと渡されたんだが、勿論一人で食べ切る自信は有る。

蓋を開ければ、上段はオカズ、下段にオニギリが12個だ。

オカズはミニハンバーグ・玉子焼き・唐揚げ・エノキのベーコン巻き・インゲンと卵の炒め物、それにデザートだ。

オニギリは梅・昆布・鮭・焼きタラコ！

「くっ……
相変わらずの食事に対する拘りですわ。
でもパンとオニギリだけの交換では、オカズが食べれませんわ！
レートが高すぎます。
せめてオカズとオニギリを半分づつ……」

流石は僕が認めるフードファイター桜岡霞。

さっそく交渉に入ってきたか……

「いやいや。
お金で買えない価値が有る！
だから市販のパンじゃ無理だよ」

ロリの手料理を市販品の惣菜パンと交換してあげるだけでも、大幅譲歩なんだぜ。

「ゆっ結衣ちゃんだったら、私と半分づつって言った筈ですわ！確認の電話を……あら、圏外だわ」

予想以上に落ち込んでいるな。

そろそろ勘弁してやるか……

「はいはい。パンとお弁当は半分こですからね。食べ過ぎはダメだよ」

割り箸を渡して、半分食べる事を許可する。

「有難う御座いますわ……」

良い年をした女性が、泣きながら割り箸を割るなよ。

パキンと良い音がして、綺麗に二本に別れた割り箸を構える。

「「では、いただきます！」」

彼女は上品な癖に速い！

それは、この間の大福でも知ってた筈だ。

早食いなら僕の倍は食べれるんだ。

しかし何だ？

このスピードは？

「ちょ、おま……

少しは遠慮しろよ。

それは僕の大好物のミニハンバーグなんだぞ！

あっ、玉子焼きは甘い砂糖と醤油味の二種類だから、甘い方だけ食べない」

「おほほほほ！

悔しければ、止めてご覧なさいな。

ほら、喋ってないで咀嚼しないと負けますわよ」

僕も桜岡さんが買ってきた惣菜パンそっちのけで、凄いスピードで結衣ちゃんの弁当を食べ始めた。

途中、狙ったオカズが一緒で互いの割り箸がガシガシ当たったが、気にせず完食。

「「ごちそうさまでした！」」

チクショウ、結局６割は喰われた……

「あれだけ半分こって言ったのに……

ミニハンバーグ６個の内４個も食べたな！」

どれも美味しいが、その中でもお気に入りのオカズを選んで食べら

れた。

「中にチーズが入っていて美味しかったわ。
今度の食事は私が奢りますから、それで良いでしょ？」

「市販品では、この心の痛みは癒されない……」

お金で買えないロリの愛が詰まってたんだぞ！

「私は、手料理は無理だから。
はい、これを食べなさいな」

手を付けなかった惣菜パンの山を押し出してきた。

心持ち足りなかったので、二人で惣菜パンを食べ始める……

悔しいから、コーヒー牛乳を半分強奪した。

間接キス？

なにそれ、美味しいの？

しかし、この大量のパンはローソンで買ったんだな。

パンにはシールが貼って有り、３０枚でリラックマ皿と交換出来るみたいだ。

一応シールを剥がしておく。

「「「「あんたら、まだ食べるんかい？」」」」

他のメンバーからの突っ込みはスルーした。
僕らにとっては、これ位は普通なんだよ。

「しかし……
同じだけ食べても体型が変わらないって凄いよな」

自分のパンパンのお腹を叩き、桜岡さんの細いお腹の辺りを見て思う。

女体の神秘を……

「榎本さん？
目つきがイヤらしいですわよ。
でも美味しかったわ。
有難う御座いました」

この辺が良い所のお嬢様なんだよな。

お礼を言われては仕方ない。

次は……

あのフルーツのタカノの巨大パフェを奢って貰ってチャラだな。

「少し休んだら、今度は滝に行ってみよう。
あとはホテルの近くまで行ってみようか？」

お昼休みを考えても、４時迄には3時間しかない。

初日だし、そんなに根詰めて調べなくても良いから。

「そうね。
でも色々と調べる事が増えたわ。
周辺の集落・ホテルとの関係・祠の事。
まだまだ有りそうね」

僕らが話してると皆が集まってきたので、簡単なミーティングをする。

「なになに？
やっぱホテルまで行くんすか？」

ＡＤ君が勝手な想像を言うが、何度も言うが調べるまでは接触しないよ！

「いや、ホテルの近く迄だよ。
この後は滝も調べるし道の周りも調べる。
ホテルの近くまで行くのは立地や周辺の確認をする為だよ。
ＡＤ君だってロケの事前調査するだろ？
それと同じだよ」

なんかムッとした顔だな。

まだ管理者に会わない事を根に持ってるのか？

「なんか地味っすね。
もっと、こう……何て言うか。
ゲームのダンジョン攻略みたいに」

「問題の廃墟を攻略しろってか？
僕らは自分の身を守る術を持ってるよ。
でも君達の安全を考えて行動してる。
君の言うゲームだって、レベル１で魔王の城に突撃しないだろ？
それと同じだよ」

命張ってる仕事なんだ。

自分の力（霊能力）に見合った進め方をしないと危険なんだよ。

「あの廃ホテルって、そんなに危険なんすか？
でもネットに書き込みが有るって事は、素人さんも入ってるんすよね？」

ああ、ネットの情報を全て信じちゃうんだ。

「確かにネットでは情報が溢れてる。
でも廃墟探検系では何年も前から画像はアップされてない。
廃墟マニアには魅力的なアレがだよ」

それでもＡＤ君は納得してない顔だ……

# 第３６話

初日から、どうしても廃墟に行かせたいＡＤ君。

何度説明しても納得しない。

いや、どうしても僕らを廃墟に行かせたい感じがするんだ……

勝手に先方にアポを取ったりしてるし。

テレビ局的な都合で、早く廃墟に行かせたいのか？

それとも何か他に考えがあるのか？

彼の行動には注意が必要だ……

ＡＤ君かテレビ局が、何を考えているか分からないけどね。

何にしても、面倒臭い事には変わりないな。

◇◇◇◇◇◇◇

「貴方の近くにあった本当に怖かった話２０１１」

それの企画変更会議。

桜岡霞の除霊コーナーを設けた夏の心霊特集だったが、梓巫女の桜岡霞がゴネやがった。

ディレクター西川が集めた関係者は自分の他に

ＡＤ君。（アシスタントディレクター）

ＴＤ君。（テクニカルディレクター）

それと脚本担当・演出担当・宣伝担当だ。

自分より上に報告する為の根拠を作らねば、番組の変更は難しい。

小会議室に全員が集まっている。

煙草と灰皿、それに新しい缶コーヒーを持って現れた西川。

パイプ椅子に浅く座り、周りを見渡すと

「聞いてると思うけど、今さっき霞ちゃんが来たのよ。
弁護士と筋肉質な坊さん連れてさ」

と切り出した。

梓巫女の桜岡霞が、同業者の坊さんは分かるが何故に弁護士を呼んだのか？

「何か番組で揉め事ですか？
企画を変えるなら急がないと！

今からなら脚本も書き換えれるけど……」

「そうですよ。
桜岡霞と差し替えるとなると……
見た目のランク落ちますよ。
ヌレヌレ・スケスケな彼女には固定ファンが付いているし。
他の（霊能者の）連中も夏は忙しい。
早めに押さえないと」

「そうだな。
今から演出を変えるとなると、目玉が欲しいな。
西川さん、どうするよ？」

各担当が、自分の仕事に影響が出そうな事を理解して西川に詰め寄る。

「落ち着けって。
霞ちゃんが連れてきた弁護士は、契約内容についてだよ。
契約に疎かった彼女には、負担が多いからね。
誰か入れ知恵しやがったんだ」

責任の殆どを彼女に押し付けたから、見る奴が見れば此方が不利とは言わないが公表されると困る。

「ＡＤ君に聞いたが、その筋肉坊主が例の廃墟ホテルがヤバいって騒いでるんだろ？
本物の坊主らしいし、業界的に本物の心霊現象を流すのはヤバいぜ。
程度によるが……
稲荷神とかは、将門の首塚や四谷怪談のお岩さん級に厄介なら問題だぞ」

テレビ業界で噂になっている、将門の首塚と四谷怪談のお岩さんは度々映画やドラマになる。

だが出演者や関係者が参拝を怠ると、確実に呪いを受ける事で有名だ。

それは現場スタッフだけでなく、関係者にも降りかかる。

つまり我々も危険なんだ。

「その筋肉質な坊さんは何て言ってるんだ。
事前調査くらい、やらせれば良いだろ？」

「放送は7月だから半年有るんだ。
製作期間に余裕は有るが、予算をふっかけられてるのか？
どうなんだ、西川さんよ」

我が身可愛い連中は、危険が回避出来るなら言う事聞いてやれよと騒ぐ。

「ん、まぁ本番のコメンテーターの雛壇芸人を2人も切れば平気だな。
でもバーターで来てる連中は無理か……
誰だっけ？
セットで来る奴は？」

バーター……

業界用語で「束」の逆読みで、同じ事務所から抱き合わせで、格下

か知名度を上げたい新人とかを出演させる事。
意外と人気芸能人には、バーター出演の新人がセットで付いてくる。
「今回は……
大物は呼ばないからバーターは平気だが。
あの団体女性ユニットを呼ぶからな。
１６人は来るぜ」
今人気上昇中の４８人ユニットアイドルだ。
その１／３を呼ぶとなると結構な出費だ。
その分、現場に行く女は格下モデル達だからギャラは安い。
逆に露出度は高い。
「そうだな。
各々ファンが居るし、誰々が出ないとなるとクレームが酷いよな」
コアなファンは、彼女達が出演する番組をチェックしている。
それで贔屓のメンバーが出ないと文句を言うんだ。
「何で○○ちゃんを呼ばないんだよ！」
「○○呼んで○○ちゃん呼ばないって何でだよ？
総選挙の順位知ってる？
バカなの？」

言いたい放題言いやがって！

フザケンナ！

４８人も呼べる訳ないだろ？

「彼女達は視聴率が取れるからな。

外せないか……

本番のスタジオで霞ちゃんと掛け合わせたいしな。

じゃコーナー１つ切るか？

心霊写真の診断コーナー切れば、あのババァのギャラが無くなるだろ？

その分の予算を回そう」

毎年夏近くになると、番組で鑑定して欲しい心霊写真と思われる物が沢山来る。

その殆どが光の加減や影、自然の造形物が人の顔に見える程度だが……

稀に本物が混じっている。

それらを番組で紹介し鑑定・除霊するコーナーを受け持つのは、小太りな中年女性だ。

「この写真に写り込んだ霊は、写真の男の子の縁者です。

心配で見に来たんでしょう」

「これは、この写真のグループが楽しそうなので惹かれて来たのでしょう。

特に問題は有りません」

「この写真の霊は危険だ。
番組で責任を持って供養します」

お決まりの台詞で写真を鑑定し、護摩壇で御焚き上げ供養をして貰った。

だが今回は仕方が無い。

ヤバそうなのは返却するか、纏めて焼却処分すれば良い。

または保管庫行きだな……

曰く付きの品々を纏めて保管してる倉庫が有るから、其処へ突っ込めば平気だろ？

「そうだな。
この筋肉坊主は、不動産や警備会社のお抱えだ！
だからアイツは本物なんだよ。
しかも、この企画をやりたくなさそうだった」

「つまり、出来ればやりたくない？
裏を返せば本物の心霊物件で、しかも相手は強力か？」

全員に沈黙が降りる。

本物の霊能力者が避けたい物件だ。

でも逆に番組的には、本物の心霊物件を引き当てた事になる。

当たればデカいし、ヤバそうならオリジナルビデオ化しても良い。
番組内の宣伝で
〈驚愕の真実！
地上波では放映出来ない内容をオリジナルビデオにまとめました。
近日中に販売します〉
的に煽れば、売上は伸びるだろう……
ついでにゴールデンでは放映出来ないお色気を絡ませれば？
〈あの梓巫女の桜岡霞が？
次々と女性陣に降りかかる色情霊とは？〉
とか煽りを入れる。
序でに際どいカットを幾つか1秒単位で差し込めば、それだけで食い付く奴は居るよ、絶対に！
ヨシ、上司の説明は固まったじゃん。
「予算については一考しよう。
我々の安全が第一だからな。
じゃ解散で！
ああ、ＡＤ君だけ残ってくれ。
少し話が有る」
ＡＤ君を残し、他は小会議室から出て行く。

皆が出て行ってから暫く無言で向かい合う二人……

「西川さん、なんすか？」

沈黙に耐えられずに話し掛ける。

「君、霞ちゃんの事前調査に同行するんだろ？
カメラと音声連れてけよ。
それと……
あの筋肉坊主を番組に巻き込んじゃえ」

「えっ？
巻き込むって出演させるんすか？
さっき予算が足りないって言ってたじゃないすか！
出演者を増やすのは……」

「違うよ。
筋肉坊主なんて視聴者は喜ばないって！
見てて気持ち悪いだろ？
あの坊主、この企画に反対な感じだった。
つまり嫌な物件なんだよ。
実績有る本物の拝み屋がだぞ。
だから企画から離れなれない様に巻き込め。
やり方は任せるけど、手紙を送ってきた管理者に合わせるとか。
とっとと廃墟に連れ込むとか、色々有るじゃんか！
上手く行けば霞ちゃんとセットで使えるよ。
番組の華は霞ちゃんで、裏方に実績有る筋肉坊主。
美女と下僕みたいで受けるかもな」

「成る程……
でも自信無いっす」

「そこはＡＤちゃんの頑張り次第だよ。
上手く行けば希望してた番組の担当にしてやるよ。
好きなんだろ？
あのアイドルがさ」

筋肉坊主は保険だよ。

どうにも霞ちゃんに惚れてる感じ？だった。

霞ちゃんも話し合いの途中途中で目線を送ってたし。

少なくとも良い関係なんだろうな。

だから霞ちゃんを巻き込めは、あの筋肉坊主も確実に付いて来る。

「西川さん、本当っすか？
約束っすよ！」

「ああ約束するよ。
だから上手くやるんだぞ」

ご機嫌で小会議室を飛び出して行くＡＤ君を見て思う。

安っすい奴だな……

あんな、マルマルがモリモリとか言ってる小学生が好きなんてよ。

ロリペドの変態小僧が！

女はもっと、こう……

バインバインなボッキュボンだろ？

その点、霞ちゃんは合格だよな。

あのロケットみたいなオッパイはスゲーよな。

今回もロケ中に雨降んないかな……

あの透けた巫女服は……

ハァハァ堪らんのよねぇ！

西川の妄想は続く……

◇◇◇◇◇◇◇

渋るＡＤ君をいなし次の目的地である滝を目指す。

錆びた看板には桃源の滝と書いて有ったが、本来の名前では無いだろう。

ホテル側が勝手に付けたんじゃないのか？

車で徐行して進むが、本当に荒れている。

途中で避けられるが落石や倒木も有った。

カーブの吹き溜まりには落ち葉が堆積してるし、普通のスピードで走っても事故りそうだな……

もし廃墟で何か有った場合に逃走ルートは、この道か未だ見ぬ集落が使っている道しかない。

原生林に近い山の中に逃げ込むのは危険だ。

本来の遭難の心配の他に、街に住み慣れた連中が山に住んでる連中に勝てる訳が無いからだ。

心霊現象だけでなく、普通の人間が信用出来ない場合も有るしな。

最悪の場合は、この道は捨てて山を降る事も考えておくか……

助手席に座り、ニコニコしている桜岡さんの様子を伺う。

満腹のせいか機嫌は良さそうだね。

「ん？何かしら？」

僕の視線に気付いた彼女が聞いてくる。

「いや……

上に行く程、荒れ果ててるよね。

また落石だ。
倒木も有ったし、夜に走るのは危険だね……」
また１つ落石を避けて進む。
二車線だから良いが、対向車が来たら大変だな。
池から進む事１０分。
「あっ！
榎本さん、看板が有りますわ」
彼女が指を指す方を見れば、問題の滝の入り口を示す看板が見えた。
道路の脇に待避スペース程度の、車3台が止まれる場所が有る。
そこに生い茂った木々に隠れる様に
「この先５０m桃源の滝」
と書いてある看板が見えた。
通り過ぎてしまった為にハザードを点けて後続車を止めて、更にバックで車を移動し待避場に縦列駐車した。
車を降りて、看板の指す方向を見る。
道？
らしき草木が少なく真っ直ぐ延びている空間が有るが……

「ここも池の遊歩道と同じ様に草ボウボウだな……」

やれやれ、またジャングル体験か。

「しかも獣道みたいだわ。
地面も舗装されてないし、自然石を並べただけね……」

妙に近くに居る桜岡さんが、又なの私は嫌よ！

的なオーラを醸し出している。

女性陣には辛いロケーションだが、これも仕事だ。

しかし先程の遊歩道より確実に草木の生い茂る量は多いな。

桃源の滝なる場所へは、この険しい獣道を進まないと駄目そうだね。

「やれやれ……
じゃ準備しますか」

前回と同じ様に「蕨手山刀」を取り出し腰に差す。

それと今回は予備で持ってきていたコンバットマシェットナイフを取り出す。

此方はアーミーショップに行けば良く売っているブッシュナイフだ。

イスラエルのＵＺＩ社製の刃渡り５８５ｍｍのステンレス製。

グリップはゴムでケースはプラスチック。

一万円以外のお手頃ナイフだが、使い勝手は良い。

安いから乱暴に使えるから気楽だ。

ＡＤ君達もタオルでほっかむりをしたり、虫除けスプレーを吹いたりして準備オーケーみたいだ。

「じゃ行きますよ。
順番はさっきと同じで」

そう言ってコンバットマシェットナイフを振りかぶった。

明日は筋肉痛かも知れない……

そんな考えが頭の隅をよぎったのは内緒だ。

# 第37話

原生林には程遠く、雑木林としては草木が密集している。

普通は太陽の光が届かない部分には草木は生えず、苔や光を余り必要としない背の低い草がチョボチョボ生える程度なのだが……

鬱蒼とした木々を縫って歩道を造った為に日の光が入り、腰の近く迄草が生えている。

それをブッシュナイフで水平に薙いで行く。

当然屈んだ状態じゃないと低い位置からは切れない。

格好は稲刈りに近い。

つまり腰が……

腰が痛いんだ。

「榎本さん、大丈夫ですか？
仰け反って腰を叩く姿がお爺さんみたいですよ」

僕が薙いだ草木を踏み固めながら後ろに付いて来る桜岡さんから、失礼な意見が来ました。

「んー、結構辛くなって来たな。
ＡＤ君代わってよ。
ほら、ブッシュナイフ」

中列を歩く彼にブッシュナイフを渡す。

カメラさんと音声君は機材を持っているし、女性陣は論外だ。

手ぶらでウザい彼に頼む事にする。

「えっ、僕っすか？
うわぁ！
凄いナイフっすね。
ロープレのショートソードみたいだ」

無邪気にはしゃぐ彼を見て、ああ彼もゲーム世代なんだなと思う。

「グリップの紐を手首に巻いて固定するんだ。
振り回すから、すっぽ抜ける場合が有るからね。
それと細い竹や枝を斜めに切ると、切り口が刺さって危ないから水平にね」

簡単なレクチャーをして列の二番目に移動し念の為、彼から２ｍ程後ろに離れる。

嬉しそうにブッシュナイフを振り回しているが、アレでは２０ｍ位でギブアップか？

距離的には丁度滝に着くから良いか……

でも力の入れ過ぎだよ。

刃が欠けるかもしれないが、必要経費で落とすから気にしない。

元々使い捨てのつもりだし。

腰に差した蕨手山刀はオーダーメイドの逸品で、１０万円以上もする趣味の物だから経費には乗せられない。

でも……

あの調子だと、もう一本位必要だったかな？

楽しそうに振り回すＡＤ君を見て、細い癖に結構体力が有るんだと少しだけ見直した。

「ねぇ、榎本さん。
気が付いてます？」

肩と腰のコリを揉み解してしると、後ろを歩いていた桜岡さんが無理やり横に並んで話し掛けてきた。

「ん、何を？」

道幅は１ｍも無いから、殆ど密着状態だ。

毎回思うが、この辺のガードが甘いんだよな。

普通なら

「俺に気が有るんじゃね？」

とか勘違いする態度だぞ！

「私達、滝に向かってますわよね？
看板にも有りましたが距離は５０ｍ。
でも私達は既に３０ｍ以上は歩いてますわよ」

確かに看板の距離を信じれば、半分以上は来たな。

そろそろ滝が見えても……

「あれ？
そうだね、気付かなかったよ。
滝なのに水音がしないぞ。
滝なら川も有る筈なのに……」

ＡＤ君が草木を薙いでいる音以外聞こえない。

「幾ら何でも、そろそろ水音が聞こえても良く有りません？」

立ち止まって耳を澄ましても、水音なんて聞こえない。

風も無いから草木が揺れる音もしない。

幾らＡＤ君が頑張っても、川のせせらぎや滝の音に勝てるとも思えない。

振り返って音声君に聞いてみる？

「音声君、マイクで水音拾ってない？」

彼はマイクを前方に向け、ヘッドフォンに意識を集中しているが……

やがて首を横に振った。

本職でも水音が拾えないって、どういう事だ？

「道を間違えるにも、道らしき物は此処しか無かった……

川が枯れている？

渇水時じゃないし、最近雨も降ったよな」

「川の水が枯れるなら、周りの木々も元気が無い筈でしょ？

でも青々としてるし、土も適度な湿り気が有りますわ……」

立ち止まって話ていると、ＡＤ君が何かを見つけたみたいだ。

「桜岡さーん！

榎本さーん！

何かショボい溝みたいな物が有るっすよー」

８ｍ位先まで道を作った彼が、手招きをしている。

近付いて見れば……

綺麗な窪みの溝が出来ていた。

地面がＵ字型に窪んでいて、表面には細かい土か砂が表れている。

これは水が地面を削って出来た跡みたいだ。

しかし水が流れていたとしても、川幅？は１ｍ程度で深さは２０ｃｍも無い。

溝の土を触ってみたが、僅かに湿っている程度。

「これが川？
じゃ滝って何処だ？」

周囲を見回すと１０ｍ位先の上流部分に、２ｍ位の段差が有るけど……

「まさかアレ？
みたいですわね……」

滝と言われれば否定出来ない程度の落差だ。

「滝？桃源？何処が？」

良く有るガッカリ観光地より酷いぞ。

何か納得出来ない。

一応デジカメで撮影する。

さっきの池は撮るのを忘れたが、カメラさんからデータを貰える事になった。

車にノートパソコンを積んでるから、ＳＤカードを借りてデータを貰おう。

「しかし酷いな。
滝って言うけど、水量が多くても滝とは……」

「看板のデフォルメした滝の絵だと、１０m以上有りそうでしたよ」

「詐欺だろ？
訴えられたら負けるぞ。
最も訴える相手も居ないけどな」

皆さん酷い感想を言って、折角頑張って切り開いた道を戻る。

今度は僕が最後尾だ……

桜岡さんと次の予定を考える。

まだ2時間程、時間的余裕は有るから。

「池も滝も観光地としてはショボい。
でも池は収穫が有ったね。
後は……
地図に載っていた鳥居のマークが気になるよね」

「この調子ですと期待は出来ないと思います。
でも逆に荒れ果てた神社でしたら危険だわ」

祠には石の御神体が有り、丁寧に祀られていた。

しかし鳥居って事は神社のマークだ。

荒れ果てた神社……

確かに良くないな。

「看板によれば、ホテルへの道なりに池・滝・鳥居だった。
つまり道路に戻り少し登れば鳥居の場所だね」

「行ってみましょう。
巫女としても、もし神社が荒れ果てていたら何かしない訳にはいかないわ」

梓巫女として正式に修行を修めた彼女としては、神社が荒れ果てていたら我慢出来ないのだろうな……

車に戻り更に坂を登る。

すると1分位で神社らしき建物が現れた。

今までの池と滝と違い、道沿いに建っている為に直ぐに見付けられた。

ハザードを点けて車を前に停める。

道路から苔むした大谷石の階段を8段ほど登れば境内だ……

境内はそこそこ広い。

大体20m四方は有るだろうか？

階段を登り切った所に鳥居が一つだけ有り、正面に建物で右側に倉庫。

左側には石積みの台の様な物が有る。

「アレは……
寺の鐘つき堂に似ているな。
此処は神社より寺の配置に近い」

「そうですわ。
入り口の鳥居も、山門の跡に無理矢理取り付けたみたいですわ」

廃仏毀釈……

そんな文字が頭をよぎる。

現代では宗教戦争など日本で無かったと思われているが、それに近い物は有った。

明治維新の後に公布された大政官布告。

幕府と強い結び付きが有り、独自の権力の強かった寺社・神社の締め付けがそれだ。

それまで寺社・神社が所有していた権利や敷地外の土地を没収。

極めつけは寺院法度で決められていた坊主の妻帯と食肉の禁止を

「妻帯肉食勝手に候」

と言って認めた。

新政府お抱えの国学者達が外から入ってきた仏教を締め出し、既存の宗教たる神道を強め様とした。

神仏習合を廃し、坊主の神職への転向を求めたり。
色々他に考えは有っただろうが、仏教界としては迷惑な行為だ！
しかも実情は生活の基盤たる土地を没収された多くの寺社は生活に困窮。
寺は焼かれ仏像・仏具は壊された。
有名な所では千葉県の鋸山に有った五百羅漢は全て破壊されたし、奈良県の興福寺の食堂は焼かれた。
民衆は領内の寺を焼き払い神社を建て、明治政府からの補助を求めた……
僕の実家は田舎故に、檀家衆との結び付きが強く難を逃れたらしい。
「この神社は、大政官布告による廃仏毀釈で寺から神社に建て替えられたみたいだね。
でも誰か定期的に手入れはしているみたいだ。
そんなに荒れてない」
周りを見回す限りでも、それなりに手入れはされている感じだ。
「だからかしら？
鳥居が伊勢鳥居なのよ。
ほら、笠木が珍しい五角形でしょ？
新明鳥居の派生系だけど、伊勢神宮でしか使えない筈なの。
獅子と狛犬が無いのも考えらんないわ。

何もかも中途半端……」

鳥居が宗派により色々有るのは知っているが、ドレがナニかは僕には分からない。

流石は本物の巫女さんだ。

「神殿は閉められてるから、確認のしようは無いな……
いや伊勢神宮に問い合わせれば、分かるかな？」

この神社の管理者が分かれば、調べようは有る。

けれど……

「桜岡さん、この神社から力を感じる？
神域内に居るのに、僕には何の力も感じ取れないんだ……」

彼女はハッとなり、目を閉じて神経を集中する……

そのまま1分位だろうか？

「駄目だわ。
何の力も感じないわ。
そもそも御神体は何なのかしら？
云われの説明も無いし、本当に伊勢神宮派なのかも分からないわ……」

二人して、ウンウンと悩む。

「単に神様が居ない偽物神社っすか？

なら心配する事無いですよね？」

ＡＤ君に言われて気付いた！

「そうだね。

別に問題が有る訳じゃないな。

さて、時間に余裕が出来たがら問題の廃墟を確認しよう。

此処からなら５分とかからずに見れる筈だ」

看板の地図によれば、直ぐ近くにホテルは書かれていた。

此処まで来たら、見るだけは見てみよう。

「あっ！

じゃ先方に連絡するっすよ。

ヤダなぁ榎本さん。

行かないかと思いましたよ」

いそいそと携帯を取り出すＡＤ君を止める。

落ち着けって！

「遠くから確認するだけだよ。

会ったりする時間も少ないからね。

様子だけ見たいんだ」

時刻は３時前。

タイムリミットは後１時間かな。

「えー、折角来たんだから挨拶だけでもしましょーよ」

ウザいＡＤ君を無視して車に戻る。

来た道を再度見上げても……

アンバランスな神社だな。

御神体を祀っていないのか？

でも境内は悪い感じはしなかった。

つまり神域としての結界は張られてるのかな？

◇◇◇◇◇◇◇

車で５分も走らない内に、問題の廃墟……

潰れたホテルが見えた。

鉄筋コンクリート、８階建で本館の他に低層棟やコテージ風の別棟も有る。

庭は荒れ果てて草ボウボウ。

テニスコートやプールらしき施設も見える。

入り口には簡易的にチェーンが張られ、破れた警告の貼り紙が有るだけだ。

「想像よりデカい……
しかも禍々しいぞ。
本気で此処に居たくないんだ」

「本当だわ……
物凄く嫌な感じ。
誰かに見られている様な、ザワザワした感じね」

近年稀に見る敵意を外に放っている建物だ。

こりゃヤバいぞ。

彼女も危険さが分かるのだろう。

僕の腕にしがみ付いて……

ん、しがみ付く？

「あら？
やっぱり榎本さんって霞ちゃんの彼氏じゃん！
ヒューヒューアツいねぇ？」

マネージャーの目線を追うと、僕の腕にしがみ付く桜岡さんが……

一瞬彼女と目が合うが、慌てて腕を振り払う！

ヤバい対応だ。

これじゃ初々しい中学生カップルだよ。

今まで借りてきた猫の様に大人しかったマネージャーが、獲物を見付けた牝豹に変貌。

ウザい位に囃し立てる！

「やっぱ付き合ってるじゃん！
嫌だなー秘密にしちゃってバレバレだよ？」

性懲りもなく桜岡さんが腕にしがみ付いて……

そしてズルズルとしゃがみ込んでしまった。

「どうした、桜岡さん？
大丈夫か！」

顔を真っ青にしてしゃがみ込む彼女。

本能が、この場所はヤバいと感じる。

彼女をお姫様抱っこして車に戻り、急いで山を降りる。

「ナニかに見られているの……」

腕の中で震えながら呟いた一言が、重くのし掛かる。

僕は気が付かなかったけど、ナニかは彼女に害をなしたんた……

助手席のシートを倒して寝かせている彼女を横目で見ながら、安全ギリギリのスピードで車を走しらせる事しか僕には出来なかった。

「あの廃墟に、ナニが居るんだ？」

# 第３８話

突然倒れた桜岡さん。

彼女を車に乗せて、麓まで一気に車を走らせた！

山を降りてから彼女は徐々に回復したが……

顔は未だに真っ青だ。

これは演技では出来ない。

本物の「ナニか」に襲われたんだろう……

麓まで降りてから、一旦車を路肩に停める。

田舎道の路肩だから、一般車に影響は無い。

今までにすれ違った車も無いのだから。

山あいの直線道路を見渡しても、右も左も野原と点在する住宅だけ。

長閑な田舎町だ……

桜岡さんを抱っこして車から降ろし、皆にも降りて貰う。

彼女は僕の車に積んでいたクーラーボックスに座らせる。

大分辛そうだな。

二台並んで停めたのを確認し荷台から清めた塩を出して、先ずは車にバンバンかける！

車体の屋根と四方、タイヤ周りまで念入りに塩で清める。

本当は錆を誘発するから嫌なんだけど仕方ない。

その後にマネージャー・ＡＤ君・音声君そしてカメラさんにも塩を掛けて清める。

最後に桜岡さんを念入りに塩をかけて清めた。

「有難う御座いますわ。
大分楽に……」

少しだけ顔の色が良くなったみたいだが、まだ立てない様だ。

駄目押しに御神酒を少し口に含ませ、彼女の周囲にも撒く。

御神酒は同様に車の四方にも撒く。

周囲に芳醇な日本酒の匂いが立ち込める。

用意した酒は松竹梅。

祭壇に丸一日祀って清めた物だ！

其処までして漸く自分も一息ついた……

「ヤバい物件だな。
建物の敷地外の彼女に影響を及ぼすなんて……」

残った酒を煽りたいが、飲酒運転は絶対駄目だ！

「あの時、視線を感じて廃墟を見たの……
どことなくよ。
なのに視線が合った気がしたら、力が入らなくなってしまって……」

キューブの助手席に再度座らせて、その時の様子を聞く。

場所の特定は出来ないが、あの廃墟が問題なのは間違い。

「なぁ榎本さんよ……
これを見て欲しいんだ」

「あとコレも……
聞いて欲しい」

カメラさんと音声君が、機材を広げている。

しかし様子が少し変だ。

差し出されたのはカメラのモニター。

「ここ……
建物を撮っていたけど、桜岡さんが倒れたんでカメラを回した……
ほら、ここだ！」

言われた通りにモニターを見れば、廃墟を右から左へ順番に撮して

いる。

そして画面が急に右側に動いて、僕に縋りつく桜岡さんを捉えた。

画面には僕と桜岡さんだけだが……

彼女の肩に白い手がのっている。

男女どちらかは分からないが、青白く華奢な手だ。

「手が……
一瞬後には、何も写ってないな」

「枯れ枝みたいな手だな……
信じらんない位に青白いし」

思わず撮れた心霊画像に、覗き込んで見ていた他の連中も息を呑む。

青白く血管の浮き出た細い腕。

首の後ろから肩に手を回している……

「あとコレ。
コレも聞いてくれ。
ほら……
俺ら以外には居なかったのに、変な話し声が聞こえるだろ?」

差し出されたイヤホンを耳に付けて聞いてみれば……

イヤホンから聞こえる声は、マネージャーさんが僕らをからかう声。

それに掠れた囁く様な声で

「……あー……あ……うー……げっ……の……」

耳元で聞き取り難い話し声？が聞こえた。

もう一度巻き戻して貰い、神経を集中して良く聞いてみる。

「……お……前……のせ……我ら……つ……ら……殺し……や……」

これは、恨み言だ。

殆ど聞き取れないが、呪詛の類だろう。

イヤホンを外し、ふーっと息を吐く。

廃墟に居る「ナニか」は、確実に桜岡さんに恨み辛みを伝えてきている。

僕や他の皆ではなく、彼女にピンポイントで来たのは何故だ？

女だから？

いやマネージャーと二人いるし、どちらも若い女性だ。

霊能力者だから？

僕もそうだからイマイチ違う気がする。

美女とオッサンなら美女が良い？

いや「ヤツら」は容姿で選り好みとかしない。

縋れるなら誰でも構わない連中が殆どだ。

逆に特定の条件で選べる連中は、それだけ強力なんだよな。

「カメラさんと音声君は機材に、このお札を貼って。
カメラさんは画像データをコピーさせて下さい。
音声君のデータってコピー出来るかな？」

こんなヤバい物件は放置したい。

でも桜岡さんが魅入られていた場合は危険だ。

彼女を追ってくる可能性も有る。

「ｍｉｃｒｏＳＤだからパソコンにインストール出来る。
でもヤバいのか？
俺らが持っていて平気か？」

気持ち悪いデータだ。

こんな物を持っているのは、誰でも嫌だろう……

荷台からノートパソコンを取り出し、借りたｍｉｃｒｏＳＤからデータをコピーする。

カメラさんからはデジカメのデータも貰う。

全てをコピーしてからパソコンを閉じてお札を貼る。

「なぁ、何故いちいちお札を貼るんだ？」

腰のポーチに入れている、ゴムで束ねたお札を見ながら質問する音声君。

「ん？

ああ、自縛霊じゃないと憑いて来る事が有るんだ。

彷徨う霊とは救いを求めている場合が殆どだ。

桜岡さんは彼らと波長が合ったのか、別の理由かは分からないけど狙われた。

一応出来る手立ては行った。

けど、相手が僕より強ければ……」

それでも彼女に憑いてくるかも知れない。

「今日は解散しよう。

出来るだけ安全運転で帰るんだ。

僕はもう少し結界を張り、痕跡を消してから彼女を送って行くから」

もし先に帰した彼らを追って行けば、此処で結界を張っている僕が感知出来るかも知れないし。

どちらにしても、彼女を一人には出来ない。

最悪、憑かれていたら今夜が山場だ！

「撮影はどうするっす？

中途半端っすよ！」

「バカヤロウ！
逃げるのが先だろ？
これを見せるか聞かせるかすれば、西川さんだって……」

「あの人、自分に害がなきゃ続けろって言うぜ。
ヤレヤレだぜ」

プロ根性なのか、一応撮影の続行・中断を心配している。

「様子を見よう。
兎に角、一旦離れた方が良いだろう。
準備調査だけで、この有り様なんだ。
半端に挑めば、取り返しがつかないからね。
西川さんには、此方から連絡するよ。
桜岡さん次第だから、今夜が山場なんだ。
何もなければ、明日にでも今後の相談しよう」

そう！

彼女に憑いているか、いないかは今夜がヤマなんだ。

撮影の心配は、明日を迎えてからだよ。

心配そうにしている彼らを送り出す。

何か有れば携帯で連絡を取り合う為に、名刺を交換して別れた。

見送る彼らを追っていく気配は感じられない。

走り去るライトバンが見えなくなるまで神経を集中して感知したが、大丈夫そうだな。

残りの日本酒を再度車の周りに撒いてから、空き瓶を車に積んで出発だ！

◇◇◇◇◇◇◇

キューブを安全運転で走らせ、彼女の車を停めている場所まで向かう。

先発の連中より１０分程遅れて出発したから、既に彼らは居ないだろう。

「ごめんなさい、榎本さん。
私……
迷惑をかけてばかり」

弱々しく謝るのは良くない兆候だ。

意識をしっかり持たないと、彼らに対抗出来ない。

「謝るのは無しだ！
今日はウチに泊まるんだ。
結界を張って出来る限りの防御をする。

心配し過ぎかも知れないが、ヤルだけの事をする。
今晩何もなければ、取り敢えずは安心出来る。
後は対応を考えれは良い。
弱気は禁物だよ」

この車は結界を張ってパーキングにでも置いて、彼女の車で今日は帰る。

勿論、僕が運転する。

幾つか用意している家の中でも、防衛に優れた家に泊まって貰う。

そこで祭壇の部屋に、結界を高めて泊まって貰うしかないな。

元々可能な限りの結界を張ってある。

勿論、防衛の為と何か有った時に逃げ込む為だ！

自宅には結衣ちゃんが居るから、憑れて帰る訳にはいかないからね。

「泊まる？
ヤルだけヤル？
いえ、まだ早いですわ……
その、ヤルなんて下品ですわよ。
心の準備とムードを考えて下さいな……」

真っ赤に俯く彼女を見て、何か悪い物でも食べたのか？

と思ったが空気を読んで沈黙する……

桜岡さんもアレから話さないし、やはりお腹が痛いのかもしれない。
トイレ休憩を挟まないと駄目かもな。

◇◇◇◇◇◇◇

途中、高速道路のインターで休憩をとらせる。
走りっぱなしは疲れるし危険だ。
しかも桜岡さんの車はスカイライン。
スポーツカーはハンドル硬いし車高は低いし、慣れない車の運転は疲労も倍増だ。
だからインターの駐車場に車を停めたら、外に出て屈伸運動をする。
彼女も外に出て伸びをしているが、早くトイレに行かなくて平気か？

「此処を出たら隠れ家までノンストップだよ。
トイレは済ませてね」

きっとトイレに行くのは恥ずかしいのだろうから、話題を振る。

「もう！
子供扱いしないで下さい」

プリプリ怒っているが、トイレには直行した。

やはり我慢してたんだな……

栄養補給に何か食べようと思い、売店を見る。

二店舗有る売店のメニューは……

右側が、たこ焼き・焼きそば・お好み焼き・フランクフルト・フライドポテトと揚げ物中心。

左側が、ソフトクリーム・各種ジュース・チェロキー・揚げパン・アメリカンドッグ・かき氷とデザート中心だ。

兎に角、疲れを取るには糖分だ！

先ずは右側の店で、たこ焼きと焼きそばを二つ買い、左側の店でソフトクリームを買う。

三浦名物メロンソフトと普通のミルクのダブルをチョイス！

これは一人で食べるのだ。

備え付けのイートインのテーブルに陣取り、トイレから出てくる彼女を待ちながらソフトクリームを食べる。

濃厚なミルクと安っぽい無果汁なメロン味のバランスが絶妙だ。

直ぐに食べ終えてしまったが、丁度彼女が出て来たので手を振る。

「あら？
たこ焼きと焼きそばですか？
此処で食べるなら、何か飲み物でも買ってきますわ」
そう言って売店に向かった。
既に買ってあるたこ焼きとかを見て、遠慮して飲み物位は私が……
みたいな事だろう。
相変わらず育ちの良いお嬢様だ。
ボーっと彼女を見てると、コーラ二つにソフトクリームだと？
トレイにソフトクリームスタンドにのせたコーラと、バニラ&巨峰・
バニラ&抹茶を運んでくる。
「どうぞ。
榎本さんはコーラ大好きですものね。
あと、疲れには甘い物が良いですわ」
差し出されたソフトクリームを見て思う。
本日二本目だが、どちらが僕用だ？
「美味しそうだね。
で？
どっちが僕のかな？」
違った方に口を付けたら大変だから聞いてみる。

「えっ？
半分こでも良いですわ。
私、両方食べたいですし」

おぃおぃおぃ……

間接キスより厄介だぞ！

見れば周りに居る客達も、こっちを伺ってやがる。

見せ物じゃないんだぞ。

しかし、相変わらず男女間のガードが緩いぞ。

周りからは嫉妬オーラが滲み出してきやがった。

「はっはっは！
それは駄目だよ、だからミルク&抹茶を頂こう。
はい、たこ焼きと焼きそば。
食べたら出発だ」

どの道、運転手たる僕は車では食べれないからね。

衆人環視の中でも、此処で食べていくしかない。

「いただきます！」

二本目のソフトクリームだが、出来る限りの速さで食べる。

「あっ？」

とか言われたが、３０秒で完食だ！

お陰で頭の後ろに鈍痛が……

「もう！

私も食べたかったのに……」

少し機嫌が悪くなった桜岡さんも、上品にソフトクリームを食べ始めた。

やっぱりミルク&抹茶も食べたかったのか！

僕は隠れ家にストックしている食料品を思い出したが、何処かで買い出しをしないと駄目だな。

まぁ、これだけ元気になれば、取り敢えずは一安心だね。

# 第３９話

神奈川県三浦市。

都内近郊で有数な海水浴場、三浦海岸を有する田舎町だ。

駅周辺や海岸線沿いは、それなりに開けている。

しかし一歩山側に入れば、延々と畑・畑・畑。

自然豊かな場所が多い。

そんなご近所さんが近くに居ない場所に、僕の隠れ家と言うか仕事場は有る。

元々は農家だったが、息子夫婦の元へ引き取られた知り合いの爺さんから安く借りた物件だ。

トタン張りの古民家と言うか、古い家だ。

その代わり、壁の中とか庭とかに色々仕込んでも構わないとお墨付きを貰っている。

なので庭・家・祭壇の有る部屋と、三重の結界を張ってある。

そんな周りが畑だらけ、古い家の前に車を止めた時の桜岡さんの驚きと言ったら……

口を開けて、ポカンと眺めてたからな。

「こっこっこっこ……」

「コケコッコー？
いやコカ・コーラ？」

「こっこんな汚い……
いえ、手入れの行き届いてない家が隠れ家なんですか？」

震えながら指差している、僕の仕事場。

そんなに嫌かな？

外見は良くないけど、中は知り合いの不動産屋さんに綺麗にして貰ったんだけどね。

「中はリフォームしてるから綺麗だよ。
それに周りを気にしなくても良いし、結界は厳重に張ってあるから」

そう言って庭石をひっくり返して、中に仕込んだ結界札を見せる。

パウチで防水加工した逸品だ。

「まぁ！
でもお札をパウチっこするなんて……」

驚いているのか、関心しているのか？

うんうん考えている彼女を脇目に車を入れる。

ガレージと言う、ただ広いだけの庭に。

当然、舗装も無い剥き出しの地面だ。

車を停めたら、清めた塩で周りに円を描く。

車をグルリと塩の円で囲ってから、四方にお札を裏側に仕込んだカラーコーンを立てる。

これで車を目印に追跡は出来ない筈だ。

更に桜岡さんと自分も念入りに塩をかけてから、漸く玄関の中に入った。

ギィっと建て付けの悪い木製の玄関扉を開けて、玄関に入る。

電気を付けると2畳程の玄関部分が、パッと明るくなる。

電球をＬＥＤに替えたので４０００ｋの明るさだ。

古い家だから玄関は広い……

無駄に広い玄関には、本棚みたいな下駄箱に大きな姿見。

それにドレッサーが置いてある。

ドレッサーには仕込みがしてあり、扉を開くとお札と清めた塩が飛び出す様にしてある。

玄関から逃げ出す時、または玄関から侵入されそうな時の対策だ。

後は窓とか裏口とか出入り出来る所には全てだ。

因みに普通の泥棒には、全く効果は無い！

一度空き巣に入られたが、お札や祭壇とかを見て気持ち悪くなったのか何も取られなかった……

尤も金目の物なんて無いけどね。

でも僕以外の白髪染めをしていた毛髪が落ちてたので、軽い呪いをかけた。

一日中トイレに篭もらのばならぬ呪いをね。

取り敢えずお客様を通せる場所と言えば、居間しかない。

八畳和室、コタツも完備された冬ならば日本人垂涎の部屋だ！

「上着はハンガーに掛けて。
何が飲みたい？
珈琲・紅茶・昆布茶・日本茶、それとコーラにジンジャーエールが有るよ」

玄関口で立ち尽くす彼女に、冷蔵庫をガチャガチャと探しながら話し掛ける。

途中、コンビニで買い出しはしてきた。

食料品は山盛りだ。

「えっ、と……
では紅茶を頂きますわ」

漸く再起動出来たのか、スリッパを履いて中に入ってくれた。

紅茶か……

先ずはお湯を沸かさないと駄目か。

備え付けのガス台にケトルを乗せて火をつける。

自分はジンジャーエールの缶を持ってコタツへ向かう。

「さて、今晩をどう乗り切るかがヤマだね。
取り敢えずヤルだけの事はヤッたから、追跡される事は無いと思いたい。
でも目が合ったのが心配なんだ。
もしかしたら僕の防ぎきれてない印が有るかも知れないからね」

コタツの向かい側に入って話し掛けてから思う。

「もしかして自前の結界を施した場所有った？
なら無理矢理連れてきて悪かったかな？」

仮にも霊能力者なんだ。

それ位の用心は……

アレ？

真っ赤になって俯いたぞ。

またアレか？

恥いってるのか……

「その……
そう言った技能は無くて……
何時も何時も言われて気が付いて、恥ずかしい……です……」

この娘の師匠は、彼女に何を教えていたのだろうか？

この業界は、防衛手段こそが大切なのに……

僕が教えようにも宗派が違うから無理だし、いや僕が道具を用意すれば可能か？

「得手不得手は誰でも有るよ。
僕は防衛と道具作成が主だからね。
別に恥いる事は無い。
簡単な方法なら宗派は違えど効果は発揮する筈だし」

全く、随分と優しくなったものだな。

最初の物件で距離を置くつもりが、こっちから関わりを持とうとするなんて。

まぁ桜岡さんは結衣ちゃんとも仲が良いし、手助けは仕方ないだろう。

「何故？
何故、榎本さんは私に……」

ピーっと言う甲高い音が鳴り響き、ケトルが沸騰した事を知らせてくれた。

「お湯が沸いたようだね。
ちょっと待っててね」

この家には大した茶葉は置いてないんだよね……

確かリプトンしか無かった筈だ。

◇◇◇◇

もう！

肝心な時に邪魔が入るなんて。

流石に此処まで親切にしてくれるのは……

期待して良いですわよね？

でっでもでも、私……

今日は着替えを用意してないわ。
それに初めてが、こんな古い家では嫌だわ。
せめてお気に入りの……
「はい。
レモン無いから、砂糖とクリープね」
考え事をしていたら、目の前に紅茶が。
とても大きなマグカップね。
「頂きますわ」
熱い紅茶を砂糖を二つ入れて頂く。
ふぅ、少し落ち着いたわ。
別に焦って結ばれる必要は無いわね。
幸い彼の周囲には女の影は無いわ。
精々が結衣ちゃん位だし……
榎本さんを見ればジンジャーエールをチビチビ飲んでいるわね。
本当にお世話になりっぱなしだわ。
頼りになるクマさんね。

「それで……
この後、は？
私、今日は準備が……その……」

いきなりお泊まりなんて用意してませんわ！

「ああ。
色々と考えたけどヤバい物件だったね、あの廃ホテルは」

今思い出しても恐ろしいわ。

全く力が入らないなんて、アレは何だったのかしら？

「確かに準備無くいきなり行ったら大変な事になったわ。
でも不思議ね。
管理人の人は、あの怖い建物に入っているのかしら？」

私達だけじゃないはずよね。

アレだけの力有る「ナニかか」が与える影響は……

「確かに管理人は……
怪しいんだ。
それに今回の件はホテルだけが原因じゃないと思う。
池の祠だけど、云われを調べる必要が有るかな。
蛇神か龍神か、はたまた人柱の線も有るし。
格式を守らない神社。
有るだろう稲荷神社。
何もかもが怪しくて仕方無いよね」

徐(おもむろ)にポテトチップを勧めてくる。

のり塩味ね。

私も大好きだわ！

のり塩＞コンソメ＞フレンチの順番よ。

「あの神社ですけど、境内は清々しい感じがしましたわ。格式を守ってないのに何故かしら？」

手順を守ってこそ、効果が有るのよ。

あんなインチキしたら、効果は発揮されないわ。

「僕は……

感じとしては、見た目は神社だけとど寺としての結界が生きていると思う。

アレは廃仏毀釈で建物は壊されたけど、未だに寺としての機能は保ってるんだ」

廃仏毀釈ね……

我々宗教関係者には忌まわしい記憶でしかないわ。

「榎本さんは今回の件は歴史的な事件も関係有ると思うの？」

難しい顔をしたわね。

判断はし辛いのかしら？

「ただホテルが潰れたにしては強力だ。
勿論、稲荷神の線も捨ててないさ。
兎に角、情報が少ない……
正直、この件を続けるか続けないかも微妙だよ。
勝てない相手に挑むのは、自殺志願者と変わらないからね……
さて、一息ついたら結界を強化するよ。
手順を教えるから覚えるんだ。
なに、材料さえ揃えば簡単さ」

どうやら結界の張り方を教えてくれるみたいだわ。

さり気なく大切にして貰ってる感が嬉しい。

「分かりました。
教えて下さい」

深々と頭を下げる。

この感じなら下心は無いみたいだわ。

やはりムードは大切にして欲しいから良かった。

さて、真面目に教えてもらいましょう。

◇◇◇◇◇◇◇

「先ずは知ってる結界方法を教えて」

コタツに向かい合って座っているが、真面目な顔で……

いえ、カールのチーズ味を頬張りながら聞いてくる。

既にポテトチップのり塩味は完食したわ。

知らなかった……

電子レンジで２０秒ほど温めると、出来立て風味になるなんて。

サクサク感が増して美味しいわね！

「簡単な盛り塩。

小皿に粗塩を盛って四隅に置く結界。

それと古神道の招福折符かしら……」

「招福折符って？

神折符の一種だっけ？」

カール争奪戦を繰り広げながら聞いてくる。

流石の榎本さんも、招福折符は詳しくないのね。

デッカい掌でお皿を隠すけど、隙間からカールを取り出す。

アッという間にカールも完食。

次は何が出て来るのかしら？

一旦榎本さんがコタツから立ち上がりキッチンに向かう。

冷蔵庫からお代わりのジンジャーエールと……

本命の湯煎していた缶詰シリーズを出してきたわね。

名取の焼き鳥、おでん。

それに鯨の大和煮に鯖味噌缶。

お酒が欲しくなるわね。

「そうね。

神折符とも言われるわ。

それの厄祓符と祓い包みを少し……」

あっ！

お皿に分けてよそったわね。

榎本さんの分を強奪する楽しみが無くなってしまったわ。

「ふーん。

商売繁盛・家内安全・厄除け祈願とかは見た事有るけど、祓い用の符も有るんだ」

安心しておでんの大根を食べてるわ。

玉子と大根は狙っていたのに……

ワキワキと箸を動かしていたら、お皿を左手で隠されたわ。

「ちょっと酷く有りませんか？
私、そんなに榎本さんの分を狙ってませんわ！」

彼の指差す先には……

既に完食した空のお皿が有りますわね。

私の……ですわね。

「おほほほほー！
とてもインスタントとは思えない味よ」

肩肘張らない関係が、こんなに楽しいなんて。

見た目は筋肉で決して美男子でないクマさんだけど、一緒に居て楽しいのが大切なのは良く分かるわ……

見た目だけの男を追うのは愚かよね。

ちゃんと大根と玉子を箸で半分に切って渡してくれたし。

餌付けされた訳じゃないわよ。

私が差し出されたおでんを食べていると、チーカマを出してきたわ。

「私、それも好きですわ」

剥いていたチーカマを途端に口に放り込まなくても、良くありません？

全く失礼だわ。

◇◇◇◇◇◇◇

楽しい夜食が終わり、結界を張った祭壇の間に布団を敷かれて独り。

大人しく布団の上に座っているわ。

あの後、朝まで此処に籠もるからトイレを済ませろ！

とか水と食料を用意したから、外に食べに出るな！

とか散々注意されたので、大人しく朝までお籠もりますわ。

彼曰わく

「良く怪談で言われているけど、誰が来ても開けない事。

僕は朝まで間違っても開けてくれとは言わないから。

言ったらソレは偽物だ。

結界が破られたら分かるから、それまでは大人しく寝ていて構わない。

最悪の場合は……
共に最後まで足掻こう」

そう言ってくれたわ。

つまり最悪の場合は、共に最後まで戦ってくれる。

私を残しては逃げないって事よね？

正直嬉しい。

他のどんな美辞麗句より、彼は自分の命を賭けてくれるのだから……

これって、告白よね？

でも周りから見れば既成事実を作ってしまったのよね。

仕事帰りに二人でお泊まりしてしまった訳だし。

テレビ局の人達も薄々は分かってたでしょうし。

まぁ良いですわよね？

別に私は困らないのですから……

# 第４０話

自分の仕事部屋兼寝室の布団に寝っ転がり、今までの事を考える。

桜岡さんは祭壇の間に押し込んで結果を張った。

自分の時よりも念入りで厳重な事に、少し可笑しくなった……

思えば霊能力を持った者と、こんなに親しくなったのは初めてだ。

「箱」の存在に気付かれない様に、常に彼らからは距離を置いていたからな……

彼女は僕の秘密を知ったら、軽蔑するだろうか？

距離を取るか？

排除するか？

……今は考えても仕方無いだろう。

過剰な位の結界だ。

「ナニか」が干渉すれば分かるから、今は少しでも体を休めよう。

時計を見れば９時を過ぎた……

「ヤベェ！

結衣ちゃんに連絡してねーよ」

携帯電話でなく固定電話から彼女の携帯電話にかける。
家の固定電話にかけないのは、ナンバーディスプレイじゃないからだ。
少しでもアリバイに信憑性を……
アリバイ？なんで？
3回目のコールで繋がった。
「もしもし、結衣です」
久し振り？に聞いたロリの声に心が躍る。
「結衣ちゃん。
ゴメンね、仕事でドジってしまって……
今、三浦の作業場の方に来て結界張ってるんだ」
卑怯な言い回しだが、安全の為に此方に来ていると伝える。
ナンバーディスプレイも此方の番号が表示されてる筈だから、信憑性は有る。
「えっ？
大丈夫なんですか？」
心優しい結衣ちゃんは疑わずに、腹黒く汚れた僕を心配してくれる。

「うん、今晩此処に籠もれば大丈夫。
帰れないから戸締まりをしっかりね。
明日は昼過ぎには帰れると思う。
心配しないで、念の為に此方に籠もるだけだから……」

それでも心配そうな彼女に

「大丈夫だから！」

と念を押して電話を切る。

フッと思ったけど、この状況ヤバくない？

霊的じゃなくて大人の男女が一つ屋根の下……

まぁ心配しなくても平気だよね。

仕事としてだし、桜岡さんの安全確保の為だから。

彼女もそんな気は無いだろうし、周りに言い触らす事も無いだろうし……

さて、少し休むか。

今日は色々有って疲れたよ……

倒れ込んだ布団は、暫く使ってなかったがフカフカだった。

流石はマルハチ製だ。

◇◇◇◇◇◇◇

「正明、起きろ……
ほら正明、起きんか」

横になって暫く、一時間位だろうか？

耳元で囁く声と、頭を揺らす振動により意識が覚醒する。

「誰だ、うわぁ？」

「箱」の擬態たる真っ裸なロリが小さな足で僕の頭をグリグリと押している。

僕には、そんな趣味は無いが……

目線は細く病的に白い足の付け根へ。

男の性とは言え、好みを的確に擬態する「箱」の魅力に足掻けないのは悲しいぜ。

「何だよ！
家の祭壇に祀ってあるだろう？
毎回出歩くなよ」

僕の布団にペタンと座り込む姿は、とても扇情的だが本性を知って

いるのでギャップに悩む。

「正明。
面白い女を連れ込んだな。
力有る子孫を残すには適当な女だ。
アレは、ナニに憑かれたんだ？
纏わり付く波動は……
くっくっく。
面白い、全て話せ」

「箱」が興味を持つ物件なのか？

子孫ってなんだよ？

僕は今夜を乗り切れば、彼女をあの廃ホテルから手を引かせるつもりなんだが……

しかし「箱」には逆らえない。

「実はテレビ局からの依頼で……」

真っ裸な幼女に今までの経緯を説明する。

端から見れば情けない。

真っ裸な幼女に頭を垂れて説明など……

粗方の説明を終えて幼女を伺う。

凄く楽しそうだ。

「正明、お前の予想は近くて違う。
あの女に纏わりついてるのは……
いやタダで教えるのは面白くないな。
あーっはっは！
足掻け正明、この件に関わるんだ。
私を忘れずに持ち歩けよ」

「ちょ、待てよ！
彼女は無事なのか？」

「知らんな。
自分が連れ込んだ女なんだ。
自分で何とかしろ」

そう言って「箱」に戻った。

コロンと布団の上に転がる「箱」を見て、何で不機嫌なんだよと思う。

もっとも機嫌の良い時は、大抵は贄に喰らい付いてる時くらいだけどさ。

幼女の高笑いなど、桜岡さんに聞かれてはないか？

心配なのでテレビを付けてチャンネルを変えていく。

丁度良く子役の出演しているドラマが有った。

何か聞かれたらテレビ見てた事にするか……

「箱」が言っていたが、やはり桜岡さんには「ナニか」が纏わりついている。

しかも、この件に関われと言ってきた。

「箱」が興味を持つのは大抵がロクな連中じゃない。

だから彼女の為には、テレビ局のロケ前に片を付けなくてはならない。

ロケ中に霊障に見舞わたら危険過ぎるし、責任問題を問われるだろう……

しかし前振りで厄介な現場だと教えてしまったから、テレビ局も黙っていないよな。

こんな危険だが視聴率が取れそうなチャンスをみすみす見逃すとも思えない。

どう話を持って行くかによっては、素人を大量に同行させるか・させないか。

難易度が段違いだよ。

コレは難しい……

いっそ断って独自で動いた方が？

いや、三浦のマンションの件も有るし二度目は流石に桜岡さんも本

気で怒るだろう。

「んー君ぃ、これは難問だよ……」

某メガネ君の真似事をしながら悩む。

布団の上をゴロゴロと転がるが、解決する訳じゃないから素直に寝る。

少なくとも「箱」が手元に有る以上、半端な奴が来ても喰われるだけだから極論から言えば安心だ。

「おやすみ……

「箱」少しは協力しろよ。

お前に捧げた贄は少なくないだろ？」

言っても無駄だが、言わずにはいられない。

明日の朝、桜岡さんに何て説明しようか？

悩んでいる内に、眠気が我慢出来なく……

◇◇◇◇◇◇◇

冬の日の出は遅い。

大体6時過ぎ位だ。

目覚まし時計を6時にセットしていたので、日の出前に起きる事が出来た。

先ずは家の内側の結界札を確認する。

「うん、剥がれてないな……」

次にテレビを付けて画面の右上の時刻を確認。

部屋の壁掛け時計と同じ6時8分を示している。

トイレを済ませてから顔を洗い歯を磨く。

さて周りが明るくなってきたので、慎重に玄関を開けて外に出た。

うん、冬晴れで清々しい。

冷たい空気を胸一杯に吸い込み深呼吸する。

次に車を見るが……

周りの清めの塩もカラーコーンに仕込んだ札も異常は無い。

どうやら追跡はされなかったみたいだな。

「さて、天照大神を天岩戸から出しますか！」

朝食のメニューを頭に描きながら、祭壇の間に向かう。

入口に貼った札を剥がしノックをする。

「桜岡さん？
おはよう、朝だよ。
開けて良いかい？」

中の様子を伺えば、既に起きていたのだろう。

「開けていただいて構いませんわ」

と直ぐに返事が来た。

「失礼します」

と声を掛けてから扉を開けると、ムッとした女性の体臭が鼻についた……

ああ、昨日は風呂に入れなかったっけ？

失礼な事を考えていたが、顔に出さずに挨拶する。

「おはよう。
どうやら無事だった様だね」

「おはようございますわ、榎本さん。
今日はどうしますか？」

目元が少し赤いが元気みたいだ。

寝れなかったのかも知れないが、大丈夫そうだ。

「そうだね。
君を自宅に送ったら、置いてきた車を取りに行くよ」

居間に向かいながら、今後について話す。

昨夜コンビニで朝食用にと買い込んだ品々をテーブルに並べて選別する。

総菜パンはトースターで温めた方が美味しいだろう。

後は生卵を買ったので、簡単な具なしオムレツを作る。

飲み物は彼女の為に紅茶を用意し、自分は朝からコーラにする。

瞬く間に減っていく総菜パンを見ながら思う。

（桜岡さん……
君、料理苦手だろ？）

（お嫁に貰ってくれるなら、料理くらい習いますわよ）

「えっ？」

心のボヤキに突っ込みを入れられた気がした？

「何ですの？」

「ははははは……

いや、何でもないよ。
食べたら送るよ」

誤魔化しながらコーラを一気飲みして……吹いた！

コーラを飲んだらゲップが出る程確実だ。

的なセリフが頭の中を過ぎる。

◇◇◇◇◇◇◇

7時前に作業場を出発する。

県道？農道？

早朝だからか農作業の軽トラとすれ違いながら海岸線の国道に向かう。

朝日が柔らかく照らして、寝不足気味な桜岡さんがうつらうつらしている。

眠気には勝てずに居眠りを始めたよ。

自宅の場所は大体分かっているから、直前までは寝かせてあげよう……

長閑な農道を走り、これまた長閑な海岸線を走る。

三浦半島は自然が豊かだ！

遠く千葉まで見渡せる。

更に海岸線の国道１３４号線を暫く走り、佐原のインターから横浜横須賀道路に乗る。

なるべく振動をさせない様に気をつけるが、このスカイラインＲ３４は半端無い振動が運転席に来る。

サスペンションがガチガチに固いんだ。

それでも８０キロで走行車線を安全運転。

目的地近くまで来るのに５０分か。

良いペースだ。

「桜岡さん、そろそろ起きてくれるか？
ここから先は道が分からないんだ」

一般道に降りて路肩に寄せてハザードを点ける。

平日早朝だから車通りは少ないが、なるべくなら路駐はしたくない。

「うにゅ……あふぅ。
ごめんなさいね。
寝てしまったわ。

えーと、此処からですと一つ先の信号を右折して……」

彼女のナビに従い運転する。

大体知っているので楽だ……

自宅マンションの前に到着し、指定の駐車場に停める。

彼女の住まいは15階建ての真新しいマンションだ。

「流石はお嬢様！
立派なマンションだな」

分譲だろうマンションは、丁度通勤時間帯なのだろう。

何人もの父親ズが出勤する風景が見られる。

新婚さんも多いんだな……

「ほら！
行ってらっしゃいのキスとかしてるよ。
このマンションは新婚さんが多いんだね」

玄関が駐車場に向いている為に、ら見上げるとラブラブな出勤風景が……

「新築の分譲だったので、新婚さんが多いのよ。
集会とかもラブラブだし……」

溜め息をつくなら、彼氏でも作れば良いじゃん！

空気が嫁るから、口には出さない。

出したら殴られそうだし……

「少し休んでいきませんか？
これから八王子に行って、また運転でしょ？」

「行きの電車で寝るよ。
じゃ今後の件は帰ったら連絡する。
念の為に渡したお札で暫くは結界を張ってね」

そう言って通勤の父親ズ&旦那ズに混ざって上大岡駅まで歩いて行く。

さて、昼過ぎには帰れるかな？

横浜駅でＪＲに横浜線に乗り換え、八王子駅からタクシーで車までの大体の時間を逆算して考える。

「箱」から、この件に関われと言われた。

ならば準備を整えて挑むしかない。

先ずは桜岡さんと西川を丸め込まないと駄目か……

やれやれだぜ。

◇◇◇◇◇◇◇

彼と駐車場で別れ、自分の部屋の階までエレベーターで登る。
吹き抜けの廊下から外を見れば、まだ榎本さんが歩いているのが見えた。

あの筋肉の存在感は、離れていても目を引く。

周りの旦那さん達は悪いけど貧相だわ……

「そうね、貧相ね。
霞、暫く実家に連絡が無いと思えば朝帰りとは良い御身分ね。
父さんに言い付けるわよ」

「ひゃ？
なっなんですか、お母様。
いきなり朝帰りなんて！
違います。
仕事で八王子迄調査に行った帰りですわ」

たまに抜き打ちでウチにくるお母様は苦手だわ。

本当の母親ではなくて血の繋がらない後妻だけど、悪い人じゃないの。

私の為にとお父様と子供は作らないと言ってくれてるし……

でも１０歳しか離れてないから、お母様よりお姉様よね。

実際若作りだし派手だしケバいし……

このヒト苦手ですわ。

## 第４１話（前書き）

すみません。

予約掲載間違えてしまいました。

# 第４１話

まさか自宅にお母様が来てるとは思いませんでしたわ……

しかも榎本さんと朝帰りとか誤解されてますし。

確かに朝に帰宅しましたが、大変だったんです。

それを……

「まぁ良いわ。

西川さんに聞いたら、昨日の夕方にはテレビ局の連中とは別れたって言われたわよ。

あの筋肉さんと今までナニしてたか言いなさい」

しかもテレビ局に裏まで取ってますし。

この腕を組んで胸を強調しながら詰問してくる、若い義母を見る。

朝からキッチリお化粧をして派手なスーツを着込んでいる。

この調子ですと多分昨夜辺りに訪ねてきて、そのまま泊まったわね。

「ナニって？

えっ榎本さんは優しくて紳士だから、イヤラシい事はしないわ。

脳味噌筋肉だけど、私をとても大切にしてくれるの！」

もう少し私を意識しても良い位なのに……

まだまだ調教が足りないのよね。

「脳筋？
ケダモノと同義語じゃない！
あんた、綺麗な体でしょうね？
くんくん、少し匂うわよ」

そう言えば昨日は結構な距離を歩き回ったけど、お風呂には入れなかったわ。

寝る前にウエットティッシュで拭いた程度で……

「昨夜はお風呂に入れなかったから……
玄関前で騒ぐのは御近所迷惑よ。
お母様、家の中へ……」

只でさえ芸能人扱いで周りから興味を持たれているんですからね。

此処で男性問題なんて、榎本さんにも迷惑が……

榎本さんに迷惑？

責任問題？

既成事実？

それはそれで……

良いかもしれませんわ。

「霞？
あんた腹黒い顔してるよ。
ほら、中に入るわよ」

腹黒いなんて失礼な！

でも状況証拠が固まってしまったら、仕方無いわよね。

「はいはい。
最初からお話しますわ。
でもお風呂に入ってからですわよ」

お母様には事実を包み隠くさずお話しますわ。

それでも誤解されてしまうなら……

仕方無いですわ。

今後の事を榎本さんを交えてお話すれば良いだけの事。

お父様は怒るかもしれないけど、娘の幸せが一番よね？

とっても腹黒いお嬢様に成長した桜岡霞だった。

◇◇◇◇◇◇◇

体中にサブイボが？

駅に向かう途中で全身を襲う寒気？悪寒？

思わず立ち止まり左右を見回す。

周りを同じ方向に歩いていた連中が、迷惑そうに避けていったか……

まさかマーカーを付けられたのは、桜岡さんでなく僕だったのか？

「箱」も僕の推理は近くて遠いとか言ってたし……

用心が必要だな。

警戒しながら最寄り駅に着いた。

八王子駅までは一度ＪＲに乗り換えなくてはならない。

ＰＡＳＭＯはＪＲも使えるから乗り換えは楽だ。

八王子駅まで９０分程度かかるが、今後の方針を考えれば直ぐだろう。

ホームに立って電車を待ちながら考える。

何から始めるか？

勿論、情報収集だ。

ネットは大体調べたがら、最寄りの図書館でホテル倒産の前年位か

ら今までの事を地元紙で調べる。

周辺やホテル絡みの事件・事故をだ。

変な神社について、また廃ホテル内の稲荷神社について調べる。

これは桜岡さんに頼もう。

伊勢神宮にコネは無いが、彼女なら有るかもしれないし……

京都の伏見稲荷に確認が出来れば一番良いんだ。

必ず誰が申請して歓請されたかのリストが有る。

御霊を移して有れば良いのだけど、放置プレイだと危険なんだよね……

祠については裏に伸びていた獣道を調べたいが、ＧｏｏｇＩｅ　ＥＡＲＴＨで調べきれるかな？

集落の存在が別れば行ってみるか。

一番怪しいのは管理人だ。

どういう人物なのか？

地元民やホテル関係者とかなら、何か秘密が有りそうなんだよね。

全く手掛かりが無いからな……

思考が行き詰まった時点で、電車がホームに入ってくる。

背広姿の団体が乗っている車両に押し込まれた。

横浜駅迄は満員だろう……

かろうじて吊革に捕まれたが、前に立つ男のポマードがキツい。

幾ら筋肉の鎧を纏おうと、嗅覚は一般人なんだ。

辛い１０分間だった……

◇◇◇◇◇◇◇

横浜でＪＲに乗り換える。

東神奈川駅が横浜線の始発駅だ。

八王子駅まで大体６０分で到着するだろう。

発車時刻を確認すれば、９時２５分か……

電車は停まっているので、八王子駅に到着するだろう時刻の5分前に携帯のタイマーをセット。

寝坊して折り返し運転で東神奈川駅に逆戻りしない様にしてから、

座席に座り込み少し眠る……

体力を少しでも回復しないとね。

胸ポケットに入れていた携帯から黒電話の音が鳴り響く……

もう八王子駅に到着か。

携帯を取り出し時刻を確認すると、１０時２０分だ。

周りを見渡せば、結構な混み具合だね。

妙に１０代後半から２０代前半が多いのは大学が有るからだろう。

八王子キャンパスとか、車内吊りの広告が目に付く。

ロリじゃない年齢だし、女性達も化粧とかして大人の女性っぽいからツマラナイネー……

彼らと共に終着駅を降りて考える。

バスかタクシーか？

今回は経費で落とせるか微妙だ……

最悪は請求無しのただ働きの可能性が有る。

「箱」の存在を知られない為にも内緒で除霊するかも知れないんだ。

右のポケットに突っ込んである悩みの元凶、「箱」を弄りながら考える。

こんな場所で擬態たる真っ裸な幼女で現れない事を切に祈りながら……

此処で擬態化したら、僕の社会的地位は地に落ちて犯罪者の烙印を押されるだろう。

もっとも擬態が保護されても、どうせ消えるから証拠は残らないんだけどね。

「まぁ普通は経費削減の為にバスだよな……」

どの路線が分からないので、バスの案内所を訪ねて聞きますか！

見回すと、それらしいプレハブが見えた。

◇◇◇◇◇◇◇

何という便の悪さだろう？

多分だが、開業当時は送迎バスが有った筈だ。

しかし現状のバス路線だと乗り換える事３回。

自家用車なら４０分位の距離を迂回しながら９０分もかけて漸く近くのバス停に着いた。

時刻は既にお昼前……

何にも無い田舎町のバス停を降りて周りを見回す。

辛うじて国道だからチラホラ店は有るけど。

「此処から徒歩で１０分くらいかな？
車を停めた場所までは……」

昨日の事だが、記憶を辿りながら道を歩く。

国道から脇道に逸れてからは、本当に何も無い住宅街？

遠くに問題のホテルの有る山が見える。

昨日は気が付かなかったけど、山の中腹に廃ホテルが見えるね。

グゥー……

「あれだけ朝食べたのに、お腹が空いたよ？」

最近フードファイター仲間が出来たせいか、お腹の自己主張が激しい。

前は結衣ちゃんの普通より少し大きいサイズの弁当箱で良かったのにな。

「やはりロリの愛情は空腹をも満たすんだ！」

改めて結衣ちゃんへの愛情を確認した。

なので空腹を満たす為に食事の出来そうな場所を探す……

真っ直ぐな田舎道を見渡すと、マイナー系のコンビニと蕎麦・うどんのノボリが見える。

コンビニでオニギリ等を買って車で食べる。

どう見ても個人営業的な食堂で食べる。

悩む事2秒、食堂にする。

温かいご飯が食べたいんだ。

「いらっしゃーい！」

暖簾を潜ると威勢の良いオヤジが声をかけてきた。

壁に掛けてあるメニューを見ながらカウンターに座る。

こんな店でツウぶって

「お薦めメニューは？」

とか聞いても意味は無い。

「カレーに味噌ラーメンを頼む」

水を置いてくれたオヤジに注文する。

「へい！」

手際良く麺を茹で始めたオヤジを暫く眺めながら

「昔、山の上のナントカってホテルに来た以来だけど、この辺も変わったね」

世間話みたいに聞いてみる。

野菜を刻む手を休めずに

「ああ、あのホテルですか？
結構前に潰れましたよ」

と答えてくれた。

それなりに周りも知ってるのかな？

「そうなんだ。
会社の宴会旅行だから詳しく覚えてないけど、辺鄙だったよね。
それに観光がショボい池だか滝だかしか……
なる程ねぇ」

先に出されたカレーを受け取る。

そして冷たい水の入ったコップにスプーンが刺さった物も受け取る。

何故、コップにスプーン入れてだすんだ？

一口食べたが昔風なジャガイモ・人参・玉ねぎ・豚肉の中辛だ。

「ふーん。
オヤジも行った事有るのかい？
倒産した会社の社員旅行だったから思い出深いんだよな。
暇つぶしに行ってみようかな……」

何気ない様に話した。

さり気なくオヤジの表情を伺ったが

「止めといた方が良いですよ。
変な連中が出入りしてる噂を聞いてますよ」

特にビックリした表情でもないな。

「変？アレかい？
今時の若い奴らがバカ騒ぎかい。
全く困った連中だね」

野菜を炒めてスープを入れ、味噌を溶いて味を調整している。

茹でた麺を丼に入れてから、スープを注ぐ。

中々旨そうだ……

「へい、お待ち。

いやガキじゃなくて宗教関係みたいですよ。
ほら、新興宗教？
兎に角ヤバい連中みたいですよ」

「ふーん。
じゃ止めとくよ。
そんなに行きたい訳でもないしね。
元々友達ん家に来た序でだったし……
フーフー、うん旨いな」

宗教関係者？

新興宗教？

ヤバいキーワードだ。

やはり管理人が怪しいぞ。

カレーと味噌ラーメンを平らげて店を出る。

カレー７００円・味噌ラーメン７５０円、合計１４５０円だが味噌ラーメンは十分旨かった。

カレーは本当に家庭の味だったな。

腹も満ちたので愛車の元へ向かう……

平日の昼過ぎだからか、人通りは殆ど無い。

少し歩くと駐車場に到着。

早速結界を調べるが、清めた塩もお札も異常は無い。

タイヤもパンクしてないし大丈夫かな……

車に乗り込みエンジンをかけて暫くは暖気だ。

シートを倒して先程の話を纏めてみる。

新興宗教か……

一口に新興宗教と言っても、実は年代により細分化されてるし定義もマチマチだ。

１９７０年代前後で新宗教と新新宗教に分けるのが一般的だ。

新宗教で代表的なのは天理教。

新新宗教で代表的なのは幸福の科学や統一協会。

まぁ、こんなメジャーどころは関係無いだろう。

彼らは根本的に従来型の教義の派生型だったり、教義を引き継いだりしている。

問題は一代で築いた方。

「私は天啓を授かった！」

「我が力、神なり！」

ある日突然、力有る教祖が誕生する方が厄介だ。
神がかり的な教祖は信者に絶大な影響力が有るから、何をするか分からない。
詐欺紛いの偽物教団も多いが、真面目な教団も少なくはない。
本物の力を得た人が、人々を救済する為に興した教団も知っている。
だが、今回のは善意じゃなさそうだ……
海外でカルト集団の話題が有り、それが国内の新宗教・新新宗教を纏めて新興宗教と思われがちだけど実際は違うんだ。
人間絡みだと余計に面倒だな。
「さて最寄りの図書館に行って新聞を調べるか。
結衣ちゃんが学校から帰って来るのは4時過ぎ。
3時前に出れば間に合うからね……」
少しでも調べておく為に、カーナビの検索で図書館を探す。
割と近くに有った。
「八王子市立図書館か……」
携帯で八王子市立図書館を検索。
大抵の公共施設はホームページが有るから、規模や扱っている物が

分かる。

どうやら中々の規模らしく、地元紙のバックナンバーも扱っているみたいだ。

鞄の中に眼鏡が入っているのを確認し、図書館に向けて出発する。

まだ老眼じゃない！

近眼なんだ！

でも眼鏡を掛けた姿を結衣ちゃんに見せたら

「眼鏡を掛けると知的に見えますよ」

って言ってくれたんだ。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2177w/

榎本心霊調査事務所

2011年11月10日09時31分発行